徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第64集

立江馬渕遺跡

阿南小松島線住宅宅地関連公共施設等整備促進事業・緊急地方道路整備合併事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第64集

立江馬渕遺跡

阿南小松島線住宅宅地関連公共施設等整備促進事業・緊急地方道路整備合併事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

SA1004出土遺物

SP1116出土遺物

SP1015出土遺物

序　　文

本書は県道阿南小松島線建設に伴い平成14年に実施された小松島市立江町立江馬渕遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

遺跡の所在地である立江町は、那賀川によって形成された立江低地と呼ばれる標高２ｍ前後の三角州に位置し、近世以降、四国八十八ヶ所の第19番札所立江寺の門前町として栄えてきました。立江という地名は文献では鎌倉時代までしか遡れませんが、その歴史はさらに古く、隣接する羽ノ浦町宮倉には観音山古墳をはじめ、野路地山・寺田山・三社ヶ森などの古墳が残されていることから、古墳時代のころには周辺の沖積地上に集落が存在していたと考えられます。また、町内に残る中の坪などの地名は、ここが古代の条里制地割の上に位置していたことを示し、平安時代の和名抄に記載され所在地が小松島市坂野町周辺に比定されている坂野郷に含まれていたことが考えられます。その後、鎌倉時代を経て南北朝時代にはいると、この地域一帯は立江庄あるいは立江中庄という庄園の庄域に含まれ、現在の立江寺の西方清水の山麓には立江城が築かれていたことが残された文献からあきらかにされています。このように古い歴史がある立江町ですが、町内全体が沖積地上に位置しているため、近年まで考古学的な調査の実績に乏しい地域でした。

今回の県道阿南小松島線建設に伴う立江馬渕遺跡の発掘調査では、文献の記録がない奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡群を中心とする遺構が、多量の遺物を伴って検出されています。隣接する柳ノ内遺跡の調査成果と合わせて注目されるのは、出土遺物の中に緑釉や灰釉の陶器が多く含まれるほか、須恵器の円面硯や、斎串・形代など律令的祭祀に伴う木製品が出土している点で、これらは一般に官衛に関連する遺跡から出土する遺物とされています。その点を考慮すると、立江馬渕遺跡の場合も何らかの官衛的な性格を供えた遺跡であったと考えられ、和名抄に記載のある坂野郷との関係が注目されるところです。また、遺構は検出されなかったものの、遺物の中に先行する古墳時代のものが少数含まれていたことは、立江低地の沖積地上に古墳時代の集落が存在したことを証明する材料となる資料であろうと思われます。これらの発掘の成果を通して、本書がこの地域の歴史を研究するうえでの資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、多くの関係機関及び地元の皆様に多大のご援助、ご協力をいただきましたことに対しては深く感謝の意を表するところです。

2006年３月

徳島県埋蔵文化財センター
理事長　佐藤　　勉

例　　言

1　本書は阿南小松島線住宅宅地関連公共施設等整備促進・緊急地方道路整備合併事業関連に伴い平成14年に実施された立江馬渕遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は徳島土木事務所より依頼を受けた徳島県教育委員会文化財課によって実施された試掘調査の成果を受けて、徳島県埋蔵文化財センターが発掘調査を委託することになった。発掘調査は平成14年度に実施された。

3　発掘調査及び報告書作成についての実施期間は以下のとおりである。

発掘調査期間		平成14年４月１日～10月31日
報告書作成期間	第１次	平成16年４月１日～平成17年３月31日
	第２次	平成17年４月１日～平成18年３月31日

4　遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を使用した。

ＳＡ 掘立柱建物跡　ＳＤ 溝　ＳＫ 土坑　ＳＰ 柱穴　ＳＲ 流路　ＳＵ 集石　ＳＥ 井戸
ＳＴ 埋葬施設（墓）　ＳＸ 不明遺構　ＳＨ 焼土坑

5　本書で使用した土層及び土器の色調は、小山正忠、竹原秀雄編『新版標準土色帖』1989年度版によった。

6　遺構番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。

7　第４図の地形図は建設省国土地理院発行の１／25,000地形図「立江」を使用した。

8　調査にあたっては次の機関の御協力・御指導を得た。

徳島県教育委員会　徳島県徳島土木事務所

9　本書の執筆・編集は久保脇美朗が、また遺物の写真撮影は杉本昌弘が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経緯
1　調査に至る経緯 ・・1
2　調査の経緯 ・・1
3　発掘調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
4　調査日誌抄 ・・・3

Ⅱ　遺跡の立地と環境
1　遺跡の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2　遺跡の歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅲ　調査結果
1　遺跡の基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
2　検出された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
3　考察 ・・100

Ⅳ　まとめ ・・・107

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　グリッド配置図 …… 4
第３図　立江馬渕遺跡周辺の遺跡分布図 …… 7
第４図　立江馬渕遺跡遺構配置図 …… 9･10
第５図　立江馬渕遺跡基本土層図 …… 12
第６図　SA1001実測図 …… 14
第７図　SA1001出土遺物実測図 …… 15
第８図　SA1002実測図 …… 17
第９図　SA1002出土遺物実測図 …… 18
第10図　SA1003実測図 …… 20
第11図　SA1003出土遺物実測図 …… 21
第12図　SA1004実測図 …… 22
第13図　SA1004出土遺物実測図 …… 23
第14図　SA1005実測図 …… 24
第15図　SA1006実測図 …… 26
第16図　SA1007実測図 …… 27
第17図　SA1006出土遺物実測図 …… 28
第18図　SA1007出土遺物実測図 …… 28
第19図　SA1008実測図 …… 29･30
第20図　SD1001実測図 …… 32
第21図　SD1001出土遺物実測図 …… 33
第22図　SD1005実測図 …… 35
第23図　SD1005出土遺物実測図（１）…… 36
第24図　SD1005出土遺物実測図（２）…… 37
第25図　SD1005出土遺物実測図（３）…… 38
第26図　SD1005出土遺物実測図（４）…… 40
第27図　SD1005出土遺物実測図（５）…… 41
第28図　SD1005出土遺物実測図（６）…… 42
第29図　SD1005出土遺物実測図（７）…… 44
第30図　SD1005出土遺物実測図（８）…… 45
第31図　SD1005出土遺物実測図（９）…… 46
第32図　SR1001実測図 …… 48
第33図　SR1001出土遺物実測図（１）…… 49
第34図　SR1001出土遺物実測図（２）…… 50
第35図　SR1002実測図 …… 51
第36図　SR1002出土遺物実測図（１）…… 53
第37図　SR1002出土遺物実測図（２）…… 54
第38図　SR1002出土遺物実測図（３）…… 55
第39図　SR1002出土遺物実測図（４）…… 56
第40図　SR1002出土遺物実測図（５）…… 57
第41図　SR1002出土遺物実測図（６）…… 58
第42図　SR1002出土遺物実測図（７）…… 59

第43図 SH1001実測図 …… 60
第44図 SH1001出土遺物実測図 …… 60
第45図 SP1007実測図 …… 61
第46図 SP1007出土遺物実測図 …… 61
第47図 SP1013実測図 …… 61
第48図 SP1013出土遺物実測図 …… 61
第49図 SP1014実測図 …… 61
第50図 SP1014出土遺物実測図 …… 61
第51図 SP1016実測図 …… 63
第52図 SP1016出土遺物実測図 …… 63
第53図 SP1022実測図 …… 63
第54図 SP1022出土遺物実測図 …… 63
第55図 SP1041実測図 …… 63
第56図 SP1041出土遺物実測図 …… 63
第57図 SP1056出土遺物実測図 …… 63
第58図 SP1116実測図 …… 63
第59図 SP1116出土遺物実測図 …… 63
第60図 SP1122実測図 …… 65
第61図 SP1122出土遺物実測図 …… 65
第62図 SP1159出土遺物実測図 …… 65
第63図 SP1160出土遺物実測図 …… 65
第64図 SP1164出土遺物実測図 …… 65
第65図 SP1179実測図 …… 65
第66図 SP1179出土遺物実測図 …… 65
第67図 SK1004実測図 …… 67
第68図 SK1004出土遺物実測図 …… 67
第69図 SP1015実測図 …… 67
第70図 SP1015出土遺物実測図 …… 67
第71図 第一包含層出土遺物実測図（1）…… 69
第72図 第一包含層出土遺物実測図（2）…… 70
第73図 第一包含層出土遺物実測図（3）…… 72
第74図 第一包含層出土遺物実測図（4）…… 73
第75図 第一包含層出土遺物実測図（5）…… 74
第76図 第一包含層出土遺物実測図（6）…… 75
第77図 第一包含層出土遺物実測図（7）…… 77
第78図 第一包含層出土遺物実測図（8）…… 78
第79図 第一包含層出土遺物実測図（9）…… 79
第80図 第一包含層出土遺物実測図（10）…… 80
第81図 第一包含層出土遺物実測図（11）…… 81
第82図 第一包含層出土遺物実測図（12）…… 82
第83図 第一包含層出土遺物実測図（13）…… 83
第84図 第一包含層出土遺物実測図（14）…… 84
第85図 第一包含層出土遺物実測図（15）…… 86
第86図 第一包含層出土遺物実測図（16）…… 88
第87図 第一包含層出土遺物実測図（17）…… 91
第88図 第一包含層出土遺物実測図（18）…… 92
第89図 第一包含層出土遺物実測図（19）…… 93
第90図 第一包含層出土遺物実測図（20）…… 94
第91図 第一包含層出土遺物実測図（21）…… 95
第92図 第一包含層出土遺物実測図（22）…… 96
第93図 第一包含層出土遺物実測図（23）…… 97
第94図 第一包含層出土遺物実測図（24）…… 98
第95図 第一包含層出土遺物実測図（25）…… 99

図 版 目 次

図版1 (1) 遺跡遠景（北から）…… 148
(2) 遺跡遠景（南から）…… 148
図版2 (1) 2区遺構完掘状況（北から）…… 149
(2) 2区遺構完掘状況（西から）…… 149
図版3 (1) 3区遺構完掘状況（南から）…… 150
(2) 3区南半遺構完掘状況（西から）…… 150
図版4 (1) 3区掘立柱建物跡群（南から）…… 151
(2) 3区掘立柱建物跡群（西から）…… 151
図版5 (1) SD1001（北から）…… 152
(2) SD1001（西から）…… 152
図版6 (1) SD1001遺物出土状況 …… 153
(2) SD1001遺物出土状況 …… 153
図版7 (1) SD1005遺構掘り下げ状況（西から）…… 154
(2) SD1005遺構掘り下げ状況（南から）…… 154
図版8 (1) SA1001・SP1028遺物出土状況 …… 155
(2) SA1001・SP1029遺物出土状況 …… 155
(3) SA1001・SP1033遺物出土状況 …… 155
図版9 (1) SA1002・SP1064遺物出土状況 …… 156
(2) SA1002・SP1065遺物出土状況 …… 156
(3) SA1002・SP1082遺物出土状況 …… 156
図版10 (1) SA1003・SP1095遺物出土状況 …… 157
(2) SA1004・SP1091遺物出土状況 …… 157
(3) SA1004・SP1109遺物出土状況 …… 157
図版11 (1) SR1002斎串出土状況 …… 158
(2) SR1002船形木製品出土状況 …… 158
(3) SR1002船形木製品出土状況 …… 158
図版12 (1) SP1014遺物出土状況 …… 159
(2) SP1016遺物出土状況 …… 159
(3) SP1022遺物出土状況 …… 159
図版13 (1) SP1116遺物出土状況 …… 160
(2) SP1179遺物出土状況 …… 160
(3) SP1148柱根出土状況 …… 160
図版14 SA出土遺物 (1) …… 161
図版15 SA出土遺物 (2) …… 162

図版16 SA出土遺物（3） …… 163
図版17 SD1001出土遺物 …… 164
図版18 SD1005出土遺物（1） …… 165
図版19 SD1005出土遺物（2） …… 166
図版20 SD1005出土遺物（3） …… 167
図版21 SD1005出土遺物（4） …… 168
図版22 SD1005出土遺物（5） …… 169
図版23 SR1001出土遺物 …… 170
図版24 SR1002出土遺物（1） …… 171
図版25 SR1002出土遺物（2） …… 172
図版26 SR1002出土遺物（3） …… 173
図版27 SK・SP出土遺物 …… 174
図版28 包含層出土遺物（1） …… 175
図版29 包含層出土遺物（2） …… 176
図版30 包含層出土遺物（3） …… 177
図版31 包含層出土遺物（4） …… 178
図版32 包含層出土遺物（5） …… 179
図版33 包含層出土遺物（6） …… 180
図版34 包含層出土遺物（7） …… 181
図版35 包含層出土遺物（8） …… 182

表　目　次

第１表 SA1001出土遺物観察表 …… 108
第２表 SA1002出土遺物観察表 …… 108
第３表 SA1003出土遺物観察表 …… 109
第４表 SA1004出土遺物観察表 …… 109
第５表 SA1006出土遺物観察表 …… 110
第６表 SA1007出土遺物観察表 …… 111
第７表 SD1001出土遺物観察表 …… 111
第８表 SD1005出土遺物観察表 …… 112
第９表 SR1001出土遺物観察表 …… 117
第10表 SR1002出土遺物観察表 …… 118
第11表 SH1001出土遺物観察表 …… 119
第12表 SP1007出土遺物観察表 …… 119
第13表 SP1013出土遺物観察表 …… 119
第14表 SP1014出土遺物観察表 …… 119
第15表 SP1016出土遺物観察表 …… 120
第16表 SP1022出土遺物観察表 …… 120
第17表 SP1041出土遺物観察表 …… 120
第18表 SP1056出土遺物観察表 …… 120
第19表 SP1116出土遺物観察表 …… 120
第20表 SP1122出土遺物観察表 …… 120
第21表 SP1159出土遺物観察表 …… 120
第22表 SP1160出土遺物観察表 …… 121
第23表 SP1164出土遺物観察表 …… 121
第24表 SP1179出土遺物観察表 …… 121
第25表 SK1004出土遺物観察表 …… 121
第26表 SP1015出土遺物観察表 …… 121
第27表 包含層出土遺物観察表（古墳・古代） …… 121
第28表 包含層出土遺物観察表（中世・近世） …… 136
第29表 SA1006出土遺物観察表（土製品） …… 140
第30表 SD1005出土遺物観察表（土製品） …… 140
第31表 SR1001出土遺物観察表（土製品） …… 142
第32表 SP1179出土遺物観察表（土製品） …… 142
第33表 包含層出土遺物観察表（土製品） …… 142
第34表 SR1002出土遺物観察表（木製品） …… 144

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

小松島市の南部に位置する櫛渕から立江、赤石町内を北東方向に向かって流れる立江川の流域一帯は、平成６年12月から翌年３月にかけて県教育委員会文化課によって実施された櫛渕・立江両地区の県営圃場整備事業予定区域、約3,000,000m²を対象とした埋蔵文化財詳細分布調査と、その後の圃場整備事業の進展に伴う発掘調査によって遺跡の存在が周知されるに至った地域である。今回報告する立江馬渕遺跡は、住宅宅地関連公共施設整備促進事業および緊急地方道路整備事業の一環として、この圃場整備予定地内に計画された県道阿南小松島線の道路建設に伴い、路線内での発掘調査の必要性の有無と調査対象面積の確定のため、平成14年１月15・16日に23,000m²の調査対象区域内に設けられた15ヶ所の試掘トレンチの調査結果に基づいて、本調査を実施することが決定されるに至った遺跡である。この試掘調査の結果をもとに調査の対象となる区域の選定と調査面積が決定され、平成14年度当初から発掘調査が実施されることとなった。

2　調査の経緯

発掘調査は住宅宅地関連公共施設整備促進事業（阿南小松島線）関連の道路部分2,270m²と、緊急地方道路整備事業（阿南小松島線）関連の道路部分170m²の合わせて2,440m²を対象とし、平成14年４月１日から同年10月31日までの期間で調査が実施された。

平成14年度の発掘調査および16・17年度の整理体制は以下のとおりである。

○総括・総務担当

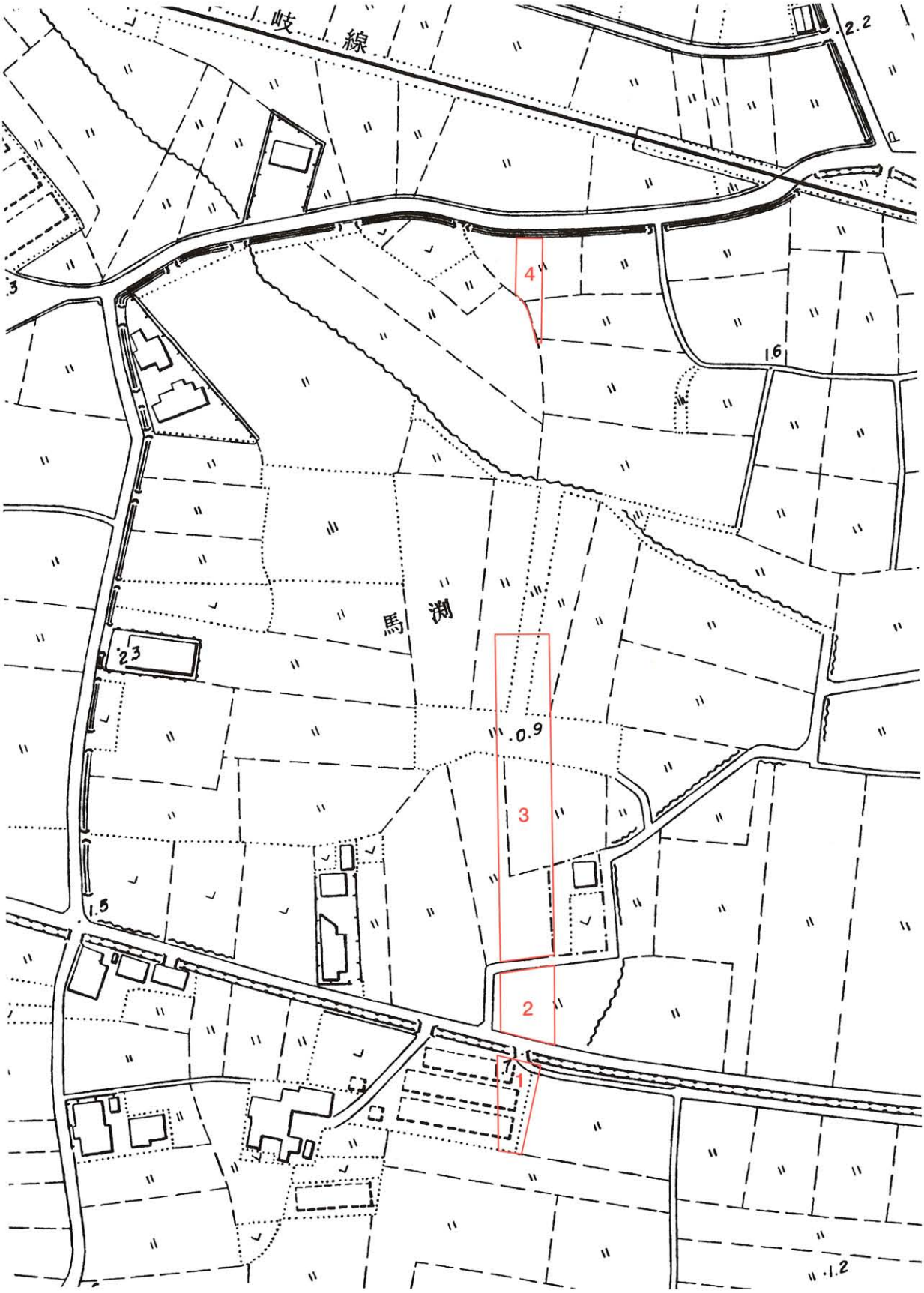
所　　長　本淨　敏之（平成14年度）　浦上　純二（平成16・17年度）
事務局長　西村　和博（平成14年度）　河野　幸一（平成16・17年度）
総務課長　山本　高史（平成14年度）　古田　哲郎（平成16・17年度）
調査課長　菅原　康夫（平成14年度）
整理・普及課長　島巡　賢二（平成14～17年度）
調査係長　新居　文和（平成14年度）
整理係長　貞野　雅巳（平成16年度）　豊田大之介（平成17年度）
総務係長　福本紀美子（平成14年度）　坂尾　俊一（平成16・17年度）
総務担当　布川　純子（平成14年度）　鈴木　智栄（平成16年度）　川口　治栄（平成16・17年度）
浦川　明美（平成17年度）

○発掘調査担当

須崎　一幸　前田　隆司

○整理担当

平成16年度　研究員　武中　宏之
平成17年度　研究員　久保脇　美朗



第１図　遺跡位置図（1/2,000）

3　発掘調査の方法

今回の調査では、発掘調査を始めるにあたってまず第Ⅳ系国土座標のＸ座標106900とＹ座標102930の交点を調査区の南西端の基点とし、調査区全体を５ｍ×５ｍを１単位とするグリッドで区画していった。各グリッドは基点となった南西の端から北に向かってはＡ・Ｂ・Ｃのアルファベットで、また東に向かっては１・２・３のアラビア数字を記号として記入し、Ａ１・Ｂ１というようにその組み合わせでグリッド名を表記するようにした。ただ、南北方向が直線距離にして300ｍ余りと長く、アルファベット表記が一巡すると、２巡目以降、再び同じ表記のグリッド名が現れることになる。このようなグリッド名の重複を避けるため２巡目からはＡＡ１・ＡＢ１というように先頭にＡ・Ｂ・Ｃの順にアルファベットを２桁で表記しグリッド名が重複することがないようにした。

4　調査日誌抄

４月１日　調査準備作業を開始する。

４月２日　徳島土木事務所・文化財課と現地で協議を行う。

４月４日　立江・櫛渕土地改良事務所と現地で協議を行う。

４月５日　プレハブ等の仮設関係の打ち合わせを行う。

４月11日　調査区内の一部の機械掘削作業を開始する。

４月12日　センターから事務所へ引越する。

４月15日　３区の機械掘削作業を開始する。

４月18日　２区の機械掘削作業を開始する。

４月19日　３区の機械掘削を終了する。

４月30日　３区の人力掘削を開始する。

５月14日　３区の人力掘削を終了。引き続き遺構面精査にはいる。

５月22日　３区の遺構面精査を終了する。

５月24日　３区で検出された自然流路部分の掘削作業を開始する。

５月27日　３区内の遺構配置図を作成する。

６月５日　３区の自然流路の東側部分の掘削作業を終了する。

６月６日　２区の人力掘削作業を開始する。

６月10日　２区内の遺構検出作業を部分的に開始する。

６月13日　３区の遺構検出作業を終了。引き続き遺構掘削作業にはいる。１区の機械掘削作業を開始する。

６月17日　２区内の一部の遺構の遺物出土状況写真の撮影と遺物の出土状況の平面図を作成する。

６月19日　３区の遺構面を再精査する。２区は遺物の出土状況平面図の作成作業を継続する。

６月21日　３区の南側を再度人力掘削する。

７月４日　２区南側部分の人力掘削作業を終了。ただちに遺構検出作業を行いSD1001を検出する。

７月８日　３区の遺構検出作業を終了。遺構掘削作業を開始する。

７月11日　２区内の遺物出土状況の写真を撮影する。３区は遺構掘削を継続する。

７月31日　４区の基準杭の打設を行う。

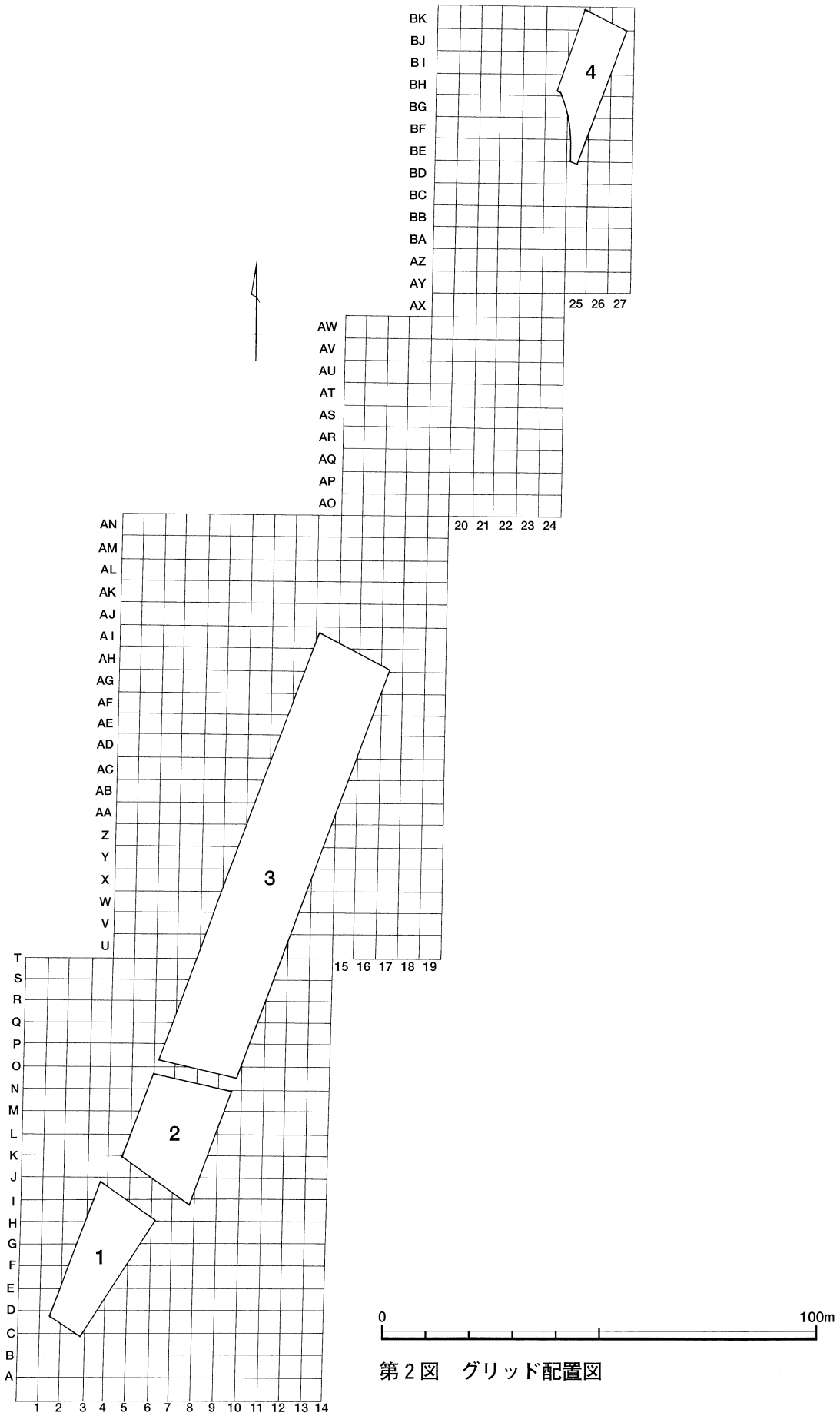
８月１日　４区の機械掘削作業を開始する。

８月５日　４区の機械掘削作業を終了する。

８月７日　４区の人力掘削作業を開始する。

８月19日　４区の人力掘削作業を終了する。

８月20日　４区内の遺構検出作業を開始する。３区は北側で検出された流路SR1002の広がりを確認するため調査区を北


BK
BJ
BI
BH
BG
BF
BE
BD
BC
BB
BA
AZ
AY
AX
25 26 27
4
AW
AV
AU
AT
AS
AR
AQ
AP
AO
20 21 22 23 24
AN
AM
AL
AK
AJ
AI
AH
AG
AF
AE
AD
AC
AB
AA
Z
Y
X
W
V
U
15 16 17 18 19
3
T
S
R
Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14
2
1
0
100m

第２図　グリッド配置図

側に拡張する。８月23日に３区で検出されたSD1005の掘削作業を開始する。

９月２日　３区内のSR1002の掘削作業を終了する。SD1005は遺構内の精査を開始する。

９月５日　３区の北側の拡張部分の包含層の人力掘削を終了。拡張部分でのSR1002の広がりを確認したうえで遺構掘削作業を開始する。

９月９日　SR1002の掘削作業を終了する。

９月12日　SR1001の遺構掘削作業を開始する。

９月18日　空撮のため２区内の清掃作業を開始。SD1001を完掘する。

９月25日　１・３・４区も空撮の準備作業にはいる。

10月３日　空撮を終了する。

10月４日　４区は完掘状況写真を撮影する。３区は調査の最終的な確認作業にはいり、一部の遺構内の遺物の出土状況の写真撮影を行う。

10月９日　１・２区は調査の最終確認作業を行うとともに、壁面の土層断面図の作成と写真撮影を行う。

10月10日　２区の壁面の土層断面図と写真撮影を継続する。

10月11日　２区は壁面の土層断面図の作成を終了し、調査を終了する。

10月15日　３・４区の壁面の土層断面図の作成と４区の壁面の写真撮影を行う。

10月16日　４区は壁面の土層断面図の作成作業を終了する。３区は壁面の写真撮影を完了する。

10月22日　３区は一部を残して壁面の土層断面図の作成作業を終了する。

10月24日　３区のSD1005の掘り下げを終了する。

10月25日　SD1005は遺構平面図を作成する。

10月28日　３区はSR1002の調査の最終確認作業を行う。

10月29日　３区は調査区内に残された一部の壁面の土層断面図を作成する。

10月31日　調査を終了。センターに帰還する。

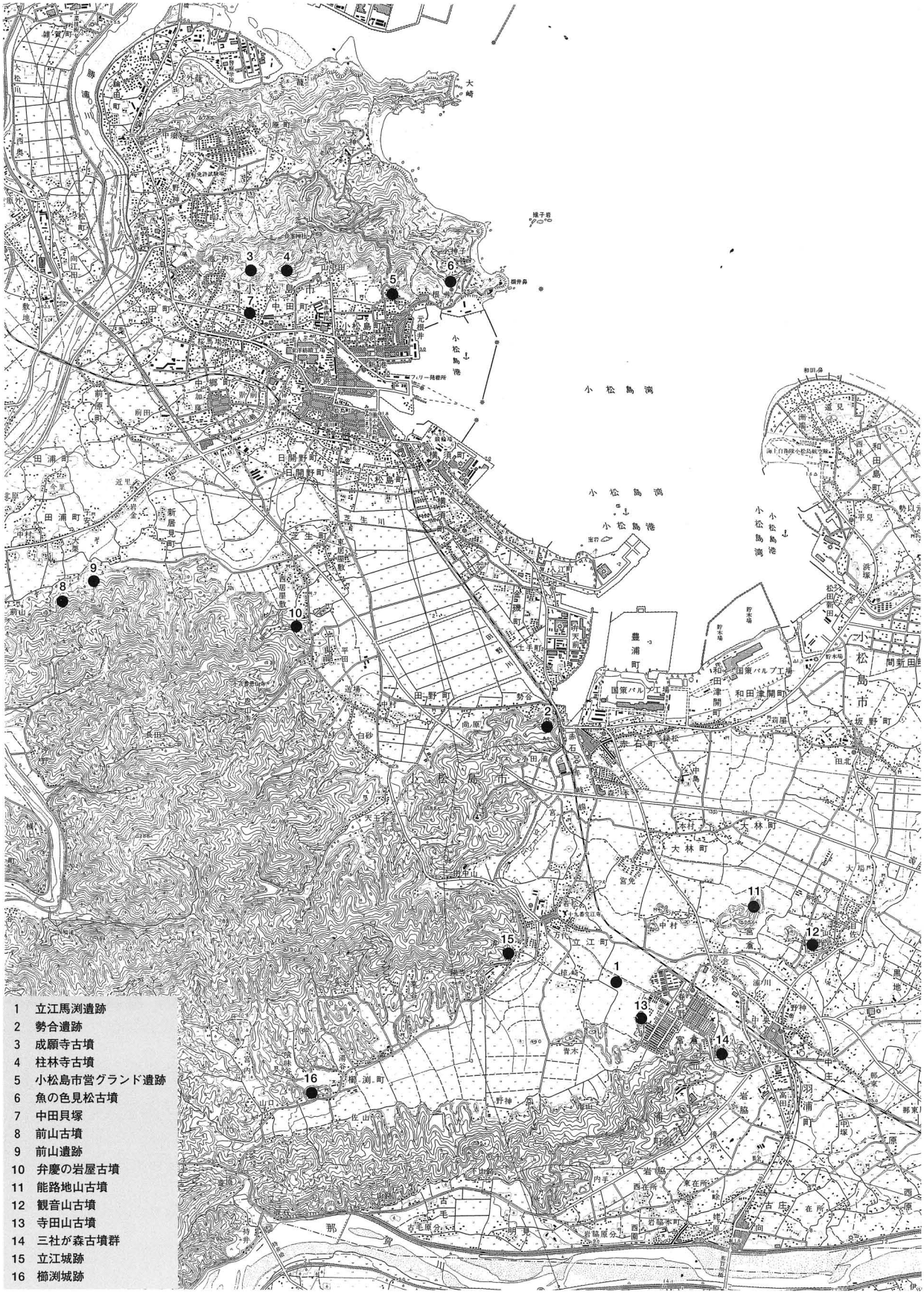
Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の地理的環境

四国の東端部に位置する小松島市は、紀伊水道に面した天然の良港、小松島湾に沿って開けた港湾都市で、古くから四国の東門として海上交通を中心に栄えてきた。市の北部、徳島市との境に広がる日之峰山地の南麓を西から東に向かって流れる神田瀬川流域から南の田野山地沿いの芝生川までの間は、四国山地の剣山山系を源流部とする全長約50㎞の勝浦川の旧河道にあたるため沖積地化が進み、小松島湾沿いの沈降海岸が埋め立てられて小松島平野が形成されている。一方、市の南部にあたる田野山地の東南側でも南を流れる一級河川那賀川によって沖積地化が進み、三角州や砂州、浜提が発達している。このような地理的条件のため、小松島市と、隣接する南の那賀川下流の市や町では、海抜５ｍ未満の低平な沖積地が町全体の面積に占める割合が高く、小松島市ではその比率が約70パーセントに達している。馬渕遺跡がある立江町は、西の櫛渕町、北の赤石町とともに市内南部を西から北東に向かって流れる立江川の流域に形成された、小松島市でも最も南に位置する町である。立江川は、北と南を四国山地からのびる北山と向山という２つの低い山地に挟まれ、東に向かって広がる楔形の平地部を流れる全長約６㎞の小河川で、上流の櫛渕町と下流部の立江町には、それぞれ櫛渕低地、立江低地と呼ばれる低地が形作られている。上流域の櫛渕低地は、もともと小松島湾に面した溺れ谷状の入江だったが、入り口部分にあたる下流の立江低地付近が、南を流れる那賀川の分流によって形成された三角州によってふさがれたため後背湿地化し潟湖となったものが、徐々に陸地化していったものと考えられている。一方、下流部の立江低地付近は、那賀川の分流による三角州の西端にあたることから、全体的に西の櫛渕低地よりも標高が1.5mほど高く、海抜２～３ｍほどの高位面が続いている。しかし、今回調査された馬渕地区周辺は、この微高地の縁辺部に位置するためか現在の地表面は標高1.5m前後の高さしかない。

2　遺跡の歴史的環境

立江馬渕遺跡の所在地である小松島市は市の面積の約70％が海抜５ｍ未満の沖積地上にあるため、以前からその存在が知られてきた遺跡は日之峰山地や田浦山地などの丘陵部に立地する場合がほとんどで、平野部での発見例は皆無に近かった。また、遺跡の時代を見ても、田浦町で採集された弥生時代の太形蛤刃石斧や、昭和２年に赤石町勢合（２）で発見された扁平紐式の銅鐸、それに昭和27年の小松島市営グランドの造成の際に出土した弥生時代後期と考えられる高坏以外は、ほぼ古墳時代に属する遺跡ばかりで、時代的にも著しい偏りがみられる。最も数が多い古墳時代の遺跡は、徳島市との境に位置する北の日之峰山地と、南の勝浦町寄りに位置する田野赤石山地、それに市の南東部に位置し立江町に隣接する羽ノ浦町宮倉の沖積地に点在する独立丘陵などに分布する古墳の存在があげられる。建島神社、成願寺（３）、桂林寺（４）、魚の色見松（６）、明神塚など、日之峰山地の古墳の多くは箱式石棺や横穴式石室を主体部とする古墳であったらしいが、現在では未調査のまますべて消滅してしまったものと考えられている。一方、田野赤石山地の丘陵部も古くから古墳の存在が知られてきた地域で、なかには前山古墳のように発掘調査が実施された古墳もある。芝生町大獄の弁慶の岩屋（10）は大正時代からその存在が知られていた古墳で、墳丘の盛土をすべて失ってはいるが横穴式石室としては県内でも最大級の規模を誇っている。田浦町前山にある前山古墳（８）は古墳時代前期の直径約15ｍの円墳で、昭和37年の調査で墳丘内から竪穴式石室と粘土郭の２つの埋葬施設が発見され、銅鏡や鉄剣、鉄斧などの鉄製品、



第３図　立江馬渕遺跡周辺の遺跡分布図

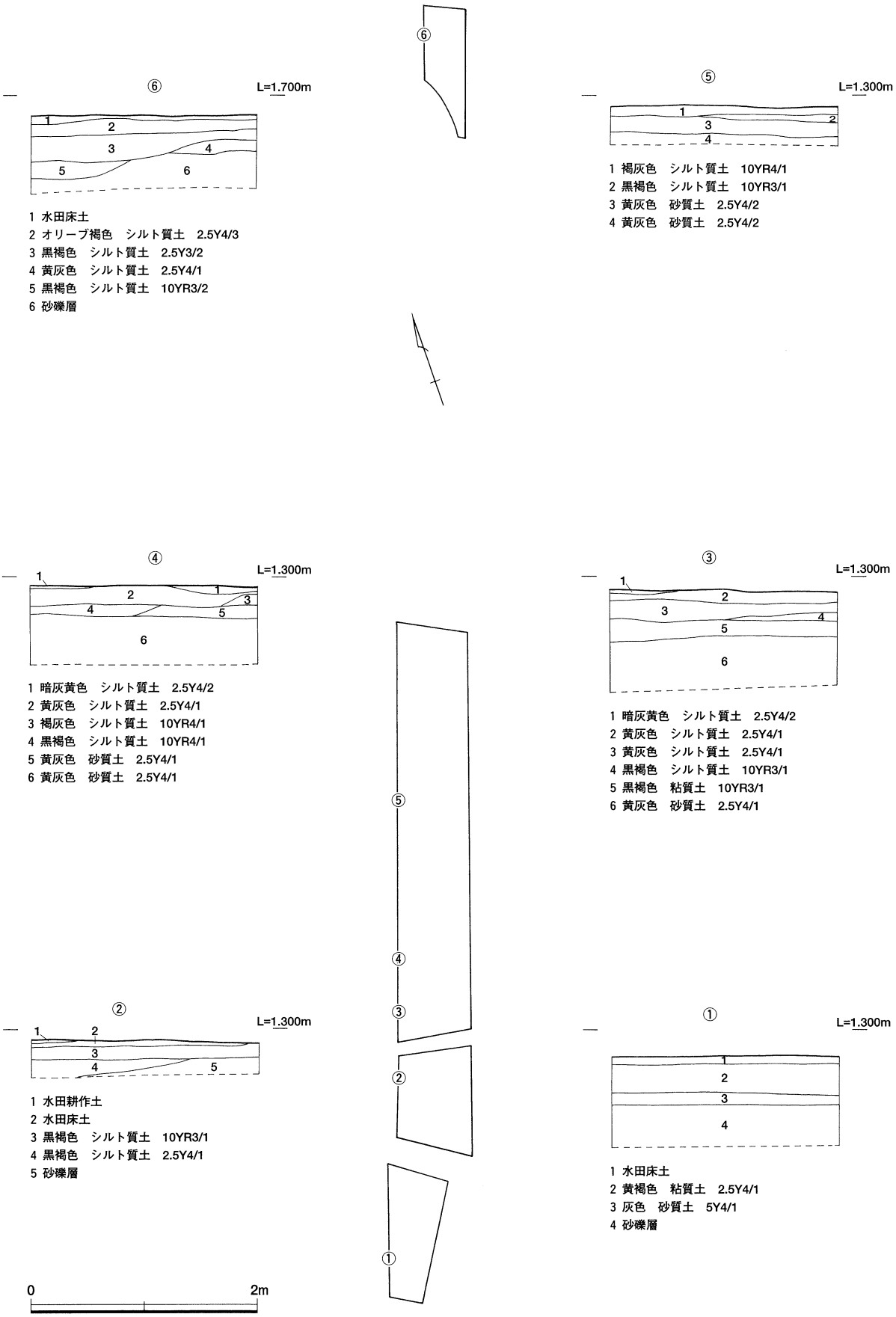
砥石が出土している。この前山古墳と尾根一つ隔てた東側の丘陵でも開墾の際に多数の埴輪が発見されているが、その他にもこの丘陵一帯からはたびたび須恵器などの出土が報じられ、山ノ神古墳をはじめとする多くの古墳が存在していたと考えられる。しかし現在では日之峰山地同様、開墾によってその大部分が消滅してしまったものと思われる。立江町に隣接する羽ノ浦町宮倉地区にも、羽ノ浦丘陵の東部に点在する独立丘陵上に、砂岩の巨石によって築かれた横穴式石室を持った能路地山古墳(11)、観音山古墳(12) の2つの古墳をはじめ、寺田山古墳(13)、三社が森古墳(14) などの古墳の存在が知られている。しかし、この時代でも古墳以外の遺跡は、先述した小松島市営グランド遺跡(5) と、中田貝塚(7) といういずれも日之峰山地南麓の2遺跡があるにすぎない。小松島市営グランド遺跡はグランド造成中に出土した遺物のため出土状況などは全く不明で、蛸壺の他に棒状有孔・有溝・管状など各種の土錘が採集されている。中田八幡神社境内に位置する中田貝塚は古くから知られていた遺跡で、貝塚を伴うことから縄文時代に属するとされていたが、採集される遺物が土師器に限られていることから、現在では古墳時代、またはそれ以降の時代の遺跡と考えられている。奈良・平安時代に入っても引き続き遺跡の発見例は少なく、中田町脇谷の須恵器の杯のように偶然の機会に遺物が採集された例がいくつか確認されてはいるが、今回の立江馬渕遺跡以外には1996年同じ圃場整備事業に伴って発見された大林町宮免遺跡以外にまとまって遺物が出土した例がなく、現在でも遺跡の分布が希薄な状況に大きな変化は認められない。しかし、平安時代の「和名抄」には、現在の勝浦川や那賀川の下流域一帯に存在した複数の郷名が記載されていることや、各地に条里地割りに関係する地名が残されていることから、具体的にその場所が特定されるまでには至らないものの、これらの河川の流域に古代の集落が存在していたと考えられてきた。その一つに那賀郡坂野郷の郷名が上げられるが、これは立江町に隣接する小松島市坂野町一帯を指しているとされてきた。一方、立江町から櫛渕、坂野町にかけては「市の坪」、「中の坪」、「三条地」、「六の坪」、「一丁ヶ坪」などの条里に関係する地名が残され、土地の区画の上にも条里に関係する地割りが分布していることから、坂野郷は現在の坂野町を中心にして近隣の立江・櫛渕近辺までその範囲が及んでいたものと考えられている。したがって立江馬渕遺跡は時代的にも距離の上からもこの坂野郷との関係を考慮せざるをえない場所に位置する遺跡だといえよう。立江低地での遺跡の発見は馬渕遺跡の東の宮免遺跡とともに沖積地上での古代の集落の広がりを確認することができた意義は大きい。中世にはいると鎌倉時代に櫛渕町に櫛渕庄が、南北朝時代には立江町に立江庄が存在したことが文献に記載されているが、現在まで残されているこの時代の遺跡に櫛渕城(16) と立江城(15) がある。櫛渕城は築城の年代は不明だが、戦国時代には地頭秋元氏の居城とされ、豊臣秀吉の四国平定後に蜂須賀家が阿波に入部後廃城になったと考えられている。立江城も築城年代が不明な山城で、戦国時代には小笠原左京がいたことが知られているが詳細は不明である。

第４図　立江馬渕遺跡遺構配置図

Ⅲ　調査結果

1　遺跡の基本層序

今回の調査は、平成14年１月に実施された試掘調査の結果を受けて道路建設予定地内約320ｍの区間に４ヶ所の調査区を設けて行われた。南側の１区から３区までは各調査区が短い間隔を置いて設定されたが、３区と一番北に設置された４区との間は約80mほど離れている。一番南の１区については調査の結果、遺構面や遺物を全く検出できなかったが、１区から約８ｍ北に位置する２区では耕作土と２cmほどの厚さの褐灰色の水田の床土直下に、遺物包含層である黒褐色シルト質土が調査区全体に10cm前後の厚さでほぼ均一に分布していた。黒褐色シルト質土層の下には、上面が遺構検出面となる黒褐色だが粘性のないシルト質土、続いて砂利層の順に堆積していた。遺構検出面の黒褐色シルト質土は調査区内に均等に堆積している上層の遺物包含層とは異なり、北に向かうほど下から砂利層が隆起し北壁近くで途切れている。２区から約７ｍ北に設定された３区は南北約100ｍの長さを持った調査区で、調査区の南北両端と中央部分とでは土層の堆積状況が大きく異なっている。調査区の中央部分は最も遺構が集中する地点で、耕作土直下の標高約1.2m付近に遺物包含層である褐灰色シルト質土が水平に約５cm前後の厚さで堆積し、その下は黄灰色砂質土・黄灰色細砂土と続いている。平均して約５cmの厚さを持った黄灰色砂質土の上面が遺構検出面にあたり、３区内を流れる自然流路ＳＲ１００１とＳＲ１００２の間に安定して広がっている。しかし自然流路ＳＲ１００１の南側では中央部とは多少様相の異なる土層の堆積状況が認められる。ＳＲ１００１の南には、一部に調査区中央部に広がる褐灰色シルト質土・黄灰色砂質土・黄灰色細砂土の連続した堆積が残されているものの、途中から上層の褐灰色シルト質土・黄灰色砂質土を切るように黄灰色シルト質土、黒褐色シルト質土、黒褐色粘質土が堆積し、黄灰色細砂土へと続いている。このことからＳＲ１００１の南側ももともとは調査区中央部同様、耕作土直下に包含層の褐灰色シルト質土と遺構検出面の黄灰色砂質土が堆積していたが、ＳＲ１００１のような流路の変化にともない、本来の土壌の堆積が押し流され、その後に黄灰色シルト質土、黒褐色シルト質土、黒褐色粘質土などが新たに堆積したものと考えられる。一方、調査区の北側では東西方向の自然流路ＳＲ１００２が検出されている。流路内は北に向かってゆるやかに降下する黄灰色細砂土層の上に灰色や黄灰色・黒褐色のシルト質土や粘土質の土壌が複雑に堆積している。中央で検出された遺物包含層や遺構検出面と同じ土層の堆積は流路内には見あたらなかったが、流路の肩にあたる部分には褐灰色の遺物包含層が流路内の堆積と交互に重なるように堆積していた。流路内から出土した遺物は、調査区中央部の遺構から出土する遺物とほぼ同じ時期かそれよりも古い遺物を含んでいることから、南側の掘立柱建物跡群が形成された時期にはすでに存在していたものと考えられる。３区から約80m北に設定された４区は現在の地表面が１～３区と比較して30cmほど高いが、水田の床土直下に20～30cmの厚さの黒褐色または黄褐色のシルト質の無遺物層が堆積し、その下には３区の遺物包含層とほぼ同じ高さの標高約1.2m付近に調査区の一部ではあるが遺物を含む黒色または黒褐色のシルト質土が約20cm近く堆積していた。しかしその下は全面砂利層で遺構等はいっさい確認することはできなかった。



第５図　立江馬渕遺跡基本土層図

2　検出された遺構と遺物

古代の遺構と遺物

掘立柱建物跡　ＳＡ（第６～19図）

掘立柱建物跡　１（ＳＡ１００１）（第６図）

２区の掘立柱建物跡群の一番南側から検出された梁間２間、桁行４間の東西棟の側柱建物である。南東隅の桂穴１基は自然流路ＳＲ１００１による浸食によって流失している。柱間の間隔は梁行側、桁行側とも2.2または2.4mと比較的揃っているが柱の通りはやや悪い。柱穴は直径約40～60cmの円形、または長軸の長さが約60～80cmの楕円形で、比較的規模が大きい。西側の梁行列の中央の柱穴内からは根石または礎盤石に使用されたと考えられる角礫が検出されている。６基の柱穴から図示できる遺物が出土している。

柱穴出土遺物

柱穴　28（ＳＰ１０２８）（第７図）

１はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の杯である。体部外面には横ナデ調整が多段に施され、その際に生じた稜線が明瞭に残されている。

柱穴　25（ＳＰ１０２５）（第７図）

６は球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに外反しながら上方にのびる口縁部を持った須恵器の壺または甕である。体部外面には平行線状、内面には同心円文のタタキがそれぞれ施されている。

柱穴　29（ＳＰ１０２９）（第７図）

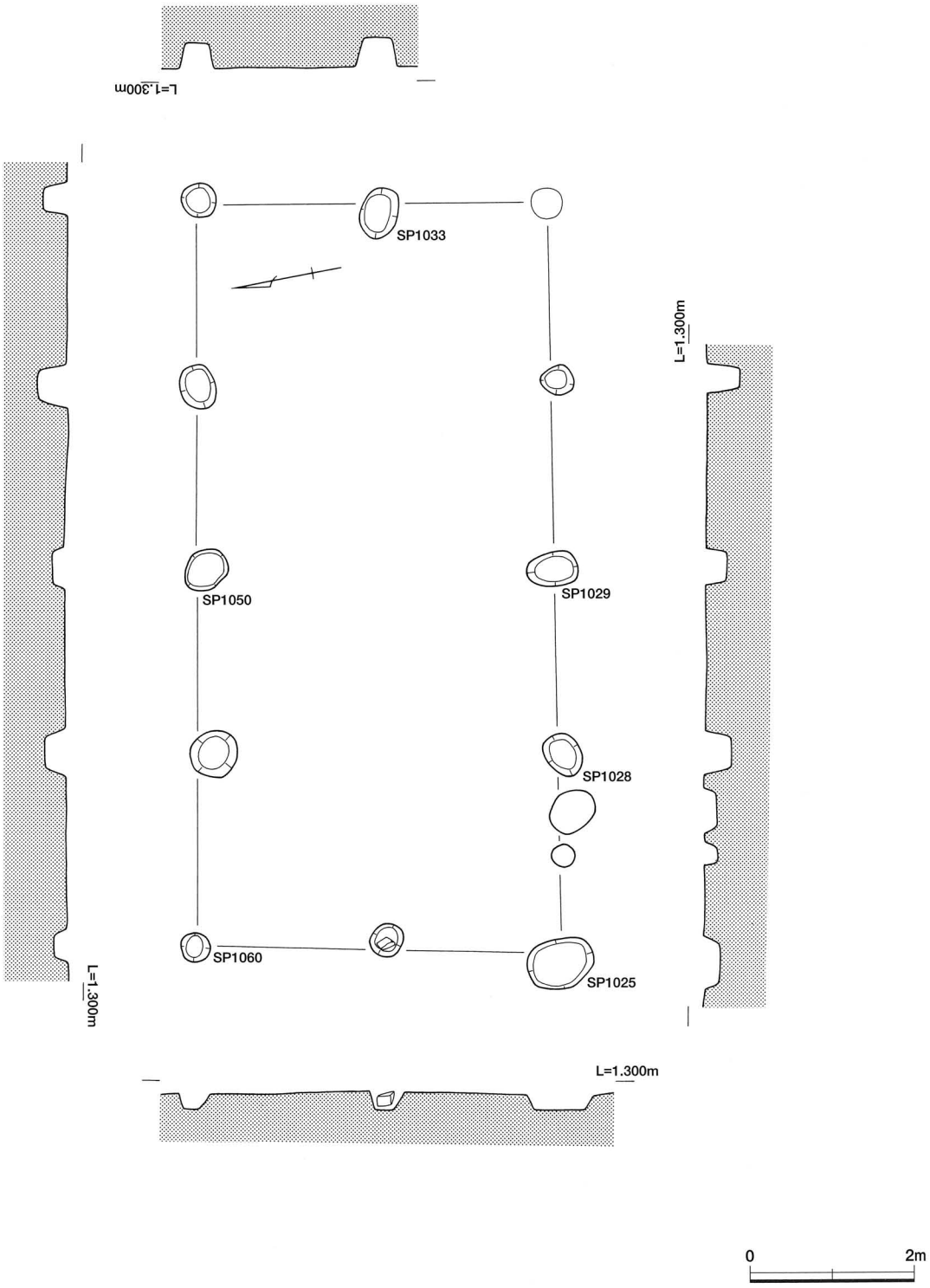
２はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の杯である。底部は周縁部が円く仕上げられ、体部との境が不明瞭である。

柱穴　33（ＳＰ１０３３）（第７図）

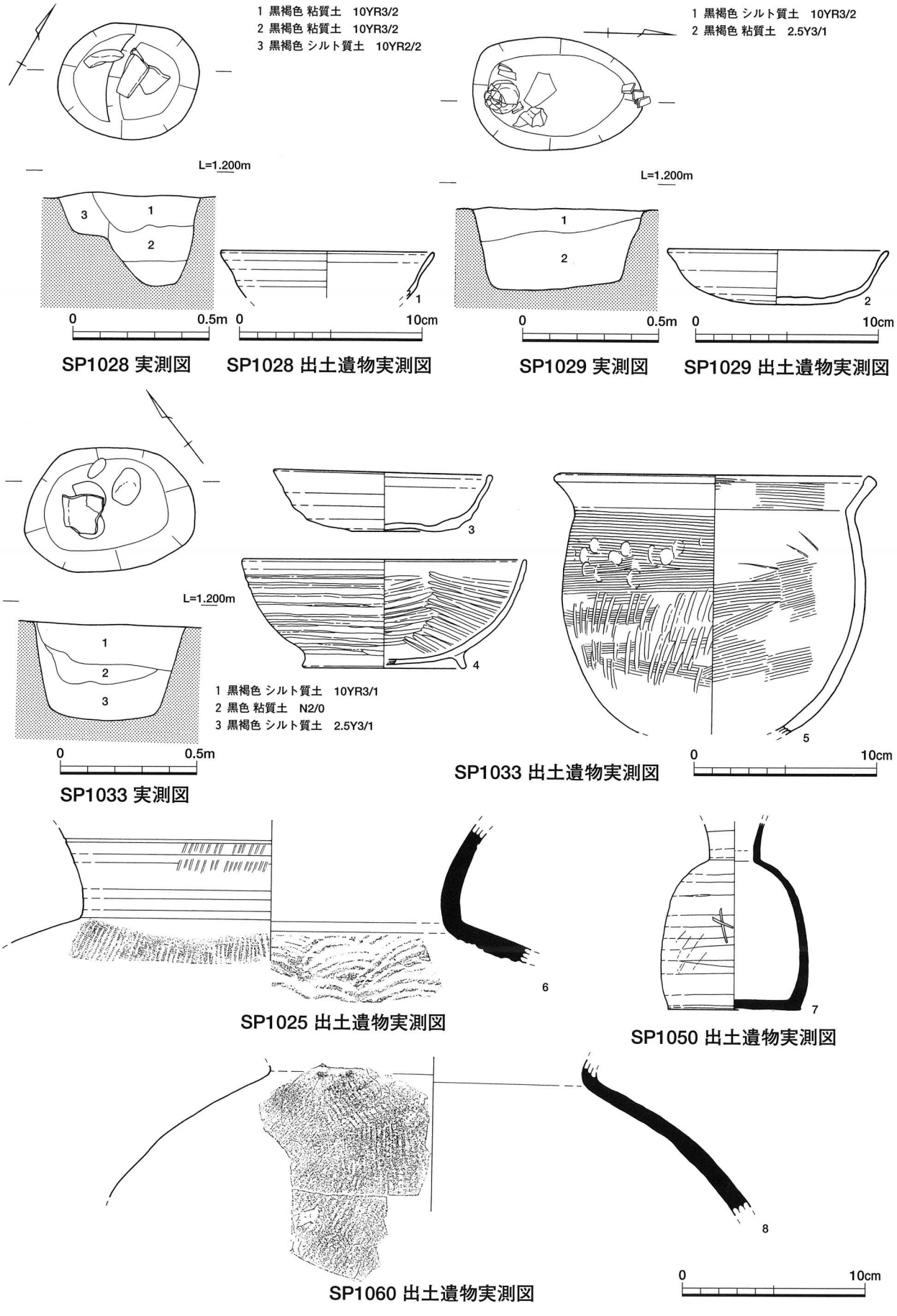
３は上方への開きの小さい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の杯である。全体に器壁が薄く仕上げられ、横ナデ調整が多段に施された体部には、その際に生じた稜線が残され凹凸が目立つ。体部は底部との境が円く仕上げられ立ち上がりが不明瞭である。５は球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からのびる上方への開きが小さく端部が円く仕上げられた直線的な口縁部を持つ丸底の土師器の甕である。体部の調整は内面がハケ目調整だけなのに対し、外面は上半部が指オサエ、下半部は平行タタキがハケ目調整とともにおこなわれている。４は大きく内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った黒色土器Ｂ類の深椀である。丸底の底部には「ハ」の字状に開く低い高台が付けられている。外面は回転力を使用したと考えられる平行ミガキ、内面は市松状の分割ミガキというように、内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が加えられている。

柱穴　50（ＳＰ１０５０）（第７図）

７は平底の底部と筒状の体部を持った須恵器の小型の長頸壺である。×印が刻まれた体部は肩の張りが全くみられないなで肩で、口縁部はゆるやかに外反しながら上方に向かってのびている。



第6図　SA1001実測図



第７図　SA1001出土遺物実測図

柱穴　60（ＳＰ１０６０）（第７図）

８は球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部を持った須恵器の壺または甕である。体部外面にはハケ目調整と平行タタキが加えられ、内面は同心円文が擦り消されている。

掘立柱建物跡　２（ＳＡ１００２）（第８図）

掘立柱建物跡群の東端に位置する梁間３間、桁行３間の南北棟の建物である。柱間の間隔は梁行間が2.2～2.4m、桁行間が2.6～2.7mと桁行側が若干長い。柱穴は１基を除いて円形または不整円形だが、大きさは直径・深さとも20cmに満たない小さなものから、直径約60cm、深さ40cmを測るものまで不揃いなものが目立っている。また２基の柱穴の中からは柱根が検出されている。１基は直径10cm足らずの細いものであるが、もう１基の柱根は20cmを越える比較的太いものである。３基の柱穴から図示できる遺物が出土している。１基（ＳＰ１０６５）の遺物は出土状況から流れ込みの可能性が高いが、他の２基については、それぞれ柱穴の中心部から完形の土器が単独あるいは折り重なった状態で出土していることから柱抜き取り後に埋納または投棄されたと考えられる。

柱穴出土遺物

柱穴　64（ＳＰ１０６４）（第９図）

９は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った高台付の杯である。体部との境が「く」の字に屈曲する平底の底部には「ハ」の字に開く比較的高い高台が付けられている。10・11は何れも直線的で短い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の小皿である。周縁部が円く仕上げられたヘラ切りの底部は、体部との境が不明瞭である。

柱穴　65（ＳＰ１０６５）（第９図）

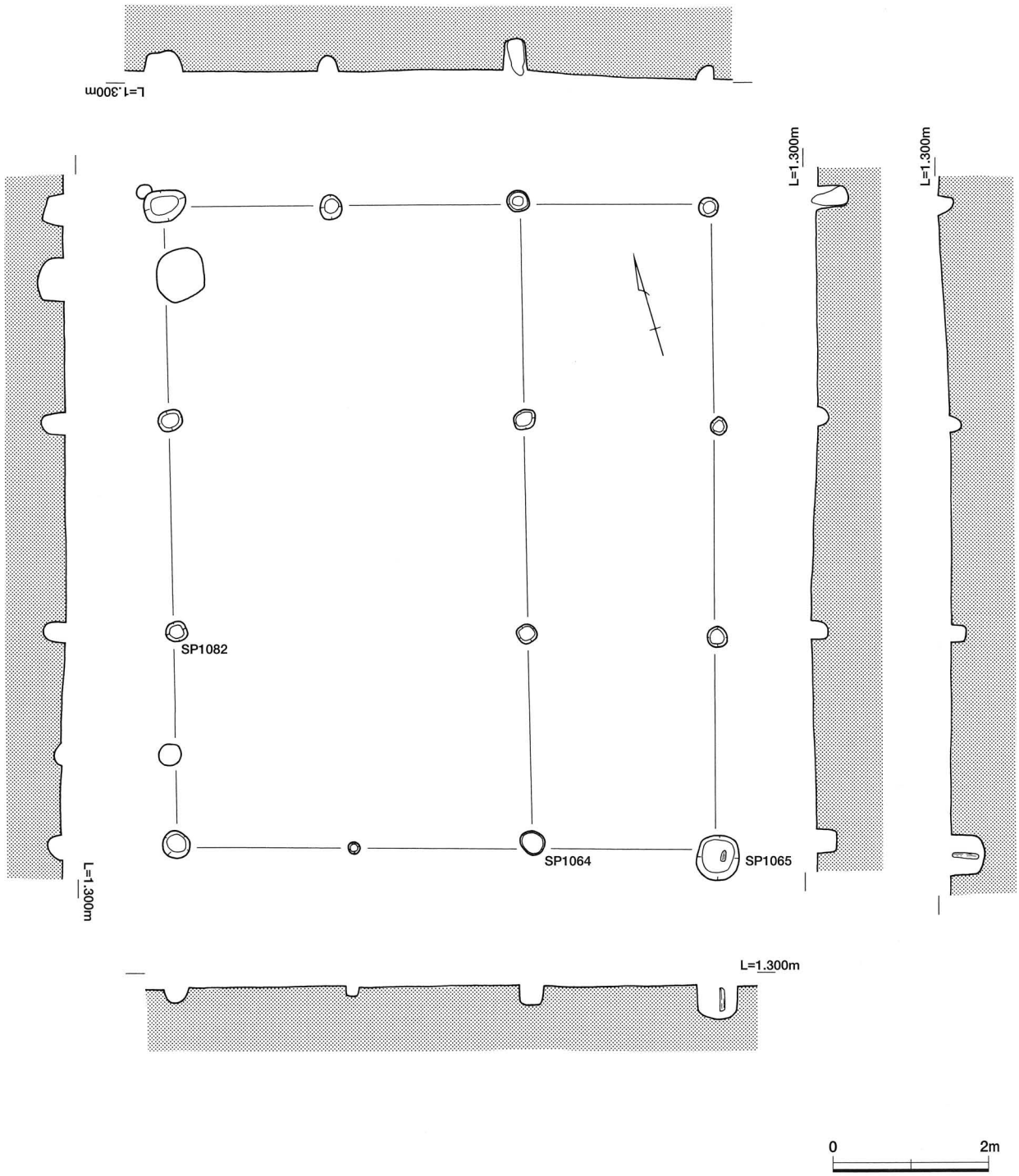
12はＳＰ１０３３の５と同じ特徴を持った土師器の甕であるが、５よりも頸部の屈曲の度合いが弱く、口縁端部は円く仕上げられている。体部の調整は内面が横または斜め方向のハケ目調整が全面に施されているだけであるが、外面は、上半部が指オサエと横方向の細かいハケ目調整、下半部が平行タタキというように上下で調整が異なっている。

柱穴　82（ＳＰ１０８２）（第９図）

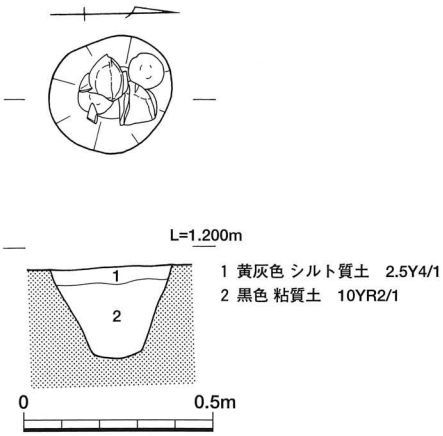
13は上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った黒色土器椀である。ゆるやかに内彎する体部は内面に不規則なヘラミガキが加えられている。比較的高い高台は外下方への開きが小さく肥厚する接地部が円く仕上げられている。

掘立柱建物跡　３（ＳＡ１００３）（第10図）

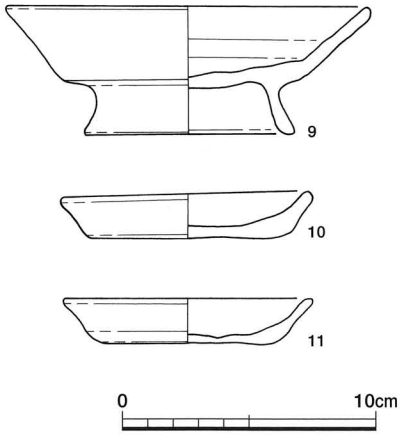
掘立柱建物跡４～７と重複して検出された梁間２間、桁行３間の南北棟の側柱建物である。柱間の間隔は梁間間が２～2.2m、桁行間が2.4～2.6mと比較的揃っている。柱穴は大きさ、形とも不揃いで、円形、または不整円形のものが大部分を占めている。３基の柱穴から柱根が検出されているが、太さがまちまちで、１基は直径が約20cmあるが、他の２本は直径10cm足らずしかない。２基の柱穴から図示できる遺物が出土している。そのうちの１基（ＳＰ１０９５）では、不整楕円形の柱穴のほぼ中央部から土師器や須恵器の甕、須恵器鉢の大型の破片が集中して出土していることから柱抜き取り後に埋納または投棄された遺物と考えられる。



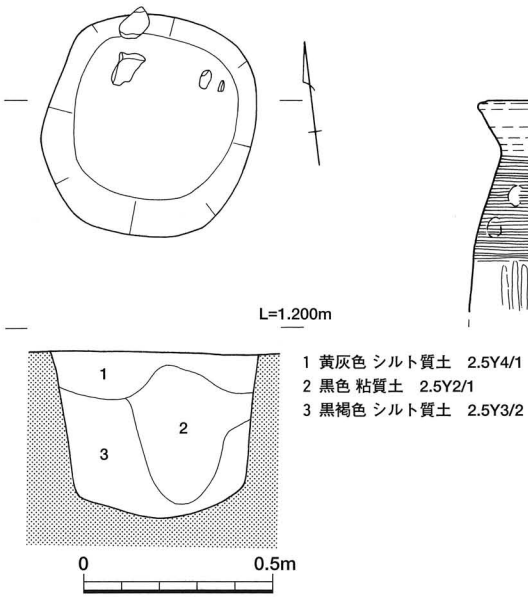
第8図　SA1002実測図



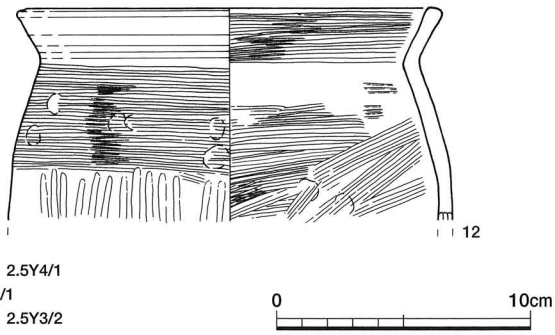
SP1064 実測図



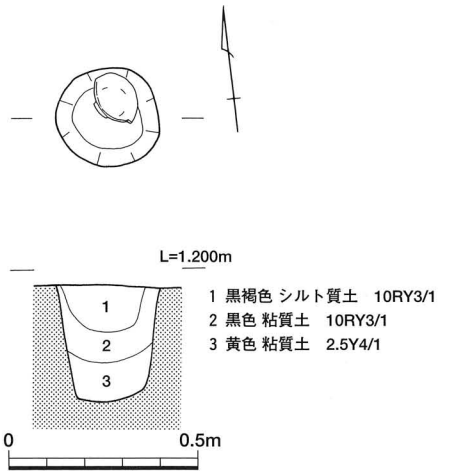
SP1064 出土遺物実測図



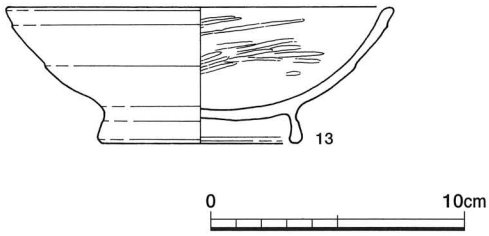
SP1065 実測図



SP1065 出土遺物実測図



SP1082 実測図



SP1082 出土遺物実測図

第 9 図　SA1002出土遺物実測図

柱穴出土遺物

柱穴　95（ＳＰ１０９５）（第11図）

14は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の杯で、体部には多段に加えられた横ナデ調整の痕が残されている。15は筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持った土師器の甕である。上方に拡張されて平坦部が作り出された口縁端部は、項部が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。16も筒状の体部と、屈曲する頸部から外上方にのびる口縁部を持った土師器の甕である。内彎する口縁は端部が円く仕上げられ、内面が横ナデによって浅くくぼんでいる。体部には内外面とも粗いハケ目調整が加えられている。外面のハケの方向は通常、縦または斜め方向が一般的だが16の場合は横方向にも調整が加えられている。17は上方へ大きく開く直線的な体部と、「く」の字に屈曲する短い口縁部が上方に拡張された須恵器の鉢である。口縁端部はにぶく尖らされ、口縁の拡張部は中央部が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。11世紀の讃岐十瓶山産と考えられる。18は球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から大きく外反する口縁部を持った須恵器の甕である。平坦に仕上げられた口縁端部からやや下がった位置には段が設けられ、幅の狭い帯状の口縁部が作り出されている。体部外面には格子目、内面には同心円状のタタキ目調整が施されている。

柱穴　111（ＳＰ１１１１）（第11図）

19は上方へ大きく開く器高の低い体部と、ゆるやかに外反する口縁部を持った土師器の小皿である。わずかに肥厚する口縁は端部が円く仕上げられている。20は直立する筒状の体部と口縁部の境に幅広い鍔がまわされた土師器の羽釜である。円く仕上げられた口縁端部は内面が横ナデによって浅くくぼんでいる。

掘立柱建物跡　4（ＳＡ１００４）（第12図）

梁間２間、桁行３間を測る南北棟の側柱建物である。掘立柱建物跡ＳＡ１００７・１００８同様、隣接する柳ノ内遺跡の調査区内で建物の西側の桁行列が検出されている。柱間の間隔は梁行間が1.6～２m、桁行間が2.2～2.4mとで桁行側が若干長い。柱穴は直径約40～60cmの円形、または長軸の長さが60～80cmを測る楕円形の比較的大きなもので、深さも40cm前後のものが多い。３基の柱穴から遺物が出土したが、そのうちの２基は遺構の中心付近に比較的多くの土器が残されていたことから、柱穴抜き取り後に遺物を埋納または廃棄したものと考えられる。

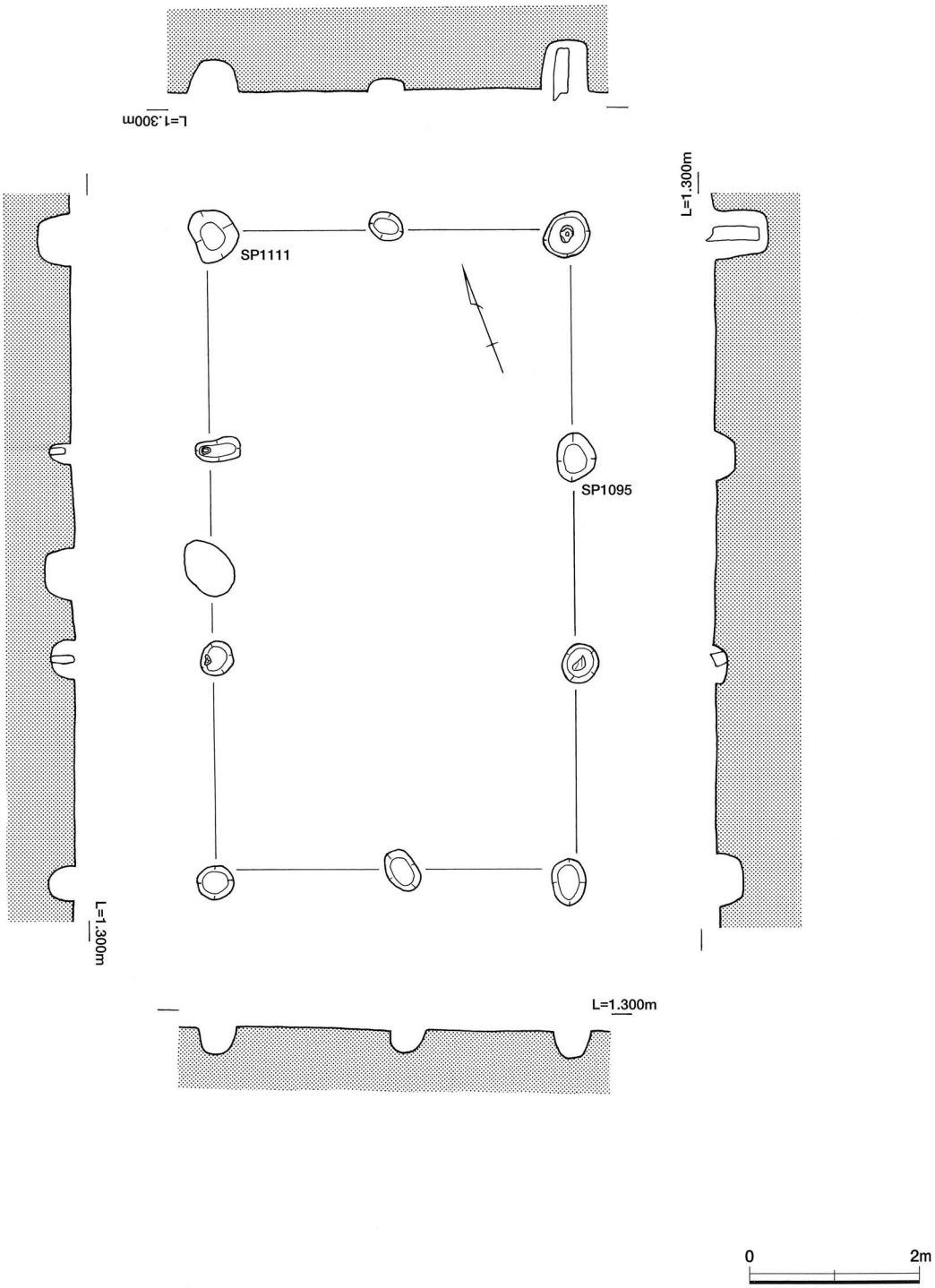
柱穴出土遺物

柱穴　78（ＳＰ１０７８）（第13図）

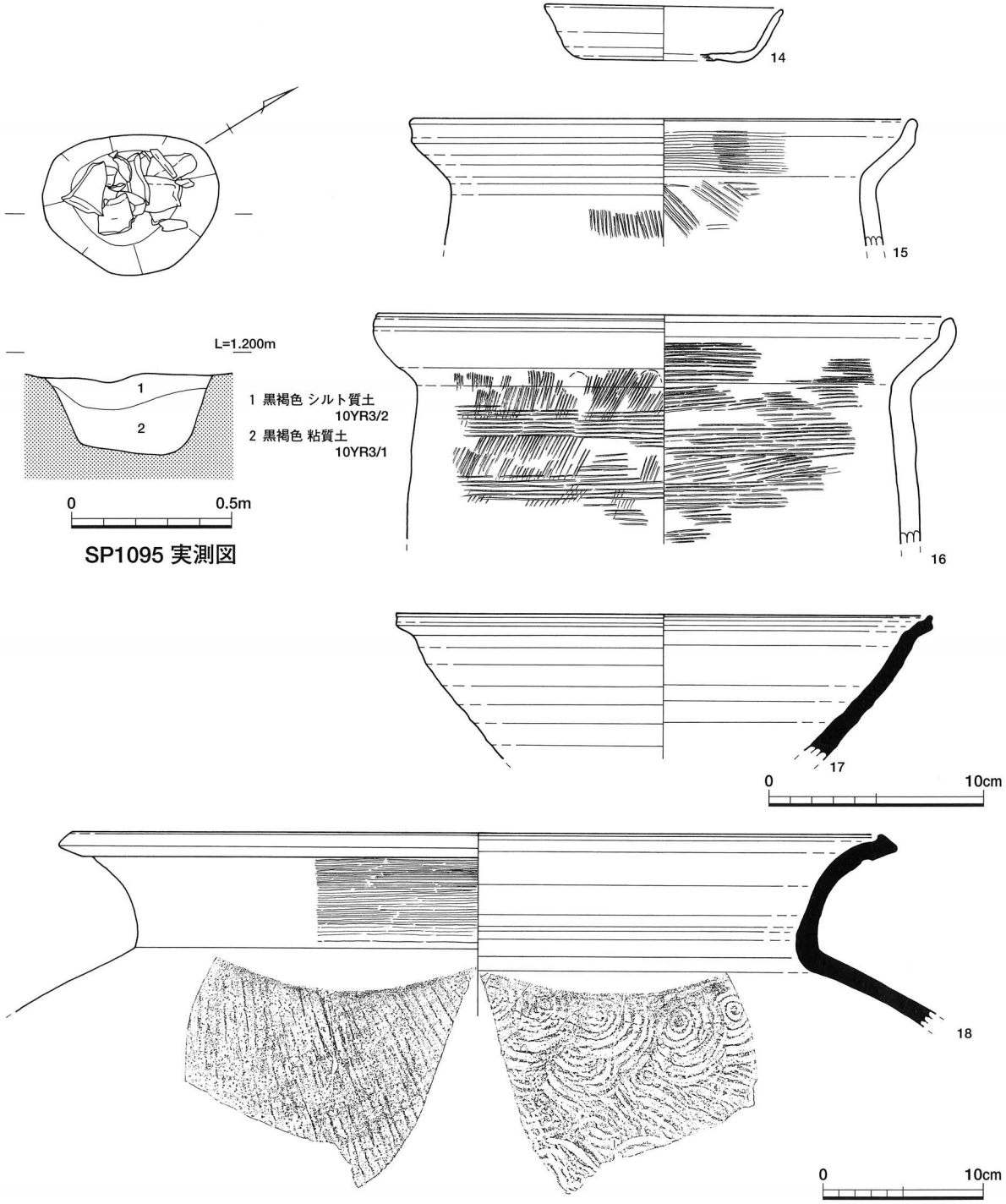
21は直線的で上方への開きが大きい体部と、端部内面に凹線状の浅い沈線が引かれた口縁部を持った土師器の皿である。体部は底部との境で「く」の字に屈曲して立ち上がっている。22はゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた外反する口縁端部を持った土師器皿である。底部は周縁部が円く仕上げられ、体部との境が不明瞭である。

柱穴　91（ＳＰ１０９１）（第13図）

23は直線的な体部と、円く仕上げられたわずかに外反する口縁端部を持った土師器の杯である。周縁部が円く仕上げられたヘラ切りの底部と、上方への開きが比較的小さい体部とは境が不明瞭である。24は上方への開きが大きく器高の低い体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持った土師器の皿である。体部の立ち上がりは円く仕上げられ境が不明瞭である。25はわずかに膨らんだ体部と、「く」

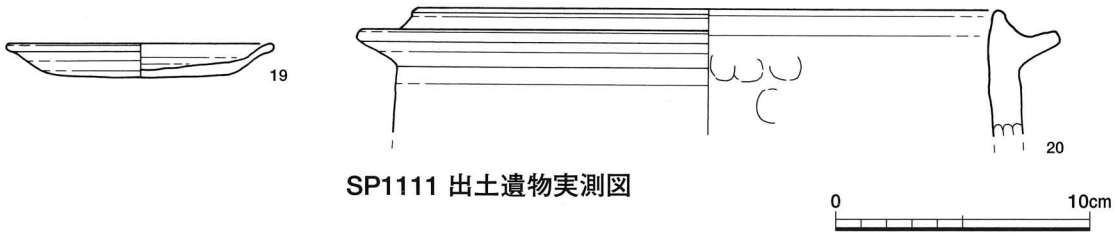


第10図　SA1003実測図



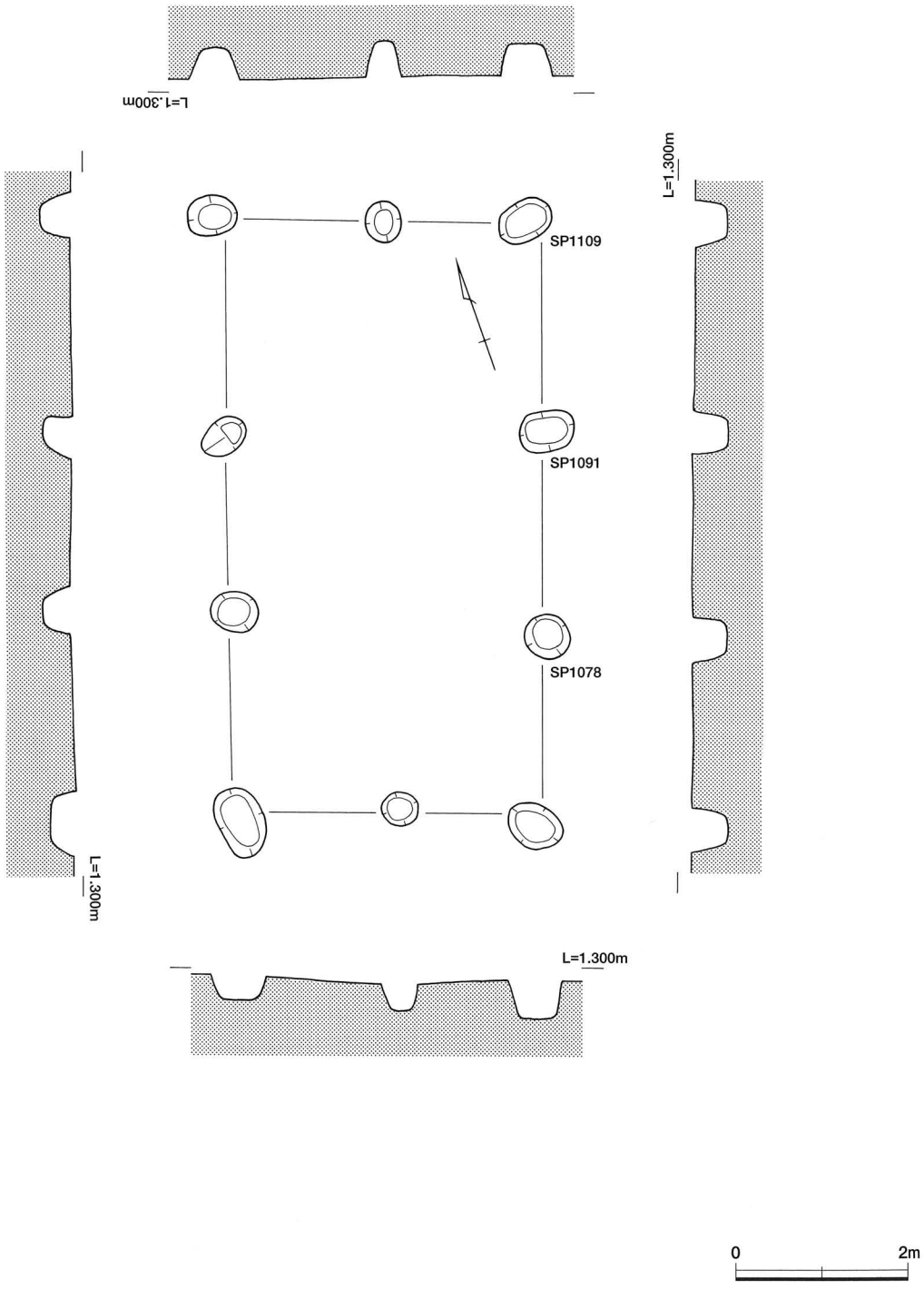
SP1095 実測図

SP1095 出土遺物実測図

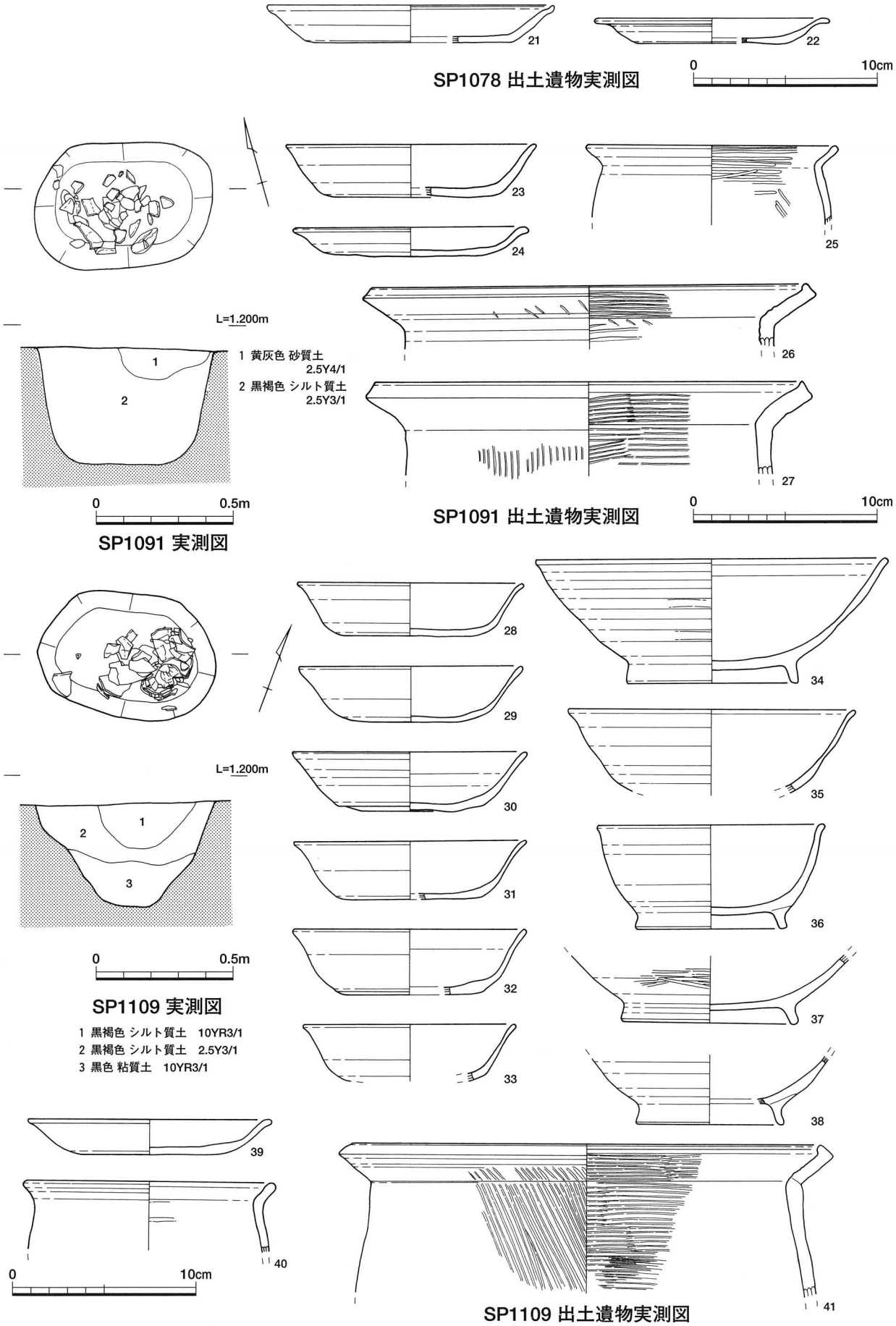


SP1111 出土遺物実測図

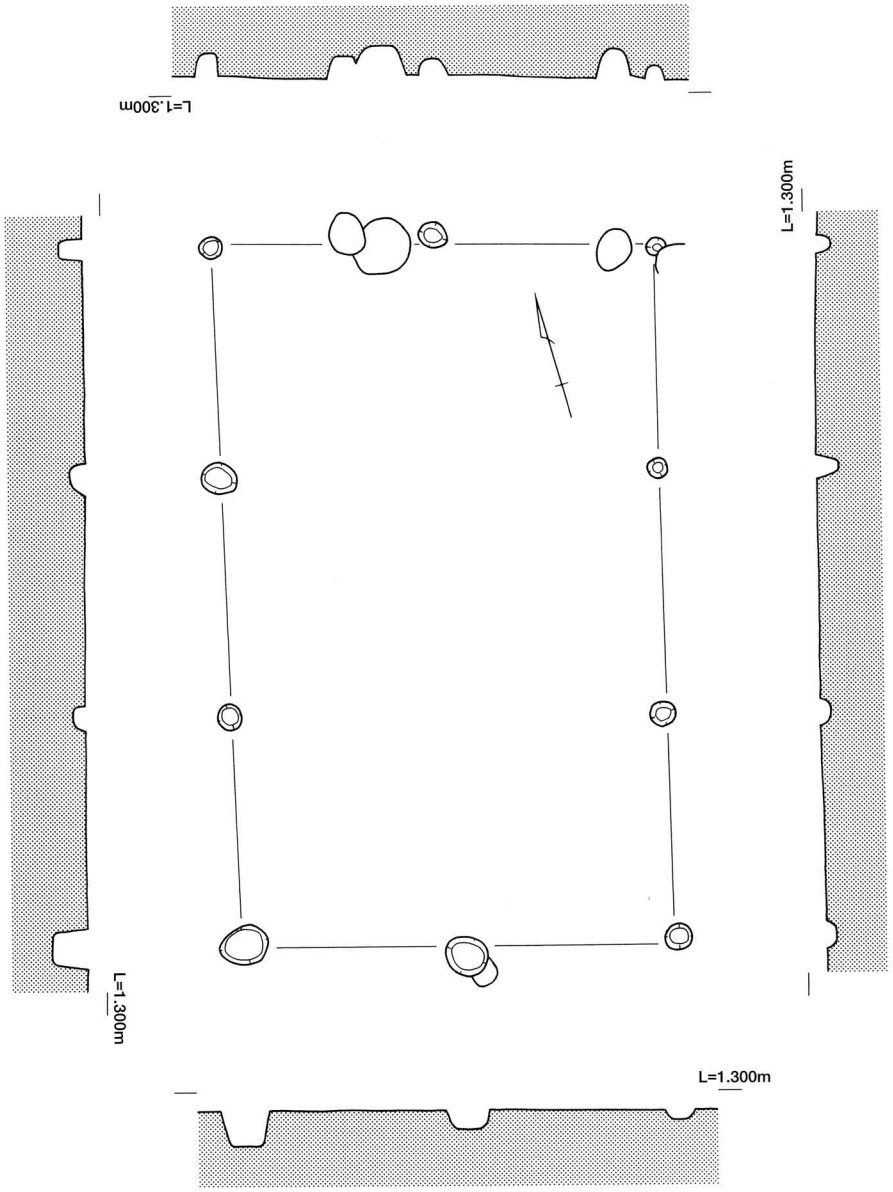
第11図　SA1003出土遺物実測図



第12図　SA1004実測図



第13図　SA1004出土遺物実測図



第14図　SA1005実測図

の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的で短い口縁部を持った土師器の甕である。口縁端部は円く仕上げられ、体部は内面にヘラミガキが加えられている。26・27は直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持った土師器の甕である。わずかに上方に拡張された口縁端部は、頂部の平坦面が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。

柱穴　109（ＳＰ１１０９）（第13図）

28～33はいずれも端部が円く仕上げられたゆるやかに外反する口縁部を持った土師器の杯である。周縁部が円く仕上げられたヘラ切りの底部は、内彎気味に立ち上がる体部との境が不明瞭である。34～38はいずれも土師器の高台付椀である。34はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った個体である。底部には外下方に向かってわずかに開く比較的高い高台が付けられている。体部外面には平行する横方向のヘラミガキが多段に加えられている。35もゆるやかに内彎する体部を持った個体で、円く仕上げられた口縁端部はわずかに外反している。36も同じく端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持ち、底部には接地部が円く外下方に開く比較的高い高台が付けられた土師器の高台付の椀であるが、ゆるやかに内彎する体部は他の高台付の椀とは異なり上方への開きがほとんどない。39はゆるやかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った土師器皿である。周縁部が円く仕上げられたヘラ切りの底部は、上方への開きが大きい体部との境が不明瞭である。40はわずかな膨らみを持った体部と、頸部から外上方にのびる端部が円く仕上げられた短い口縁部を持った土師器の甕である。41は筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方に向かってのびる直線的な口縁部を持った土師器の甕である。口縁端部は上方に拡張され頂部が平坦に仕上げられている。

掘立柱建物跡　５（ＳＡ１００５）（第14図）

掘立柱建物跡３、４、６、７と重複して検出された梁間２間、桁行３間の南北棟の側柱建物跡である。柱間の間隔は梁間間で約2.2m、桁行間で2.3～2.6mを測り、北側の梁行列が南側よりも若干長い。柱穴は直径約30cm、深さ10cmの円形のものから、長軸の長さ約70cm、深さ40cmの不整楕円形のものまで大きさ、形とも不揃いだが、小型で円形のものが多い。

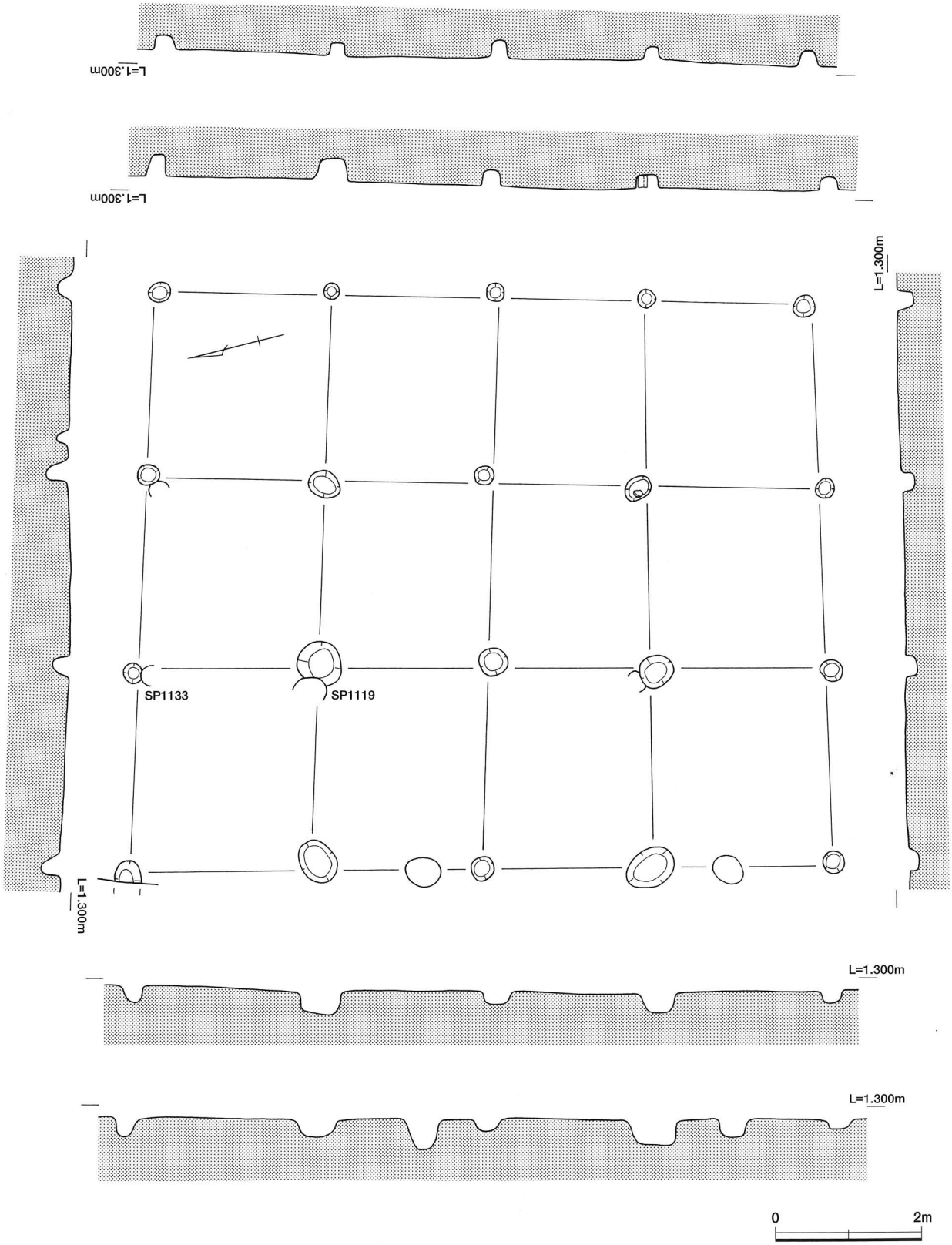
掘立柱建物跡　６（ＳＡ１００６）（第15図）

掘立柱建物跡２、４、５、７と重複して検出された梁間３間、桁行４間の南北棟の総柱建物跡である。柱間の間隔は梁行側で2.4～2.6m、桁行側で２～2.4mと比較的揃っているが、桁行間に対して梁行側の間隔が若干長くなっている。柱穴は直径約30cm、深さ20cmの円形のものから、長軸の長さ約70cm、深さ40cmの楕円形のものまで、大きさ、形とも不揃いである。梁行列、桁行列とも比較的柱の通りが悪い。

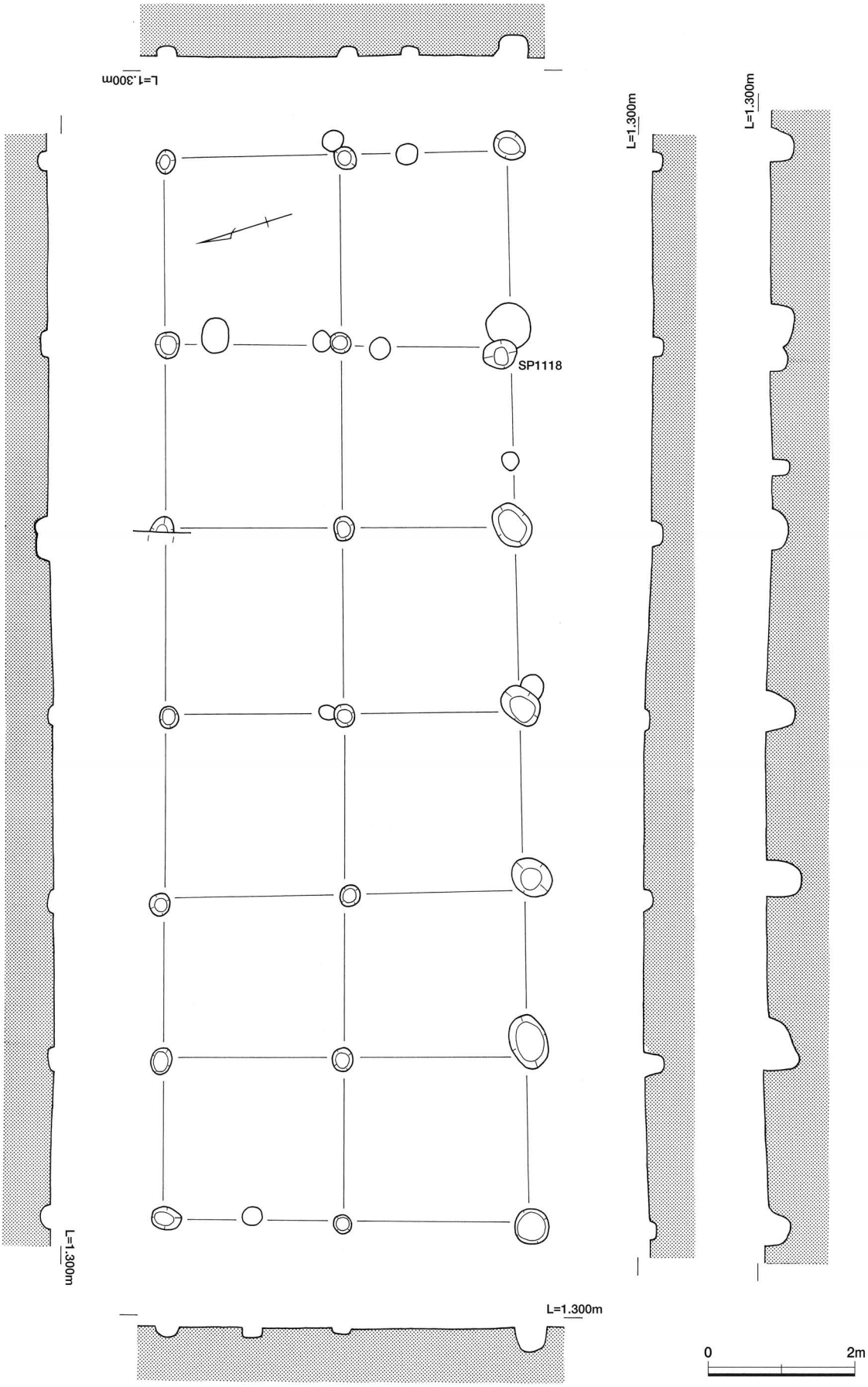
柱穴出土遺物

柱穴　119（ＳＰ１１１９）（第17図）

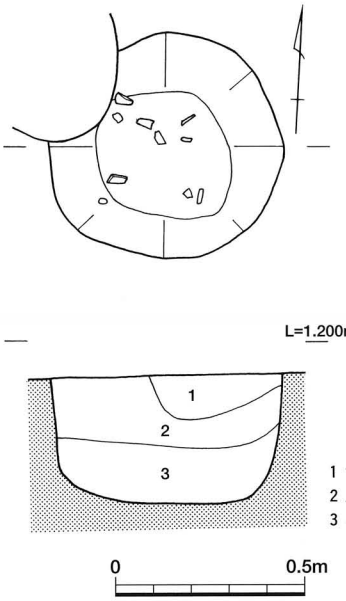
42は直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持った、口径10.2cm、器高2.2cmを測る土師器皿である。周縁部が円く仕上げられたヘラ切りの底部は、体部との境が不明瞭である。43は直立する筒状の体部と、口縁端部近くに水平にのびる鍔が付けられた摂津型の土師器の羽釜で、口縁端部と鍔先端部はそれぞれ凹線状にくぼんでいる。44は中程が膨らんだ紡錘型の管状土錘である。



第15図　SA1006実測図

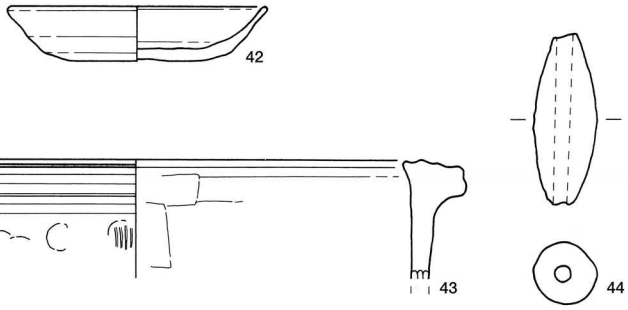


第16図　SA1007実測図

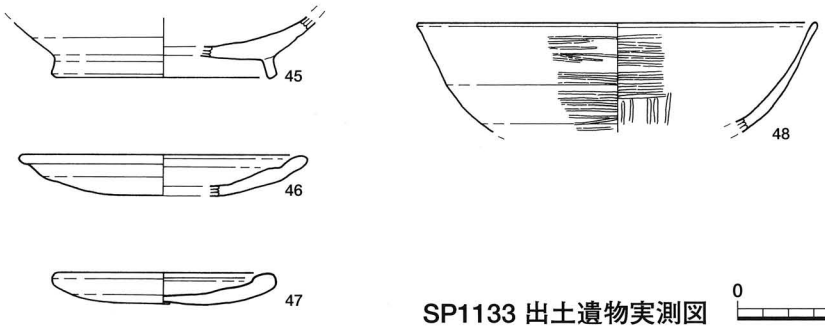


1 黄灰色 シルト質土　2.5Y4/1
2 灰黄褐色 シルト質土　10YR4/2
3 黒褐色 シルト質土　2.5Y3/1

SP1119 実測図

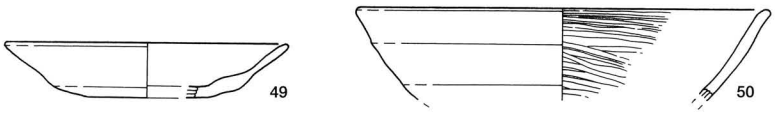


SP1119 出土遺物実測図　0　10cm



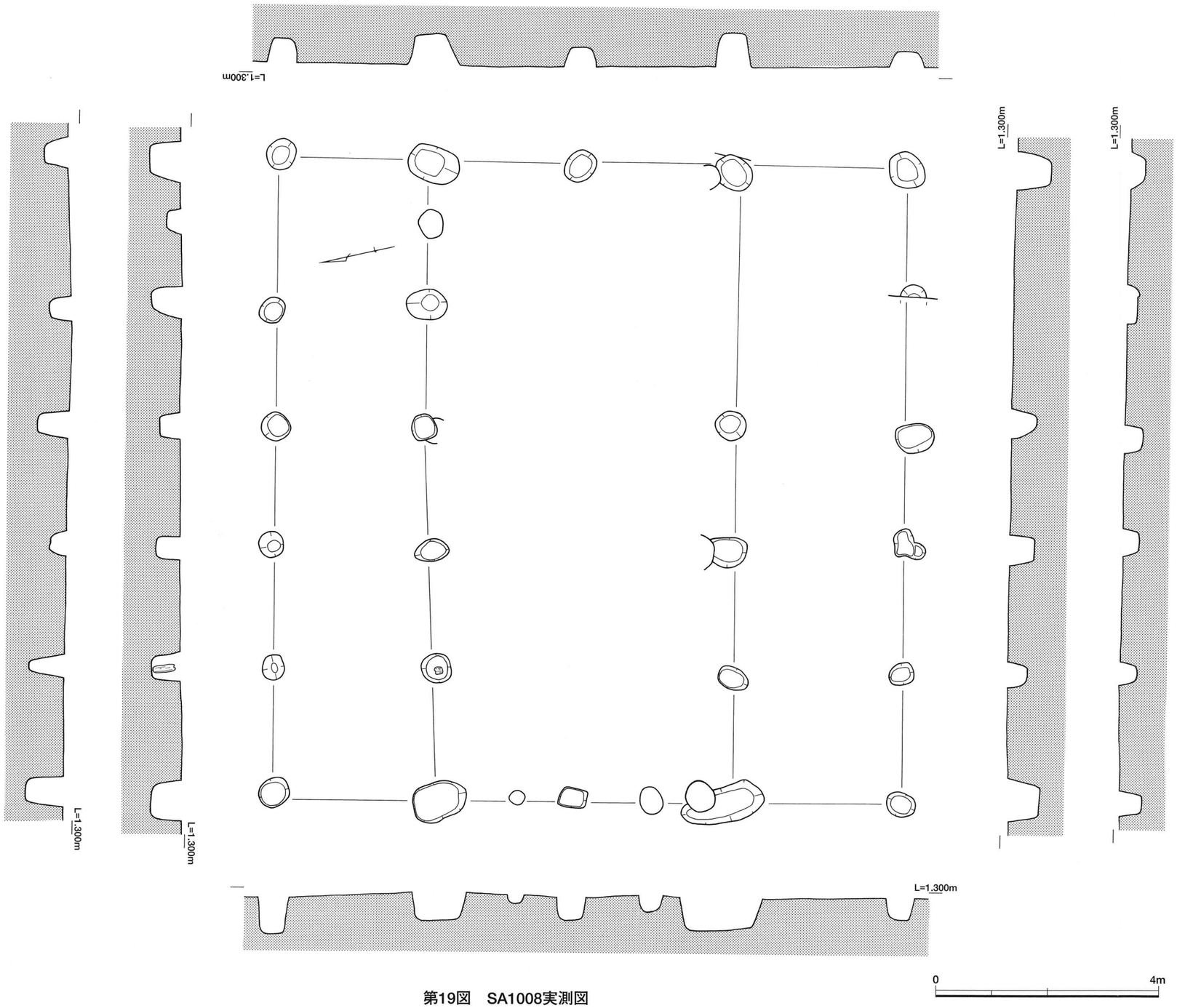
SP1133 出土遺物実測図　0　10cm

第17図　SA1006出土遺物実測図



SP1118 出土遺物実測図　0　10cm

第18図　SA1007出土遺物実測図



第19図　SA1008実測図

柱穴　133（ＳＰ１１３３）（第17図）

45は土師器の高台付の椀の底部である。接地部が方形に仕上げられた高台は、わずかではあるが外下方に開いている。46はゆるやかに内彎する体部が肥厚する口縁部に向かってそのまま移行する土師器の小皿である。口縁端部は円く仕上げられ、底部は浅い丸底である。47も46と同様の形態を持った小皿であるが、体部は短く口縁部の肥厚の度合いはさらに強い。48は内彎する体部と、薄く仕上げられた口縁部を持ち、全面に丁寧なヘラミガキ調整が加えられたＢ類の黒色土器椀である。外面には平行する横方向のヘラミガキが施され、内面見込み部には平行線状ミガキが残されている。

掘立柱建物跡　７（ＳＡ１００７）（第16図）

掘立柱建物跡８と重複して検出された総柱の東西棟の建物である。検出された建物跡は梁間２間、桁行６間と東西に長いが、ＳＡ１００８同様、建物の大部分が、隣接する柳ノ内遺跡の調査区内で検出されており、今回検出されたのは東側の梁行部分３列だけである。柱穴の形は円形または不整楕円形で、中央と北側の２列の桁行列の柱穴の大きさが30～40cmであるのに対して南側の桁行列では50～80cmと柱穴の大きさが他に比べて大きいものが多い。柱間の間隔は梁行間、桁行間とも2.2～2.4mと比較的揃っている。

柱穴出土遺物

柱穴　118（ＳＰ１１１８）（第18図）

49は直線的な体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持った口径約11cm、器高２cmを測る土師器皿である。底部の調整は粗く凹凸が目立っている。50はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ったＡ類の黒色土器椀である。体部内面にはおそらく分割ミガキと考えられる丁寧なヘラミガキ調整が施されている。

掘立柱建物跡　８（ＳＡ１００８）（第19図）

掘立柱建物跡群の最も北側で検出された東西棟の建物である。検出された建物跡は梁間２間、桁行５間の身舎部分の両平側全体の柱筋の延長線上に外周柱穴列が付けられている。建物の大部分は隣接する柳ノ内遺跡の調査区内から検出されており、今回の調査で検出されたのは東端の梁行部分１列だけである。柱間の間隔は梁間側が約2.8～３m、桁行側は２～2.6mと、梁間側のほうが間隔が揃い、若干長くなっている。柱穴の形は円形または不整楕円形で、大きさは長さ約0.4～１m、深さ30～70cmまでと不揃いである。

溝　ＳＤ（第20～31図）

溝　１（ＳＤ１００１）（第20図）

２区の南端で検出された北西から南東方向にのびる溝である。遺構の大部分が調査区外にのびているため、検出できたのは長さ約5.5m、幅1.5m、深さ20cmの不整形な浅い掘り込みだけである。

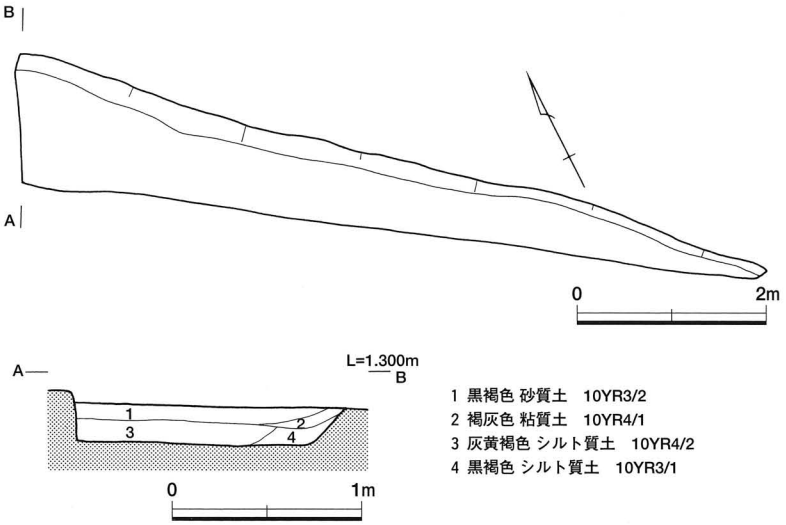
出土遺物（第21図）

51～58はいずれも口径に対して器高が低い皿に近い形態を持った土師器の杯である。直線的で上方への開きが小さい体部は、周縁部が円く仕上げられた底部との境が不明瞭である。口縁部の形によって、

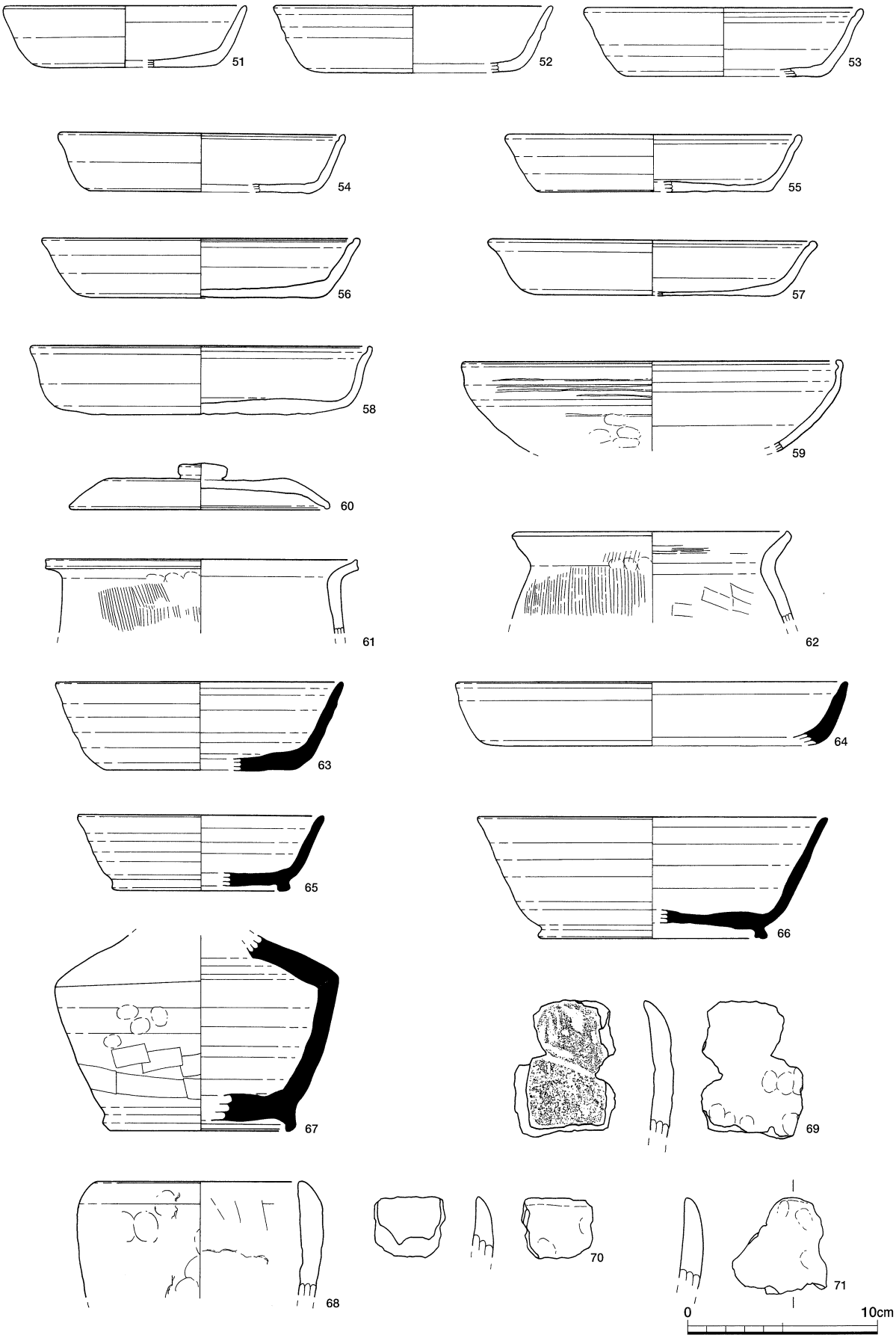
口縁端部が円く仕上げられただけのもの（51・52）と、端部を肥厚させ内面に凹線状の沈線が引かれたもの（53～58）の２つに分かれるが、いずれも全面に赤彩された痕跡が残されている。58は口縁端部が強く内側に折り曲げられたように作られている。60は平坦な天井部と、内面に沈線が引かれた円い口縁端部を持った土師器の杯蓋である。杯同様、全面に赤彩が施されている。59は内彎しながら上方に大きく開く体部を持った椀または鉢と考えられる個体で、口縁端部内面には杯と同じような凹線状の沈線が引かれている。61・62は土師器の甕である。61は直立する筒状の体部と、大きく外反する短い口縁部を持っている。わずかに上方に拡張された口縁端部は頂部が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。62は体部に膨らみを持ち、上方への開きが小さい口縁は端部が平坦に仕上げられるなど、61とは異なる特徴を持っている。63～66は須恵器の杯である。63は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持っている。体部には横ナデの痕跡が多段に残されている。64は口径に対して器高が低く、皿に近い形態を持っている。直線的で上方への開きが小さい体部は周縁部が円く仕上げられた底部との境が不明瞭である。65・66はそれぞれ大きさは異なるが、63に類似した直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った杯の底部に、低い高台が付けられた高台付の杯である。66は高台の接地部が内外方に拡張され中央が凹線状にくぼんでいる。67は口頸部を欠くが、長頸壺と考えられる須恵器である。底部との境から外上方に向かってのびる直線的な体部は途中で強く内屈し算盤玉型の肩部が作り出されている。底部には内端部に接地面を持った低い高台が貼り付けられている。68～71は砲弾型の体部を持った製塩土器である。ゆるやかに内彎する口縁は端部がにぶく尖らされ、外面には指オサエの後にナデ調整が施されている。

溝　５（ＳＤ１００５）（第22図）

３区の掘立柱建物跡群から約10mほど北側で検出された、北西から南東方向に向かってのびる溝である。幅は広いところでは約3.9mを測るが、深さは最も深いところでも40cmほどしかない。遺構の北側半分が側壁に平行するように最大約２mの幅で南側より一段高いテラス状になっていることから、２本の溝の切り合いの可能性があるが、土層の堆積状況からは確認することはできなかった。溝の埋土中や、北側を流れる溝ＳＤ１００６との間の平坦部からは大きさが不揃いな礫が多量に検出されているが、遺構の周辺に広く散らばって出土していることから、集石などに伴うものではなく周辺から自然に流れ込んだか、無作為に投棄されたものと考えられる。遺構内からは礫以外にも土師器や須恵器、鉄滓などが比較的多く出土している。



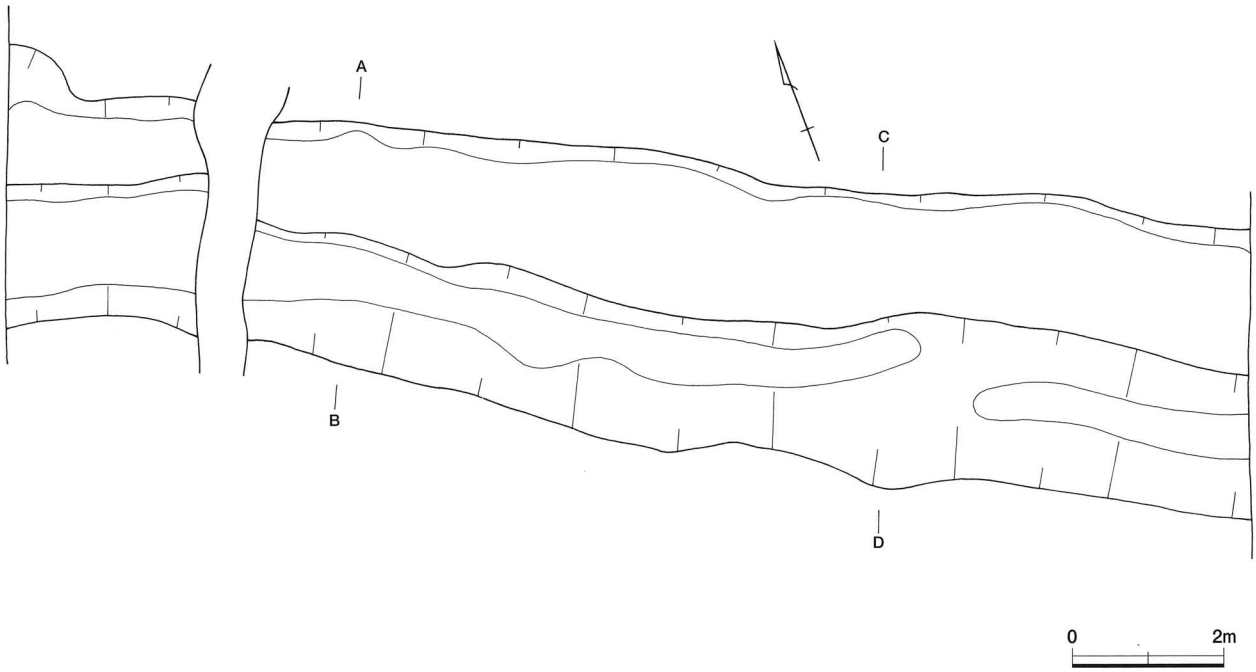
第20図　SD1001実測図

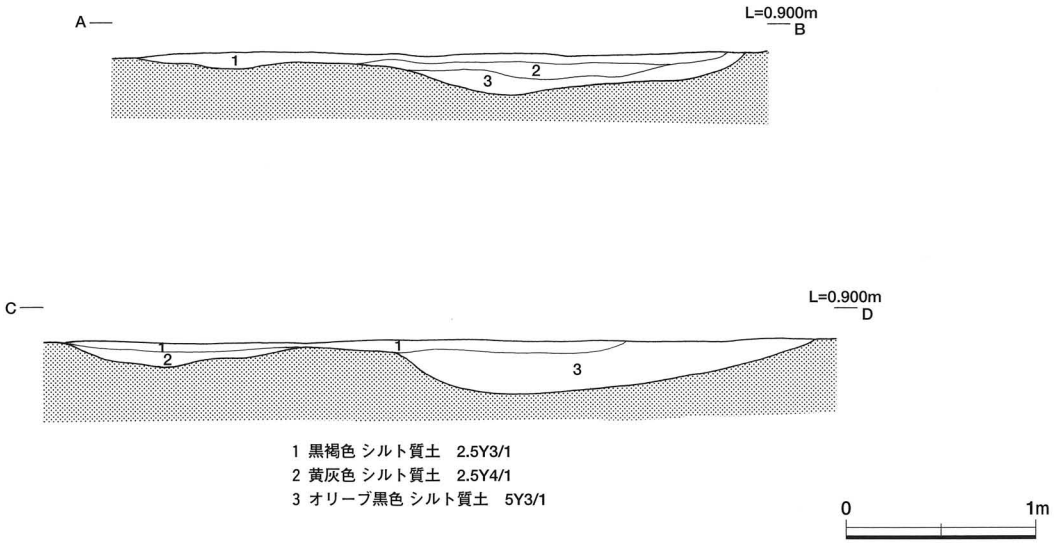


第21図　SD1001出土遺物実測図

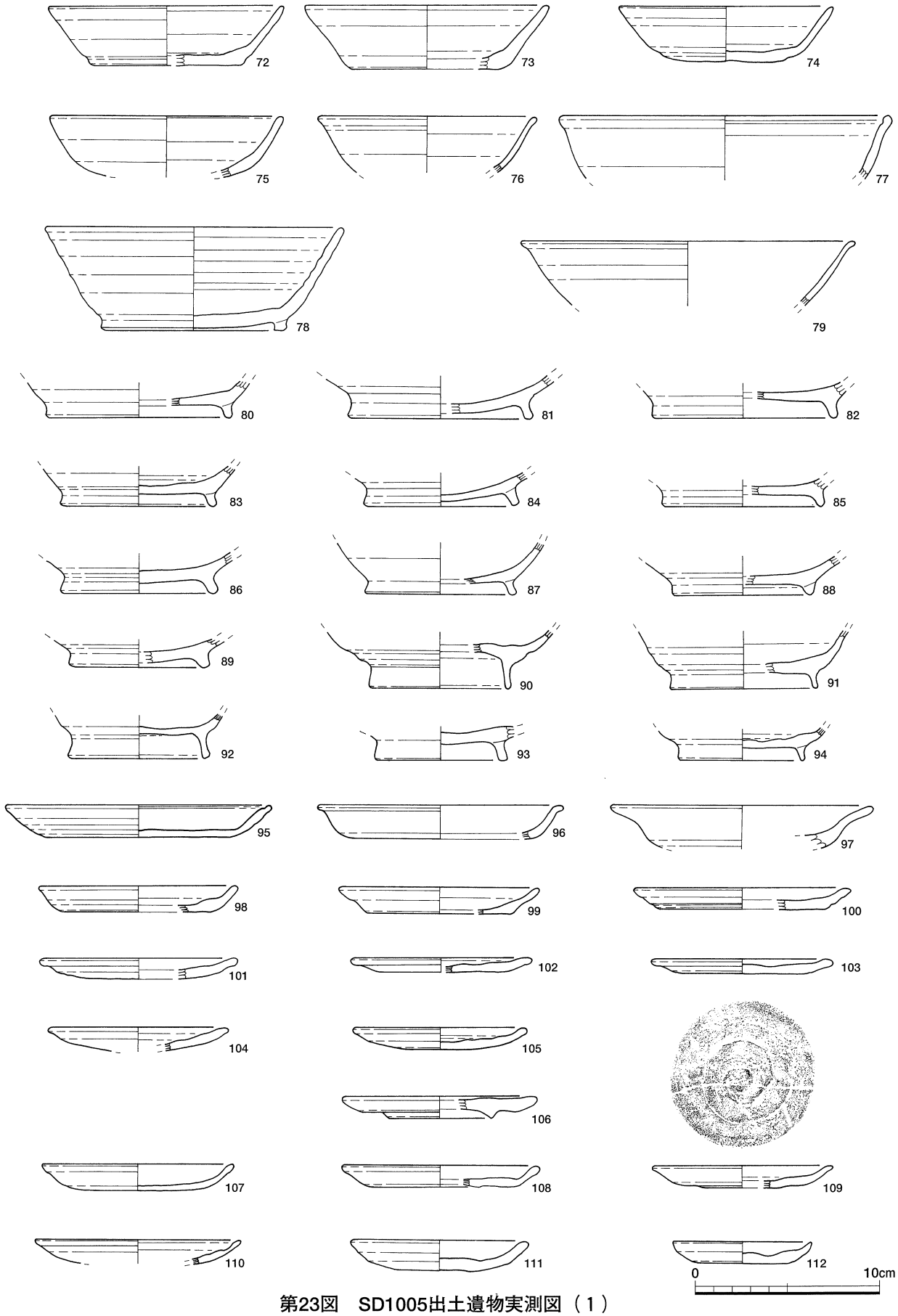
出土遺物（第23～31図）

72・73は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った杯である。体部は底部との境から屈曲して立ち上がっている。74・75はゆるやかに内彎する体部と円く仕上げられた口縁端部を持った杯である。周縁部が円く仕上げられた底部は体部との境が不明瞭である。76も同様の特徴を持った杯であるが口縁端部がわずかに外反している。77は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った杯である。折り曲げるように内彎させた口縁端部は内面に凹線状の沈線が1本引かれている。78は直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持った高台付の杯で、平底の底部には直立する断面方形の低い高台が付けられている。79はゆるやかに内彎する上方への開きの大きい体部を持った高台付の椀で、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持っている。80～94は高台付の椀または杯の底部と考えられる個体である。底部には平底と丸底のものが見られるが数は圧倒的に前者が多い。高台は90や92・93のように比較的高いものから88のような低いものまで高さはまちまちだが、直立またはわずかに外下方に開く程度で、大きく「ハ」の字に開くものはない。95は直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ち、77同様、口縁端部内面に凹線状の沈線が1本引かれている。96はわずかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられた軽く外反する口縁を持っている。97は内彎する体部と、上方に大きく開く直線的な口縁部との境に屈曲部が設けられた皿で、口縁端部は円く仕上げられている。98～112は土師器の小皿である。98～100は直線的で短い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ち、上方への開きが小さい体部は底部との境が比較的明瞭である。101～103は上方への立ち上がりがほとんどない体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った土師器の小皿である。104・105・107・109・110・111は内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持っている。104・105・110の体部は、丸底の底部から内彎しながらそのまま口縁部に移行している。106は上方への立ち上がりがほとんどない体部と円く仕上げられた口縁端部を持ち、底部には断面三角形の低い高台が付けられている。113～129は直立する筒状の体部と、水平にのびる分厚い鍔が廻された口縁部を持った摂津型の羽釜で、それぞれ口縁端部の形態や鍔の位置などに若干の差が認められる。口縁端部は113・114のようにわずかではあるが内方に拡張されるものや、124～126のように内外方に拡張されるもの、127のように外方のみ拡張されるもの、全く拡張されないものなどいくつかの形態に分類できるが、拡張された個体の多くは頂部が凹線状にくぼんでいる。また、128・129のように拡張が行われていない個体では、頂部は円く仕上げられている。口縁部に付けられる鍔の位置は、113～117のように口縁端部近くに廻されたものと、128・129のようにやや離れた位置に付けられるものがある。鍔の形態も様々で、鍔端部が凹線状にくぼんでいるものや平坦なもの、円く仕上げられたものなどがある。また、鍔の上面は強い横ナデによって凹線状の太い溝が2本廻されたものが多い。130～142は土師器の甕である。130～136は、筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持ち、上方に折り返されてできた幅の狭い口縁の平坦部は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。133～136も同じような口縁部の形態を持った甕であるが、135は体部が膨らんでいる。136は頸部の外方への屈曲の度合いが弱い。137は体部にわずかな膨らみを持ち、口縁部の上方への開きが小さい。上方に拡張された口縁端部は他の甕と同様、頂部が浅くくぼんでいる。138は内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に開く直線的な口縁部を持ち、内方に拡張された口縁部は平坦に仕上げられている。鍋に近い形態を持つ個体である。139は直立する筒状の体部と「く」の字に屈曲する頸部から上方に開く直線的な口縁部を持った甕である。全体に器壁が厚い。140は体部に弱い膨らみを持った甕で、屈曲する頸部から上方にのびる直線的な口

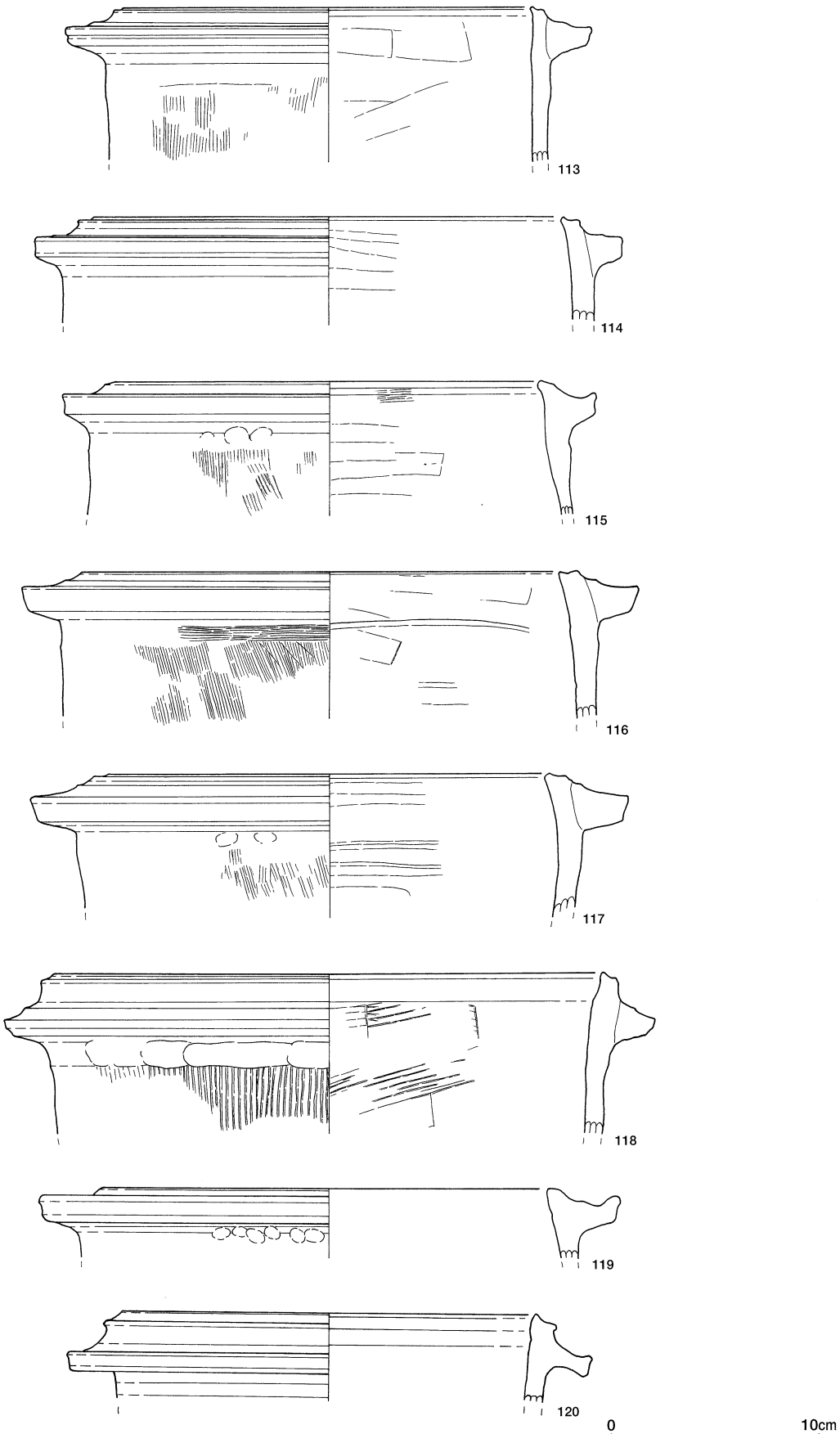




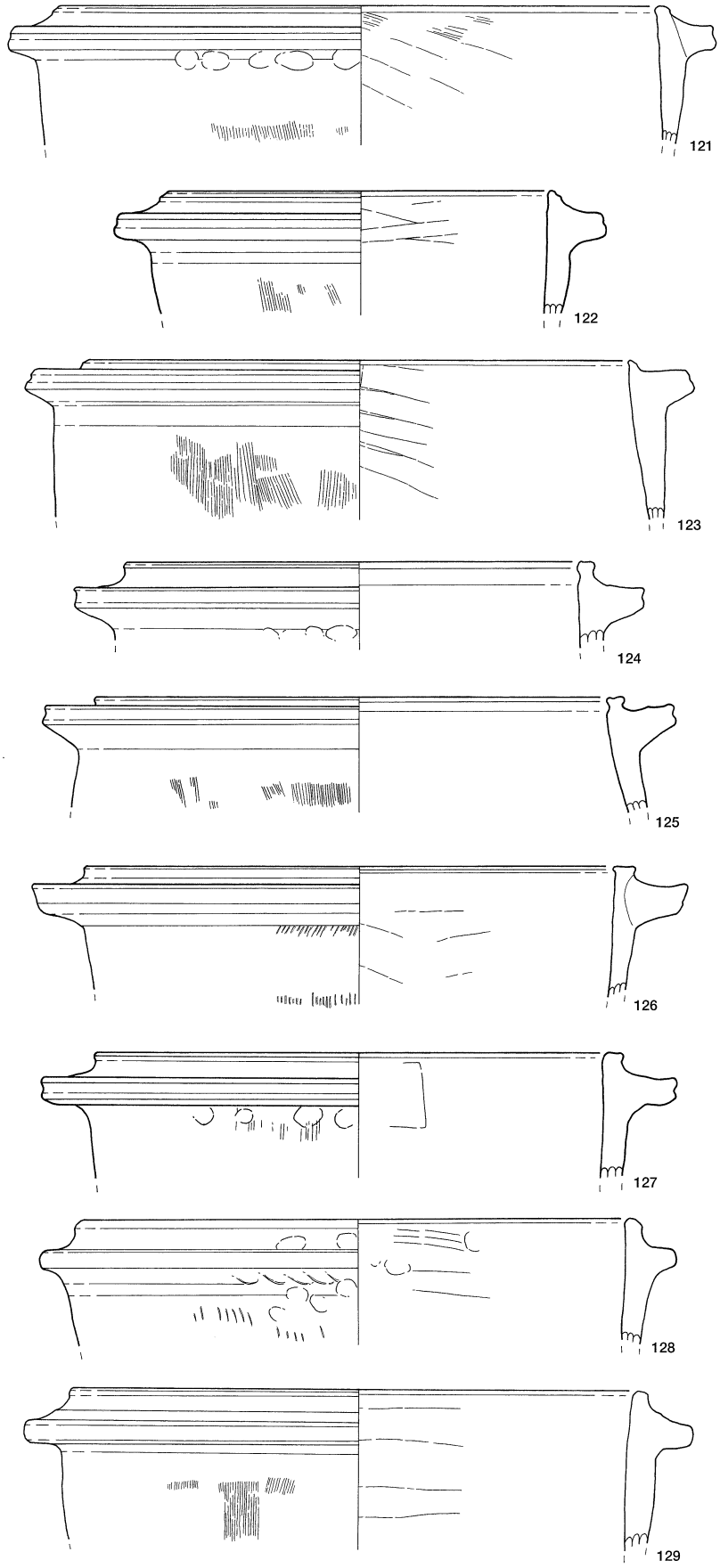
第22図　SD1005実測図



第23図　SD1005出土遺物実測図（1）



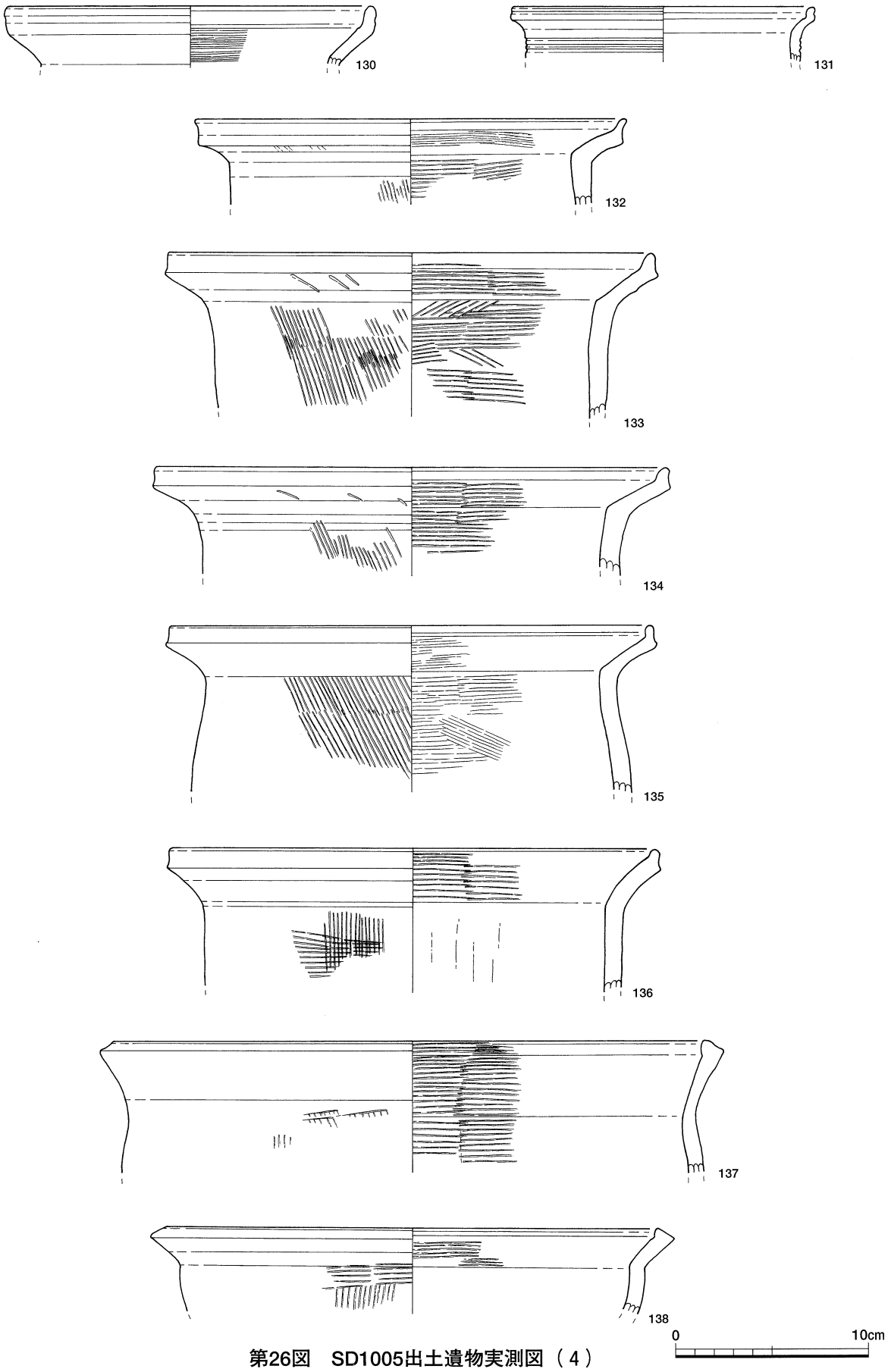
第24図　SD1005出土遺物実測図（２）



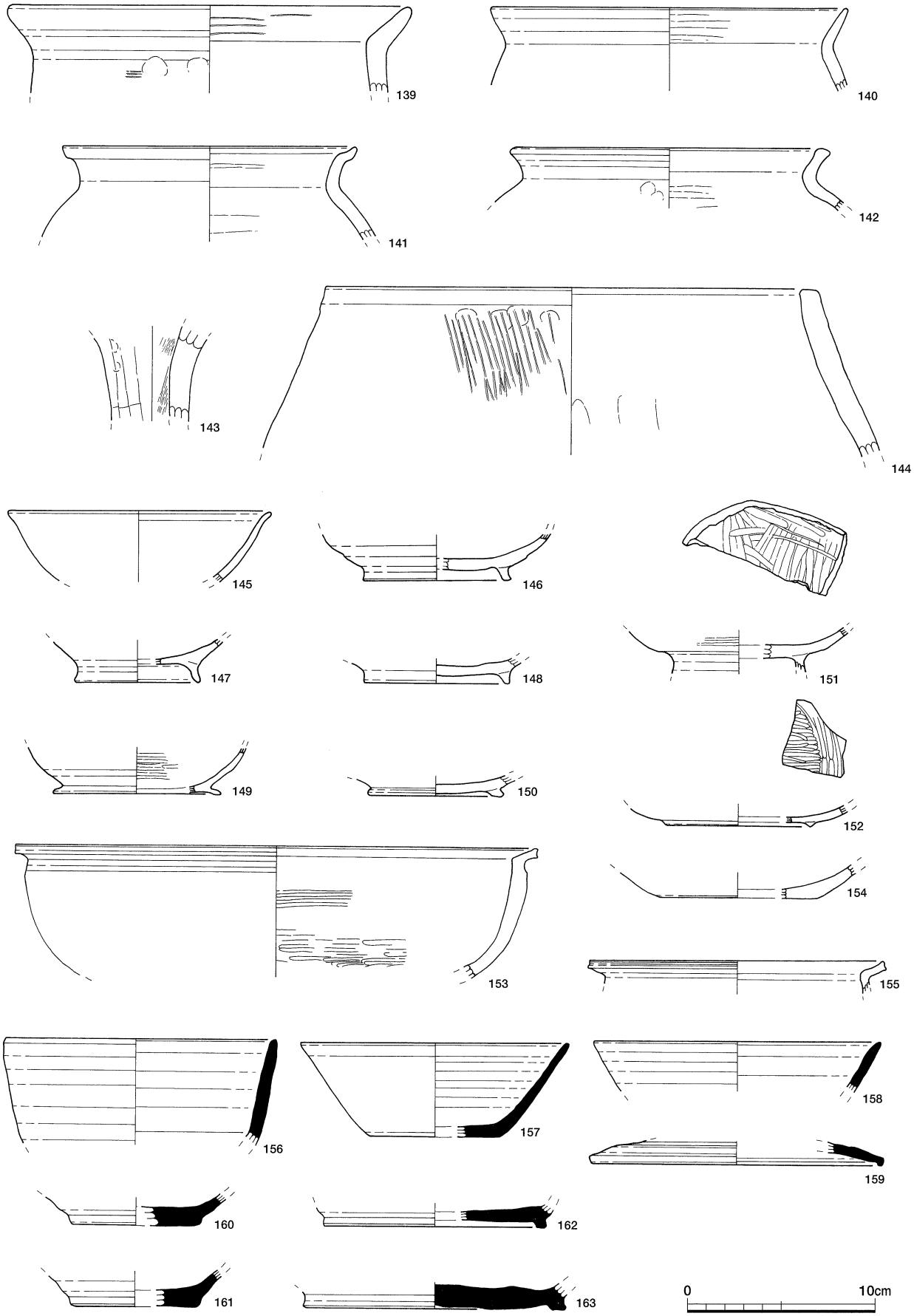
第25図　SD1005出土遺物実測図（３）

0　10cm

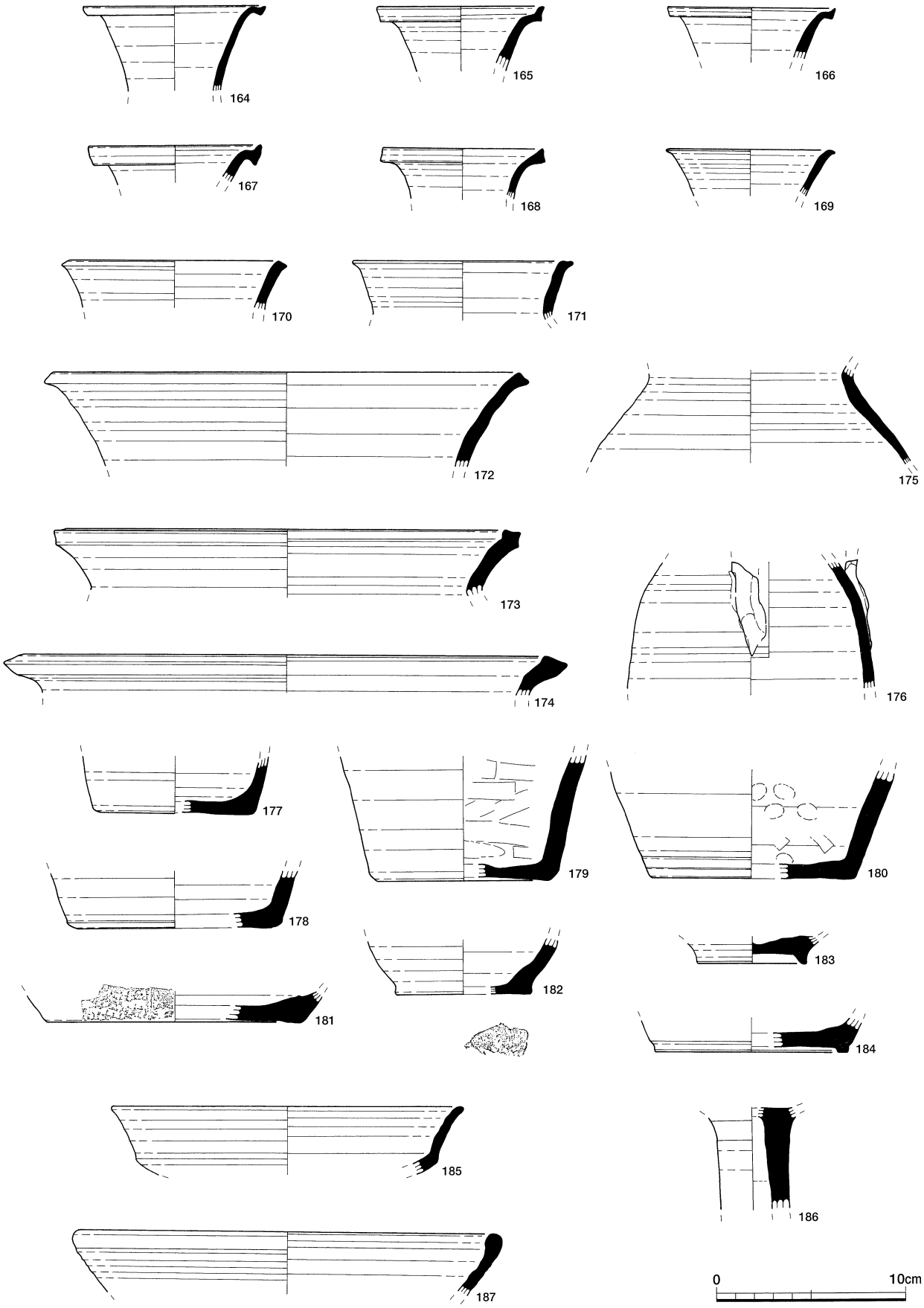
縁は、端部がにぶく尖らされている。141・142は球形の体部と、上方への開きが小さく短い口縁部を持った甕である。141は屈曲する口縁の端部が鈍く尖らされるのに対し、142では端部は肥厚し円く仕上げられている。143はヘラケズリにより幅広の面取りが施された多角形の断面を持った高杯の脚柱部である。144は竈の上部の破片で火口は上部が平坦に仕上げられている。145～155は黒色土器である。145はA類の黒色土器椀である。内彎する体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持っている。146～148も同じA類の底部で、平底の底部には直立、またはわずかに外下方に開く比較的低い高台が付けられている。149も同じくA類の椀で、外方に大きく開く低い高台が付けられている。150・151はB類の椀である。151はA類の椀と類似するが、150にはほぼ水平方向にのびる低い高台が付けられている。152はA類の皿と考えられる個体で、内面見込部には丁寧なヘラミガキが加えられ、外底部には断面三角形の低い高台が付けられている。153は内彎する深い体部と、「く」の字に屈曲する短い口頸部を持ったA類の鉢である。端部が上方に拡張された口縁には浅い凹線状の沈線が付けられている。155は「く」の字に強く屈曲する頸部と、上方に大きく開く短い口縁部を持った黒色土器の甕で、口縁端部には凹線状の沈線が引かれている。156～163は須恵器の杯または杯蓋の類である。156は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った須恵器の杯である。体部は内外面ともに横ナデ調整が多段に施されている。157・158も直線的な体部を持った須恵器の杯であるが、156より体部の開きが大きい。157の体部は底部との境で「く」の字に屈曲し、立ち上がりが明瞭である。158は口縁端部が尖り気味に仕上げられている。159は口縁部に向かってゆるやかに内彎する天井部を持った杯蓋で、口縁端部は下方に向かって「く」の字に折り曲げられている。160・161は体部との境に弱い段が設けられた平底の底部を持った杯である。体部は上方への開きが大きく、厚い盤状に仕上げられた底部は緑釉皿の底部に類似している。162・163は平底の底部に断面方形に近い低い高台が付けられた高台付の杯である。163は高台がわずかに外下方に開き、接地部は中央がくぼんでいる。164～168は細く括れた頸部と、上方に向かって大きく開く口頸部を持った壺である。外反する口縁部を上方に折り曲げて作り出された幅の狭い段は、中央が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。169も長頸壺と思われるが、口縁部には屈曲部が設けられず、そのままにぶく尖らされた口縁端部に移行している。170・171は短頸壺あるいは平瓶の口縁部であろうか。172は頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら上方へ大きく開く甕である。わずかに拡張された口縁端部は、頂部が平坦に仕上げられている。173・174も同じくゆるやかに外反する口頸部を持った甕で口縁部は上方に屈曲し頂部が平坦に仕上げられている。174は口縁部を肥厚させている。176は筒状に近い体部を持った壺で、肩部には把手が付けられている。177～182は平底の底部を持った壺である。177～180は体部が直線的で上方への開きが小さく、外面にはそれぞれ丁寧な横ナデ調整が施されている。181の体部は上方の開きが大きく、底部との境近くには格子目のタタキが加えられている。182の体部は大きく球形に膨らみ、底部には回転糸切り痕が残されている。183・184はいずれも底部に断面逆台形または方形の低い高台が付けられた高台付の壺である。184の体部は直線的で上方への開きが小さいが、183は球形に膨らんでいる。185はゆるやかに内彎しながら上方に大きく開く体部と、外反する口縁部の境に屈曲部を持った杯部の破片と考えられるが、具体的な器種は不明である。186は外面全体に丁寧な横ナデ調整が加えられた高杯の円柱状の脚柱部の破片である。須恵器の高杯は包含層を含めてこの１点しか出土していない。187はゆるやかに内彎する体部を持った鉢である。口縁は端部を肥厚させ円く仕上げている。188～195は緑釉の椀・皿類である。188はゆるやかに内彎する体部と、端部が鈍く尖らされる外反する口縁部を持った椀である。底部には外底面まで釉がかかった断面



第26図　SD1005出土遺物実測図（４）



第27図　SD1005出土遺物実測図（５）



第28図　SD1005出土遺物実測図（６）

方形の低い削り出し高台が付けられている。胎土は黄色味をおびた白色で焼成は軟質である。189も188とほぼ同じような特徴を持った椀で、体部外面には回転力を利用したヘラケズリと横ナデ調整の痕跡が明瞭に残されている。190は「く」の字に屈曲する体部と外反する口縁部を持ち、内面に陰刻の花紋が描かれた腰折れ皿である。胎土は灰色で焼成は硬質である。191～195は椀・皿類の底部である。191・192は188・189と同じ特徴を持った軟質の土器である。193は胎土が灰色で焼成が硬質の個体である。194はやや上げ底風の平底の底部と体部の境が削り出され、低い段が設けられている。胎土は白色で焼成は軟質である。195は内面見込部に花紋が陰刻された蛇ノ目高台の皿である。胎土は灰色で硬質に焼き上げられた尾張産の製品と考えられる。196～201は灰釉陶器である。196・197はゆるやかに内彎する体部と、端部がわずかに外反する口縁部を持った椀である。196は円く仕上げられた口縁端部直下に約0.5cmほどの幅の強い横ナデが加えられ、露胎のまま残されているが、内面は見込部まで施釉されている。底部には外面に薄く施釉された高さ約１cmの直立する高台が付けられている。197は内外面とも薄い釉がかけられている。198は内彎する体部と外反気味に水平方向にのびる口縁部との境に屈曲部が設けられた段皿である。外面には回転力を使用したヘラケズリが加えられ全面に薄く釉がかけられている。199も段皿である。口縁部は内外面とも比較的厚く釉がかけられ、内面見込部にも施釉されているが、全体に釉の厚さが薄く一部は露胎のまま残されている。200は直立する高さ約１cmの三日月形高台を持った椀である。内面見込部は薄く釉がかけられ重ね焼きの痕跡が残されている。201は下膨らみの筒状の体部と、頸部から外反する短い口頸部を持った手付瓶である。頸部を除き外面全体に灰釉がかかっているが、自然釉の可能性もある。202は、砲弾型の体部と、ゆるやかに内彎する口縁部を持った製塩土器である。口縁端部は鈍く尖らされ内外面には指オサエの痕が残されている。203～257は管状土錘である。203～226は側面の形が紡錘形または楕円形をした土錘である。中央部の径は両端より約２倍の長さがある。234～257は中央部が尖り気味に仕上げられた両端よりわずかに太い管状の形態をしている。258はチャート製の火打ち石である。全面に不規則な剥離痕が残されている。259～261はいったん適当な大きさに打ち割った礫にさらに粗い敲打を加えて整形された砥石である。それぞれ部分的に自然面が残されている。262は敲き石として使用された砂岩礫で、楕円形の礫の中央部に敲打痕が集中して残されている。263は扁平な砂岩の円礫の両面をそのまま砥面として使用した砥石である。敲石としても使用され、片側の砥面と礫の縁辺部全体に敲打痕が残されている。

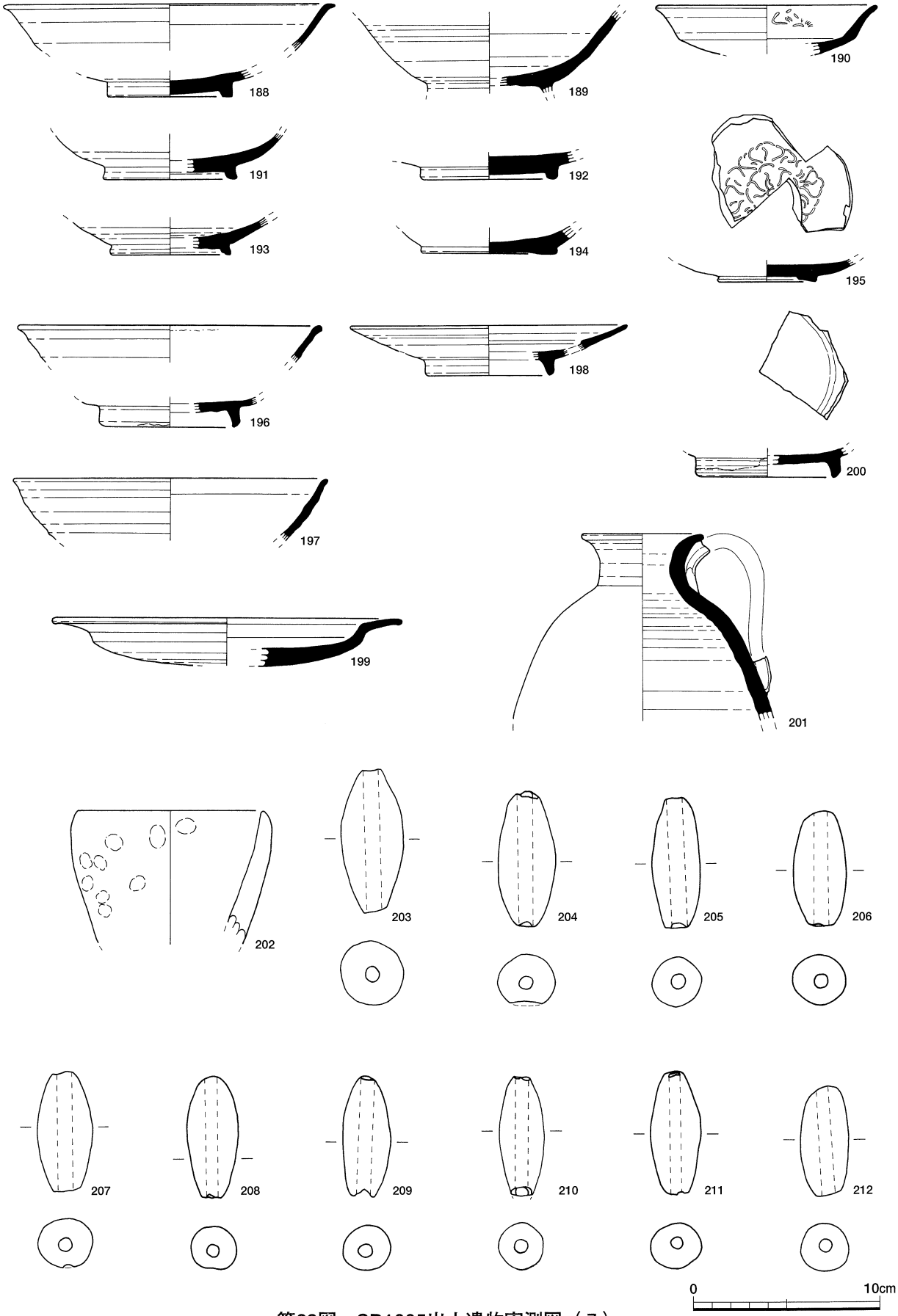
自然流路　ＳＲ（第32～42図）

自然流路　１（ＳＲ１００１）（第32図）

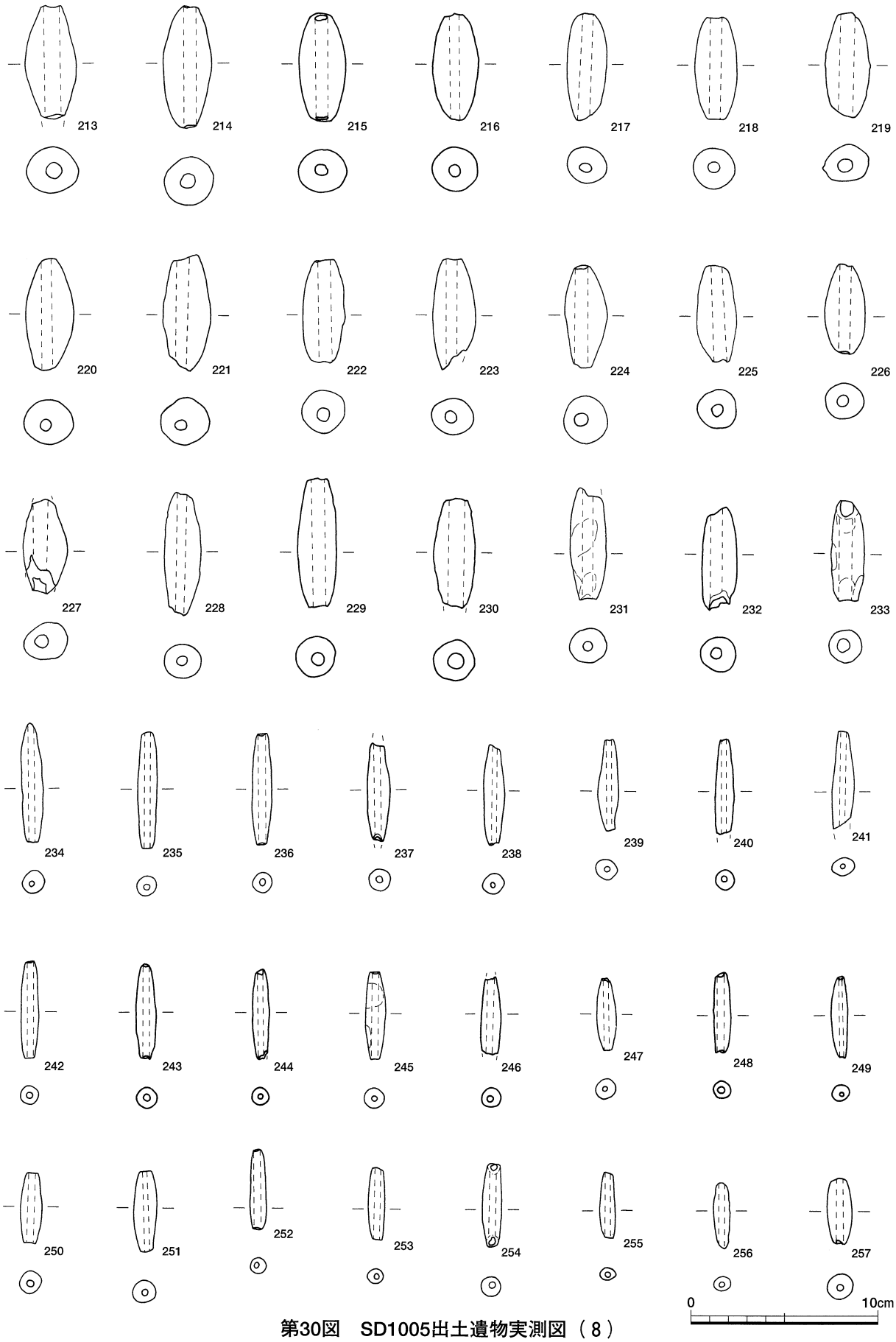
掘立柱建物跡群の南側を、ゆるやかに蛇行しながら東西方向にのびる幅７m前後の自然流路である。遺構内からは平安時代を中心とする遺物が出土しているが、流路の北側に位置する掘立柱建物跡ＳＡ１００１の柱穴の一部がこの流路の浸食によって失われていることから、掘立柱建物跡群の廃絶後に起こった周辺の河道の変化に伴って新たに流れ始めた流路と思われる。遺構内から出土した遺物の中には室町から戦国時代にかけてと考えられる土師器の羽釜が出土していることから、概ね16世紀代前半頃まで流路として機能していたものと考えられる。

出土遺物（第33～34図）

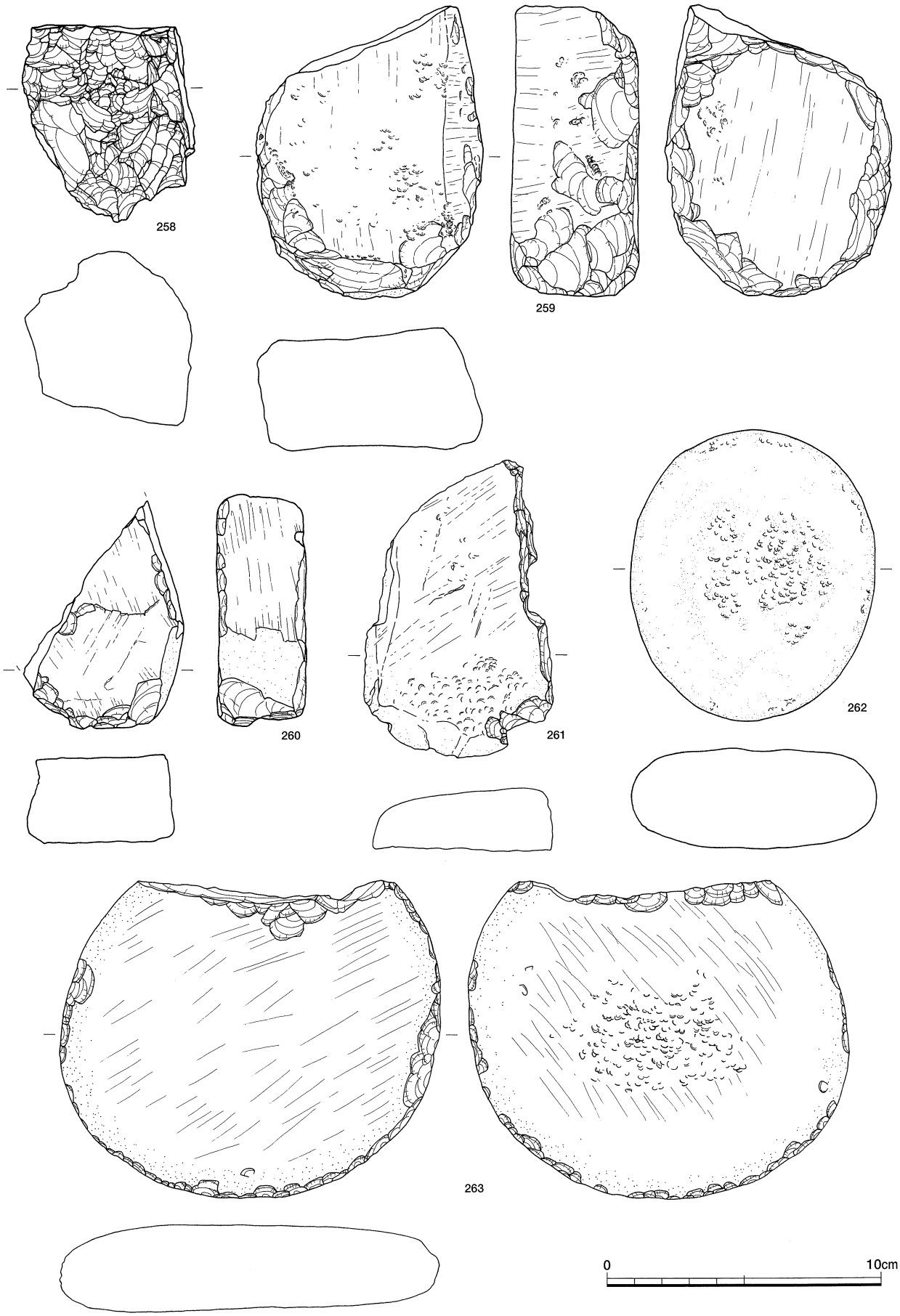
264はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の杯である。周縁部が



第29図　SD1005出土遺物実測図（７）



第30図　SD1005出土遺物実測図（８）



第31図　SD1005出土遺物実測図（９）

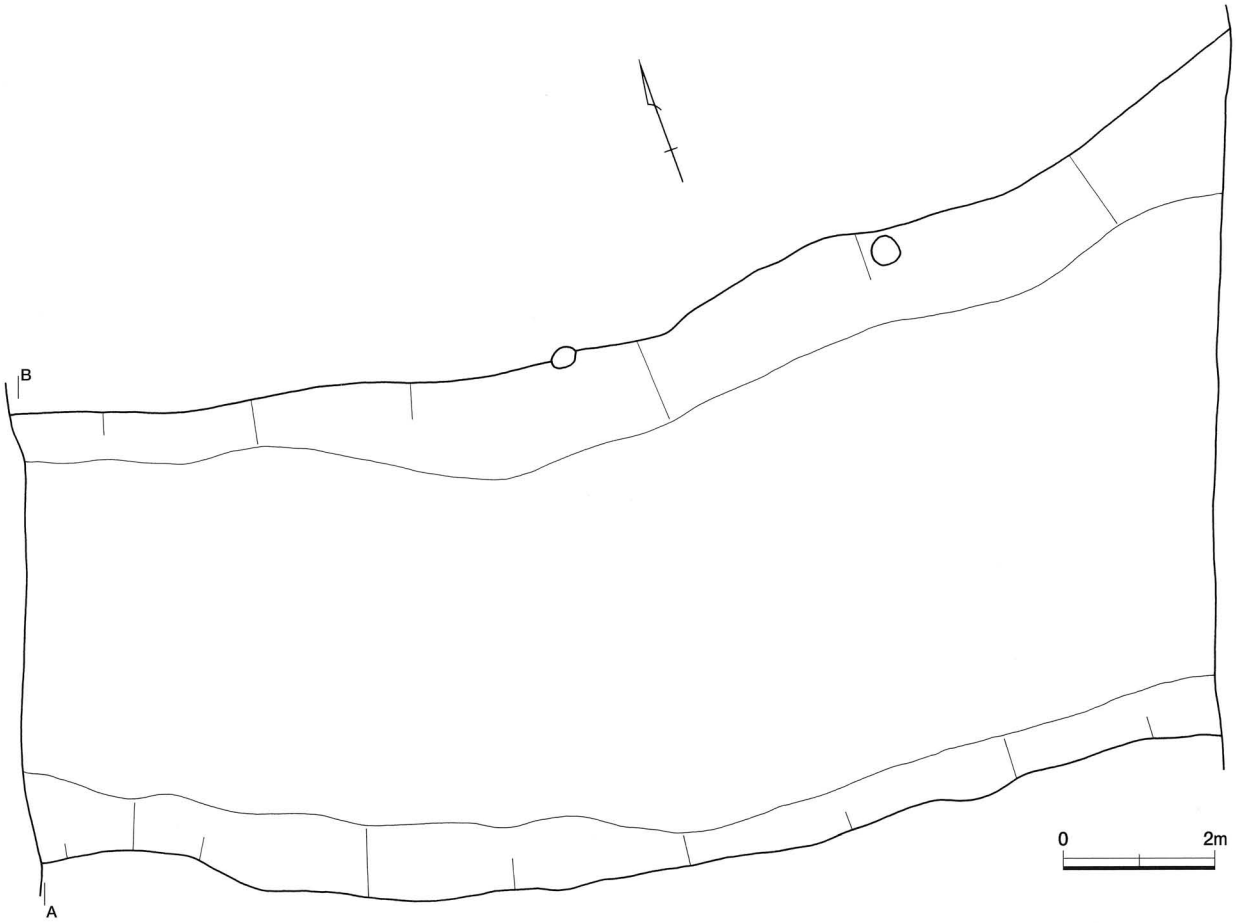
円く仕上げられた底部は体部との境が不明瞭である。265は直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った土師器皿である。口径に対して器高が著しく低く、底部と体部の境が不明瞭である。266も上方への開きが大きい体部を持った土師器の小皿である。直線的で短い体部は外反することなく端部が円く仕上げられた口縁部にそのまま移行している。267～269は平底の底部に外下方に開く比較的高い高台が貼り付けられた土師器の高台付の椀である。268・269は267に比べて器壁が薄く赤彩されている。270・271は、直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持った甕である。両者とも口縁端部が上方に拡張されているが、270の頂部が横ナデによって凹線状にくぼんでいるのに対して、271では円く仕上げられている。272は土師器の羽釜である。わずかに内傾する筒状の体部は凹線状にくぼむ口縁端部にそのまま移行している。273・274は土師器の竈である。275は丸底の底部に、直立する高台が貼り付けられたA類の黒色土器椀である。内面見込部は丁寧なナデ調整によって平滑に仕上げられている。276は体部との境が円く仕上げられた須恵器の杯の底部である。回転ヘラ切り痕が残された底部には部分的にナデ調整が加えられている。277は球形の体部に直立する高い高台が付けられた壺である。高台の接地面は内外方に拡張され中程がわずかにくぼんでいる。278は体部にゆるやかな膨らみを持った壺で、肩部には環状の耳が縦方向に貼り付けられている。279・280は須恵器の甕または壺の口頸部の破片である。279の口縁は上方への開きが大きく、外面は口縁端部直下を2cmほど肥厚させ段が設けられている。口縁端部は内方に拡張され、外面には櫛描による波状文が描かれている。281～284は緑釉、285は灰釉陶器である。281の体部は上方への開きが大きく、底部には断面方形の低い高台が付けられている。282～284の底部は削り出しによる平高台が付けられているが、282・284は若干上げ底気味に仕上げられている。285は端部がわずかに内彎する比較的高い三日月形高台が付けられている。286は上方への開きの大きい体部と、断面三角形の低い高台が付けられた瓦器椀である。287・288はそれぞれ有孔、管状の土錘である。287は端部に側面から穿孔が加えられている。288は紡錘形の小型の製品である。

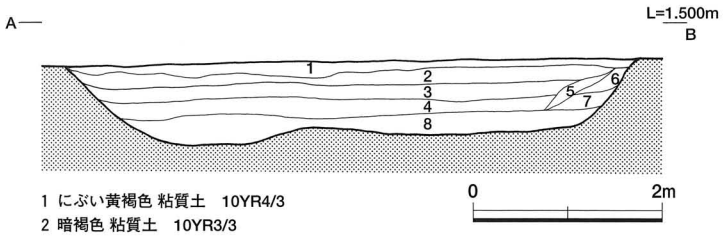
自然流路　2（ＳＲ１００２）（第35図）

3区の北端部分で検出された北西から南東方向にのびる自然流路で、南岸は検出できたが、北岸は調査区外にのびているため未検出である。流路の埋土中には古墳時代後期から平安時代にかけての土器が出土しているが、それ以外にも多量の自然木に混じって曲物や、形代、斎串などの祭祀に関係する木製品が出土している。

出土遺物（第36～42図）

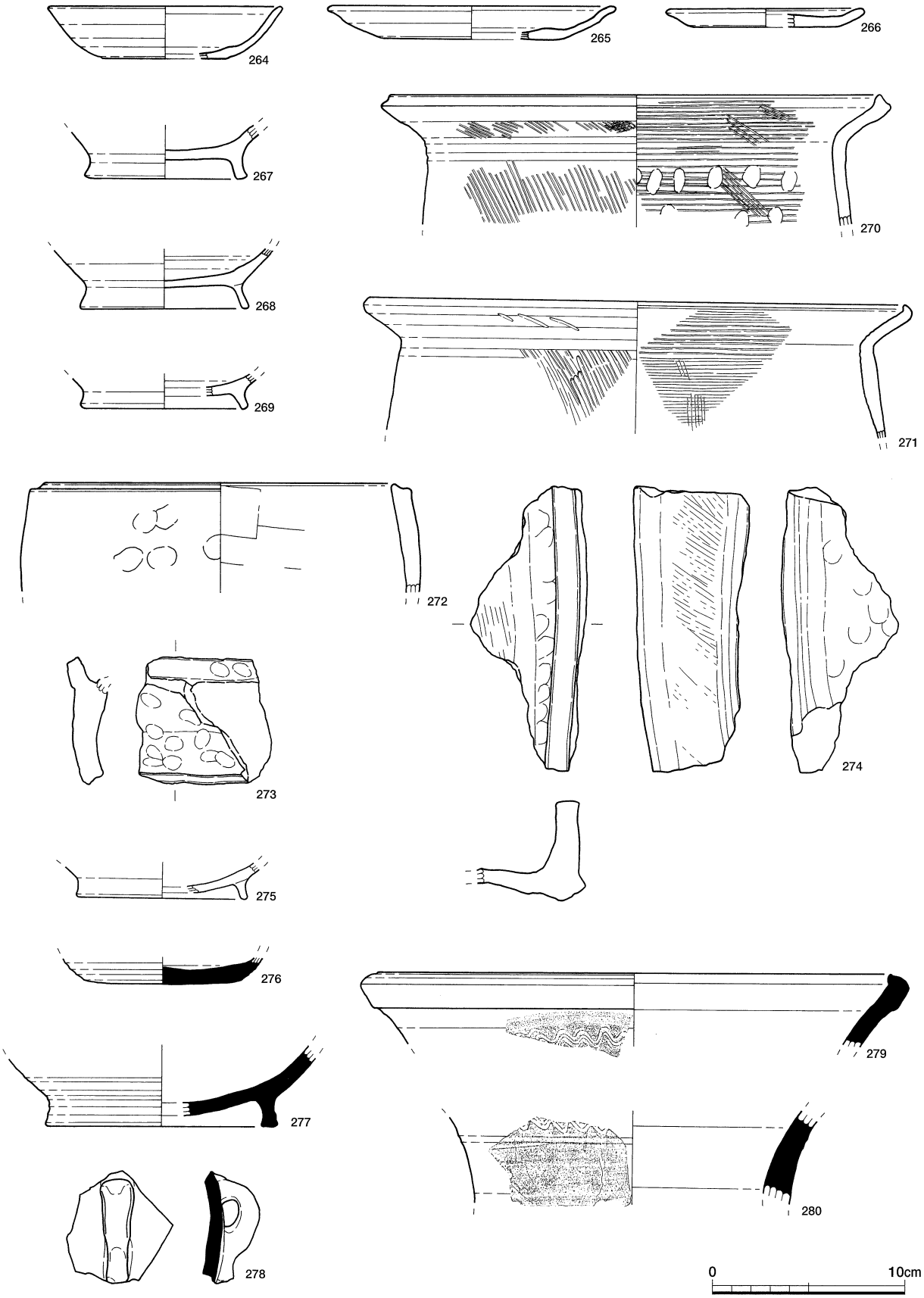
289はゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、内側に巻き込むように折り曲げられた口縁部を持った土師器の杯または皿で、口縁端部の内面には凹線状の沈線が1本引かれている。290はわずかに外下方に開く比較的高い高台が付けられた高台付の椀である。外面には赤彩された痕跡が残されている。291は直線的で器高が低い体部と、円く仕上げられた端部がわずかに外反する口縁部を持った土師器の皿である。周縁部が円く仕上げられた底部は、体部との境が不明瞭である。292・293はいずれも上方への開きが大きく器高の低い体部を持った土師器の小皿である。292は口縁部がわずかに外反するのに対し、293は直線的で形態が若干異なっている。296は球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに外反しながら上方に向かってのびる口縁部を持った土師器の甕である。薄く仕上げられた口縁は端部がにぶく尖らされ、体部は内外面とも細かいハケ目調整が加えられている。297・298は直立



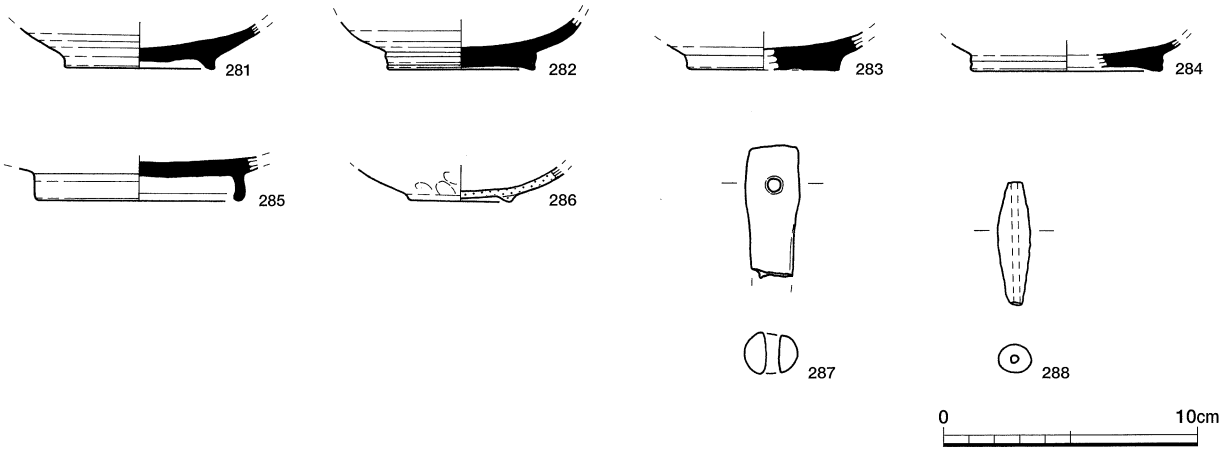


1 にぶい黄褐色 粘質土　10YR4/3
2 暗褐色 粘質土　10YR3/3
3 黒褐色 粘質土　10YR2/2
4 黒褐色 粘質土　10YR2/2
5 褐色 シルト質土　10YR4/4
6 にぶい黄褐色 粘質土　10YR4/3
7 灰黄褐色 粘質土　10YR4/2
8 黒色 粘質土　10YR2/1

第32図　SR1001実測図

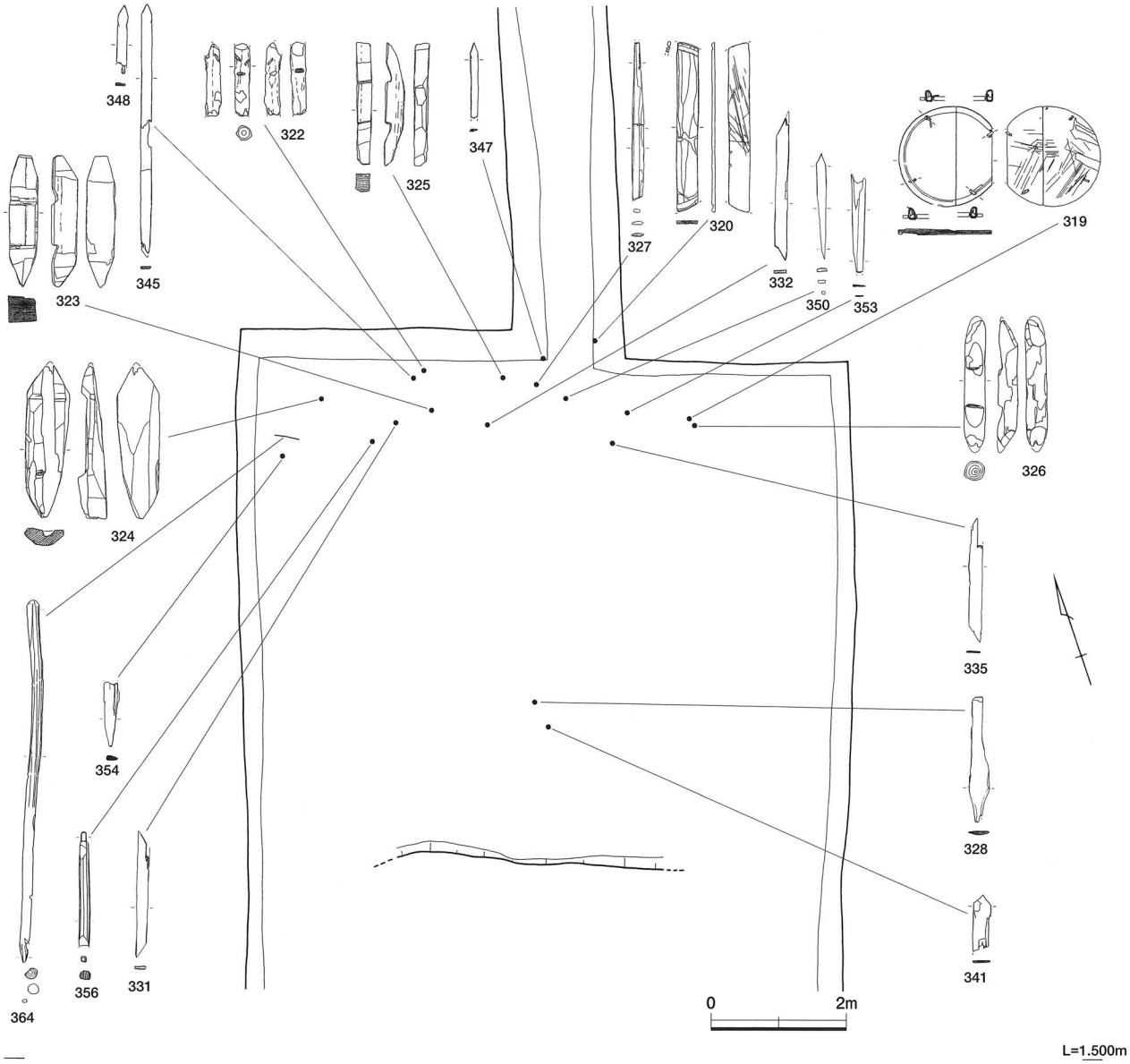


第33図　SR1001出土遺物実測図（1）



第34図　SR1001出土遺物実測図（２）

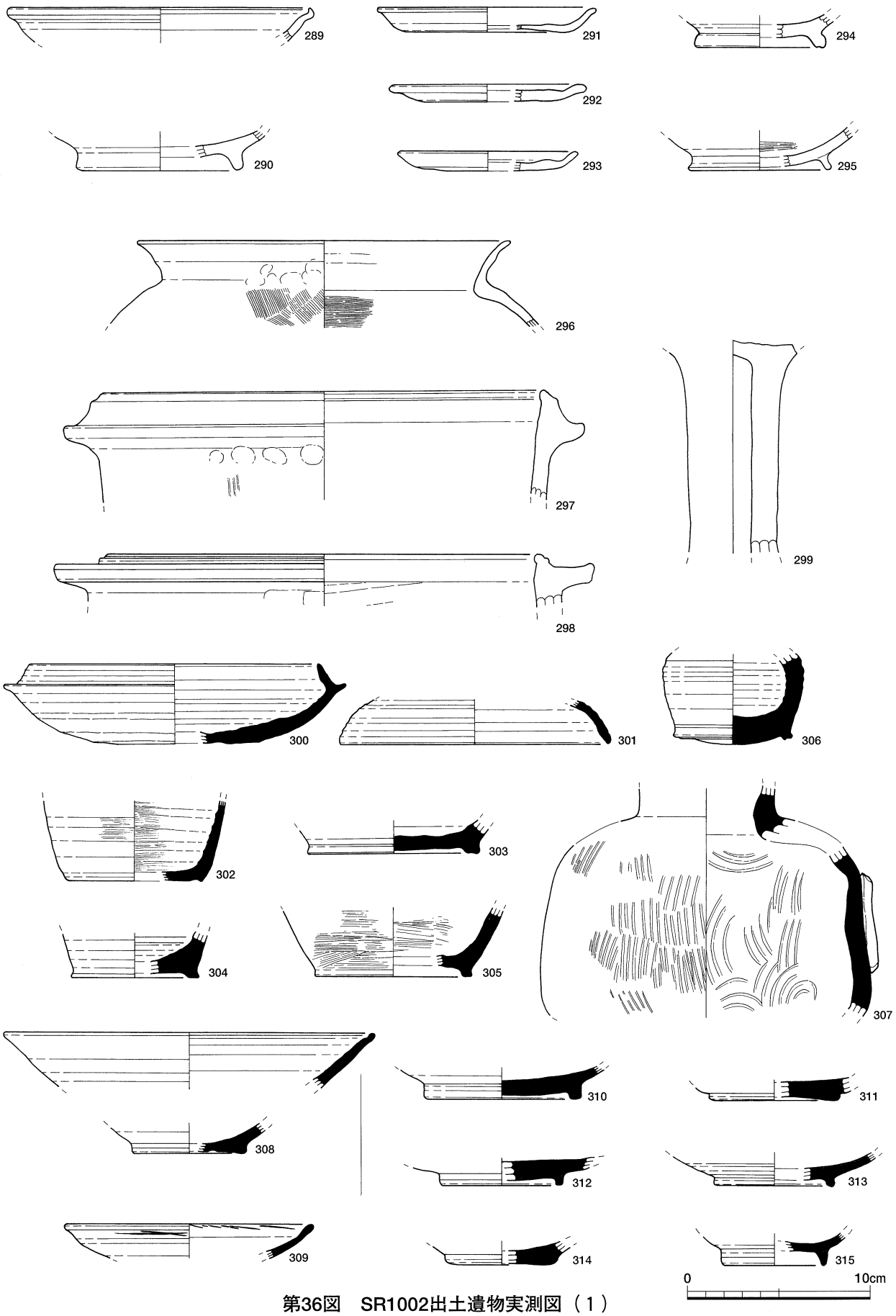
する筒状の体部と、内方に拡張された口縁端部からやや離れた位置に幅の狭い鍔が廻された摂津型の羽釜である。297は鍔端部が円くわずかに上方に外反している。298は、鍔が口縁端部直下に付けられ、鍔の幅も広い。口縁端部は内方に拡張され頂部と内面は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。299は脚柱部にヘラケズリによる幅広い面取りが加えられた土師器の高杯である。294は底部に低い高台が貼り付けられたＢ類の黒色土器椀である。高台は外下方への開きがやや大きく、接地部の中央部が凹線状にくぼんでいる。295も底部に外下方に向かって「ハ」の字に開く低い高台が付けられたＡ類の黒色土器椀である。高台は接地部が円く仕上げられ内面には丁寧なヘラミガキ調整が施されている。300・301は古墳時代後期の須恵器の蓋杯である。300は上方への開きが大きい扁平な体部を持った杯身で、口縁は立ち上がりが内屈し短く、端部は円く仕上げられている。また、受け部は比較的長く端部が円い。301は杯蓋である。天井部が低く扁平で口縁端部は円く仕上げられている。302～306は須恵器の壺の底部と考えられる個体である。302は直線的で上方への開きが小さい体部と、平底の底部を持っている。303～305は、底部に低い高台が付けられている。高台は断面が方形に近く外下方への開きが小さい。303の高台は接地部の中央が凹線状にくぼんでいる。306は球形の体部と丸底の底部を持った小型の壺と考えられる須恵器である。肩部には複数の凹線状の沈線が引かれ、底部には形骸化した低い高台が付けられている。307は俵型の体部と、直立する太い口縁部を持った横瓶である。口縁部はその大部分を欠くため詳細は不明だが、体部は外面全体に平行タタキが、内面には同心円文タタキが施されている。体部の一方の端には焼き台として使用した須恵器片が窯着している。308～314は胎土が黄色味をおびた白色の軟質焼成の緑釉陶器である。308は直線的で上方への開きが大きい体部を持った皿である。円く仕上げられた口縁端部は内面に凹線状の沈線が１本引かれ、蛇ノ目高台の底部と体部の境には低い段が設けられている。体部内面には見込部にかけてヘラミガキが施されている。309はゆるやかに内彎しながら上方へ大きく開く体部を持った皿である。円く仕上げられた口縁端部はわずかに肥厚し、口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整のほか、放射状の暗紋が施されている。310・312はいずれも全面に施釉された上方への開きが大きい体部を持った皿または椀で、底部には直立する断面方形の高台が削り出されている。310は内面見込部に細いヘラミガキが加えられている。313は蛇ノ目高台、314は平底の底部を持った皿である。内彎する体部と底部との境にはヘラケズリにより段が設けられている。315は内彎する体部を持った高台付の灰釉皿または椀で、底部には直立する低い高台が付けられている。316～320



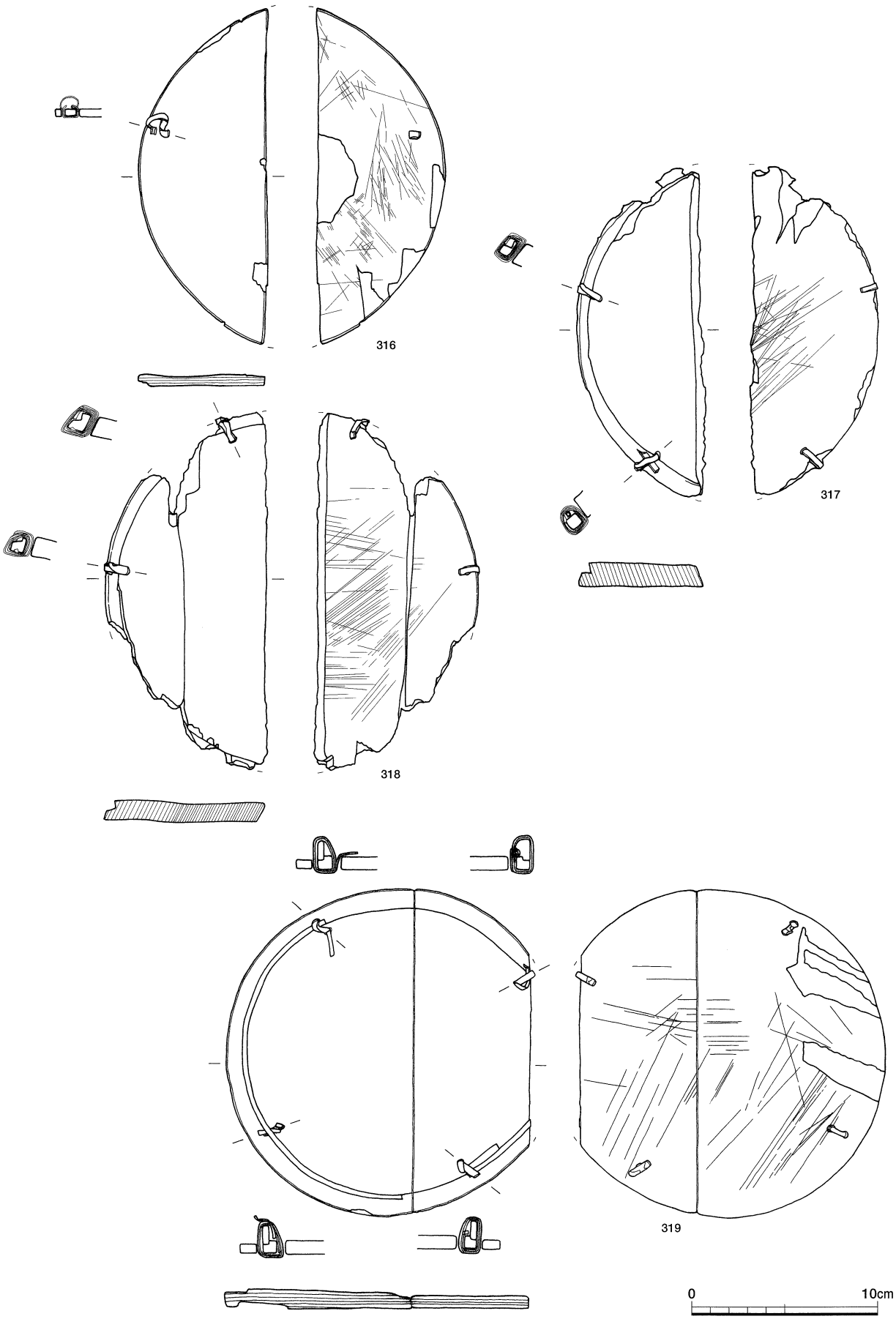
1 灰色 シルト質土　5Y4/1
2 黄灰色 シルト質土　2.5Y4/1
3 黄灰色 粘土質土　2.5Y4/1
4 灰色 粘土質土　5Y4/1
5 灰色 シルト質土　7.5Y4/1
6 黒褐色 粘土質土　2.5Y3/1
7 褐灰色 シルト質土　10YR4/1
8 オリーブ黒色 シルト質土　5Y3/1
9 黄灰色 粘土質土　2.5Y4/1
10 灰色 シルト質土　5Y4/1
11 黄灰色 粘土質土　2.5Y4/1
12 灰色 粘土質土　5Y4/1
13 灰 オリーブ色 シルト質土　5Y4/2
14 黒褐色 粘土質土　10YR3/1
15 黄灰色 砂質土　2.5Y4/1
16 黄灰色 砂質土　2.5Y4/1
17 黒色 粘土質土　5Y3/1

第35図　SR1002実測図

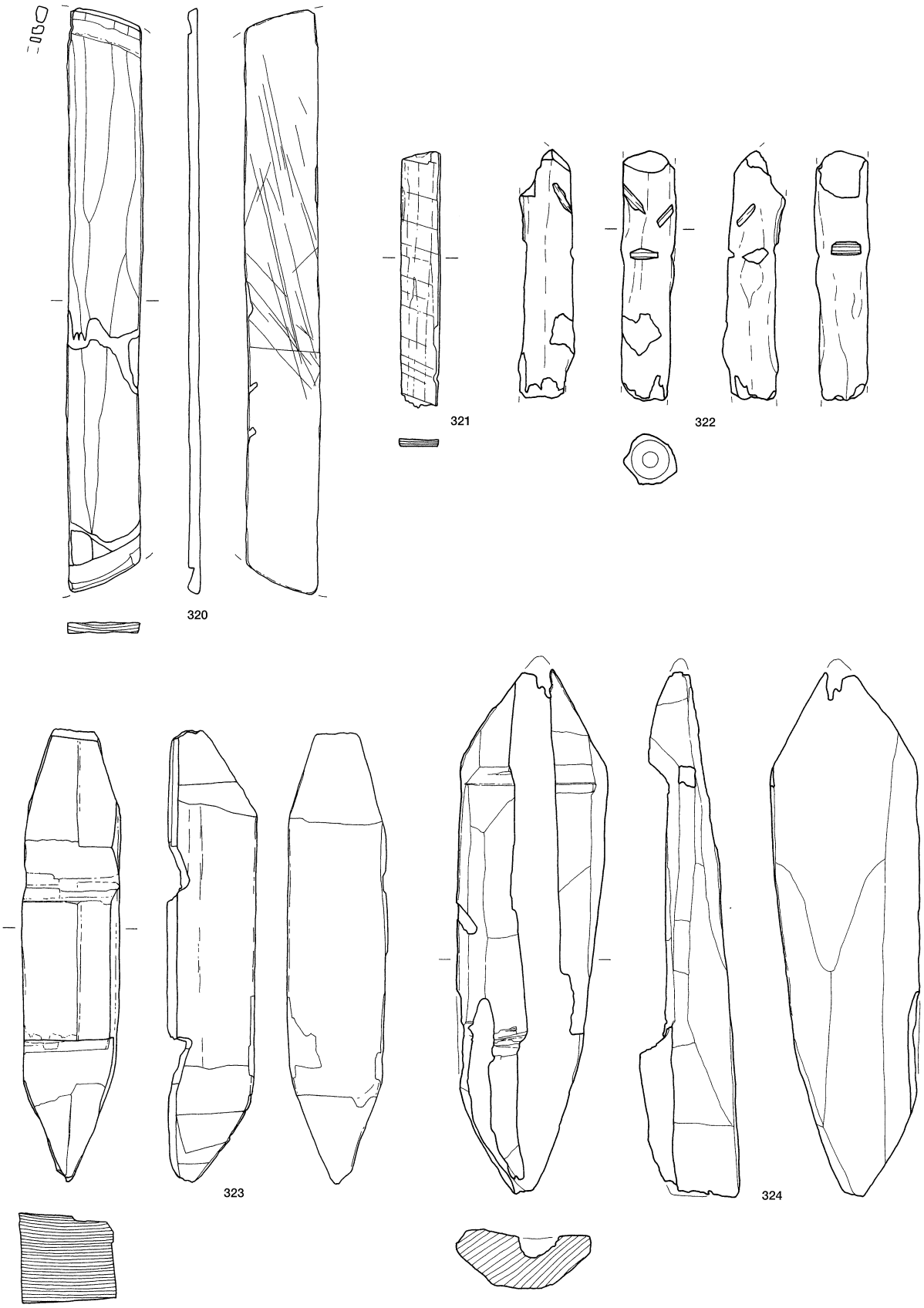
は曲物の蓋または底板である。316は針葉樹の板目材を使用し、側板を接合するための樹皮が１ヶ所残されている。317・318は正目板を使用し側板を取り付けるために縁辺部が一段低く削り出され、側板を接合するための樹皮がそれぞれ２ヶ所ずつ残されている。319は板目材を使用し、側板が部分的に残されている。側板を取り付けるために縁辺部が１段低く削り出され、側板を接合するための樹皮が４ヶ所残されている。いずれも外面には刃物によって付けられた傷跡が多く残されている。320も板目材を使用した曲物の蓋または底板であるが、大型の製品である。縁辺部のやや内側に斜めの溝が彫り込まれている。側板を取り付けるための樹皮を通す孔が１ヶ所残され外面には刃物による傷跡が残されている。321は側板の破片である。板目材を使用し斜めのケビキが入れられている。322は人形である。樹皮を剥いだ細い丸太に目と口を刻み、反対側の後頭部下にも水平の刻みを入れて首を表現している。323～326は船形である。323は角材の一端を尖頭状に、もう一端を台形状に削り出してそれぞれ船首と船尾を表現している。甲板部分には２ヶ所に船首方向と船尾方向からの刳り込みが行われ、船底は平らである。324は両端を尖頭状に削り出して船首と船尾部分を表現し、甲板を台形に削り込み船艘部分を表現している。船底部分はＵ字状を呈している。325は角材の両端を船底部分から斜めに削り込んで船首と船尾を表現している。また、甲板側には船底部とは逆に両端から内側に向かう切り込みを加え、中央に方形の突起が残されている。326は丸太を素材にし323・325と同様の加工を施したものである。327～329も形代である。327は薄板の片方の側縁を中央付近から一方の端に向かって削り込み徐々に細くした刀形の可能性がある。328も薄板の両側縁から一方の端に向かって削り込みを入れ尖らせたもので、剣形であろうか。330～339は薄板の両端を片方の側縁から削り尖らせた斎串である。340～343は幅は３cm前後の薄板の上端を両側縁から削り出し圭頭状に成形し、下端を剣先状に成形する斎串である。圭頭状の上端からやや下がった位置に一対の浅い切れ込みが加えられている。346～349も薄板を340同様に成形した斎串であるが、使用される板が１cm前後と細く、幅広の板材のものと比較して頭部が尖っている。350・351も圭頭状の頭部と剣先状の下端部を持つ斎串であるが、頭部への切れ込みが施されていない。352～355は剣先状に成形された斎串の下端部の破片であろうか。左右対称のものと非対称のものがあるが、非対称のものについては刀形などの可能性も考えられる。356は先端を四角く削り出した多角形の棒である。357は厚さ約１cmの板を約1.2cmほどの幅に割って作り出された棒状の木片の一端を、四方向から面取りを加えて鈍く尖らせ、元の板だった面に間隔を置いて平行する２本の刻みを加えている。板を割った面はそのままの状態で残されているが、先端近くに加えられた刻み目は片方の割られた面にも加えられている。もう一端は割られた面から削りを加えて尖らせたものである。358は角材の板目側から先端に向かって加工が加えられ先端がくさび状に整えられている。船形の可能性がある。359～363は棒状に加工された木製品である。断面は円形または楕円形で、表面は丁寧に削られなめらかに仕上げられている。頭部は平坦で縁辺部には面取りが施されている。364も棒状の木製品である。長さ約64cmを測る細長い丸太の一方を尖らせ、根本側に近いもう一方を半円形に加工している。半円形の頭部から中程にかけては表面を削ってなめらかにしているが、残りの半分は樹皮を剥いだ状態のまま残されている。365・366も先端が尖らされた棒状木製品である。365は全面に削りが加えられているが、366は先端部以外は樹皮を剥いだ状態のまま残されている。367～373は板状に加工された木製品である。370は板目材を使用し断面がゆるやかに彎曲している。容器の一部であろうか。368・369は幅約２cm前後の薄板で、両端を欠くため断定はできないが斎串の可能性がある。374は長さ約14cmの平造の鉄製の刀子である。長さ約4.2cmの茎は断面が逆台形で刀身との境にはマチが明瞭に残されている。



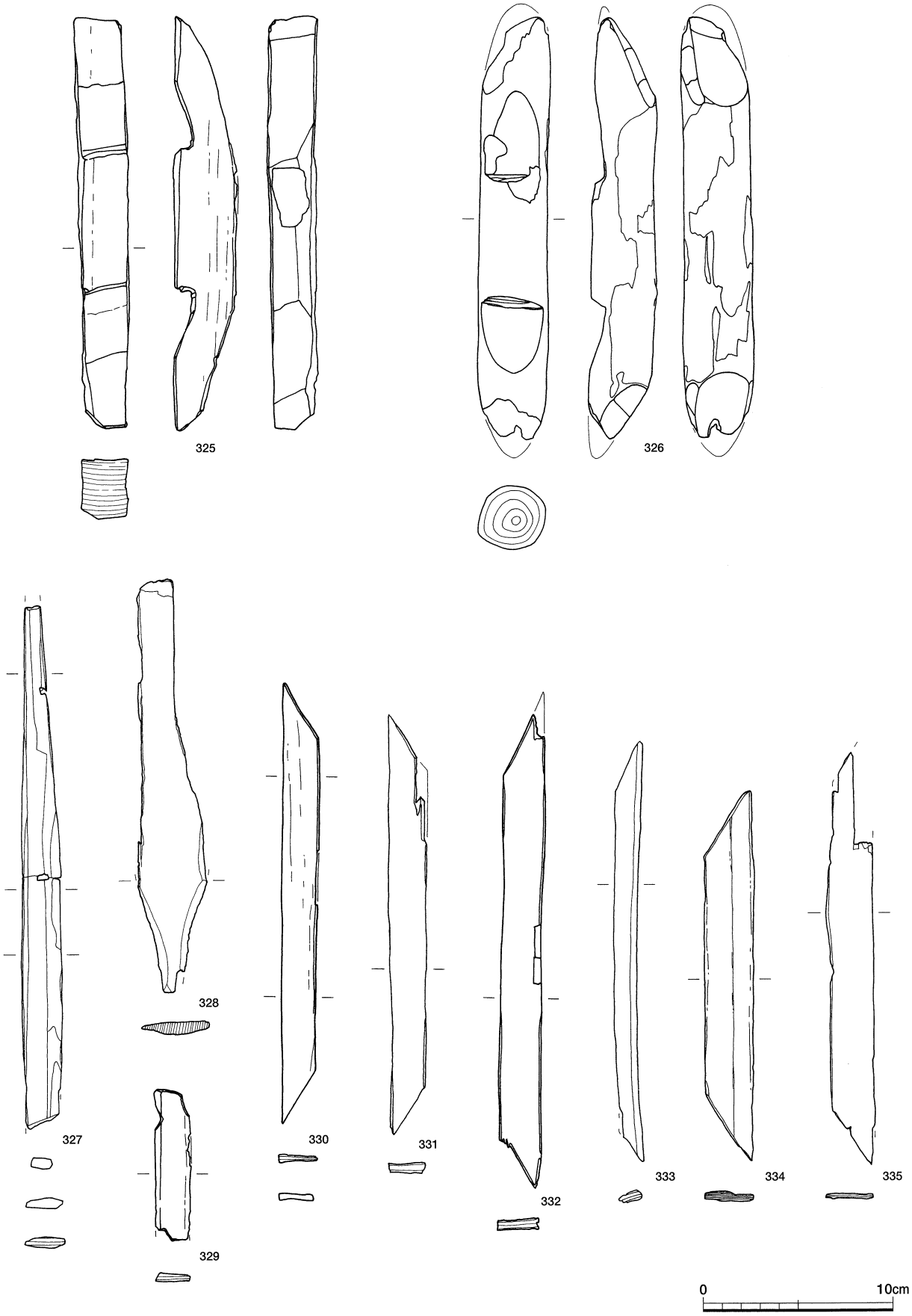
第36図　SR1002出土遺物実測図（1）



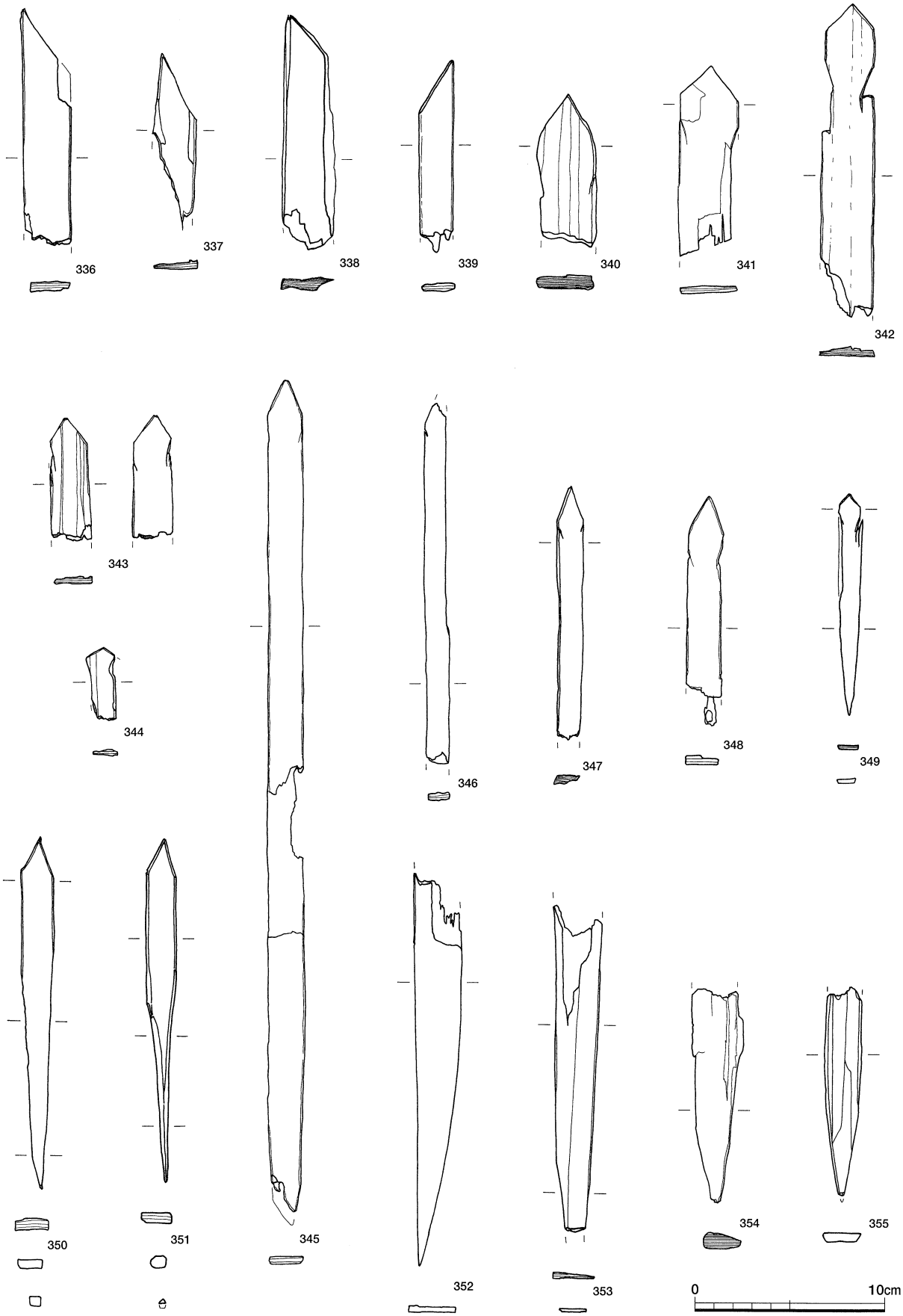
第37図　SR1002出土遺物実測図（２）



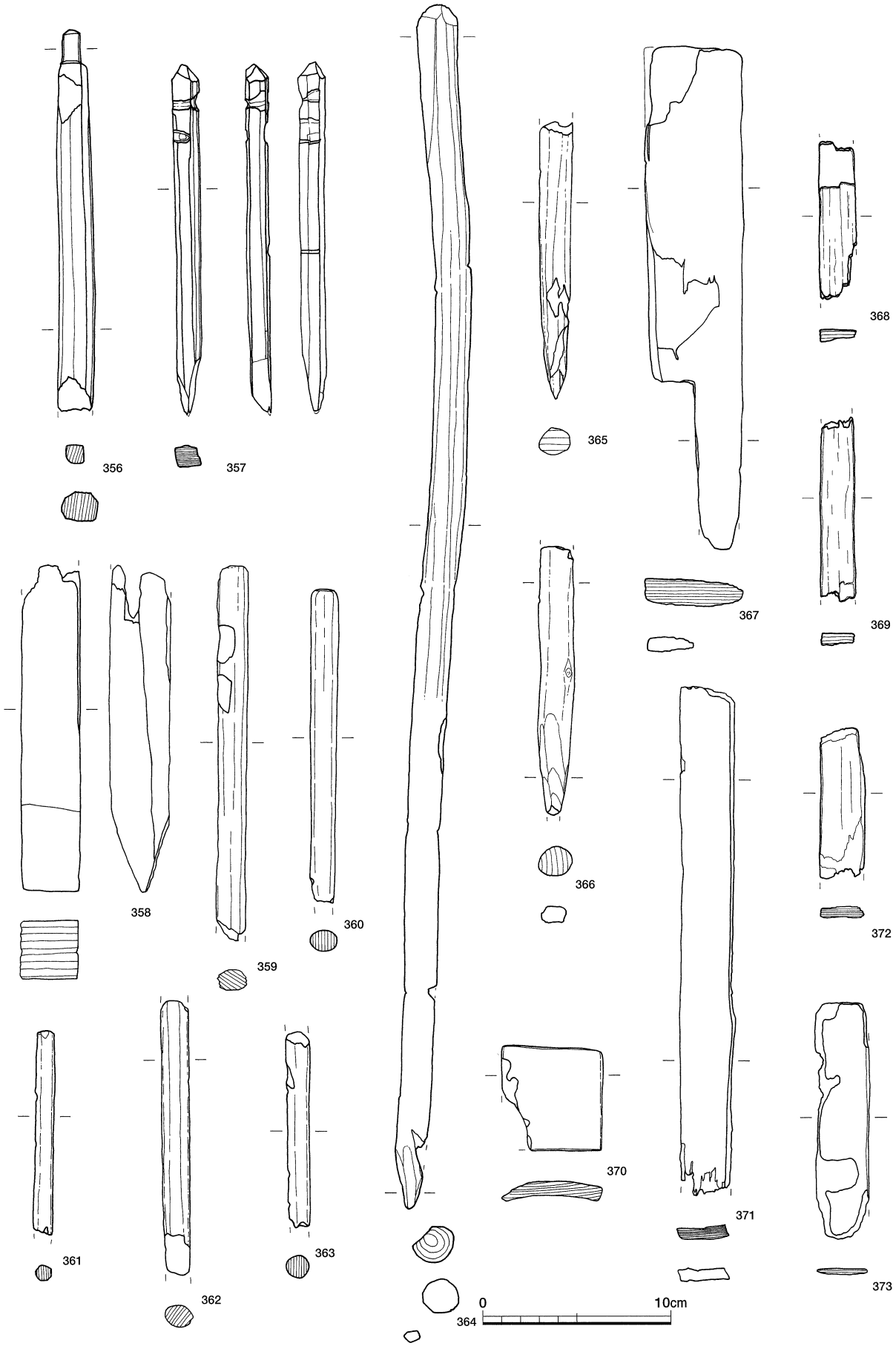
第38図　SR1002出土遺物実測図（3）



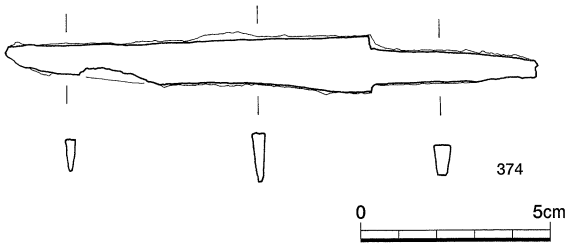
第39図　SR1002出土遺物実測図（４）



第40図　SR1002出土遺物実測図（５）



第41図　SR1002出土遺物実測図（6）



第42図　SR1002出土遺物実測図（７）

焼土坑　ＳＨ（第43～44図）

焼土坑　１（ＳＨ１００１）（第43図）

２区で検出された直径約1.6mの不整円形の遺構である。浅い皿状に掘り込まれた遺構は深さが15cmほどしかなく、壁面の立ち上がりが不明瞭である。遺構の中央部には鉄滓を多く含む厚さ約３cmの焼土層が円形に堆積していた。遺構内から出土した須恵器の杯や杯蓋、壺などから、同じ２区の南端から検出された溝ＳＤ１００１と同時期の遺構と考えられる。鍛冶遺構の一種であろうか。

出土遺物（第44図）

375は扁平な天井部と内屈する縁部を持った須恵器の杯蓋である。端部は下方に強く折り曲げられている。頂部のつまみは扁平で中央が小さく突出している。376は直線的で上方への開きが小さい体部と鈍く尖らされた口縁端部を持った須恵器の杯である。体部内外面には丁寧な横ナデ調整が加えられている。377は肩部が内側に向かって「く」の字に屈曲する体部を持った須恵器の壺である。底部との境から肩までの間は直線的で、底部には内端部に接地面を持つ「ハ」の字に開く低い高台が付けられている。高台の接地部は中央が凹線状にくぼんでいる。

柱穴出土遺物（第45～66図）

柱穴　７（ＳＰ１００７）（第45図）

長軸の方向を東西にとる長さ約0.7m、幅0.5mの不整楕円形の遺構である。深さは20cmほどで断面はU字状に掘り込まれている。遺物は遺構内全体に散乱したような状態で出土している。

出土遺物（第46図）

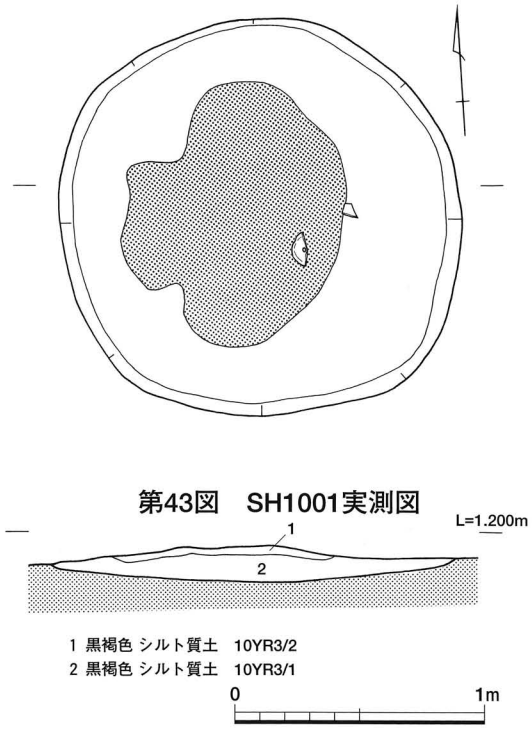
378は「く」の字に屈曲する底部との境から外上方へ大きく開く直線的な体部と、鈍く尖る口縁端部を持った土師器の杯である。379は直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口頸部を持った土師器の甕である。上方にわずかに拡張された口縁端部は拡張部が平坦に仕上げられている。

柱穴　13（ＳＰ１０１３）（第47図）

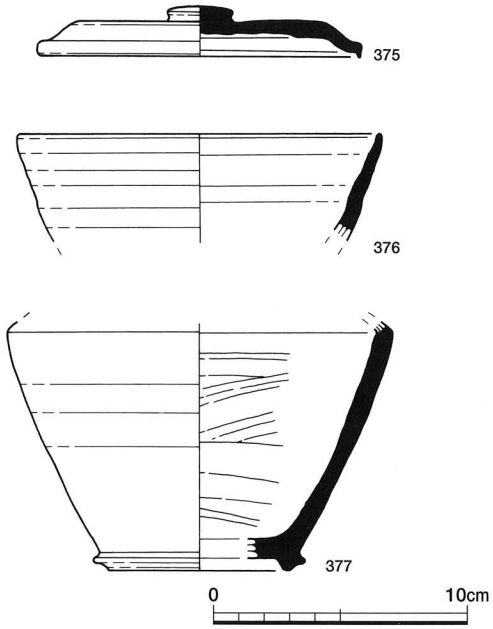
遺構の西側を大きく削平されているため全形は不明だが、残された部分から推測すると、直径約0.5m前後の不整円形の遺構であったと考えられる。深さは15cmほどで断面がU字状に掘り込まれている。遺物は遺構の中心から東壁よりの地点で礫と一緒に検出されている。

出土遺物（第48図）

380は直立する筒状の体部と、幅の広い鍔が口縁端部からやや下がった位置に水平に貼付けられた土師器の羽釜である。口縁端部からやや離れた位置に付けられた鍔は幅が広く、口縁端部は内方に拡張され、頂部と内面が浅くくぼんでいる。



第43図　SH1001実測図



第44図　SH1001出土遺物実測図

柱穴　14（ＳＰ１０１４）（第49図）

長軸を南北方向にとる長さ約0.6m、幅0.5mの楕円形の遺構である。遺構のほぼ中央からは直径約10cm前後の礫が集中して検出されたが、その下からは礫に覆われた状態で大型の土師器の鍋の破片が出土している。

出土遺物（第50図）

381は内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方に大きく開く口頸部を持った土師器の鍋である。直線的な口縁部は端部が円く仕上げられ、頸部の屈曲部は内面がわずかに内方に張り出している。

柱穴　16（ＳＰ１０１６）（第51図）

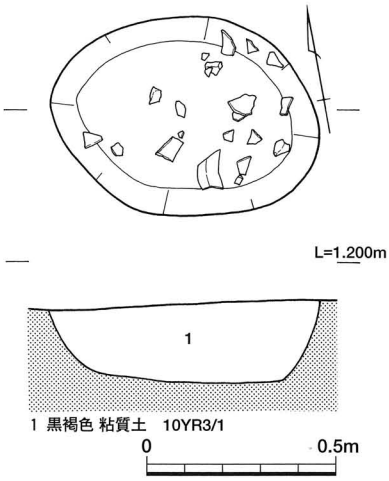
長軸を南北方向にとる長さ約0.6m、幅0.45mの不整楕円形の遺構である。深さは15cmほどで断面が逆台形状に掘り込まれている。遺構の南東側からは大小の礫がかたまって検出されたが、それに混じって土師器の甕の破片が１個体分出土している。

出土遺物（第52図）

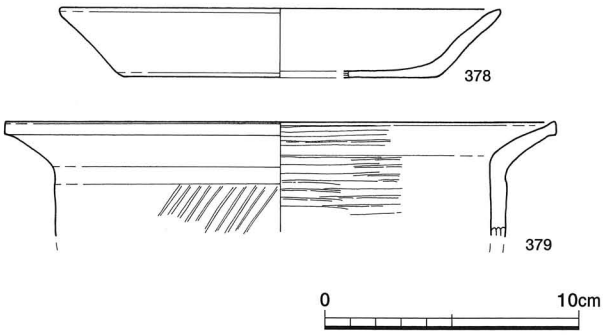
382は直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的で短い口頸部を持った甕である。口縁は端部がわずかに上方に拡張され横ナデによって凹線状にくぼんでいる。

柱穴　22（ＳＰ１０２２）（第53図）

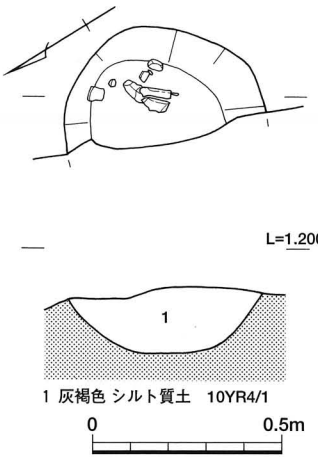
直径約0.6mの不整円形の遺構である。深さは25cmほどで断面がＵ字状に掘り込まれている。遺構の中央部から西よりで完形の土師器の杯が１点単独で出土している。



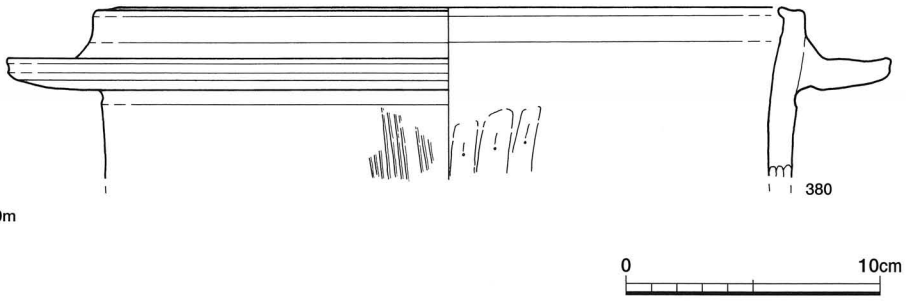
第45図　SP1007実測図



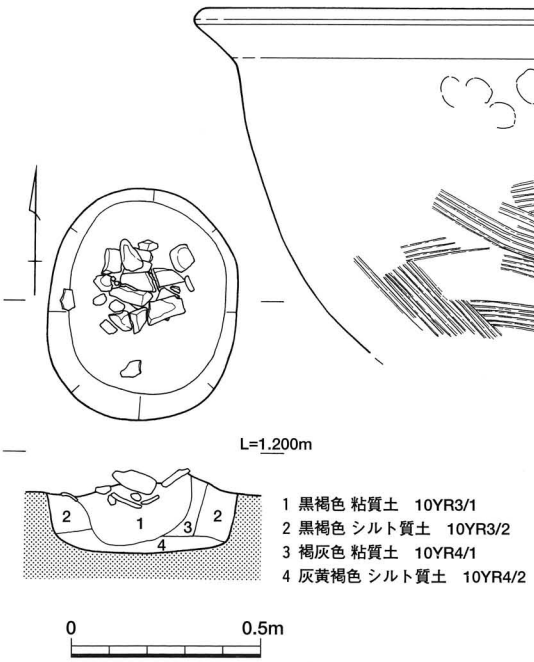
第46図　SP1007出土遺物実測図



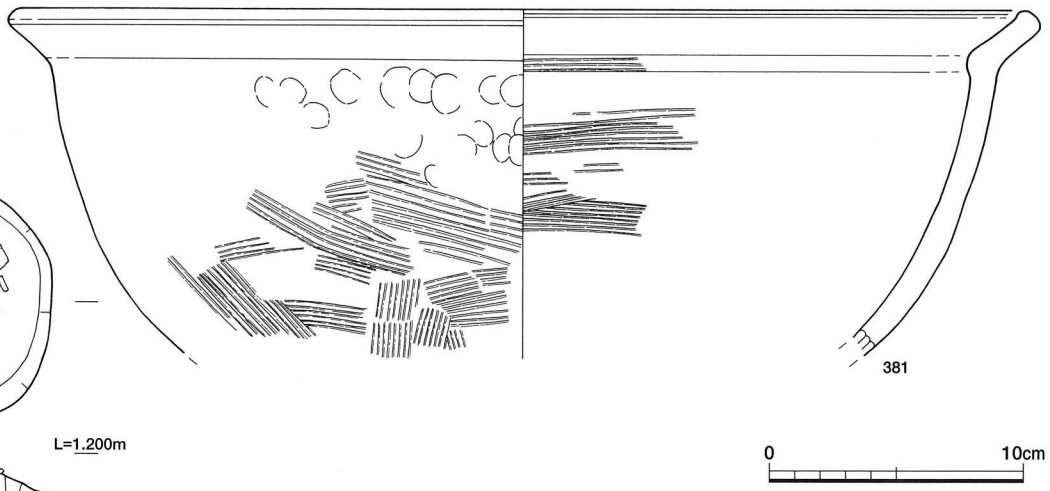
第47図　SP1013実測図



第48図　SP1013出土遺物実測図



第49図　SP1014実測図



第50図　SP1014出土遺物実測図

出土遺物（第54図）

383はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の杯である。体部は周縁部が円く仕上げられた底部との境が不明瞭である。

柱穴　41（ＳＰ１０４１）（第55図）

直径約0.2m、深さ0.1mの不整円形の遺構である。小規模な遺構にもかかわらず、須恵器の甕の大型の破片が出土している。

出土遺物（第56図）

384は直線的で上方への開きが大きい口縁部を持った須恵器の甕である。口縁部は断面半円形の比較的太い突帯状で下端部を下方に垂下させている。口縁は端部内面を横ナデによって凹線状にくぼませている。

柱穴　56（ＳＰ１０５６）

長さ約0.6m、幅0.4m、深さ0.35mの楕円形の遺構である。

出土遺物（第57図）

385は直線的で短い体部と、端部が鈍く尖らされた口縁部を持った土師器の台付小皿である。底部には外下方に向かってわずかに開く比較的高い高台が付けられている。

柱穴116（ＳＰ１１１６）（第58図）

直径約0.3m、深さ0.2mの不整円形の遺構である。遺構の中央から南東よりの地点を中心に黒色土器や土師器の小皿が出土している。

出土遺物（第59図）

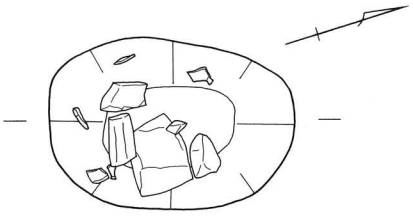
386はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ったＡ類の黒色土器椀である。体部外面には横ナデ調整が多段に施され、丸底の底部には「ハ」の字状に開く比較的高い高台が貼り付けられている。387も体部下半を欠くが同じ特徴を持ったＡ類の黒色土器椀である。388は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の小皿である。体部は底部との境に屈曲部を持ち立ち上がりが明瞭である。389も直線的な体部と円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の小皿であるが、体部と底部の境は円く仕上げられ立ち上がりが不明瞭である。

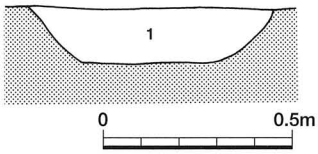
柱穴　122（ＳＰ１１２２）（第60図）

直径約0.6mを測る不整円形の柱穴である。深さ30cmほどの遺構は断面がＵ字状に掘り込まれている。遺構の北東の側壁近くから比較的大きな礫が数点検出されている。

出土遺物（第61図）

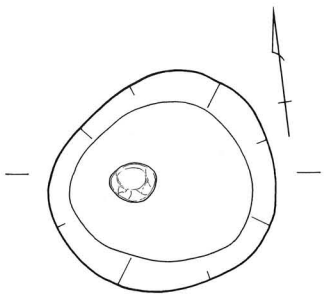
390はゆるやかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った土師器の椀である。上方への開きが大きい体部は、内外面とも不規則なヘラミガキが加えられ、赤彩が施されている。

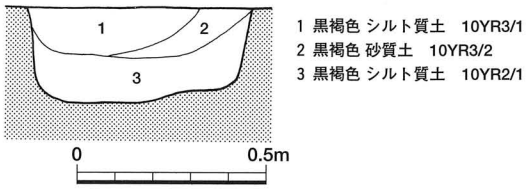




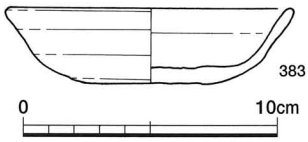
第51図　SP1016実測図

第52図　SP1016出土遺物実測図

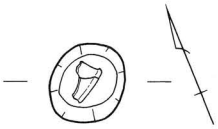


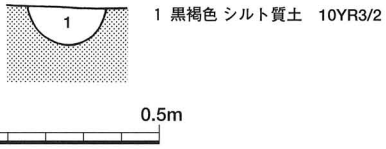


第53図　SP1022実測図

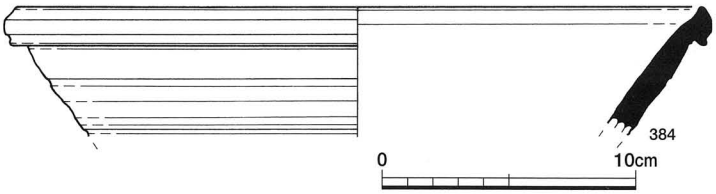


第54図　SP1022出土遺物実測図

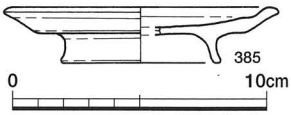




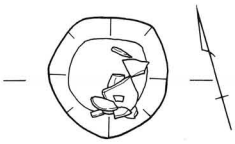
第55図　SP1041実測図

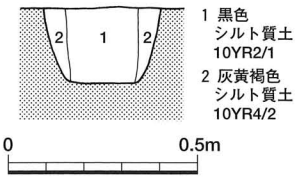


第56図　SP1041出土遺物実測図

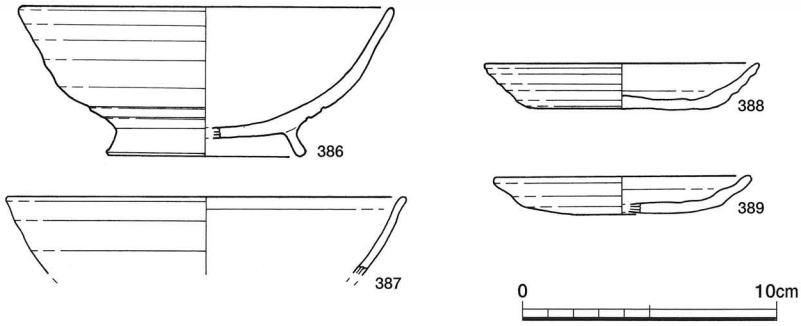


第57図　SP1056出土遺物実測図





第58図　SP1116実測図



第59図　SP1116出土遺物実測図

柱穴　159（ＳＰ１１５９）

直径約0.5m、深さ0.3mの円形の遺構である。

出土遺物（第62図）

391はゆるやかに内彎する体部と、わずかに外反する口縁部を持った土師器の杯である。口縁端部は内側に折り曲げられ、内面に浅い凹線状の沈線が１本引かれている。体部は、周縁部が円く仕上げられた底部との境が不明瞭で、内面には斜行暗文が１段施されている。392はゆるやかに内彎する上方への開きがほとんどない体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の椀または鉢である。口縁部の外面には端部近くに浅い沈線が１本引かれている。

柱穴　160（ＳＰ１１６０）

直径約0.5m、深さ0.3mの不整円形の遺構である。

出土遺物（第63図）

393はゆるやかに内彎する体部と、わずかに外反する口縁部を持った土師器の高台付椀である。口縁端部は円く仕上げられ、体部は内外面とも赤彩されている。394は直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持った土師器の甕である。上方に拡張された口縁端部は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。395は平底の底部にわずかに外下方に開く低い高台が付けられたＡ類の黒色土器椀で、内彎する体部は内面に丁寧なヘラミガキが密に施されている。

柱穴　164（ＳＰ１１６４）

長さ約0.6m、幅0.4m、深さ0.3mの不整楕円形の遺構である。

出土遺物（第64図）

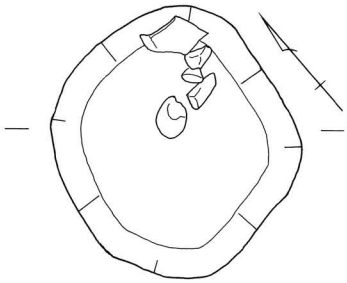
396は球形の体部と、接地部が方形に仕上げられた「ハ」の字に開く高い高台が底部に付けられた土師器の風炉である。外面は高台から体部にかけて指オサエとハケ目調整が施されているが、被熱してもろくなっている。この個体には見られないが、ＳＤ１００５では高台部分に円い透かしが入れられた個体が出土している。

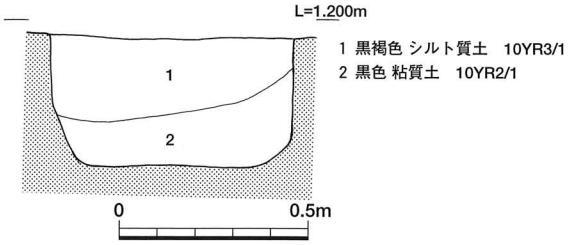
柱穴　179（ＳＰ１１７９）（第65図）

直径約0.3m、深さ0.1m足らずの円形の遺構である。遺構内には遺物とともに礫の破片が散乱していた。

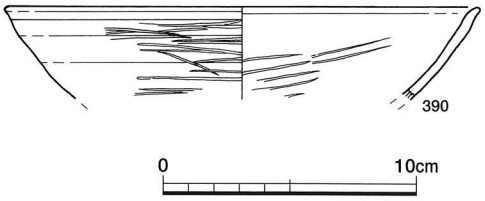
出土遺物（第66図）

397はゆるやかに内彎する体部を持った土師器の高台付の椀である。底部には接地部が方形に仕上げられた低い高台が付けられている。398は短い体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った土師器の小皿である。上方への開きが小さい体部は、周縁部が円く仕上げられたヘラ切りの底部との境が不明瞭である。399は紡錘形の管状土錘である。

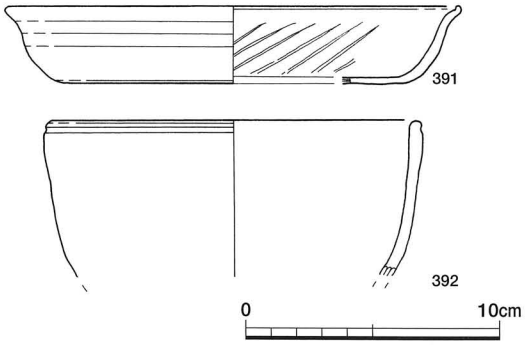




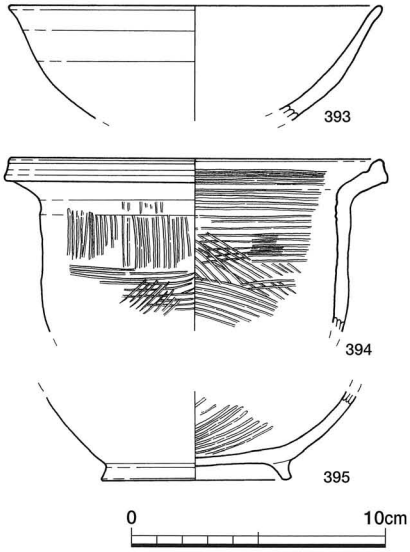
第60図　SP1122実測図



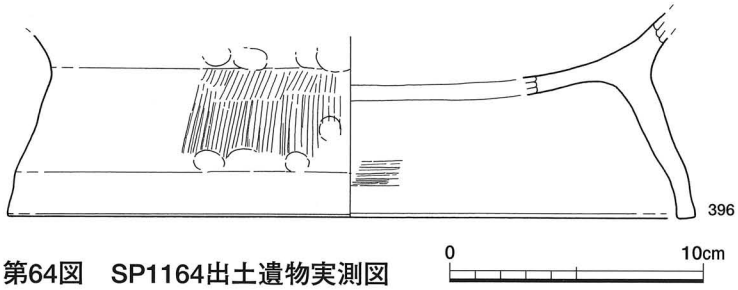
第61図　SP1122出土遺物実測図



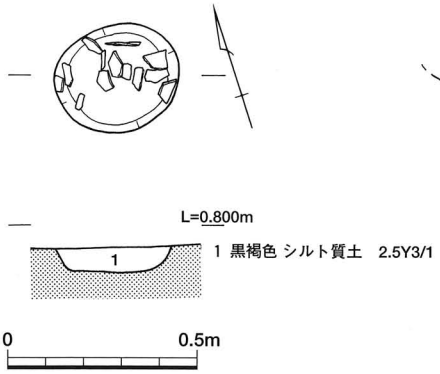
第62図　SP1159出土遺物実測図



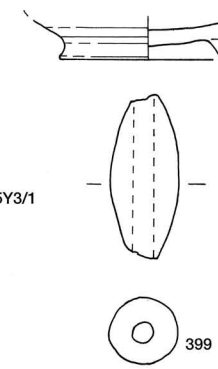
第63図　SP1160出土遺物実測図

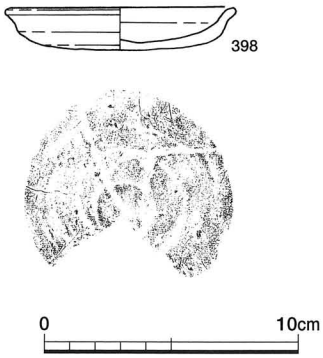


第64図　SP1164出土遺物実測図



第65図　SP1179実測図





第66図　SP1179出土遺物実測図

中世の遺構と遺物

土坑　ＳＫ（第67～68図）

土坑　４（ＳＫ１００４）（第67図）

長軸を東西方向にとる長さ約0.9m、幅0.7mの楕円形の遺構である。深さは0.1mと浅いが、側壁の立ち上がりは明瞭である。遺物は遺構の中央部分から南側で検出されている。

出土遺物（第68図）

400は内彎する体部と、わずかに外反する口縁部を持った和泉型の瓦器椀である。高台は断面逆台形状で低い。外面は口縁端部直下に強い横ナデが２段にわたって行われ、体部には指オサエとともにヘラミガキの痕がわずかに残されている。平滑に仕上げられた内面には圏線ミガキと平行線状ミガキが加えられている。401はゆるやかに内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方に向かって大きく開く直線的な口縁部を持った土師器の鍋である。焼成は良好で器壁が薄く仕上げられた体部は、内外面ともハケ目調整が施されている。

柱穴　ＳＰ（第69～70図）

柱穴　15（ＳＰ１０１５）（第69図）

直径約0.4m、深さ0.15mの円形の遺構である。遺構の中央やや北よりの地点から完形の瓦器椀が３点押しつぶされたような状態で出土している。出土状態から流れ込みなどではなく何らかの意図のもとに埋納されたものと考えられる。

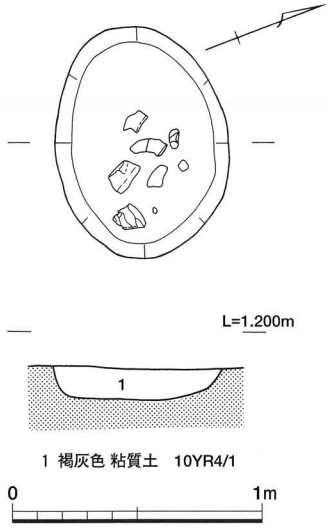
出土遺物（第70図）

402は内彎する比較的器高の高い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った和泉型と考えられる瓦器椀である。外面は口縁端部直下に横ナデ調整が行われ、体部には粗い指オサエの痕が残されている。内面は平滑に仕上げられ圏線ミガキと平行線状ミガキが加えられている。403・404も同じく和泉型瓦器椀であるが402と比較すると口径、器高とも若干縮小している。403は内彎する体部とわずかに外反する口縁部を持ち、底部には断面逆台形状の低い高台が付けられている。外面は口縁端部直下を２段にわたって横ナデし、体部には指オサエの痕が残されている。内面は平滑に仕上げられ圏線ミガキが加えられた痕が認められる。404は403よりも器高がさらに低く、高台の断面が逆三角形状を呈している。外面の口縁端部直下を幅広く横ナデし、指オサエの痕を強く残す体部にはヘラミガキの痕もわずかに残されている。平滑に仕上げられた内面には圏線ミガキが加えられている。

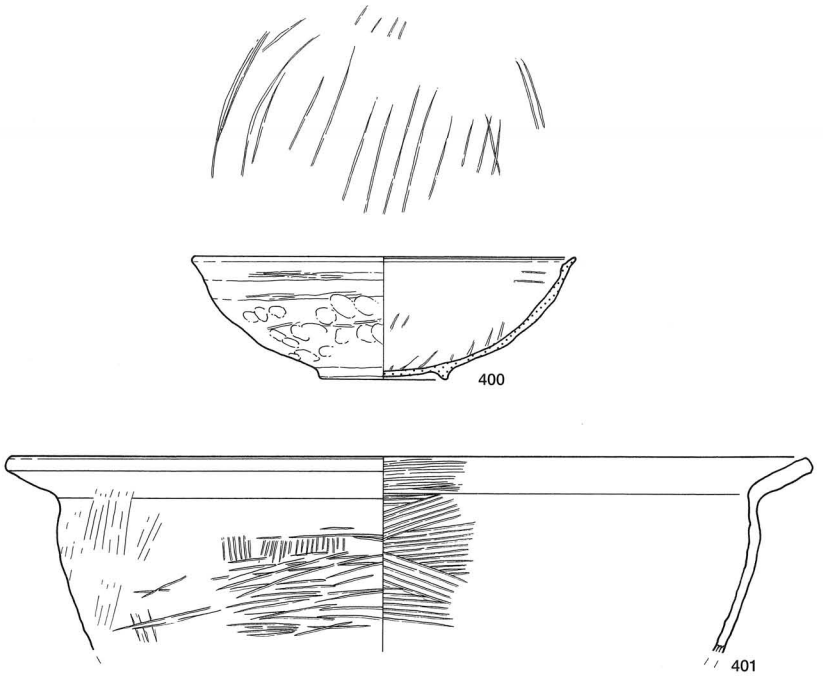
包含層出土遺物（第71～94図）

古代以前（第71～85図）

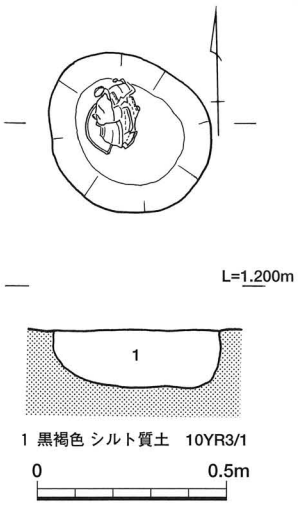
405～408、416は、いずれも直線的な体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った土師器の杯である。体部は底部との境が「く」の字に屈曲し、立ち上がりが比較的明瞭である。416は口縁端部内面に浅い凹線状の沈線が１本引かれている。409～412・418・420・421も直線的な体部



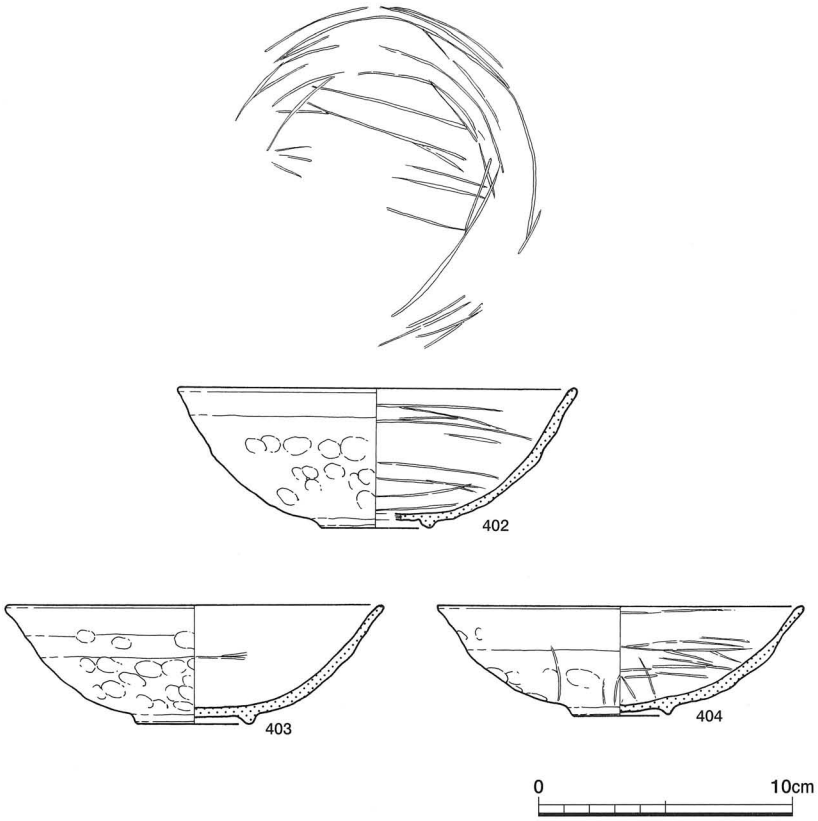
第67図　SK1004実測図



第68図　SK1004出土遺物実測図

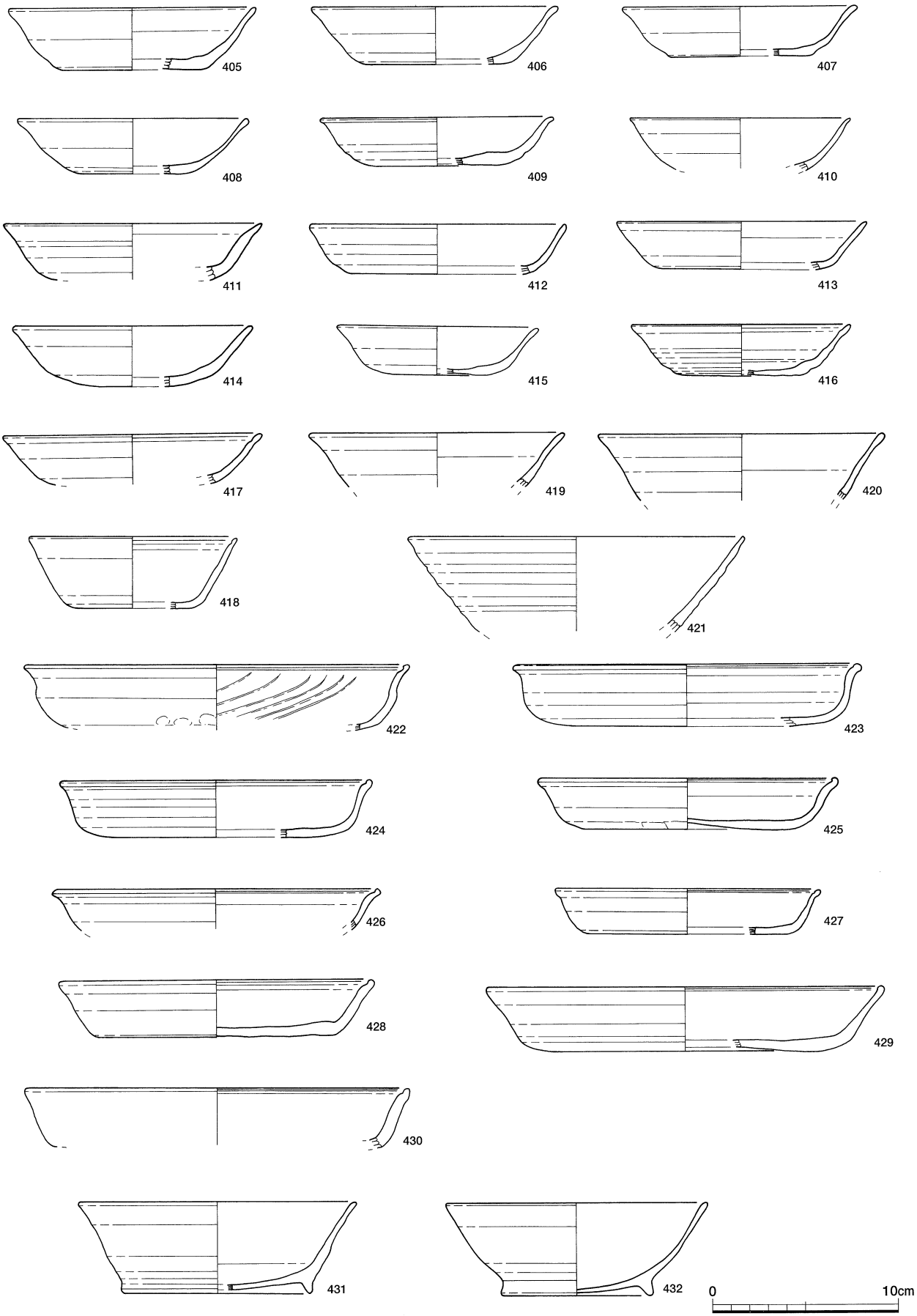


第69図　SP1015実測図

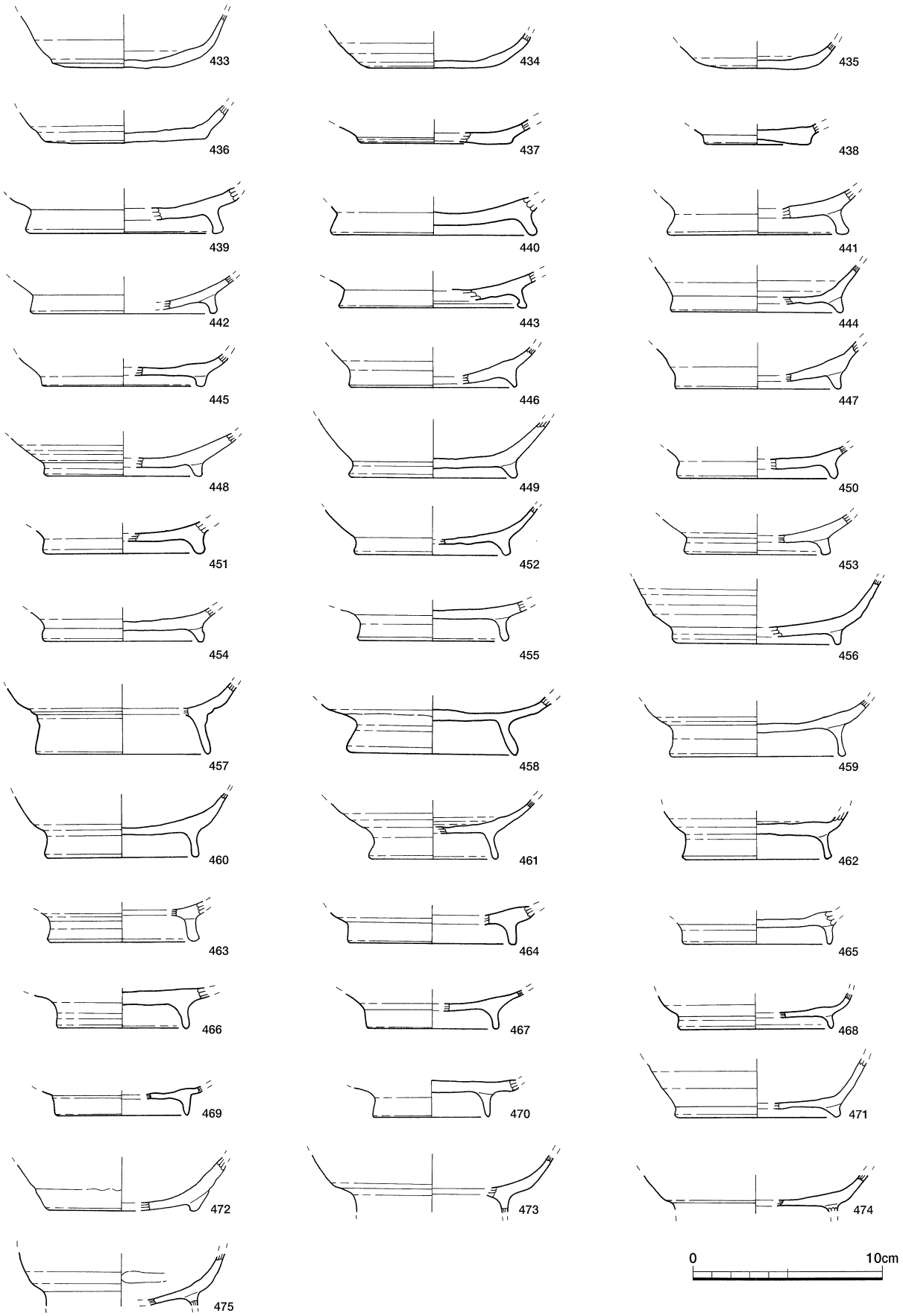


第70図　SP1015出土遺物実測図

と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持っているが、周縁部が円く仕上げられた底部と体部との境は不明瞭である。412・413は直線的でやや器高が低い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った杯である。体部と底部との境が屈曲し、立ち上がりが比較的明瞭である。417は体部がゆるやかに内彎し、口縁端部内面には凹線状の沈線が1本引かれている。418の体部は直線的で上方への開きが小さく、円く仕上げられた口縁端部内面には凹線状の沈線が1本引かれている。他の杯と比較すると底径と口径の差が小さく、器高が高い。419・420はゆるやかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った土師器の杯である。405などに比べて口径・器高とも大きい。421は直線的な体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持った大型の杯である。上方への開きが大きい体部は内外面とも横ナデ調整が多段に加えられている。422～430は口径と底径の差が小さく、器高が著しく低い皿状の杯である。内側に折り曲げられた口縁端部は内面に凹線状の沈線が1本引かれている。422～427は体部が内彎し、周縁部が円く仕上げられた底部との境が不明瞭なのに対して、428～430では体部が直線的で底部との境が「く」の字に屈曲している。422は内面に放射状の斜行暗文が1段付けられている。431は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った高台付の杯である。直立する低い高台は底部と体部の境の屈曲部に付けられている。432はゆるやかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った高台付の椀である。丸底の底部には下方に向かってわずかに開く低い高台が付けられている。433～438は杯の底部である。433～435は体部との境が円く仕上げられている。436は体部が底部との境で屈曲しながら上方にのびている。437・438は底部と体部の境に弱い段が設けられている。439～475は高台付の杯または椀の底部である。胎土や焼成の違いによって439～456と、457～472の2つのグループに分けられる。439～456の一群は焼成が良好で胎土の色調が白色に近く、赤彩されているものが多い。439～443は内彎する体部と、丸底の底部に下方に向かって「ハ」の字に開く比較的高い高台が付けられた椀である。体部・高台とも器壁が厚く、接地部が円く仕上げられている。444～447は直線的な体部と平底の底部との境の屈曲部に下方に開く低い高台が付けられた高台付の杯である。448～455は内彎する体部と、円または平底の底部に下方に開く高台が付けられた高台付の椀である。439などと比較すると全体に軟質で器壁が薄く、接地部が円く仕上げられた高台は直径・高さとも縮小傾向が見られ下方への開きも小さい。456～462は体部との境に屈曲部をもつ平底の底部に、接地部が円く仕上げられた高い高台が付けられている。高台付の杯であろうか。463～467は底部に接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられた椀または杯である。468・469も直立する低い高台が付けられた椀または杯であるが、高台の器壁が薄く、接地部は鈍く尖らされている。471・472は直線的な体部と底部の境の屈曲部に低い高台が付けられた高台付の杯である。476～480はゆるやかに内彎する体部と、わずかに外反する口縁部を持った皿である。口縁端部は円または尖り気味で、上方に大きく開く体部と、周縁部が円く仕上げられた底部とは境が不明瞭である。481～484は476と同じように上方へ大きく開く器高の低い体部と、外反する口縁部を持った皿または小皿であるが、直線的で短い体部は、底部との境が屈曲している。485～489も上方へ大きく開く器高の低い体部を持った小皿だが、短い体部は直線的またはわずかに内彎している。490の小皿は内彎する短い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ち、比較的器高が高い。体部は周縁部が円く仕上げられた底部との境が不明瞭である。491～493もゆるやかに内彎する体部を持った小皿である。わずかに外反する口縁は端部が円く仕上げられている。短い体部と、周縁部が円く仕上げられた底部との境は不明瞭である。494～499は平底の底部がそのまま円く仕上げられた口縁端部に移行する小皿で、体部の上方の立ち上がりはほとんど認められない。500～502・504も同様の小皿である

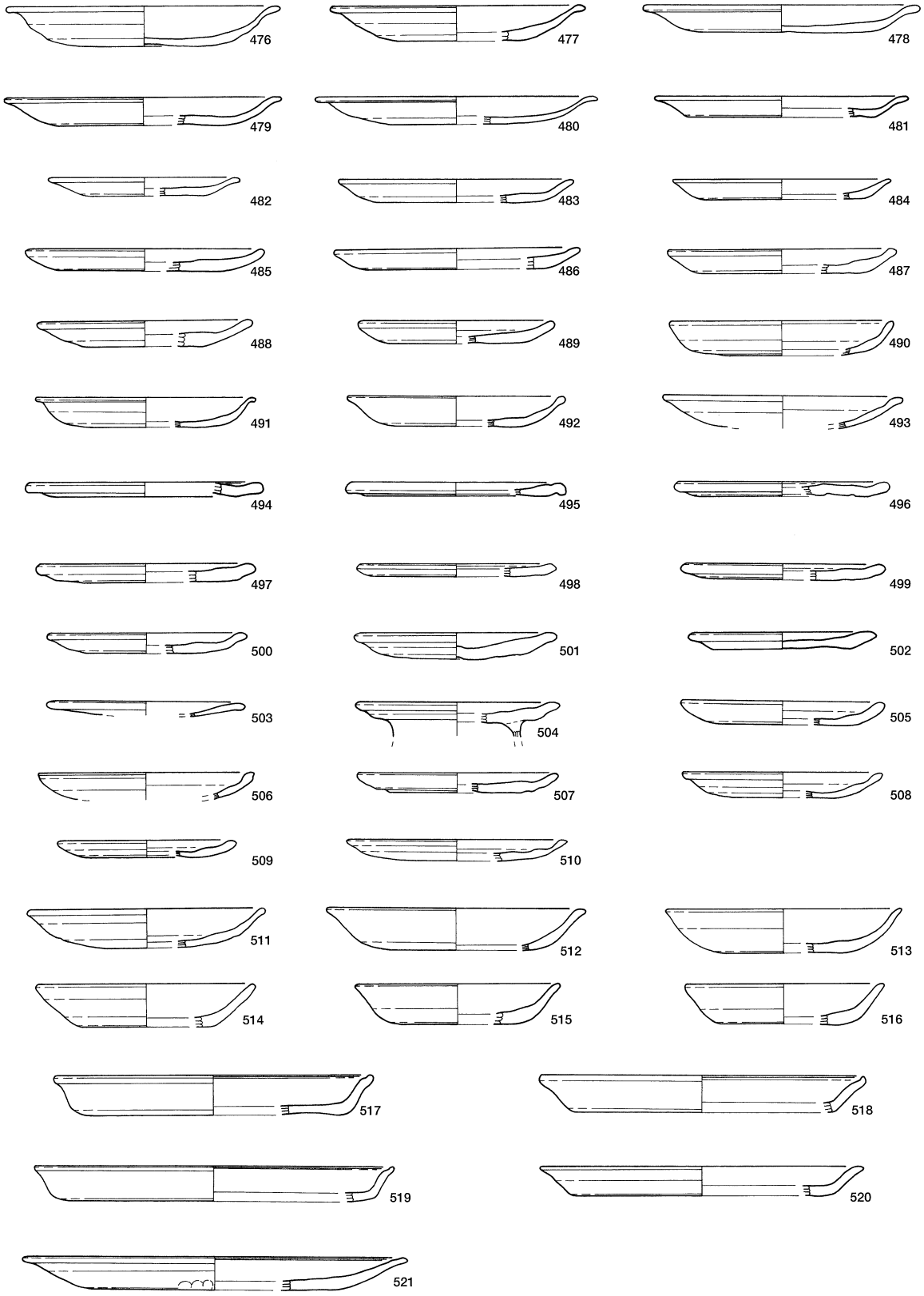


第71図　第一包含層出土遺物実測図（1）

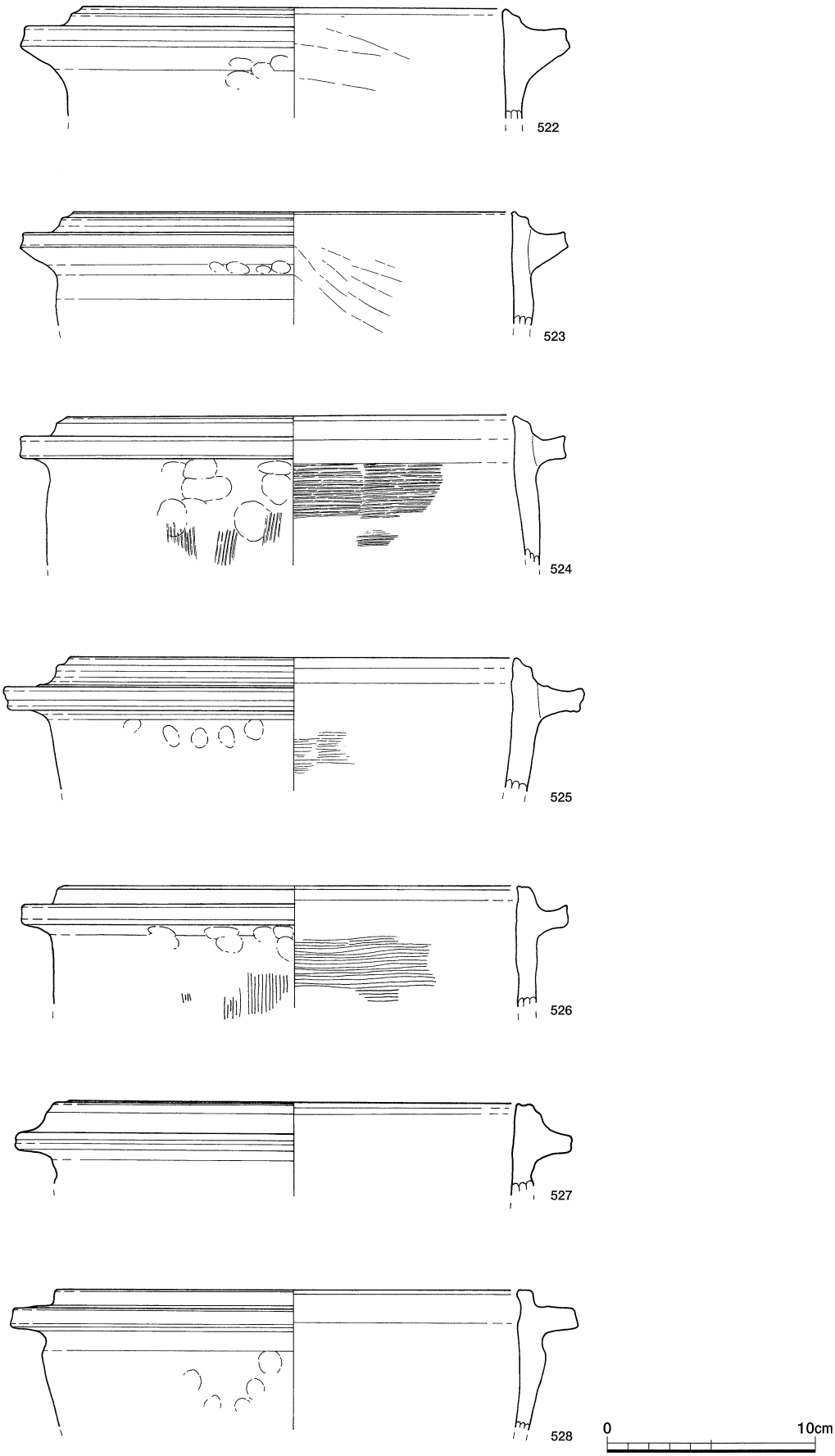


第72図　第一包含層出土遺物実測図（２）

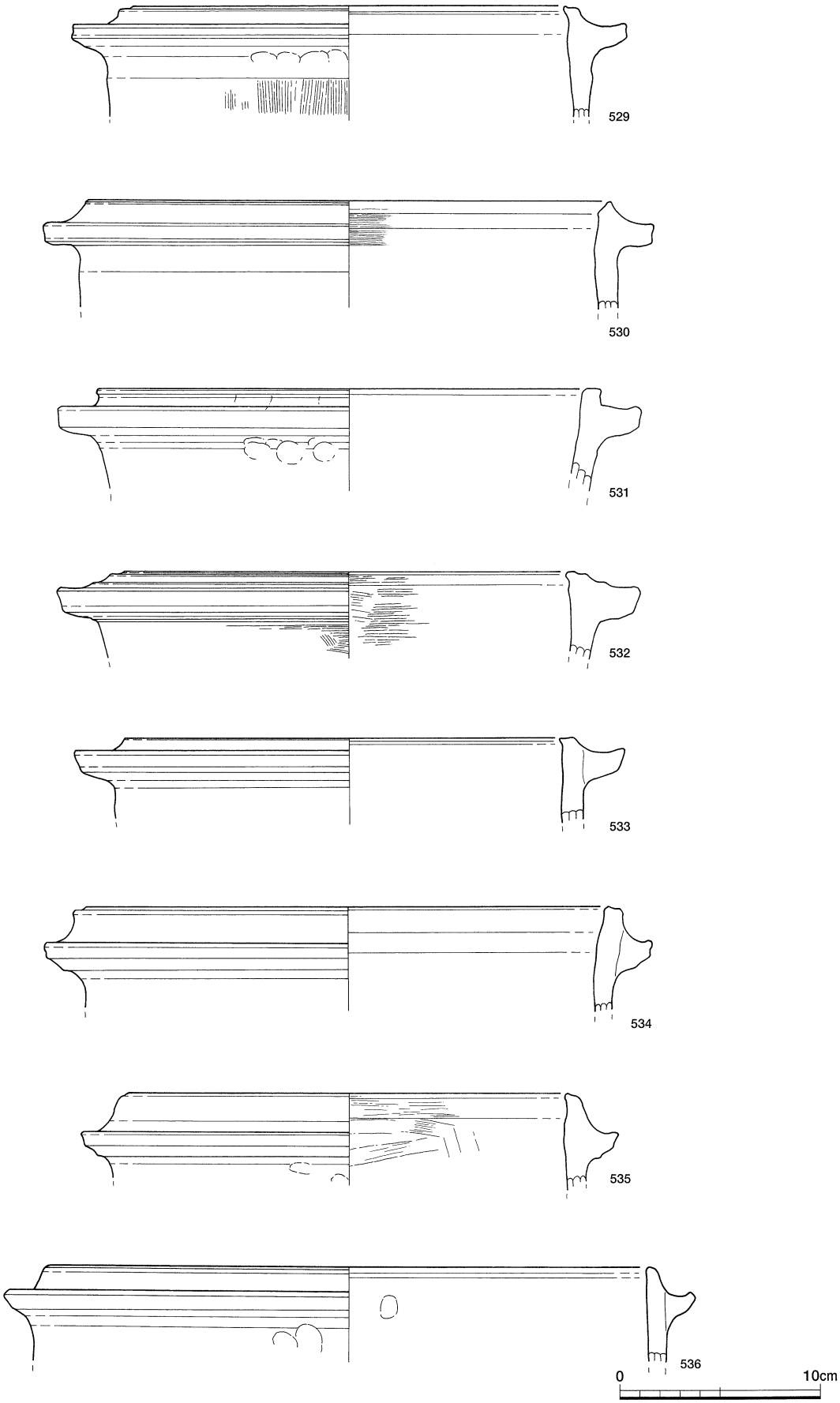
が体部が若干長く、円く仕上げられた口縁端部がわずかに外反している。504は底部に直立する高台が付けられている。494～502・504など体部の立ち上がりがほとんどないこれらの小皿は、焼成が悪く軟質な個体が大部分を占めている。503も底部から肥厚する口縁部にそのまま移行する小皿であるが、器壁が極めて薄く焼成も比較的良好で、他の個体とは大きく異なる特徴を持っている。505～510はゆるやかに内彎する短い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った小皿である。いずれの個体にも内面には粘土紐巻き上げの痕跡が明瞭に残されている。底部は周縁部が円く仕上げられ、体部との境が不明瞭である。511～513はゆるやかに内彎する体部と、わずかに外反する口縁部を持った小皿である。口縁端部は円、またはにぶく尖らされ、比較的器高が高い。底部は周縁部が円く仕上げられ、体部との境が不明瞭である。514～516は直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った小皿である。体部は511などと同じく器高が高く、底部との境は「く」の字に屈曲している。517～519は直線的で短い体部と、わずかに外反する口縁部を持った皿である。上方への開きが小さい体部は器高が低く、内側に折り曲げられた口縁端部は内面に浅い凹線状の沈線が１本引かれている。520もほぼ同じ形をした皿であるが、口縁端部は鈍く尖らされるだけで内面には沈線が引かれていない。521は直線的で長い体部を持った皿である。517～520と同じく器高が低く、円く仕上げられた口縁端部は内面に形骸化した凹線状の浅い沈線が１本引かれている。522～543は、筒状の体部と口縁部の境にタガ状の鍔が貼り付けられた摂津型の羽釜で、口縁部と鍔の形が個体ごとに少しずつ異なっている。522～526は口縁端部から約１cm離れた位置に水平にのびる鍔が付けられている。口縁端部は斜縁で頂部が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。鍔の上面は横ナデによって段が付き、端部が凹線状にくぼんでいる。527・528も口縁端部から約１cm下がった位置に水平または端部が外反する鍔が付けられている。口縁端部は平坦で頂部が凹線状にくぼみ、内面も強い横ナデによってくぼんでいる。529～541は鍔端部が外反し、２度の強い横ナデによって鍔の下面に段が生じている。口縁端部は平坦なものや頂部が凹線状にくぼむものが多いが、530・539のように内側に傾斜するものがある。また内面に加えられる強い横ナデによって端部が内面に拡張されたようになる個体も多い。536・537は口縁端部の内方への拡張が認められない。541～543は鍔端部が円く仕上げられている。544～566はいずれも土師器の甕である。544は球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に向かって大きく開く直線的で長い口縁部を持った個体で、円く仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。545はわずかな膨らみを持った体部と、外反する頸部から上方にのびる直線的な口縁部を持った個体で、断面が方形に仕上げられた口縁は端部が横ナデによってわずかにくぼんでいる。546は膨らみを持った体部に、「く」の字に屈曲する頸部と、直線的で上方への開きが小さい口頸部を持ち、口縁端部は円く仕上げられている。547～562は直立、またはわずかに内傾する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方に大きく開く直線的な口縁部を持った甕である。口縁端部は断面が方形のものや、上方に拡張して平坦面を作り出すもの、平坦面に横ナデを加え凹線状にくぼませたものなどいくつかのタイプに分類できるが、最も数が多いのは上方に拡張した口縁端部に横ナデを加え凹線状にくぼませた個体である。559・560は上下に拡張した口縁端部を横ナデによって凹線状にくぼませている。561・562は断面方形の口縁端部を横ナデで浅い凹線状にくぼませている。563・564は直線的で上方への開きが比較的小さい口縁の端部を円く仕上げたり、鈍く尖らせた個体である。565・566はゆるやかに膨らんだ体部に、「く」の字に屈曲する頸部と直線的で短い口縁部を持った、南河内産の甕と考えられる個体である。口縁端部は円または鈍く尖らされている。567・568はゆるやかに内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的で長い口縁部を持った鍋である。上方に拡張され



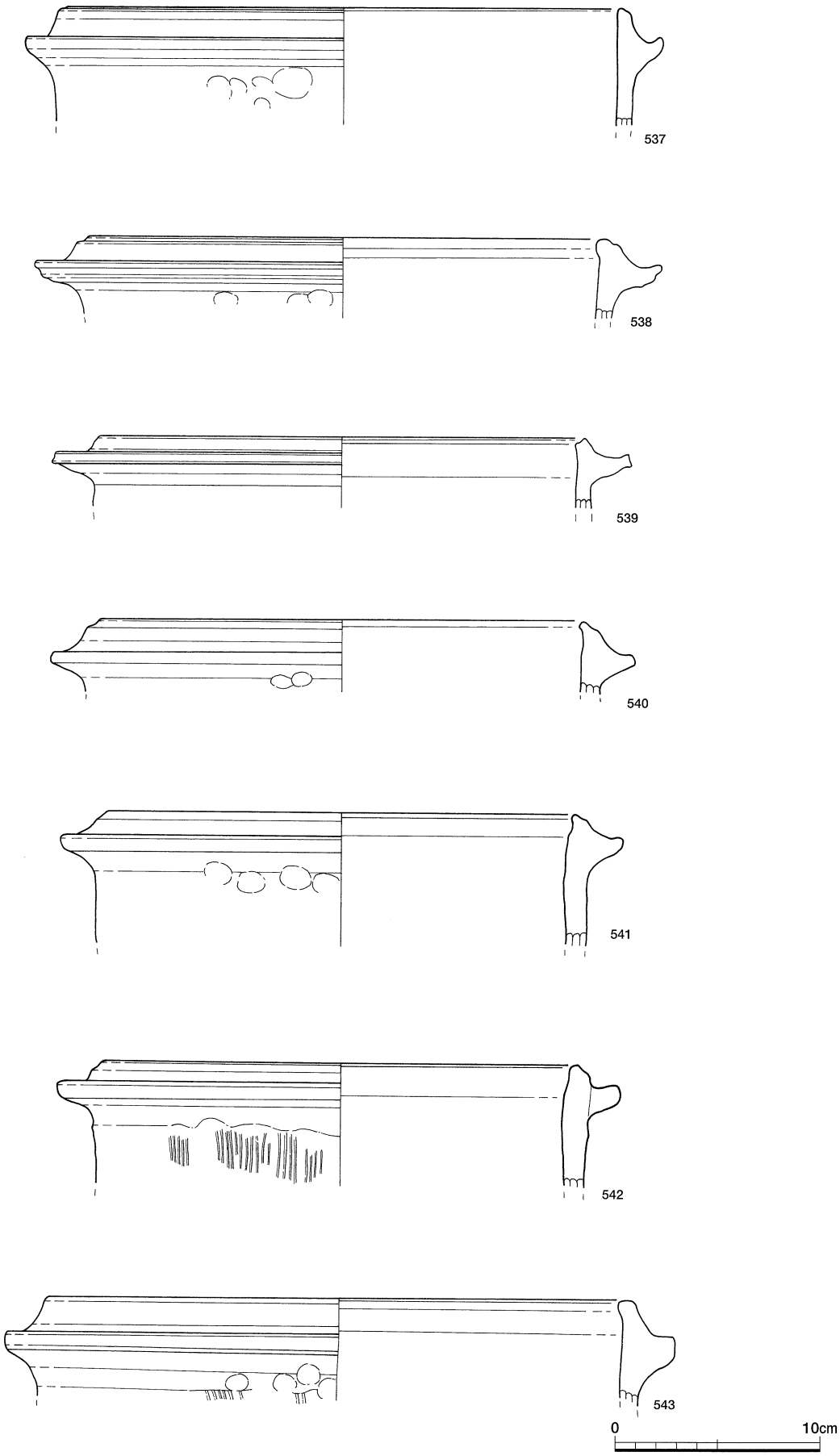
第73図　第一包含層出土遺物実測図（３）



第74図　第一包含層出土遺物実測図（４）

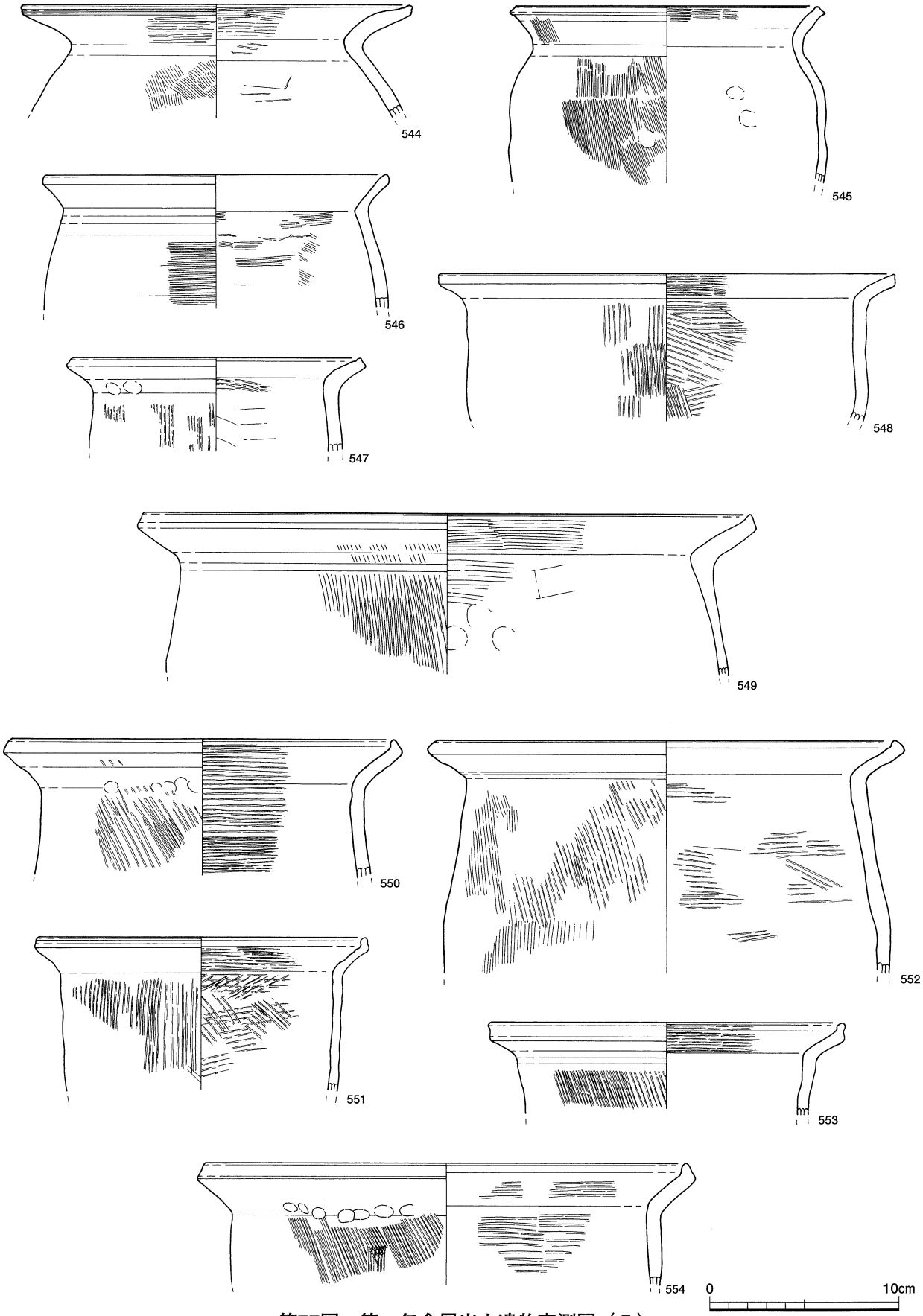


第75図　第一包含層出土遺物実測図（５）

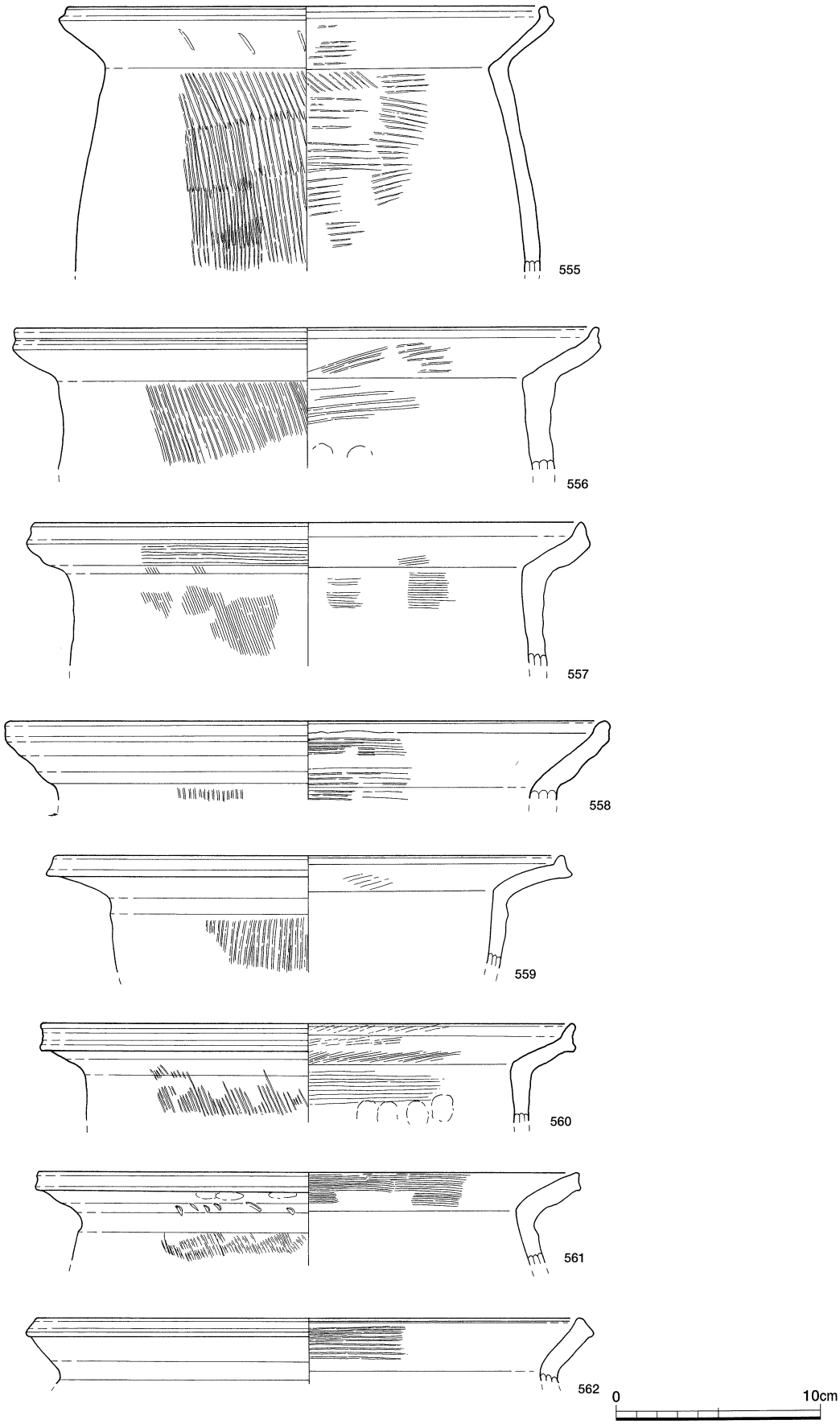


第76図　第一包含層出土遺物実測図（６）

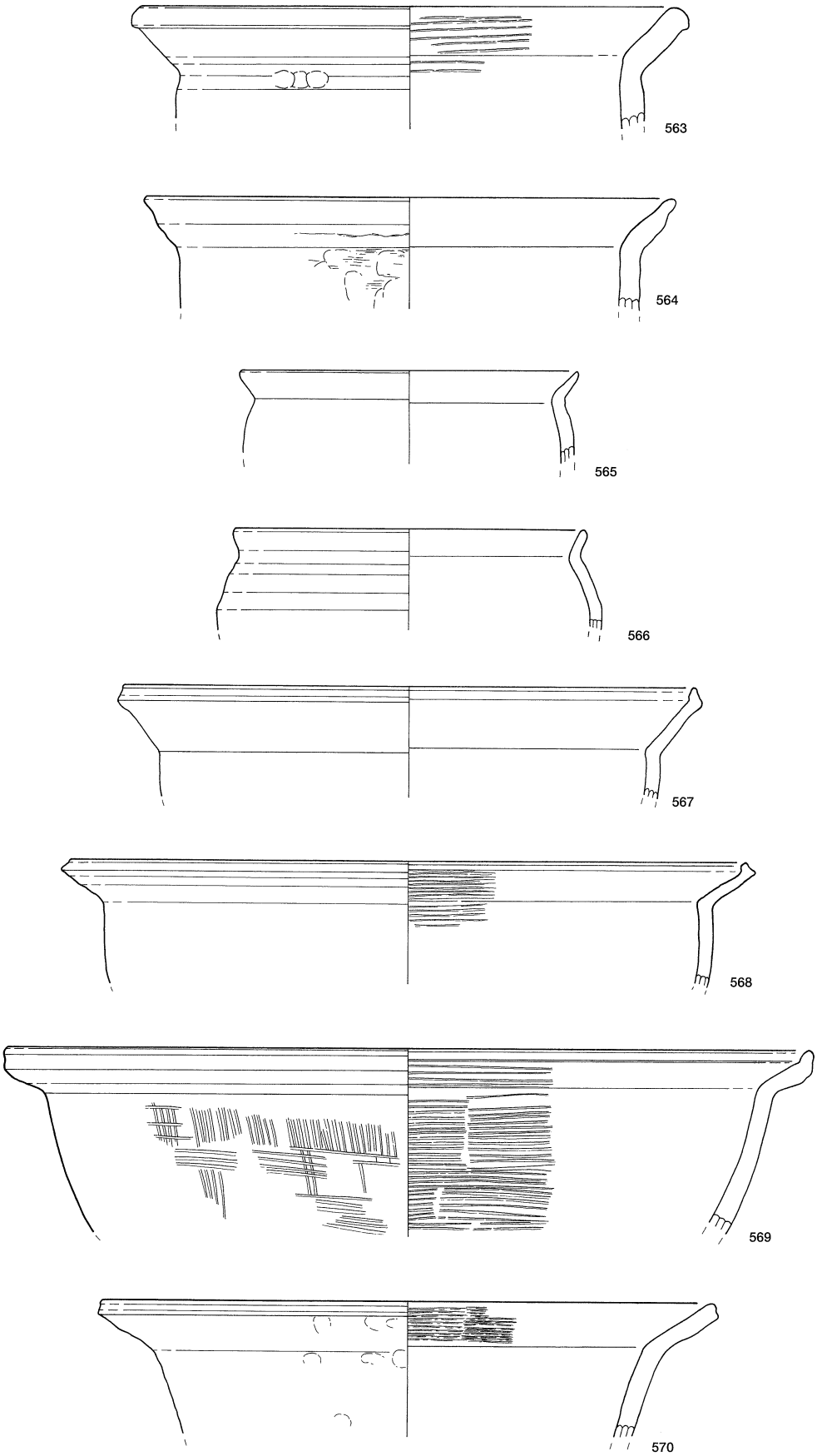
た口縁端部の狭い平坦面は、甕同様、横ナデによって凹線状にくぼんでいる。569も「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる口縁部を持った鍋である。口縁端部は上方に拡張され横ナデが加えられている。ゆるやかに内彎する体部は567・568より上方への開きが大きく、口縁部の長さは短い。570は直線的で上方への開きが小さい体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的で長い口縁部を持った鍋で、円く仕上げられた口縁端部には凹線状の沈線が引かれている。571は内彎する体部が、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する鉢である。口縁端部外面には横ナデ調整が加えられている。572は土竈のドーム状の焚き口部に付けられた庇から焚き口部分にかけての破片である。庇は厚さ約1cmで7cm程前方に突き出ている。573は土竈の底部である。厚さ約1cm余りの器壁は底部で2cmある。574・575はA類の黒色土器椀である。574はゆるやかに内彎する体部がそのまま鈍く尖らされた口縁端部に移行している。体部は上方への開きが大きく外面には横ナデ調整が加えられている。575は同じく内彎する上方への開きの大きい体部と、わずかに外反する口縁部を持っている。573同様、口縁端部は鈍く尖らされている。576～586、589～591はA類、587・588はB類の黒色土器椀の底部である。576～584、586～589は高台がわずかに下方に開き、接地部が円く仕上げられている。585・590・591には接地部が鈍く尖らされた直立する低い高台が付けられている。592はゆるやかに内彎する体部と、「く」の字に屈曲する短い口頸部を持った鉢である。口縁は端部が上方に拡張され凹線状の沈線が1本引かれている。593・594はいずれも須恵器の蓋杯である。593は上方への開きが大きく扁平な体部を持った杯身である。口縁は立ち上がりが内屈し短く、端部は円く仕上げられている。受け部は比較的長く端部は円い。594も同じような形態の杯と考えられるが、593より口縁部の立ち上がりが短く直立している。595～599は直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が鈍く尖らされた口縁部を持った須恵器の杯である。体部の立ち上がりは595のように「く」の字に屈曲するものや、598・609のように円く仕上げられたもの、611・612のように厚い盤状の底部との境に弱い段が設けられたものなどがある。600・613～632はそれぞれ須恵器の高台付の杯とその底部である。600は598と同じ形の杯の底部に断面方形の低い高台が付けられている。底部に付けられた高台はほぼ直立するものと、外下方に向かってわずかに開くものがある。高台の位置は613のように体部との境に沿って付けられた個体と、627のように体部との境からやや離れた位置に貼り付けられているものがある。多くの個体は高台の接地部の中央部が凹線状にくぼんでいる。633はゆるやかに内彎する体部と、下方にのびる低い高台部分を持った皿、または蓋と考えられる個体で、高台の接地部はわずかに内方に拡張され中央が凹線状にくぼんでいる。601～604は杯蓋、605～608は摘みである。杯蓋には601・602のように扁平な天井部と下方へ強く屈曲する縁部を持った個体と、603・604のような円い天井部を持ったものがある。603は内彎する天井部が円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行している。摘みは扁平で中央部がわずかに突出する擬宝珠摘みが多く出土している。634～641、647～650は、ゆるやかに外反しながら上方にのびる口頸部を持った須恵器の長頸壺である。634～637は、大きく外反する口縁部を上方に折り曲げて作り出した狭い平坦面に横ナデ調整を加え凹線状にくぼませている。638～640は口頸部の上方への開きが小さく、口縁端部を外方に拡張して頂部を平坦に仕上げた個体である。641の壺は筒状の頸部からゆるやかに外反しながらそのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行している。647～650は頸部から体部にかけての破片で、体部は上半部が球形に膨らんでいる。642～644はゆるやかに外反する口縁の端部を平坦またはわずかにくぼませている。平瓶の口縁部であろうか。645・646は球形の体部と、直立する短い口縁部を持った須恵器の短頸壺である。652・653は同じ短頸壺の頸部から体部上半にかけてと考えられる個体である。653は球



第77図　第一包含層出土遺物実測図（７）

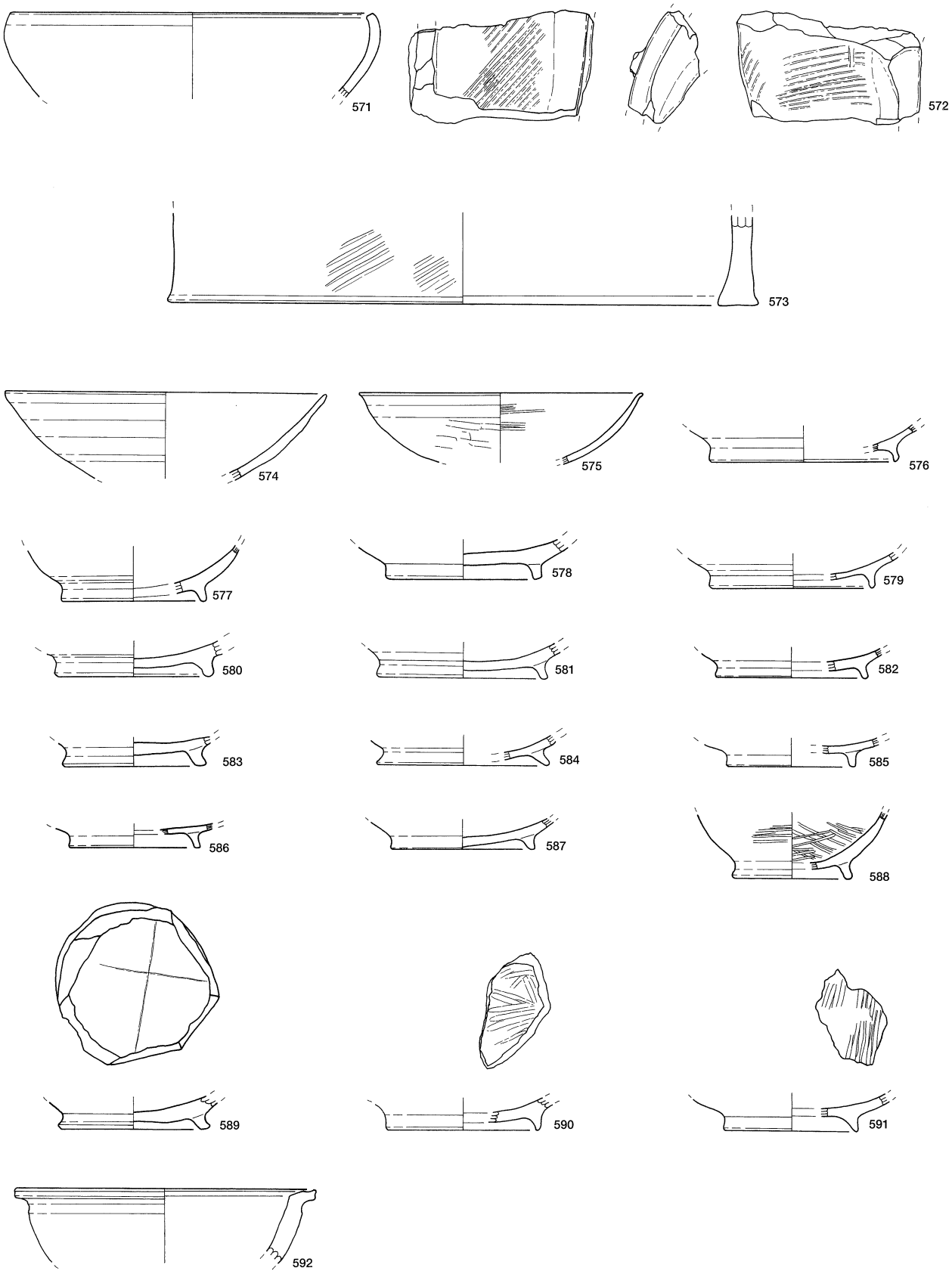


第78図　第一包含層出土遺物実測図（８）

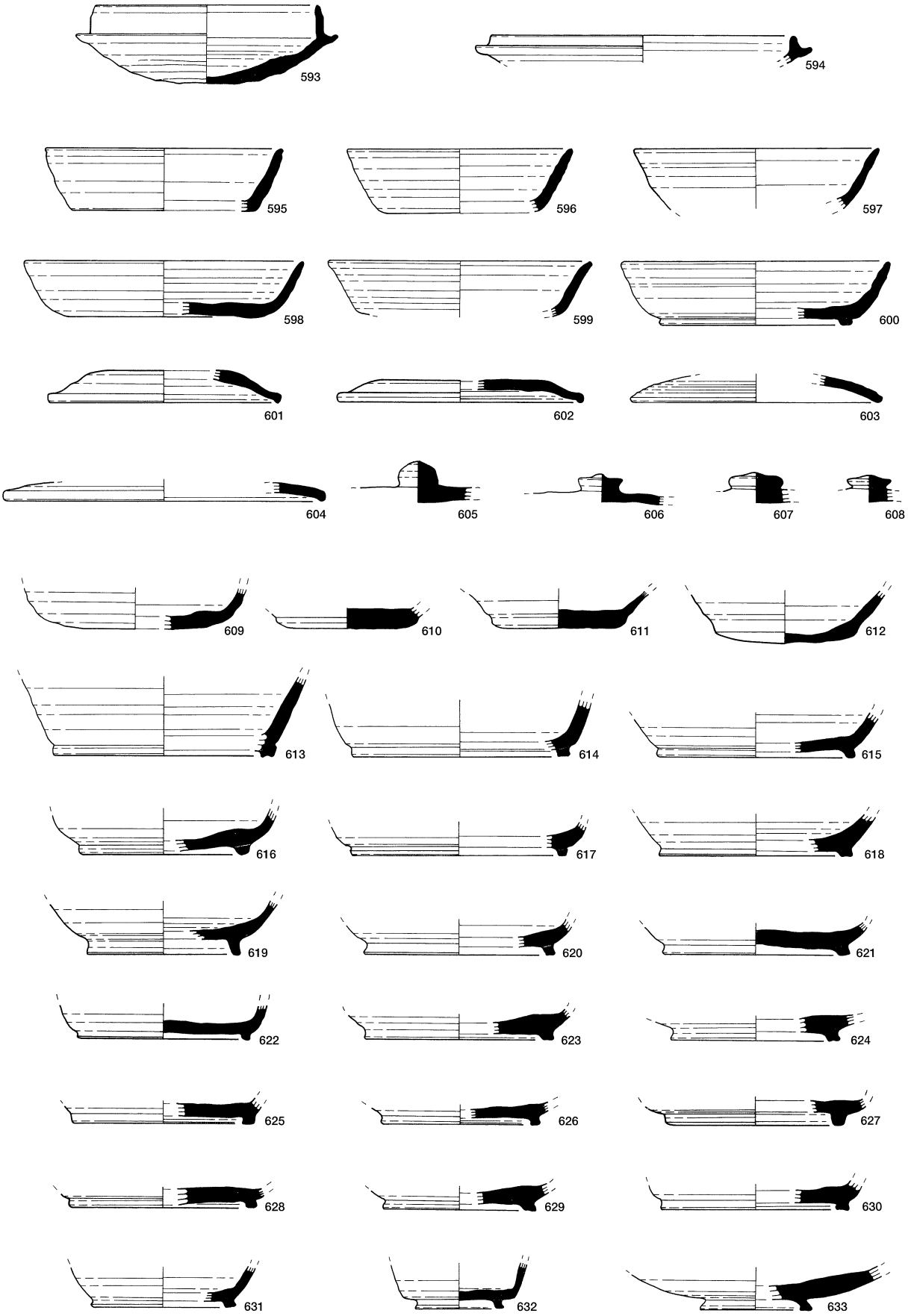


第79図　第一包含層出土遺物実測図（９）

0　10cm

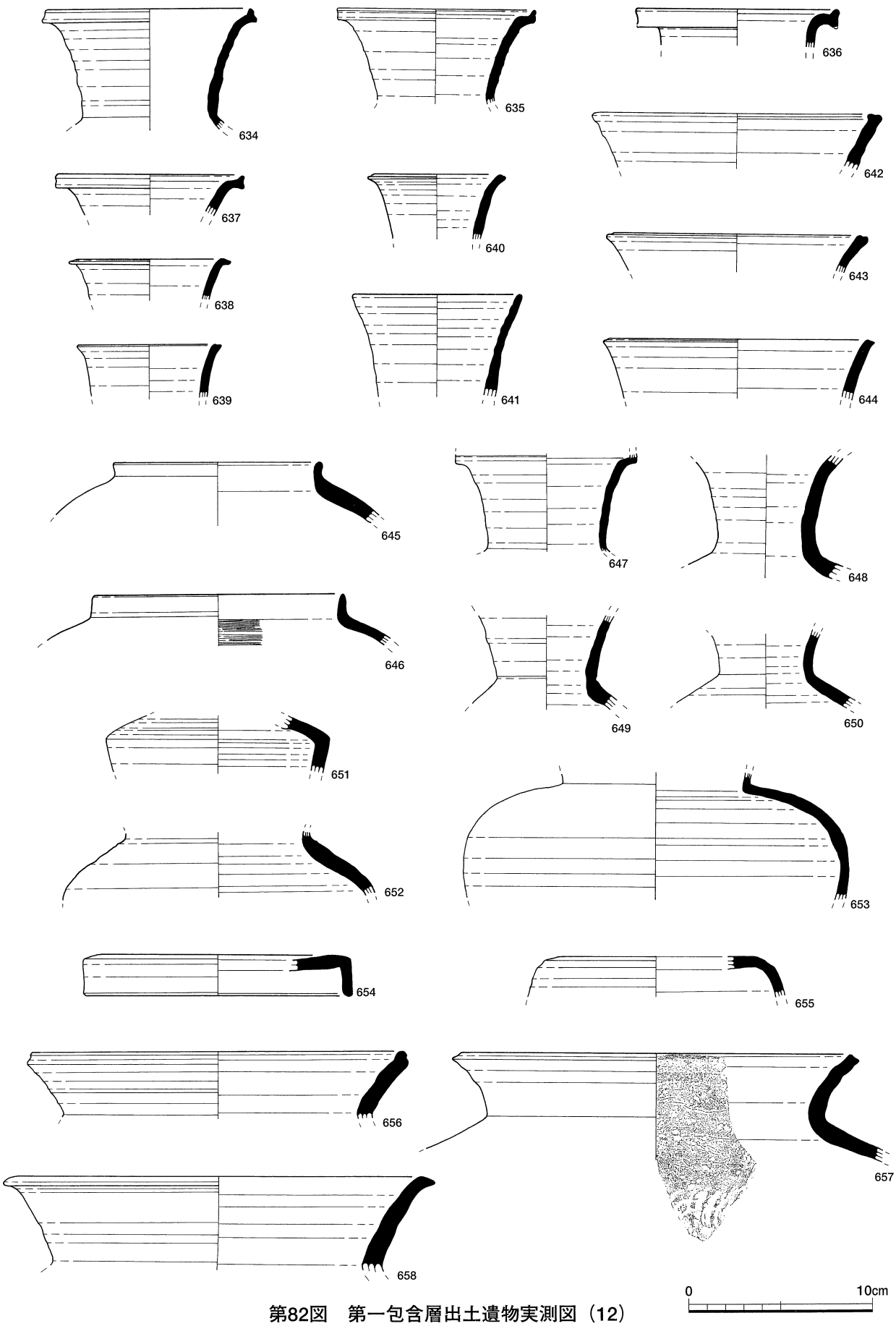


第80図　第一包含層出土遺物実測図（10）

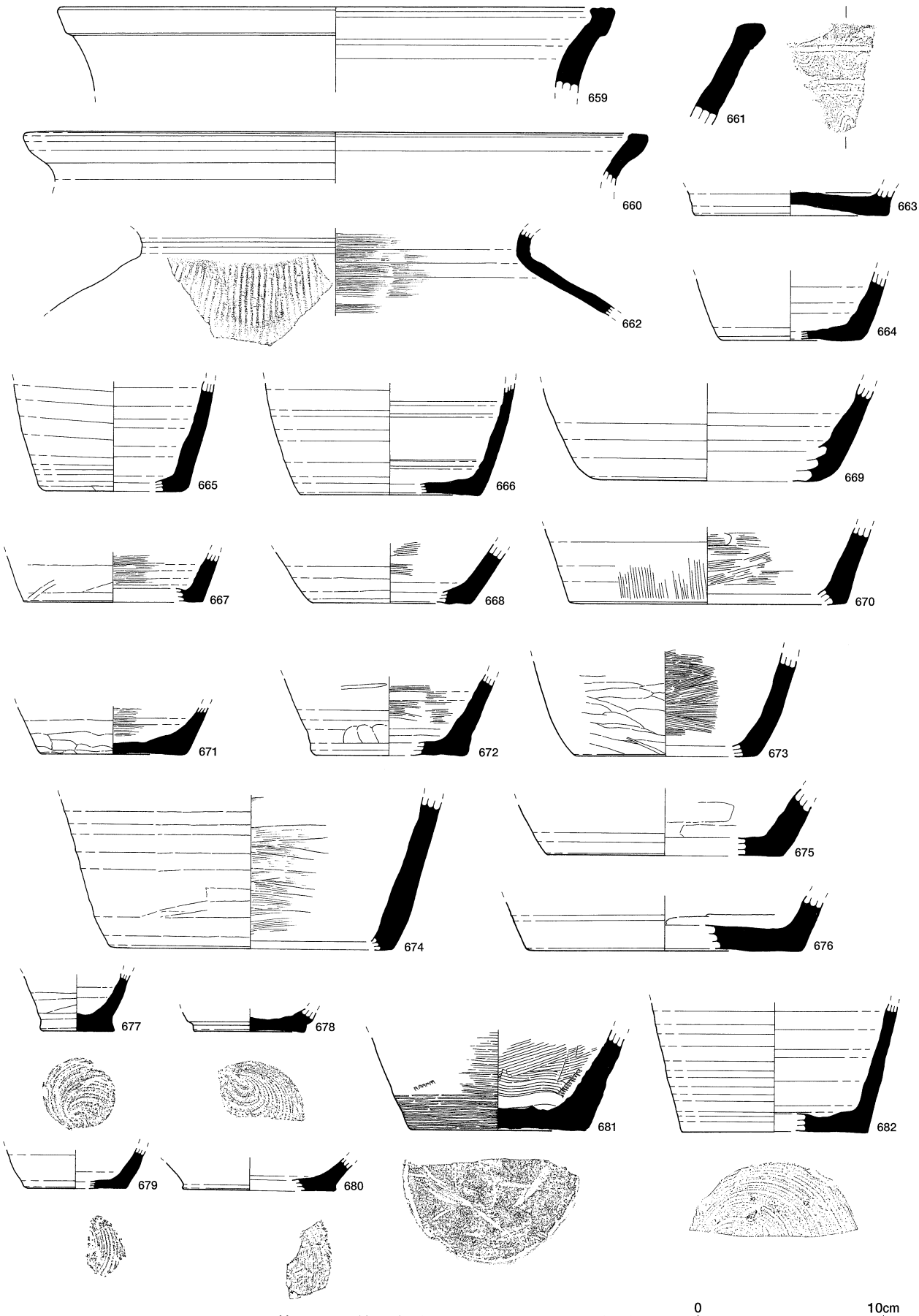


第81図　第一包含層出土遺物実測図（11）

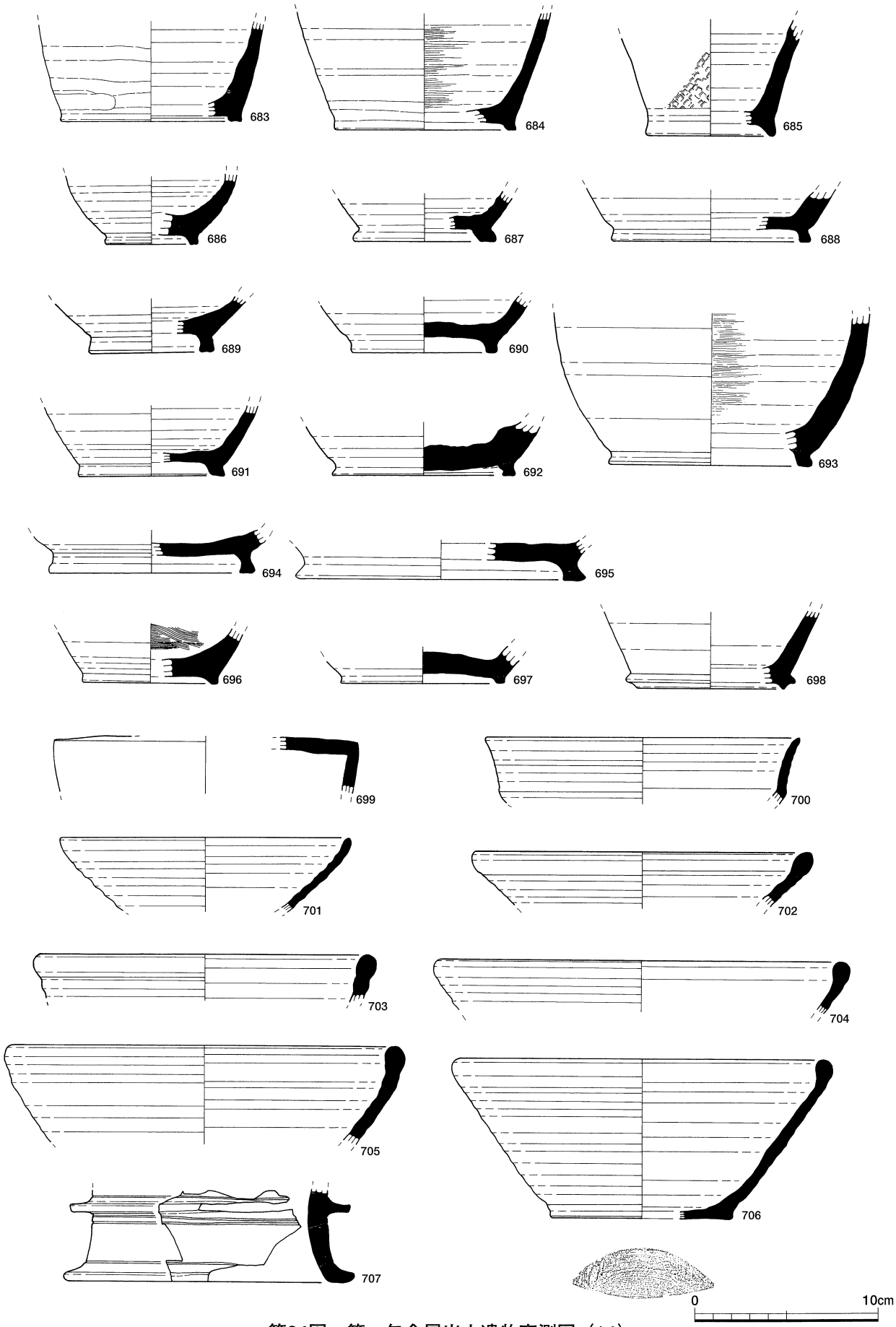
0　10cm



第82図　第一包含層出土遺物実測図（12）

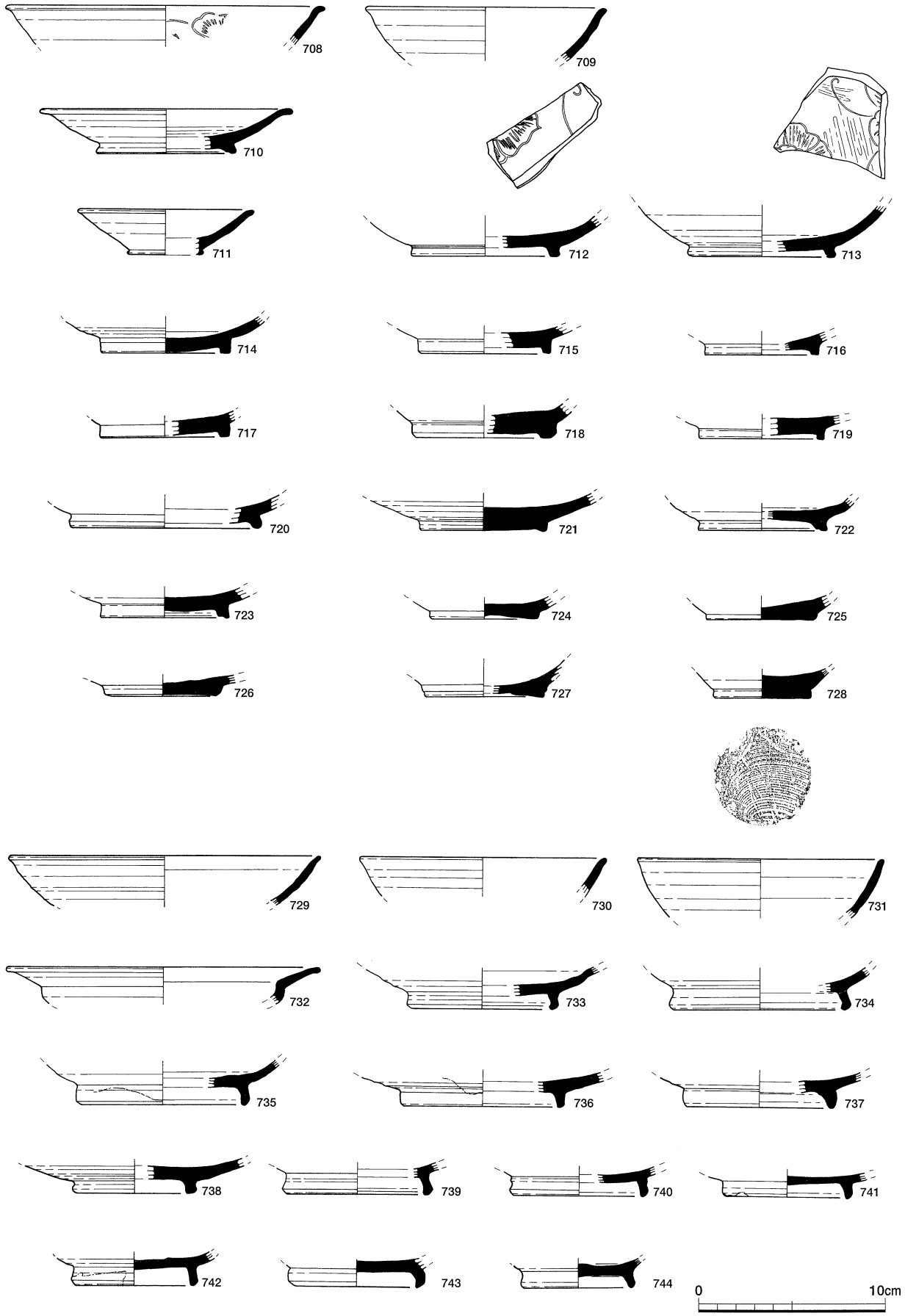


第83図　第一包含層出土遺物実測図（13）



第84図　第一包含層出土遺物実測図（14）

形の体部と筒状の頸部との境が「く」の字に強く屈曲している。651は体部上半が「く」の字に内屈する壺である。654・655は壺の蓋である。654は平坦な天井部を下方に向けて直角に折り曲げ、円く仕上げた口縁端部を作り出している。655は平坦な天井と口縁部の屈曲部が円味を持ち幅広の沈線が1本引かれている。656～661は球形の体部と、大きく外反する頸部から上方にのびる口縁部を持った大型の壺または甕で、口縁部の形は各個体ごとにまちまちである。656は直線的な口縁の端部をわずかに上方に拡張してできた狭い平坦面の中程が、横ナデによって凹線状にくぼんでいる。657も断面方形の口縁端部が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。658は口縁端部が外方に拡張され頂部が平坦に仕上げられている。659は、口縁部外面に幅約1cm程度の狭い帯状の段を設け、端部の内面を拡張して頂部を平坦に仕上げている。660は口縁部の外面を肥厚させ、頂部を平坦に仕上げている。661も口縁部外面を肥厚させ頂部を平坦に仕上げ、頸部外面には並行する沈線を間隔をあけて引き、その間を櫛描の波状文で埋めている。662は内外面にタタキ目調整が施された甕の体部で、外面には平行タタキがそのまま残されているが、内面は板状工具を使用した丁寧なナデ調整によってタタキ痕が消されている。663～676は、直線的で上方への開きが小さい体部を持った壺の底部である。663は上げ底だが、他はすべて平底である。外面には回転力を使用した横ナデ調整が加えられたものが多いが、一部には670のようなハケ目調整や671・673のようなヘラケズリが施された個体もある。内面の調整は比較的粗く、ハケや板状工具による不規則な方向のナデ調整が多く残されている。677～682は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された壺である。677は回転力を使用した不規則な横ナデ調整が加えられた細長い体部を持つ壺で、底部と体部の境が外方に突出している。678は体部との境に弱い段が設けられている。679は体部がわずかに膨らんでいる。680は体部が直線的で上方への開きが大きく、底部との境が外方に突出している。681・682はそれぞれ直線的で上方への開きが小さい体部を持った個体で、681は外面にタタキを加え内面には板状工具による不規則なナデ調整が行われているのに対して、682は内外面とも回転力を使用した丁寧な横ナデ調整が行われている。683～698は高台付の壺である。683・684とも体部は直線的で上方への開きが小さく、底部には断面方形の低い高台が付けられている。685の体部は683と同じように直線的で上方への開きが小さいが、683などと比較すると底部の径が体部に対して2分の1程度の大きさしかないと考えられる。高台は端部が円く仕上げられ、高さも若干高い。686～693は、体部の膨らみが比較的大きく、なかには球形に近いものが含まれている。底部に付けられた高台の形は様々で、直立する断面方形に近い低い高台のものや、内外方に拡張された接地部の中央が凹線状にくぼむもの、外下方に開くものなどがある。694・695も高台付の壺の底部と考えられる個体で、底部には接地部が内外方に拡張された外下方に開く高台が付けられている。696・697の底部には、断面逆台形状の低い高台が付けられている。698は体部が直線的で、底部には内端面に接地部を持った高台が付けられている。699は肩部が下方に向かって「く」の字に折り曲げられた平瓶の体部と考えられる個体である。700は、体部との境で上方に折り曲げられた口縁が、わずかに外反しながらにぶく尖らされた口縁端部に移行する土器で、高台付の杯の可能性がある個体である。701～706は篠系の椀または鉢である。701はゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った椀で、口縁から体部にかけては内外面とも横ナデ調整が多段に加えられている。702は直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った鉢である。701と比較して器壁が厚く口縁端部が肥厚している。703～706も肥厚する口縁端部が円く仕上げられた鉢である。上方に大きく開く体部は直線的、またはゆるやかに内彎している。706は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用されている。707は外下方に向かって「ハ」

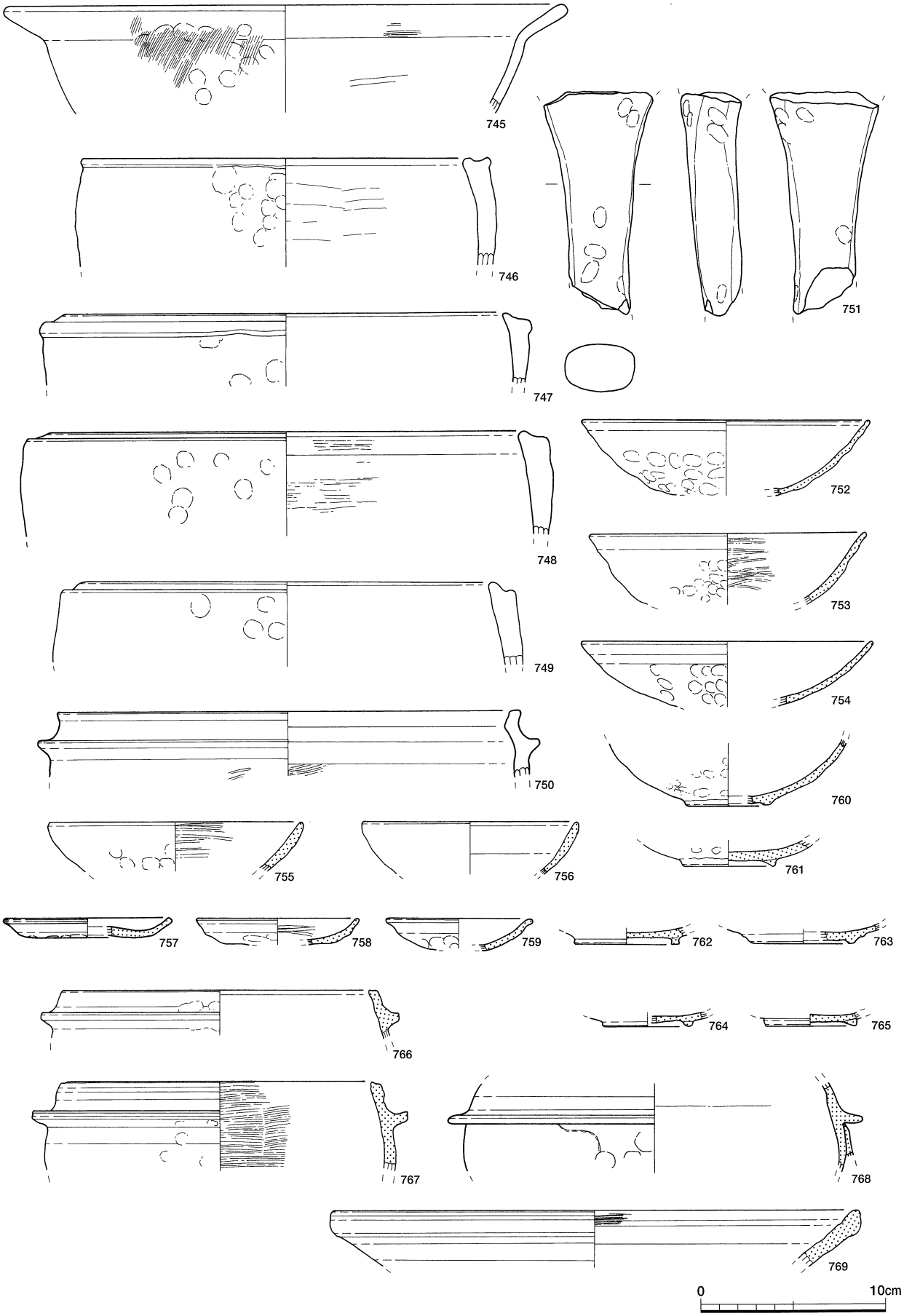


第85図　第一包含層出土遺物実測図（15）

の字に開く脚をもつ圏足硯である。脚端部と体部にはそれぞれ鍔がタガ状に廻され、その間の帯状の脚部には透かしが付けられている。708～728は緑釉、729～744は灰釉である。708は内面に陰刻による花紋が描かれた白色の精良な胎土の硬質焼成の椀である。口縁は端部近くで短く外反している。712・713も白色の精良な胎土を持ち、内面見込部に陰刻による花紋が描かれた椀と考えられる個体で、底部には外下方への開きが小さく低い貼付高台がつけられている。いずれも尾張産と考えられる製品である。709はゆるやかに内彎しながら上方に開く体部をもつ緑釉椀である。胎土は灰色で粒子がやや粗いが焼成は良い。710は粒子が細かい灰色の胎土をした硬質焼成の皿である。上方への開きの大きい体部と外反する口縁部を持ち、底部には下方に大きく開く低い貼付高台が付けられている。711は直線的で上方への開きが大きい体部と、平底の底部を持つと考えられる皿である。714～728は椀または皿の底部である。714～717、719・720・723はやや黄色味がかった白色の胎土を持った焼成が軟質の土器で、底部には削り出しにより低い高台が付けられている。716を除き高台内面まで施釉されている。718・721は灰色のやや粗い胎土を持った硬質の焼成の個体で、底部は低い削り出し高台で薄い釉がかけられている。722は灰色で精良な胎土を持った硬質の土器で、底部は回転糸切りの後、下方に開く低い高台が貼り付けられ薄く釉がかけられている。724～726は体部との境に削り出しによる低い段が設けられた平底の底部を持った皿である。胎土は黄色味をおびた白色で焼成は軟質である。727も体部との境に段が設けられた焼成が軟質の皿で、底部は蛇ノ目高台に仕上げられている。728は回転糸切り痕が残された平底の底部を持った皿で、体部と底部の境には削り出しにより段が設けられている。胎土は灰色でやや粒子が粗いが焼成は良好である。内面には薄く釉がかけられている。729～744は灰釉の椀または皿と考えられる個体である。729は上方への開きが大きい体部を持った個体で、口径に対して器高が低いことから皿の可能性がある。内面は施釉されているが外面は部分的に露胎のまま残されている。何れも釉の厚さは薄い。730・731はゆるやかに内彎する体部を持った椀である。730は内外面とも施釉されているが、731は内面に釉が施されているだけで外面は全面露胎のまま残されている。732は内彎する体部と、直線的で上方へ大きく開く口縁部との境が「く」の字に屈曲する段皿である。内面は比較的厚い釉がかけられているが、外面は露胎のまま残されている。733も体部に弱い屈曲部を持った段皿と考えられる個体で、内面見込部には重ね焼きの痕跡が残されている。高台は三日月形高台で露胎のまま残されている。734～744は椀または皿の高台部分である。734・737・739・743・744の底部は内外面とも露胎のまま残されている。739・744は見込部に重ね焼きの痕が残され、744はさらに漆膜が付着している。743は高台の周囲を内側に向かって打ち欠き円盤状に加工している。735・736・738はいずれも内面見込部が露胎のまま残されているが、高台外面の施釉方法はそれぞれ異なっている。735の外面は高台の途中まで施釉されている。736は見込部に重ね焼きの痕跡が残され、外面は釉が高台部分まで垂れ下がっている。738の外面は高台との境付近まで薄く施釉されている。740・741は内面見込部に薄く釉が塗られている。740の見込部は部分的に露胎のまま残され、外面は高台が露胎である。741は見込部に重ね焼きの痕跡が残され、外面は高台畳付部分まで釉がかけられている。742は内面見込部に輪状の重ね焼きの痕が残され、外面は高台の途中まで施釉されている。

中世（第86～90図）

745はゆるやかに内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持った土師器の鍋である。口縁端部は円く仕上げられ、外面にはハケ目調整と指オサエが残されている。



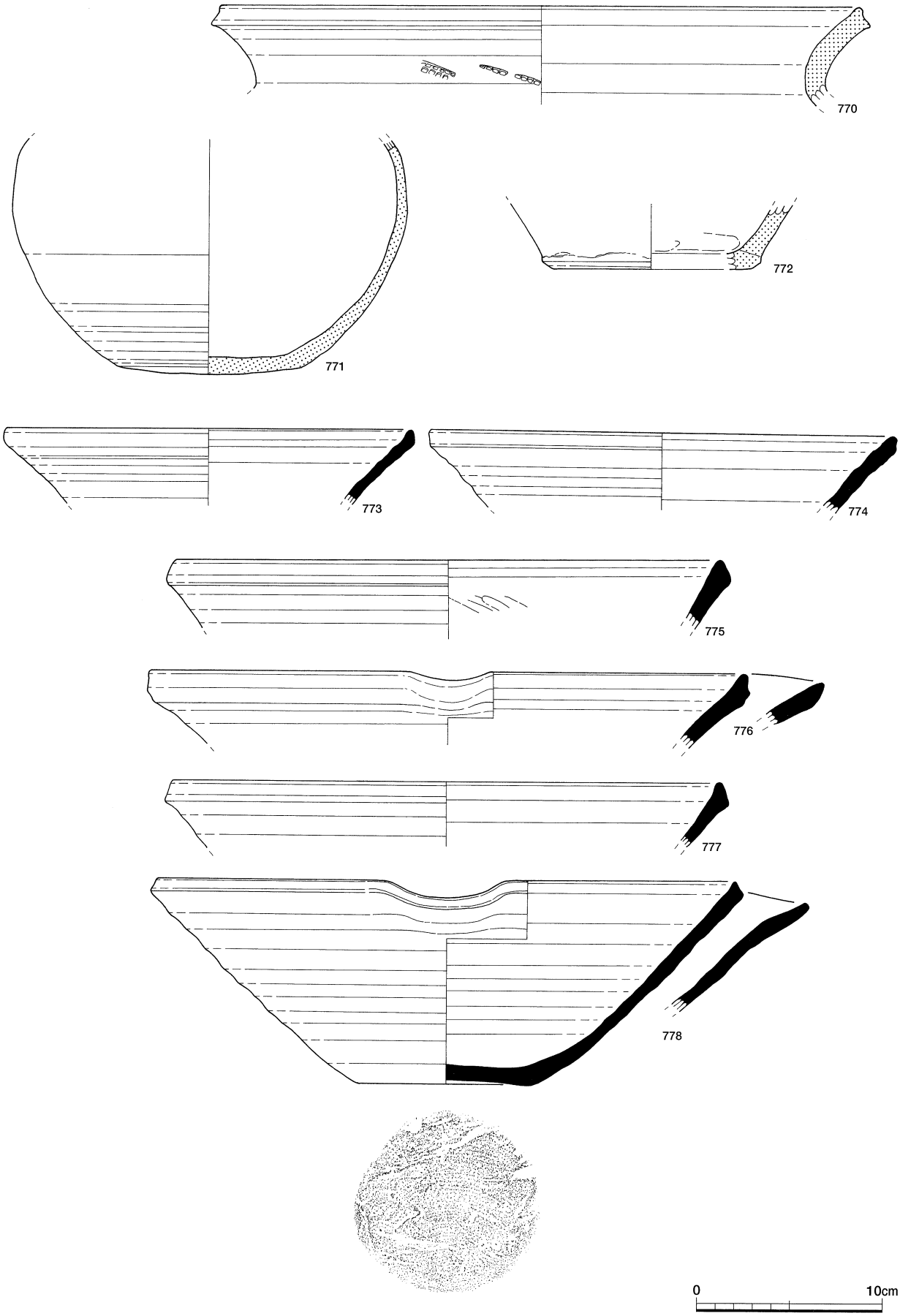
第86図　第一包含層出土遺物実測図（16）

746～749は直立またはわずかに内傾する体部を持った土師器の羽釜である。肥厚する口縁は端部が円く仕上げられている。746・747は口縁端部直下に形骸化した隆帯状の鍔が廻されているが、748・749は頂部が凹線状にくぼむだけで鍔は消滅している。750は直立する体部と「く」の字に内屈する口縁部の境に水平の短い鍔が付けられた播磨型の羽釜である。口縁端部は平坦に仕上げられ、体部外面には平行タタキが加えられている。752～765は瓦器の椀と小皿である。752～754は内彎する上方への開きの大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った和泉型の瓦器椀である。外面は口縁端部直下に一段または二段の横ナデが加えられ体部には指オサエの痕が残されている。内面全体は平滑に仕上げられ、753のようにヘラミガキの痕跡が残された個体がある。760～765は、断面方形または逆三角形の低い高台が付けられた和泉型瓦器椀の底部である。755・756は、内彎する体部の器壁が厚く、端部が円く仕上げられた口縁部は外面に横ナデ調整が加えられない非和泉型と考えられる瓦器椀である。766～768は瓦質の脚付羽釜である。766・767は端部が平坦に仕上げられた内傾する口縁部と球形の体部の境に、断面方形の低い鍔が廻されている。768は口縁端部を欠くが、体部との境には端部が円く仕上げられた水平方向にのびる比較的幅の広い鍔が廻されている。769は直線的で上方への開きが大きい体部と、上方に拡張され狭い平坦面が作り出された口縁端部を持った瓦質の捏鉢である。770は大きく外反する短い口縁部を持った瓦質の甕である。口縁端部は断面方形に仕上げられ、頂部は凹線状にくぼんでいる。外面は頸部まで格子目のタタキが加えられている。771は球形の体部を持った壺、または甕と思われる個体である。焼成不良で内面は酸化している。外面は底部近くに回転ヘラケズリが加えられている。772は壺の底部であろうか。平底の底部から上方へ開きの大きい直線的な体部が外上方にのびている。773～796は何れも東播系の捏鉢である。773～776、778は直線的で上方への開きが大きい体部と、端部をわずかに上方へ拡張し幅の狭い平坦面が作り出された口縁を持っている。778は底部に回転糸切り痕が残されている。777は口縁端部を上下に拡張し狭い平坦面が作り出されている。口縁端部内面には横ナデが加えられ、浅い凹線状にくぼんでいる。779・780は直線的で上方への開きが大きい体部と、端部を上方に拡張し円く仕上げた口縁部を持っている。781は上方への開きが比較的小さい個体で、口縁部を肥厚させ端部は円く仕上げられている。782も同じような口縁の形態を持っている。783～787は口縁部を上下に拡張し平坦面を作り出したものである。円く仕上げられた口縁端部は内面に強い横ナデが加えられ凹線状にくぼんでいる。788も口縁端部が上下に拡張されているが、下方への拡張の度合いが強く下端部が垂下している。789・790は体部の上方への開きがやや小さく、円く仕上げられた口縁端部は大きく肥厚している。791は上方に拡張された口縁端部が鈍く尖らされている。792～796はいずれも平底の捏鉢の底部である。794～796は778同様、底部に回転糸切り痕が残されている。797～805は備前焼の擂鉢である。797～799は直線的またはわずかに内彎する体部と、平坦に仕上げられた口縁端部を持っている。798・799の体部は口縁部に向かって序々に肥厚している。内面には板状工具によりていねいな横ナデ調整が加えられ、擂目が間隔をあけて放射状に付けられている。800は外上方にのびる直線的な体部と、上下に拡張された帯状の口縁部の境に段が設けられている。中央がくぼむ口縁は端部が円く仕上げられ体部との境は外方につきだしている。801・802は外上方に向かって大きく開く直線的な体部と、「く」の字に内屈する口縁部を持ち、屈曲部には段が設けられている。幅広の帯状を呈する口縁には凹線状の沈線が3本ずつ引かれ屈曲部は下方に垂下している。803は口縁部と体部との境を大きく肥厚させて強い段を設け、内外面には帯状の凹線が引かれている。804と805は、それぞれ6本一単位と8本一単位の擂目が放射状に付けられた体部と底部の破片である。806はゆるやかに外反する筒状の頸部と、上下に大きく拡

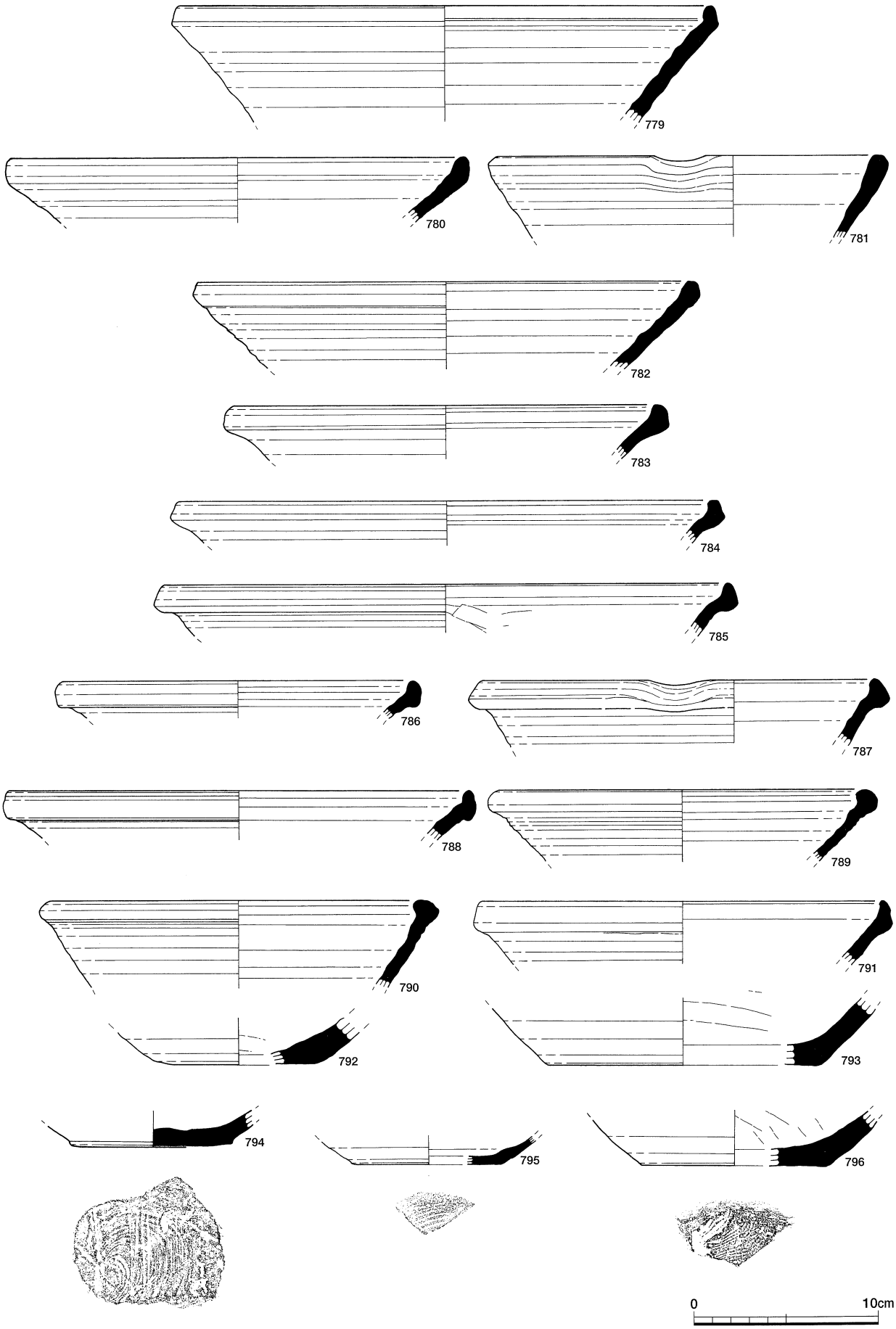
張された口縁部を持った常滑の壺である。強く外反する帯状の口縁は端部が平坦に仕上げられ、中央部が凹線状に大きくくぼんでいる。807も平行タタキ状の押印が加えられた常滑の甕の肩の破片である。808～810はいずれも備前焼の甕の底部である。808・809は体部内外面に板状工具によるナデ調整が残されている。811は内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持った瀬戸の灰釉皿で、底部は露胎で低い削り出し高台が付けられている。812・813・817・818は龍泉窯系の青磁鎬連弁文碗である。ゆるやかに内彎する体部には片切彫により連弁が描かれ、その上から厚く釉がかけられているが、高台畳付部分と外底面は露胎のまま残されている。814も内彎する体部を持った青磁碗である。口縁部外面には雷文、体部には退化した連弁文が描かれている。816は同安窯系の青磁碗で、内面見込部には櫛描文様が描かれている。819～821は青磁碗の高台部分である。819は比較的高い高台の畳付部分が円く仕上げられ、外面全体が施釉される青磁碗で、内面見込部には鳳凰か龍と思われる図柄がスタンプで押されている。820・821は断面方形の低い高台の畳付部分と外底面がそれぞれ露胎のまま残されている。815はゆるやかに外反しながら外上方に向かって大きく開く口縁部と、円く仕上げられた口縁端部を持った青磁の画花皿である。口縁部と体部の境は屈曲して稜を持ち厚くかけられた釉は発色が悪い。823～833は白磁である。823はゆるやかに内彎する体部と、小さい玉縁状口縁を持った碗である。図示できた部分は内外面とも全面に釉が施されている。824はゆるやかに外反する口縁端部が円く仕上げられた碗である。内彎する体部は上方への開きが大きい。825～827は直線的な体部と幅広い玉縁状に仕上げられた口縁端部を持った碗である。826・827は内面全体に釉が施されているが、外面は体部下半部が露胎のまま残されている。828～830は碗の高台部分である。828は内彎する体部に低い削り出し高台が付けられ、体部下半部から高台にかけては露胎のまま残されている。829・830はいずれも高い削り出し高台を持った碗であるが、畳付部分は829が台形、830は鈍く尖っている。

近世（第91図）

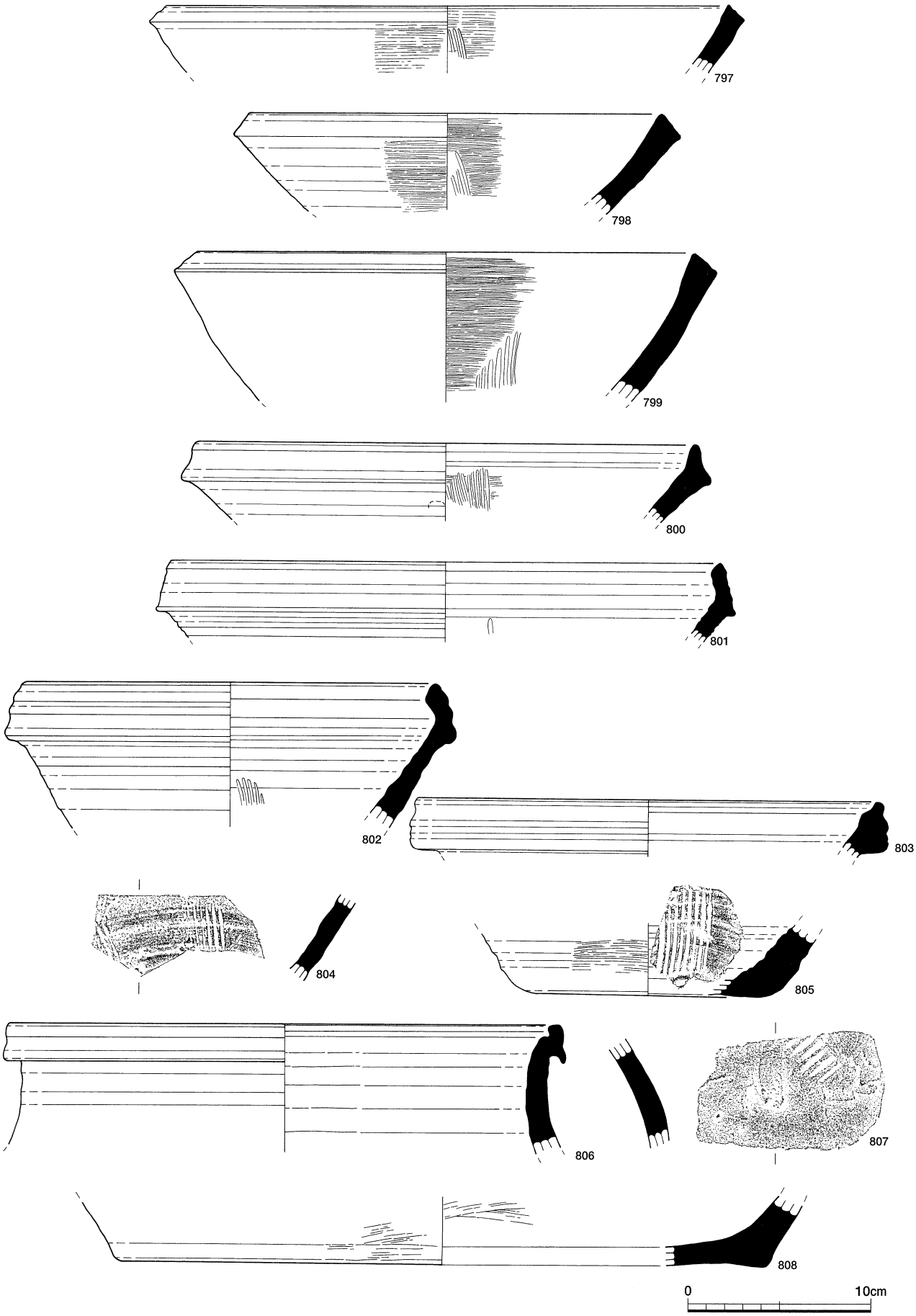
835は陶胎染付の碗である。体部外面には染付により絵付が施されているが発色が悪く絵柄の種類は不明である。高台畳付部分は露胎だが内底面は施釉されている。836は界線が描かれた内面見込部の中央にコンニャク印判による五弁花が付けられた伊万里の外青磁碗である。高台畳付部分の釉は掻き取られ露胎で赤く発色している。837も伊万里の外青磁碗である。内面見込部には2重の界線が描かれ中央にはおそらくコンニャク印判による五弁花が付けられていたと思われる。高台外底部には角福の文字が書き込まれている。838は直立する高い高台と、上方への開きが小さい体部を持った青磁碗である。高台は畳付部分が露胎のまま残されている。外底部には釉を掻き取った痕跡が残されている。839は内面に染付による条線が描かれた伊万里の染付皿である。841～847は陶器皿である。841の角張った厚い削り出し高台の外面は一部が畳付部分まで釉が垂れ、露胎部分は赤く発色している。842は体部との境の屈曲部からやや内側に低い削り出し高台が付けられている。全体に厚く施釉されているが、内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが加えられ、外底から畳付までは露胎のまま残されている。844～846は幅広で低い削り出し高台が付けられ、内面見込部には砂目積の痕を残す唐津の皿である。844・845は体部下半から高台部分にかけてが露胎のまま残されているが、846は外底部全面に釉がかけられている。847も唐津の皿だが、底部が碁筍底で内面見込部には胎土目の痕跡が残されている。848は堺・明石系と考えられる擂鉢である。口縁と体部との境は「く」の字に屈曲し、段が設けられている。帯状の口縁部には凹線状の太い沈線が2本引かれ、口縁端部は円く仕上げられている。849は口縁部が玉縁状に肥厚し、外面にハ



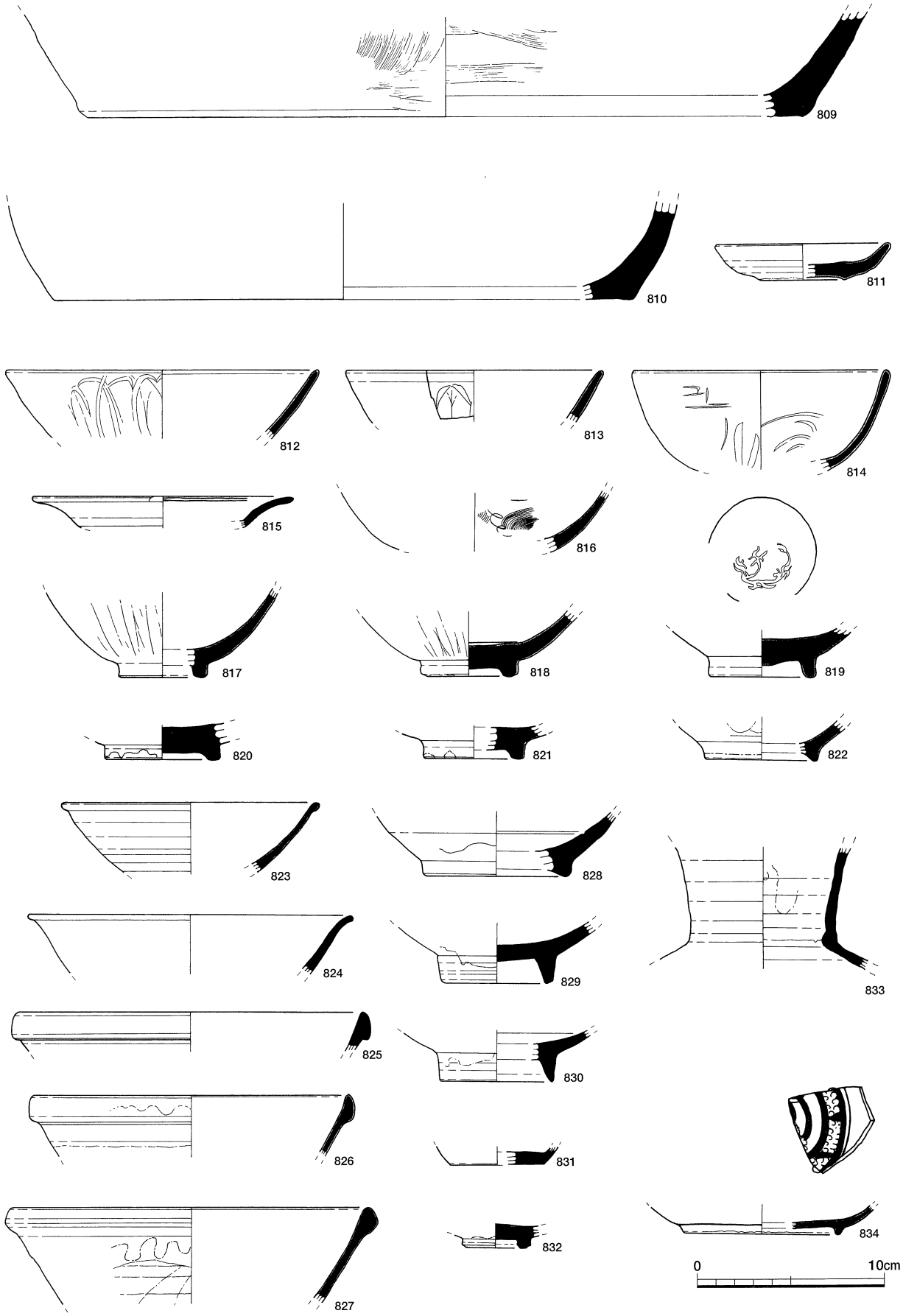
第87図　第一包含層出土遺物実測図（17）



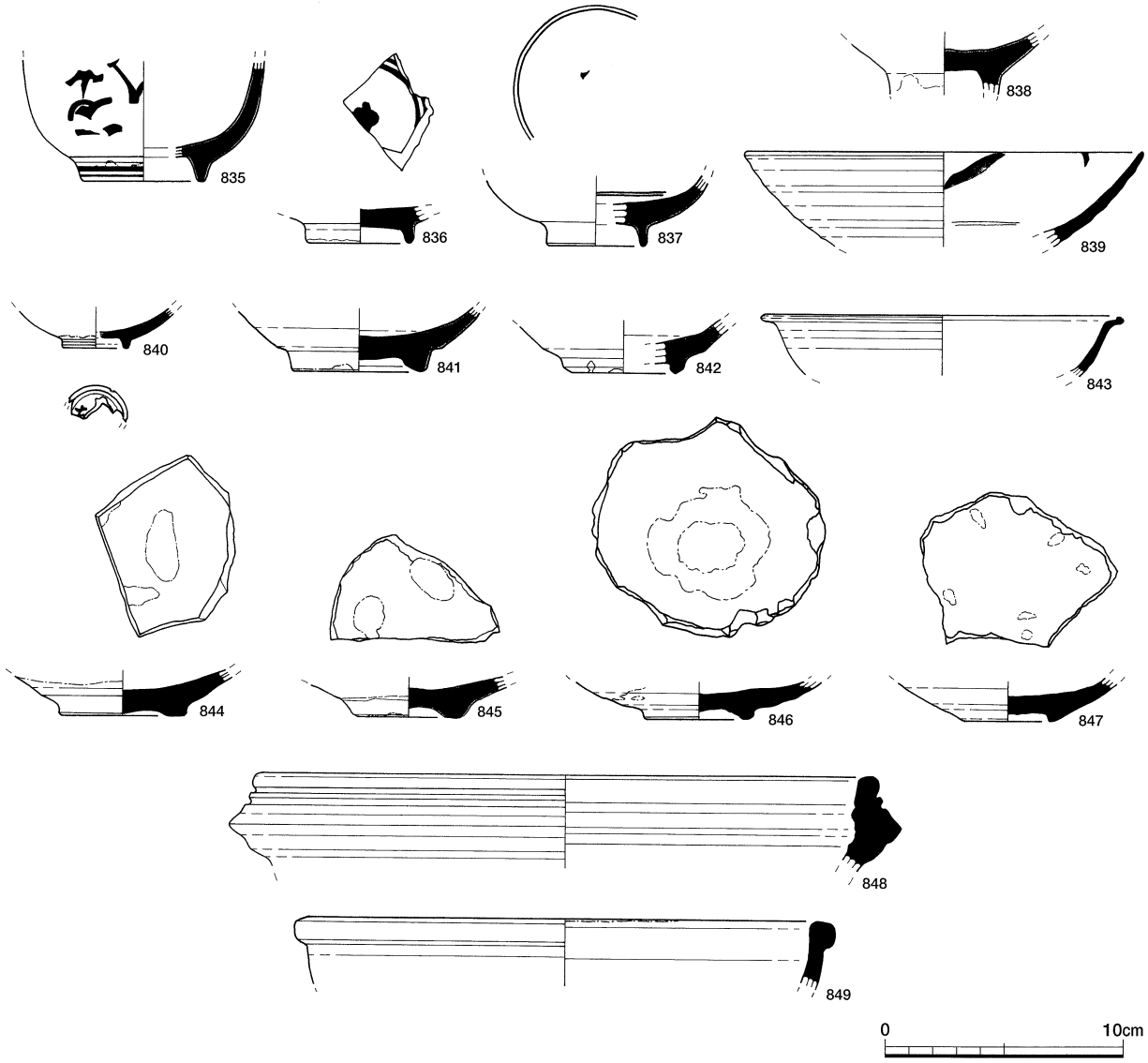
第88図　第一包含層出土遺物実測図（18）



第89図　第一包含層出土遺物実測図（19）



第90図　第一包含層出土遺物実測図（20）

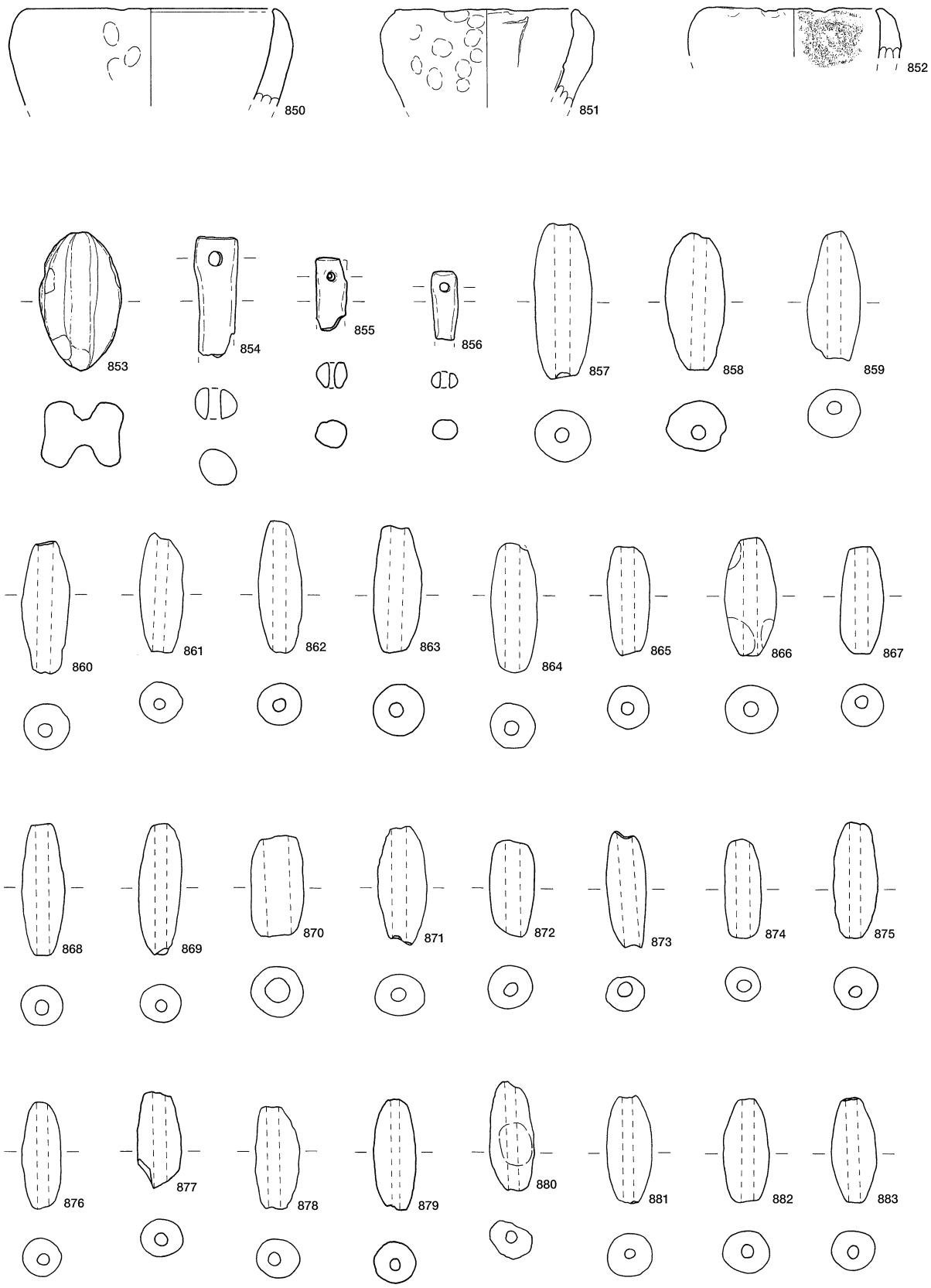


第91図　第一包含層出土遺物実測図（21）

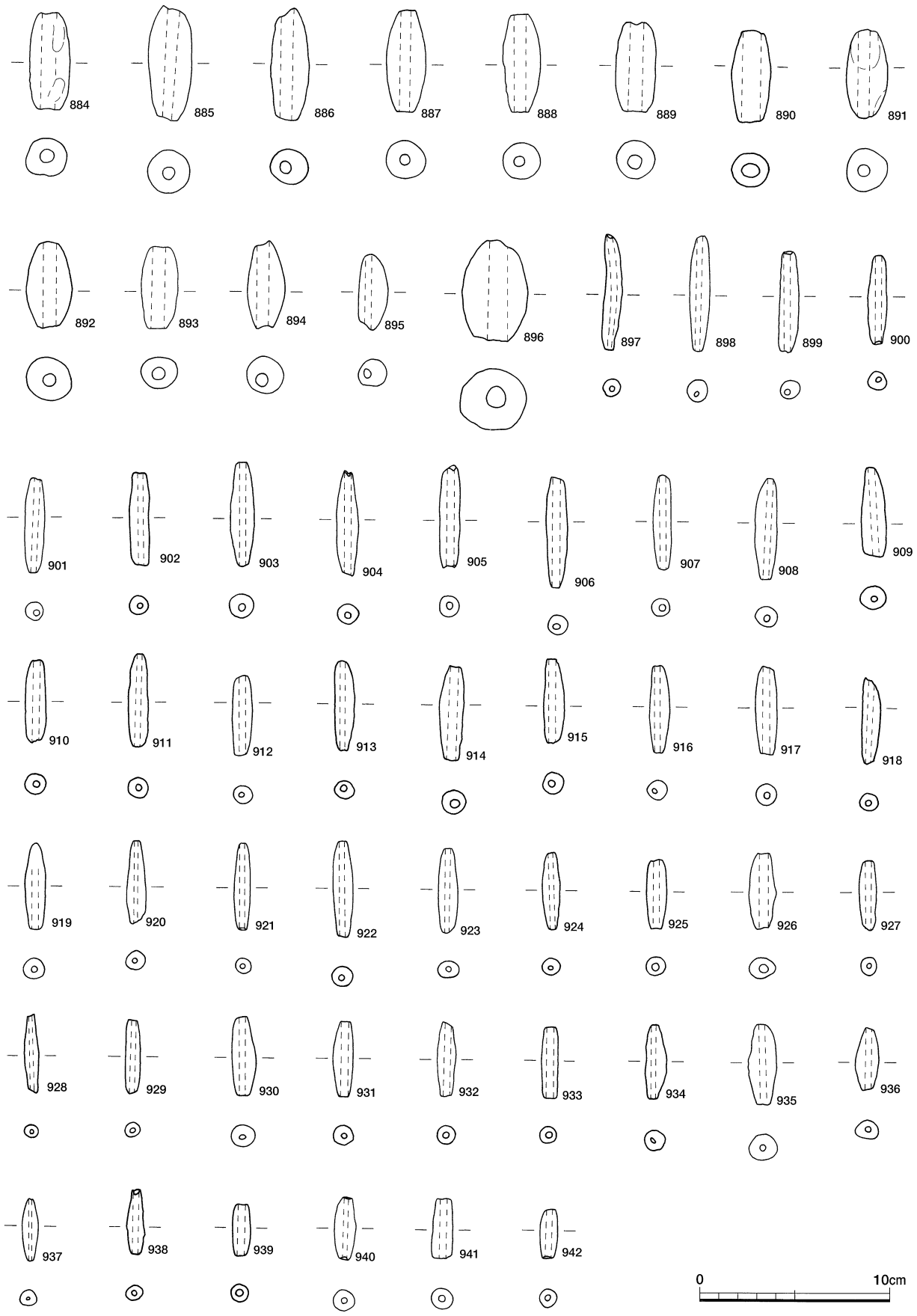
ケ目文様が描かれた唐津の鉢である。内外面とも施釉されているが口縁端部は釉が部分的に掻き取られている。

土製品（第92～93図）

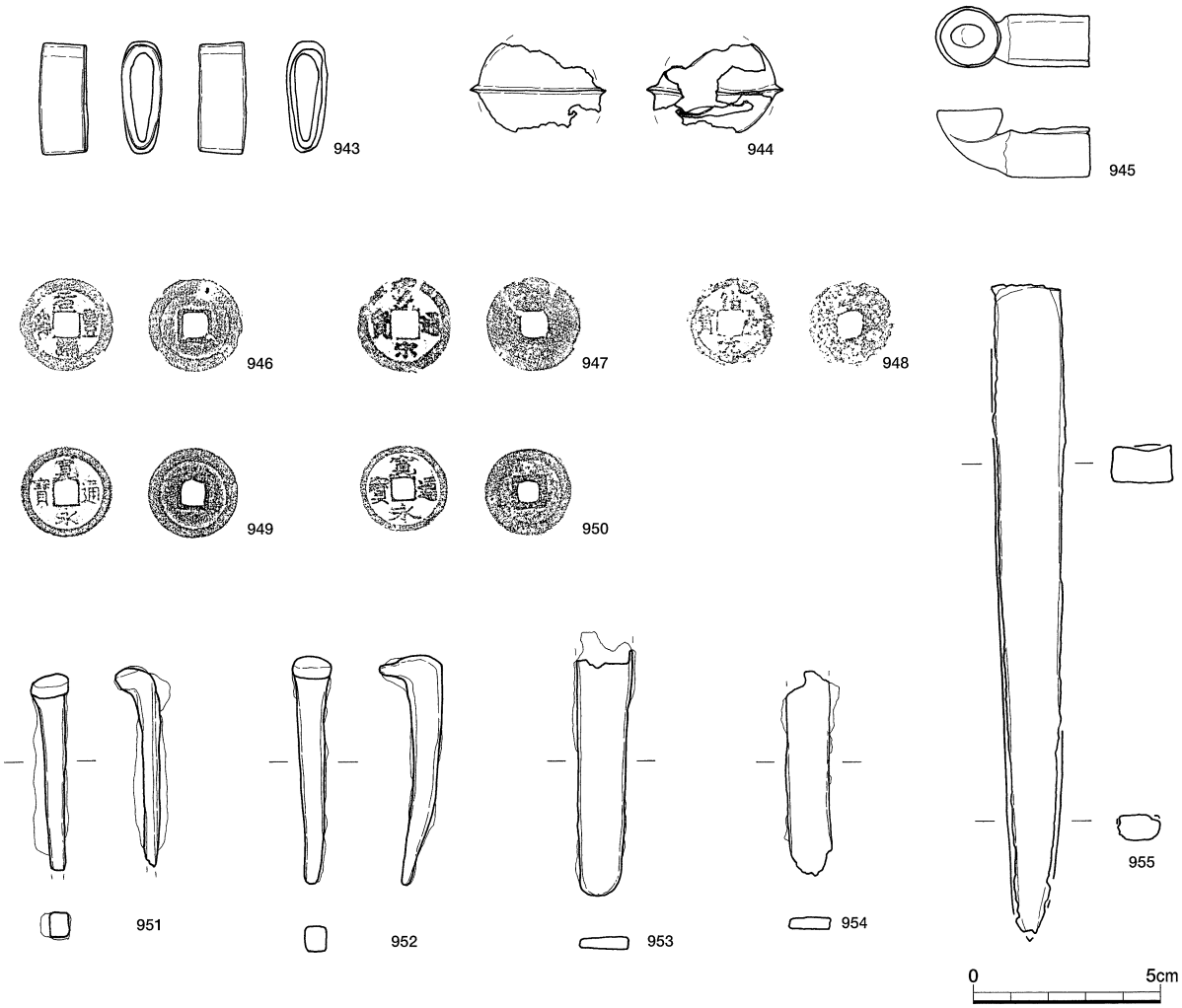
850～852は底部がにぶく尖らされた砲弾型の体部を持った製塩土器である。ゆるやかに内彎する口縁は端部がにぶく尖らされている。外面全体に指オサエとナデ調整が加えられているが凹凸が著しい。852は内面に布目圧痕が残されている。853～942は土錘である。有溝土錘が1点と有孔土錘が3点出土（853～856）している以外はすべて管状土錘である。管状土錘は楕円形または長楕円形のものと、中程がわずかに膨らむ細い管状のものに分けられる。857は長楕円形の管状土錘の中で最も大きいもので、長さ約8cm、太さ3cmを測る。この大きさのものは出土数が少なく、3～4cm前後の長さで、太さも1.5～2cmまでのものが圧倒的に多い。896は直径3.5cmと最も太い。



第92図　第一包含層出土遺物実測図（22）



第93図　第一包含層出土遺物実測図（23）



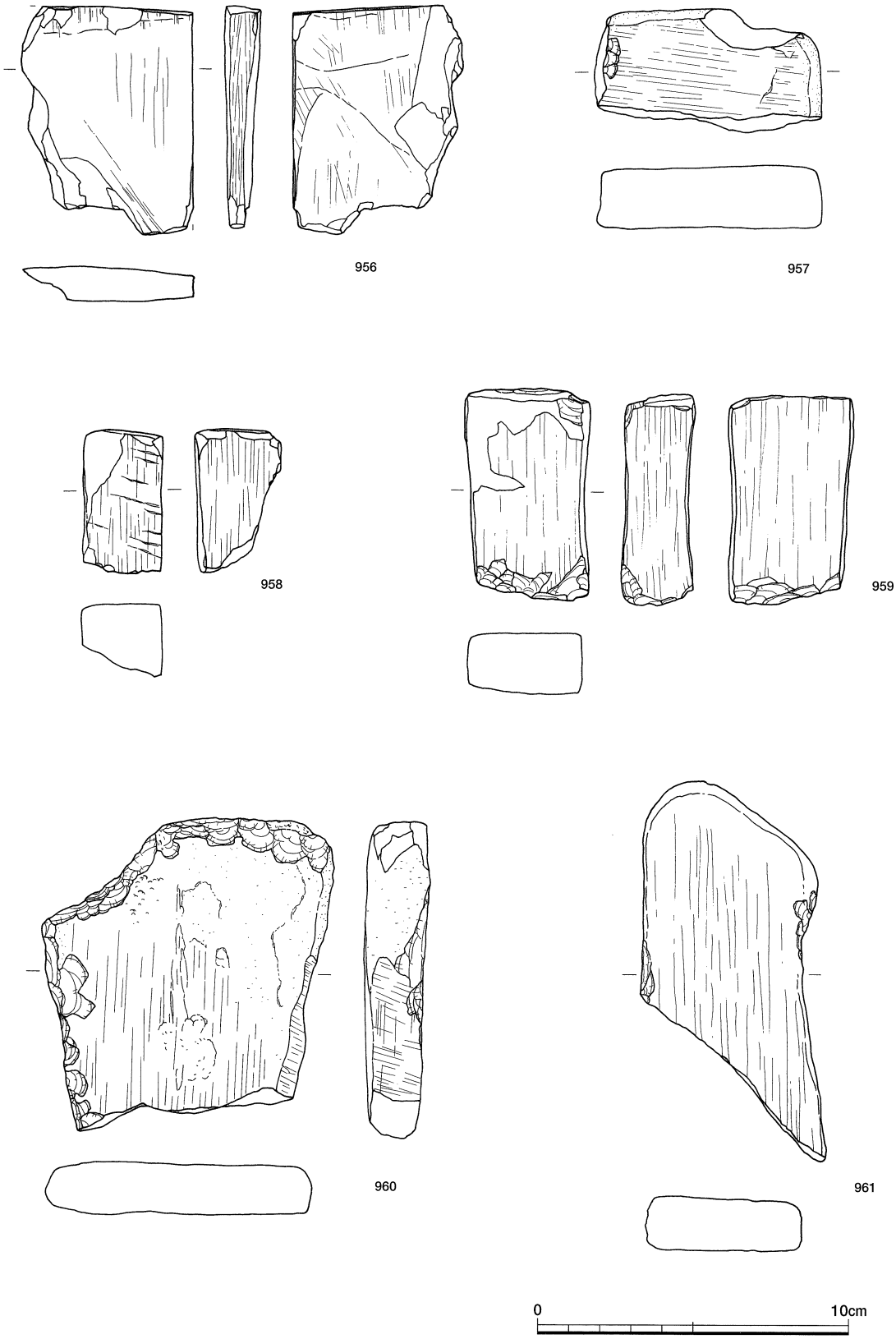
第94図　第一包含層出土遺物実測図（24）

金属製品（第94図）

943は銅製の刀の責め金具である。944は銅鈴である。945は銅製のキセルの雁首である。脂返しの彎曲がほとんどなくなった19世紀の製品である。946～950は銅銭である。946は元豊通宝、947は皇宋通宝、949・950は寛永通宝である。948は紹聖元宝であろうか。951・952は鉄釘である。何れも頭部をＬ字型に折り曲げている。953～955は不明鉄製品である。953・954は先端がＵ字状に造られていることから茎の可能性がある。955は断面が長方形で一端がにぶく尖らされている。

石製品（第95図）

956は粘板岩製の砥石である。側面には丁寧な面取りが行われ長方形に整えられている。957は砂岩の礫を適当な厚さに割り、平坦な自然面をそのまま砥面に使用している。958・959は方形に整形された凝灰岩製の砥石で、表裏両面と側面が砥面に使用されているが長軸方向の中程がわずかにくぼむ程度で大きく変形していない。960も957と同じように砂岩礫を適当な厚さに割り、平らな自然面をそのまま砥面に使用している。整形のためか、あるいはハンマーのように使用したためか側面には敲打痕が連続して残されている。961は扁平な片岩の自然面をそのまま使用した砥石である。砥面として使用されたのは片面だけで、ハンマーとして使用されたためか側面には敲打痕が集中するところがある。



第95図　第一包含層出土遺物実測図（25）

3　考察

立江馬渕遺跡の出土遺物について

今回、馬渕遺跡の発掘調査の契機となった櫛渕の圃場整備事業では、東西約1000m、南北500mの範囲内に、約80ヶ所の試掘調査を行ない、その結果をもとに、馬渕や柳ノ内をはじめ小規模なものを含めると16ヶ所の地点を選んで発掘調査が実施された。馬渕遺跡の場合、南から北に向かって設置された１区から４区までの調査区のうち、２区と３区では遺構が検出されたが、一番南側に位置する１区から遺物・遺構とも全く検出されなかった。１区からさらに南の水田面下には試掘調査によって櫛渕低地が広がっていることが確認されていることから、遺構が検出された２区がほぼ馬渕の遺構の分布する南限を示しているものと考えられる。一方、北側の４区も土壌のなかに少量の遺物が含まれていただけで、遺構は検出されなかった。最も遺構が集中する３区では、調査区の北側に自然流路ＳＲ１００２の堆積が約30mほど広がり、そのまま調査区外にのびていた。３区と４区の間は距離にして80mほどの未調査区域が広がっているが、この間の試掘調査のデータを見ると、水田床土直下にＳＲ１００２の埋土に類似した粘土と砂礫の堆積が確認されている。また、この未調査区域の西側、馬渕から北北西約90m付近に、馬渕の調査区に平行するように設置された長さ約30mのトレンチからは、調査区の南端と北端部分でそれぞれ木製品を含む自然流路が検出されている。２本とも調査区外にのびているため詳細は不明だが、南側で約３m、北側では７m程の幅がある。このうち南側の流路については、位置から考えてＳＲ１００２と同じ流路と判断された。このように３区と４区との間の未調査区域にはＳＲ１００２をはじめ複数の流路が流れていたことが想定されることから、遺構が存在する可能性が極めて低いと考えられる。一方、馬渕の東側の調査区からも流路が確認されている。４つの調査区のうち、馬渕の北東に設置された調査区からは流路が１本検出されている。これは西側の調査区の北端部分で見つかった流路にあたると考えられるが、もう一ヵ所、馬渕から東に約140m離れた地点に設置された調査区で検出された幅20m以上の規模を持つ北西方向の流路は、その位置や方向からＳＲ１００２の一部と考えられる。ＳＲ１００２の流れた方向は調査では確認できなかったが、遺跡が形成された沖積地が櫛渕低地より標高が高いことから、櫛渕低地から流れ出す立江川の支流の可能性は少ない。一方、櫛渕低地の南側を東に向かってのびる向山山地のさらに南を東流する那賀川は、羽ノ浦町中庄付近で方向を北に転じ、立江から坂野にかけての沖積地に流れ込んでいる。馬渕遺跡の近くでも春日野と宮倉の間を北西方向に流れる複数の河道が復元されていることから、自然流路ＳＲ１００２も那賀川から分かれた自然流路の一部と考えるのが自然であろう。以上のことを考慮すると、ＳＲ１００２も馬渕の東の調査区で検出された地点から馬渕の３区の北側と西側の調査区南端部分を通り、最終的には立江川に合流する北西方向の流れであったと考えるのが妥当であろう。ただ、この自然流路を除くと、馬渕の東側の調査区で検出された遺構は極めてわずかで、遺跡の範囲がこの辺りまで及んでいなかったものと思われる。事実、馬渕遺跡とその周辺の調査区内での遺構の検出状況をみると、遺構が最も集中する３区でも、掘立柱建物跡群の周辺を含め隣接する柳ノ内遺跡に近い西側に分布の偏りが見られ、東に向かうほど希薄になる傾向が認められる。これは、圃場整備に伴う迂回水路建設のため、２区を挟んで東西に設けられた２つの調査区も同じで、長さ約20m、幅約６mの西側の調査区からは、大小２本の溝をはじめ、土坑や柱穴など複数の遺構が検出されたが、東側に設置された東西約15m、幅５mの調査区からは遺構は全く検出されなかった。これらの点を総合すると、今回の馬渕の調査地点は北と南をそれぞれ自然流路と櫛渕低地によって挟まれた沖積地上に形成された遺跡のほぼ東端部分に位置している可能性が高い。一方、西側への遺構の広

がりも、馬渕の西に設置された柳ノ内遺跡をはじめとする８ヶ所の調査区の調査結果からある程度推測することが可能である。馬渕に隣接する柳ノ内の場合、馬渕を大きく上回る数の柱穴群が検出され、掘立柱建物群の分布の中心がむしろ柳ノ内側にあったことを示しているが、さらに柳ノ内から直線距離にして約200mと300m西に設置された大小３つの調査区でも、総数330基余りの柱穴や15本の溝、井戸跡１基などが検出され、鎌倉時代を中心とする遺構の広がりが確認されている。しかし、この地点よりさらに西に設置された２ヶ所のトレンチでは検出された遺構が全体で自然流路１、柱穴17、土坑３、不明遺構４にすぎないことから、西側への主要な遺構の広がりは柳ノ内から約300m付近までの範囲と考えられる。これらの調査区からはＳＲ１００２に該当する自然流路は検出されなかったが、各調査区の位置関係からみて、調査区が配置された東西約400m、南北200mの範囲内にＳＲ１００２が流れていた可能性は極めて低いと考えられる。おそらくＳＲ１００２は馬渕の西側でも流路が検出された３ヶ所の地点を結んだ延長線上を、さほど方向を大きく変えることなくそのまま北西方向に向かって流れていたものと思われる。以上のことから、遺跡が形成された沖積地は、南と北をそれぞれ櫛渕低地と自然流路ＳＲ１００２によって区画された、東西に長い独立した地形であったと考えられ、予想される遺跡の範囲は、馬渕の２区の南東の端を基点にして、少なくとも西に約400m、北には100mに及んでいたものと思われる。ただ、馬渕、柳ノ内と、西側の調査区で検出された鎌倉時代を中心とする遺構群が連続しているかどうかは、この間に、東西約180m近い未調査区域が残されているため、あきらかではない。この沖積地にはＳＲ１００２以外にも複数の流路の存在が確認されていることや、馬渕の３区のＳＲ１００１や、その南側で検出されたような再堆積土壌のように流路が度々変化した痕跡が残されていることから、馬渕、柳ノ内と中世集落との間も流路によって切り離されていた可能性も考えられる。

馬渕遺跡からは、古墳時代以降、古代、中世、近世に至るまでの各時代の遺物が出土している。しかし、検出された遺構の時期は古代から中世にかけての間だけで、古墳時代と近世は遺物の出土に限られている。なかでも近世の遺物は17世紀代前半の古唐津がまとまって出土した以外は、注目されるような調査結果は見あたらない。古墳時代の遺物も、須恵器の杯・蓋と土師器の甕が自然流路ＳＲ１００２内と包含層からわずかずつ出土しているだけである。出土した須恵器の杯は、６世紀後半ころの古墳時代後期に位置づけられる遺物である。ＳＲ１００２内の遺物は自然流路からの出土ということで、本来の位置から大きく動いている可能性が高いが、包含層からの遺物も、出土した地点の土壌が中世以降の流路の変化によって再堆積した可能性があり、自然流路内の遺物と同じように本来の場所から移動していることが考えられる。ただ、隣接する柳ノ内遺跡では７世紀前半代に遡る土師器の高坏が柱穴の中から出土している。馬渕の場合、柳ノ内よりも若干遡る遺物ではあるが、隣接する場所に時期的に近い遺物を出土する遺構が存在することを考慮すると、馬渕の古墳時代の遺物はこの沖積地上に遺跡が形成され始めた時期を示唆する資料と考えられる。

古代は、馬渕遺跡の中心となる時代で、遺構や遺物の出土が最も多い。３区の自然流路ＳＲ１００２内から律令祭祀に伴う木製品が出土したことや、須恵器の硯や、緑釉・灰釉陶器の優品が出土遺物の中に含まれていることに加え、隣接する柳ノ内遺跡では石帯が出土していることなどから、調査の時点からすでに官衛に関連する性格を持った遺跡であると考えられてきた。しかし、これらの官衛関連の遺物をはじめ検出された遺構や出土遺物には、かなりの時期幅が認められる。

馬渕遺跡で最も古い時期に位置づけられる遺構は、２区の南端で検出された溝ＳＤ１００１である。ＳＤ１００１は溝という遺構の性格上、時期の異なる遺物が混入する可能性が高いが、出土した土師器

の杯や杯蓋、鉢、甕、須恵器の杯、高台付杯、壺などの遺物からはさほど大きな時期幅を持った遺構ではないと考えられる。土師器の杯は、口径13～17cm前後、器高３～3.3cmの大きさの皿に近い形態で、口径の小さい２点を除き口縁端部が内側に折り返され、内面に凹線状の沈線が引かれている。このような口縁の形態は杯以外にも１点だけ出土した鉢にも認められる。杯はいずれも内外面に赤彩が施され、底部は外面にヘラケズリが加えられているが、体部は内外面とも横ナデ調整だけである。同じタイプの杯は、ＳＰ１１５９や包含層でも出土しているが、このなかにはＳＤ１００１の杯には見られなかった内面に放射状の暗文が施された個体が２点含まれている。１点出土した杯蓋は、扁平な天井部と外下方に向かって屈曲する口縁部を持ち、杯と同じように赤彩が施されている。甕は筒状の体部を持ったものと、体部が緩やかに膨らむものがそれぞれ１点ずつ出土している。筒状の体部を持った甕は馬渕で出土する一般的な甕と同じであるが、もう１点の体部が膨らむ個体はそれよりも若干古い特徴を持っている。須恵器は杯と高台付の杯がそれぞれ２点ずつと、高台付の壺が１点出土している。杯は直線的で上方への開きが小さい体部を持った器高の高いタイプと、器高が低く扁平な皿に近いタイプに分かれている。底部に低い高台が付けられた高台付の杯は、大小の違いはあるが器高の高い杯と類似する形態を持っている。ＳＤ１００１で特徴的な口縁端部内面に沈線が引かれた杯は８世紀から９世紀代にかけての時期に一般的だが、包含層の出土遺物を含めても体部内外面に暗文が施される個体が著しく少ないことから、概ね暗文が消失していく８世紀後半以降の段階のものと考えられる。これは後述するＳＲ１００２から採集された律令祭祀に伴う木製品とは時期的に約半世紀ほどの隔たりを持っている。ＳＤ１００１に代表される時期の遺構は馬渕遺跡の調査区内ではＳＰ１１５９などわずかで、隣接する柳ノ内遺跡でも同様である。しかし、迂回水路建設のために２区の西側に設置された調査区では状況が大きく異なり、ＳＤ１００１とほぼ同じ８世紀後半頃の土器を多く含む、並行する大小２本の南北方向の溝が検出されている。ＳＤ１００１とは直線距離にしてそれぞれ５ｍと７ｍしか離れていない２本の溝はいずれも南側が調査区外にのびているが、その位置からいって、当然、東側から北西方向にのびる２区のＳＤ１００１とつながっていると考えられる。東側の幅約１ｍの規模の小さな溝は北側が調査区の途中で収束しているが、西側の幅2.5mほどの溝はそのまま調査区外にのびている。この溝の延長線上には柳ノ内の調査区があるが、そこではこの西側の溝に該当するような遺構は未検出なことから、柳ノ内との間で途切れるか、北西方向に向きを変えてさらに北にのびていたことが予想される。２本の溝から出土した遺物は質・量ともに豊富で、周辺に同じ時期の遺構が存在していたことを示唆している。先述したように馬渕ではＳＤ１００１に該当する８世紀後半代の遺構の検出はわずかで、隣接する柳ノ内側の調査でもこの状況に大きな変化は認められなかった。しかし、２区から西側の迂回水路関連の調査区での遺構、遺物の出土状況を考えると、馬渕と西の中世集落との間の約180mの未調査区域にこの時期の遺構や遺物が集中している可能性が高い。

ＳＤ１００１に続く遺構として、掘立柱建物跡ＳＡ１００４があげられる。１００４ではＳＰ１０７８・１０９１・１１０９の柱穴からそれぞれ図示可能な遺物が出土している。１１０９では、杯・椀・皿・甕からなる土師器の一群が出土している。杯６点は、体部の上方への開きが比較的小さく、ゆるやかに外反する口縁部を持った口径12cm前後のもので、出土した皿１点も同様の外反する口縁部を持っている。高台付椀は、ゆるやかに内彎する体部が上方へ大きく開くものと、直立気味に立ち上がるものが出土しているが、量的には圧倒的に前者が多い。椀には内外面が赤彩された個体が多いのも特徴である。甕は筒状の体部をもった大型のものと、わずかに膨む体部を持った小型のものがそれぞれ１点ずつ

出土している。前者は筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ馬渕の遺構や包含層から出土する多くの甕と共通するタイプである。後者は被熱のため炭素の吸着が認められないが、「く」の字に屈曲する頸部と、口縁端部が円く仕上げられた短い口頸部を持った黒色土器の甕である。ＳＰ１０９１では高台付の椀こそ伴わないものの、１１０９と同じ形態の土師器の杯・皿・甕と黒色土器の甕の組み合わせが出土していることから、この２基の柱穴はほぼ同じ時期の遺構と考えられる。柱穴ＳＰ１０７８からは、土師器皿が２点出土している。そのうちの１点は口縁端部を内側に折り返し内面に沈線を引く古い要素を持っているが、もう１点は１１０９と同じタイプの皿であることから、他の２基の柱穴とほぼ同じ時期と考えてよい。これらＳＡ１００４の遺物の時期を馬渕の出土遺物から決定することが難しいため、類例を他の遺跡に求めると、板野町古町遺跡のＳＫ３００１・３０３０や、石井町石井城ノ内遺跡のＳＫ２００３・２００５・２０１４の各遺構の出土遺物がこれに最も近いと考えられる。古町遺跡のＳＫ３００１、３０３０からは、土師器の杯、皿、高台付の椀とともに９世紀後半から10世紀初頭の畿内系Ⅲ類の黒色土器Ａ類の椀や鉢、９世紀中葉頃の蛇ノ目高台の緑釉陶器椀が出土している。杯・皿・椀を問わず多くの土師器の供膳具には赤彩が施されているが、口縁端部内面に沈線が引かれたものは痕跡程度のものが２点出土しているにすぎない。時期については、黒色土器、緑釉陶器碗の特徴や、摂津型の羽釜が伴うことなどから９世紀後半から10世紀初頭に位置づけられると思われる。石井城ノ内遺跡のＳＫ２００３・２００５・２０１４も遺物の特徴から古町とほぼ同じ時期の遺構と考えられる。この古町、城ノ内の出土遺物と、ＳＡ１００４の遺物を比較すると、供膳具の形態に共通する点が多いが、ＳＡ１００４では杯の器壁がやや薄くなり底部外面の調整が粗雑なものが主になっていること、法量が若干小さくなっていることや、高台付の椀以外は赤彩された土器が僅かなことなど、同時期とするよりは、より後出する要素が強いことから、一応、古町、城ノ内よりやや時期が下る10世紀前半頃に位置づけておきたい。

馬渕の掘立柱建物跡群ではＳＡ１００４以外にもＳＡ１００１・１００２・１００３・１００６から遺物が出土しているがそれらはすべて１００４に後続する時期の遺物と考えられる。

ＳＡ１００１ではＳＰ１０２８・１０２９・１０３３の各柱穴から遺物が出土している。ＳＰ１０２８・１０２９からは、全体に器壁が薄くゆるやかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持った口径12cmほどの小型の杯が１点ずつ出土している。１０２９の個体の場合、底部は未調整のまま残され、体部との境が不明瞭である。ＳＡ１００４のＳＰ１１０９で出土した杯と形態が類似しているが、法量が縮小し調整がさらに粗雑化している。ＳＰ１０３３では、土師器の杯と甕、Ｂ類の黒色土器椀がそれぞれ１点ずつ出土している。出土した土師器の杯は口径約12cm、器高３cmで、ＳＰ１０２８・１０２９で出土した杯とほぼ同じタイプと考えられる。甕は外面に平行タタキが加えられた特徴的な体部を持っている。これらＳＡ１００１の一群の遺物については時期を明確に示せる資料がないが、土師器の杯の形態がＳＡ１００４の杯と類似するものの法量の縮小と調整の粗雑化の傾向が見られることや、ＳＰ１０３３の黒色土器の深椀が10世紀中葉頃に出現するとされているＢ類であることから、少なくともそれ以後に位置づけられる遺物である。

ＳＡ１００２ではＳＰ１０６４・１０６５・１０８２の各柱穴から遺物が出土している。１０６４からは、土師器の高台付の杯１点と小皿２点が、建物の廃絶後、意図的に埋納または廃棄された状態で出土している。高台付の杯は直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持ち、体部との境が「く」の字に屈曲する平底の底部には「ハ」の字に開く高い高台が付けられている。

高台が底部と体部との境からやや離れた位置に付けられている点が特徴である。小皿は体部が直線的で上方への開きが小さく、口縁端部が円く仕上げられたもので、底部内面には粘土紐巻き上げの際の凹凸が残されている。ＳＰ１０６５からは、ＳＡ１００１のＳＰ１０３３と同じタイプの土師器甕が出土している。ＳＰ１０８２では内彎する上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁部を持ち、底部には接地面が円く仕上げられた比較的高い高台が付けられたＢ類の黒色土器椀が１点出土している。ＳＰ１０６５の甕はＳＡ１００１のＳＰ１０３３で同じタイプの甕がＢ類の黒色土器椀とともに出土していることから、１０８２のＢ類の黒色土器椀とともに、ＳＡ１００１と同じく10世紀中葉以降に位置づけられる遺物である。１０６４の高台付の杯と小皿は、９世紀後半から10世紀初頭の古町・石井城ノ内の両遺跡の遺物や10世紀前半に位置づけた馬渕のＳＡ１００４の遺物と比較すると、高台付の椀・杯類がすべて底部と体部の境の屈曲部に付けられた古町・城ノ内、馬渕例とは形態を異にしている。また、古町・城ノ内の皿類は、緩やかに外反する上方への開きが大きい体部と、端部がわずかに外反する口縁部を持ち体部全体に入念な調整が加えられた、口径が10cmを越える個体ばかりで、上方への開きが小さく成形の際の凹凸がそのまま残された口径が10cmに満たない小皿化した１０６４の個体とは形態、調整とも大きく異なっている。このことから１０６４の遺物も１０６５・１０８２同様、少なくとも10世紀中葉以降に位置づけられると考えられる。以上の点からＳＡ１００２も１００１と同じく、10世紀中葉以降の掘立柱建物跡であろう。

ＳＡ１００３はＳＰ１０９５・１１１１で遺物が出土している。１０９５は土師器の杯１点、甕２点、須恵器の鉢と甕がそれぞれ１点ずつ出土している。杯は口径約11.2cm、高さ2.5cmと小型で、直線的な体部は上方への開きが小さく、円く仕上げられた口縁端部はわずかに外反している。ＳＡ１００１で出土した小型の杯の流れを汲むと考えられる。甕２点は筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる口縁の端部が上方に拡張されるもので、頸部は屈曲の度合いが弱く、口縁端部は円く仕上げられている。須恵器の鉢は直線的で上方への開きが大きい体部と、「く」の字に外折する短い口縁部を持っている。端部が上方に拡張された狭い帯状の口縁は横ナデによって中程が凹線状にくぼんでいる。１０９５は遺物の出土状況から、掘立柱建物廃絶後に一括して埋納または廃棄されたものと考えられる。出土した土師器の杯・甕類は時期決定の決め手に欠けるが、須恵器の鉢は口縁の形態から讃岐十瓶山周辺の窯で焼かれた11世紀中葉から12世紀初頭の間に位置づけられる製品である。ＳＰ１１１１からは、土師器の小皿と土釜がそれぞれ１点ずつ出土している。土師器の小皿は底部外面が未調整で、口径、器高とも古町のＳＫ３０３０の小皿より縮小している。土釜は摂津型で、直立する体部と口縁部との境にわずかに上方を向く鍔が付けられている。１１１１の時期は小皿の形態や摂津型の羽釜などから10世紀前半頃に位置づけられると考えられる。ＳＰ１０９５と１１１１では出土遺物に時期差が認められるが、遺物の出土状況から考えるとＳＡ１００３は１０９５の時期に廃絶された遺構と考えておきたい。

ＳＡ１００６は、ＳＰ１１１９から土師器の小杯（皿？）と口縁端部直下に鍔が付けられた摂津型の羽釜が１点ずつ、ＳＰ１１３３から土師器の高台付椀が１点と小皿が２点、Ｂ類の黒色土器椀の破片１点が出土している。小皿は体部の立ち上がりがほとんどなく、丸底の底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行している。ＳＰ１１３３の小皿と同じ形の小皿はＳＤ１００５や包含層からも出土しているが、何れも時期を決定する決め手を欠いている。Ｂ類の黒色土器椀の破片が伴っていることや、他の遺跡の10世紀前半頃までの遺構一括遺物の中に同じ形態のものが認められないことから、ＳＡ１００１・１００２同様、10世紀中葉以降のものであろう。ただ、ＳＰ１１３３の小皿とＳＡ１００２のＳ

Ｐ１０６４の小皿ではタイプが全く異なっていることからＳＡ１００１・１００２との間にも時期差が存在していることが考えられる。

上記のような点に留意しながら掘立柱建物跡の変遷を見ると、最も古い時期に位置づけられる建物がＳＡ１００４で、ＳＰ１０９１・１１０９での遺物の出土状態から10世紀前半頃に廃絶したと考えられる。１００１・１００２・１００３・１００６の各掘立柱建物跡は、これに次ぐ10世紀中葉以降の遺構と考えられるが、このなかで建物のおおよその時期が明らかなのは、ＳＰ１０９５の出土遺物から11世紀中葉から12世紀初頭の間に廃絶したと考えられるＳＡ１００３だけである。ＳＡ１００２はＳＰ１０６４・１０８２の出土遺物から、上限が10世紀中葉頃まで遡る可能性があるが、正確な時期幅は不明である。ただ、ＳＰ１０６５で出土した土師器甕から１００１とほぼ同じ時期に位置づけることが可能である。そこでＳＡ１００１のＳＰ１０２８・１０２９・１０３３の各柱穴から出土した土師器の杯と、ＳＡ１００３、１００４の杯を形態や法量で比較すると、１００４の杯のほうにより類似点が多く認められることから、１００４とはさほど大きくかけ離れた時期に位置づけられる資料ではないと思われる。したがってここではＳＡ１００１・１００２の時期を一応１００４と１００３の間でもより１００４に近い１０世紀中葉から後半くらいに位置づけておきたい。上述した掘立柱建物跡以外にも少量ずつではあるが遺物が出土した柱穴が存在している。しかし、時期的にＳＤ１００１と同じ８世紀後半段階頃まで遡ることが可能な遺構はＳＰ１１５９だけで、それ以外の柱穴は概ね１０世紀以降と考えられるものばかりである。これは、掘立柱建物跡群の北側を東西に走る溝ＳＤ１００５でも同じで、８世紀代の遺物を少量含んではいるものの、主要な出土遺物は掘立柱建物跡群と同じ10世紀以降の時期の遺物によって占められている。これらの点を総合すると、３区で検出された掘立柱建物跡群とその周辺から検出された遺構は概ね10世紀から11世紀にかけての期間を中心に形成されたものであろう。

次に律令祭祀関連の木製品や須恵器の硯、緑釉、灰釉陶器など官衛に関係するとされる遺物について考えてみたい。３区の北側を流れる自然流路ＳＲ１００２内の堆積の中には、流木と考えられる多くの自然木に混じって曲げ物をはじめ、船形、斎串、人形などの木製品が出土している。このうち、船形や斎串、人形などの形態は、徳島市観音寺遺跡の自然流路内から出土した律令祭祀に伴って使用されたと考えられる木製品に類似している。観音寺遺跡の遺物は、出土した層から平城京Ⅰ～Ⅱ段階の７世紀末から８世紀初頭の時期に位置づけられている。観音寺遺跡の律令祭祀関連の木製品の年代が、この時期に限定されるかどうかは今後の資料の増加によって変更される可能性があるが、他に類例がない今の段階では、馬渕の律令祭祀関連の木製品の年代も観音寺と同じ時期とせざるをえない。ただこの場合、ＳＲ１００２の木製品と同じ７世紀末から８世紀初頭にかけての時期の遺構や遺物は、今回の馬渕、柳ノ内の調査区内からは発見されていない。包含層から出土した硯に関しては出土状況などから年代を確定することができないが、圏足円面硯であることから、ＳＤ１００１に代表される古い時期に属する可能性が高い遺物である。２区の西側で実施された迂回水路建設に伴う調査ではＳＤ１００１と同じ時期の遺跡を多量に含む溝などの遺構が検出されていることから考えて、馬渕・柳ノ内の西側の未調査区には８世紀後半代またはそれ以前の時期に遡る遺構が存在した可能性が高いと考えられるが、律令祭祀に伴う木製品や硯の存在から考えて、この時期の馬渕は官衛に関連する性格を供えていたものと考えられる。緑釉・灰釉陶器については、おおむね９世紀代後半から10世紀前半に位置づけられる遺物であることから、その時期は一部が掘立柱建物跡群の時期と重なっている。度々比較のために取り上げてきた石井城ノ内遺跡、黒谷川宮ノ前遺跡、古町遺跡などでも９世紀代から10世紀にかけての緑釉・灰釉の出土が報

告されている。報告書に掲載された個々の遺跡ごとの遺物の点数は、馬渕の64点に対して、石井城ノ内遺跡が２点、黒谷川宮ノ前遺跡が19点、古町遺跡が22点と、数の上で馬渕が圧倒的に多いだけでなく、陰刻花紋などが描かれた優品が少なからず含まれている。宮ノ前、古町は官衛関連の遺跡としての評価を受けているが、その遺跡より出土数が圧倒的に多いうえに、優品が含まれていることは、10世紀前後の時期の馬渕が官衛関連の遺跡としての性格を持っていたことを裏付ける遺物である。もう一つ、官衛関連の遺跡を裏付けるとされる遺物として柳ノ内で出土した石帯があげられる。柳ノ内の石帯は裏面に潜り穴が穿たれた巡方で、馬渕の掘立柱建物跡群とほぼ同じ10世紀代の土師器を出土する柱穴から出土している。同じ10世紀代の石帯を出土した遺跡に、巡方と思われる製品が出土した板野町古町遺跡ＳＫ３００１の例がある。柳ノ内と同じく裏面に潜り穴があけられた石英片岩を素材とするもので、古町ではこの石帯の出土が官衛関連の遺跡とする根拠の一つにあげているが、同じ時期の石帯が柳ノ内で出土していることは、緑釉・灰釉の優越性とともに、10世紀以降の馬渕が官衛関連の性格を持っていたことをさらに裏付けるものである。しかしこれとは対照的に、検出された遺構には遺物ほど明確に官衛との関連を証明できるような積極的な根拠を見いだすことは出来ない。馬渕では８棟の掘立柱建物跡が復元されているが、その内訳は、２間×３間の側柱建物跡３棟、２間×４間の側柱建物跡１棟、３間×３間の側柱建物跡１棟、２間×５間の両廂側柱建物跡１棟、３間×４間の総柱建物跡１棟、２間×６間の総柱建物跡１棟で、掘立柱建物の半数を占める無廂の側柱建物４棟の規模は官衛、集落遺跡を問わず最も一般的とされる大きさである。建物の主軸の方向は、おおむね東西或いは南北方向に分かれているが、東西方向では15度から25度前後の間で東南方向に、南北方向では15度から22度ほど南西方向にずれるなど、建物の間で棟や梁行、桁行の方向にばらつきが認められる。これは１００１と１００２のように時期的に近いと考えられる建物間でも同じで、建物をある一定の規格に従って配置したような痕跡は確認できない。掘立柱建物跡群の分布の中心が柳ノ内側にあるうえに、柳ノ内の整理が進んでいない現状では建物群内での個々の建物の時期や位置関係などを総合的に検討するための詳しいデータが揃えられないことも明確にしえない一因であるが、今後は遺物の上で確認された官衛としての性格を、遺構の上で検証してゆく必要があると考えられる。

参考文献

日下正剛　「石井城ノ内遺跡 石井・神山線地区－主要地方道石井・神山線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第２３集　１９９９　徳島県教育委員会

斉藤　剛　「古町遺跡－一般県道板野川島線住宅宅地関連公共施設整備促進事業関連埋蔵文化財発掘調査報告－」
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第４３集　２００２　徳島県教育委員会

藤川智之編　「観音寺遺跡Ⅰ（観音寺遺跡木簡篇）－一般国道一九二号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第４０集　２００２　徳島県教育委員会

Ⅳ　まとめ

櫛渕地区の圃場整備に伴う調査によって確認された、周囲を低湿地と自然流路によって囲まれた標高1.5m前後の独立した沖積地上に立地する古代から中世にかけての時期を中心とする集落遺跡は、東西約400m、南北100m以上の広がりを持っていたと考えられる。今回の立江馬渕遺跡の調査区は、この古代から中世にかけての掘立柱建物跡群を中心とした遺跡の、東端部分に位置していると考えられる。馬渕で検出された遺構は、８世紀から12世紀にかけての古代段階に属するものが中心を占めているが、なかでも掘立柱建物跡群や溝など主要な遺構は10世紀以降の時期に集中し、ＳＤ１００１に代表される８世紀段階の遺構が全体に占める割合はきわめて低い。しかし、２区の西側で実施された別の調査では、ＳＤ１００１と同じ遺構と考えられる溝が多量の遺物とともに検出されていることから、今回の調査区の西側の未調査区域に馬渕では検出率の低い８世紀段階の遺構が広がっていた可能性が高い。出土した古代の遺物のなかには、須恵器の硯、緑釉・灰釉陶器、石帯などの、官衛またはそれに関連して出土するとされる遺物が含まれている。これらの遺物の年代を見ると、遺構が検出された８世紀後半段階と10世紀以降の両方の時期のものが含まれている。このことは、馬渕遺跡が遺構の集中する10世紀代以降のみならず、遺構が希薄な８世紀段階でも官衛、または官衛に関連する性格を備えていたものと考えられる。一方、３区の北側で検出された自然流路ＳＲ１００２内からは人形や船形、斎串など律令祭祀に伴うとされる木製品が出土している。同じ流路内からの出土遺物は、これらの木製品の時期を決定する決め手を欠いているが、国府関連の遺跡に位置づけられる徳島市観音寺遺跡の流路内で出土した７世紀末から８世紀初頭段階の木製品と、形態や組成など多くの類似する点を持っている。この観音寺遺跡の木製品の年代を馬渕にあてはめると、最も古いと考えられる遺構の時期よりさらに50年前後遡ることになる。今回の馬渕の調査区では検出されなかったが、今後、同時期の遺構が検出された場合は８世紀代以降と同様、当然官衛に関連する性格を持っていたもの考えられるが、隣接する柳ノ内遺跡では７世紀代前半の遺物を伴う遺構が検出されていることや、馬渕の調査区の西側区域への８世紀代の遺構の広がりを考えると、同じように西の未調査区域に木製品と同じ７世紀から８世紀代前半に遡るような遺構が存在していた可能性が充分考えられる。

馬渕遺跡は標高約1.5m前後の不安定な沖積地上に位置しているにもかかわらず、地点を変えながらも古代から中世にかけて集落が維持し続けられ、その間にはかなり長期にわたって官衛に関連する性格を備えた時期があったことが明かとなった。しかし掘立柱建物跡をはじめとする遺構の分布の中心が隣接する西側の柳ノ内遺跡側にあるため、遺構の面からの検証は、柳ノ内遺跡の整理を待って再度検討すべきと課題と考えられる。

紀伊水道に面した徳島県沿岸の吉野川から勝浦川、那賀川下流域にかけての地域には海岸線に沿って浜提が発達し、その背後には起伏の変化に乏しい平坦な沖積地が広がっている。今回の立江馬渕遺跡の調査結果は、これら沿岸部の沖積地上に遺跡が出現する時期や、その性格を考える上で、有意義な事例の一つになるものと考えられる。

第１表　ＳＡ１００１出土遺物観察表

ＳＰ１０２５出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
6	須恵器甕		球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。頸部には平行する沈線が引かれている。	長石・黒色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　灰黄色	

ＳＰ１０２８出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
1	土師器杯	口径11.8	内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	長石・雲母・赤色斑粒・結晶片岩	良好	内面　にぶい橙色 外面　褐灰色	

ＳＰ１０２９出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
2	土師器杯	口径12.1	内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	雲母・赤色斑粒・結晶片岩	不良	内面　褐灰色 外面　灰黄褐色	

ＳＰ１０３３出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
3	土師器杯	口径12.1	内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部の境は円く不明瞭。	雲母・赤色斑粒・結晶片岩	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
4	黒色土器椀	口径15.8	内彎する身の深い体部は端部が円く仕上げられた口縁部にそのまま移行する。円底の底部には接地部が円くわずかに外下方に開く低い高台が付けられている。	石英・雲母・赤色斑粒	良好	内面　黒褐色 外面　褐灰色	
5	土師器甕	口径17.2	球形の体部と、上方への開きの小さい直線的な口縁部を持つ。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は円く仕上げられている。	石英・長石・雲母・赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい褐色	外面に煤付着

SP１０５０出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
7	須恵器壺	底形7.4	筒状の体部と、上方への開きが小さい緩やかに外反する口縁部を持つ。底部は平底で、体部には×印が刻まれている。	長石	やや良好	内外面ともに灰色	

SP１０６０出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
8	須恵器甕	器高8.5	球形の体部と「く」の字に外反する頸部を持つ。外面はハケ目調整と平行タタキが施され、内面は同心円文のタタキが磨り消されている。	石英・長石	やや良好	内外面とも灰白色	

第２表　ＳＡ１００２出土遺物観察表

ＳＰ１０６４出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
9	土師器高台付杯	口径14.4	上方への開きが大きい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には接地部が円く仕上げられ下方へ開く比較的高い高台が貼り付けられている。	石英・長石・赤色斑粒・結晶片岩	良好	内外面とも橙色	
10	土師器小皿	口径9.8	上方への開きの小さい直線的で短い体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英・長石・赤色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　橙色	
11	土師器小皿	口径10.0	上方への開きの小さい直線的で短い体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英・長石	良好	内面　浅黄橙色 外面　橙色	

ＳＰ１０６５出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
12	土師器甕	口径16.1	球形の体部と、上方への開きの小さい直線的な口縁部を持つ。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は円く仕上げられている。	石英・長石・雲母・赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	外面煤付着

ＳＰ１０８２出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
13	黒色土器高台付椀	口径15.2	内彎する上方への開きが大きい体部は、端部が円く仕上げられた口縁部にそのまま移行する。底部には接地部が円く下方への開きが小さい比較的高い高台が付けられている。	石英・雲母・結晶片岩	良好	内面　黒褐色 外面　黄灰色	B類

第３表　ＳＡ１００３出土遺物観察表

ＳＰ１０９５出土遺物

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
14	土師器杯	口径11.3	上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･雲母･赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	内外面に黒斑あり
15	土師器甕	口径23.6	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁は端部が円く仕上げられている。	石英･長石･雲母	良好	内外面とも黄橙色	
16	土師器甕	口径27.4	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石･赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
17	須恵器鉢	口径25.4	上方への開きの大きい直線的な体部は口縁部との間に屈曲部を持ち口縁端部はにぶく尖らされる。	石英･雲母･黒色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
18	須恵器甕	口径50.6	緩やかに外反する口縁は端部近くに段が設けられ頂部が平坦に仕上げられている。	石英･長石･雲母･赤色斑粒･黒色斑粒	良好	内外面とも灰白色	

ＳＰ１１１１出土遺物

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
19	土師器皿	口径10.5	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	長石･赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	
20	土師器羽釜	口径23.2	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、鍔も端部が円く仕上げられている。	石英･長石･雲母	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	

第４表　ＳＡ１００４出土遺物観察表

ＳＰ１０７８出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
21	土師器皿	口径15.8	上方への開きが大きい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれ、体部と底部との境は「く」の字に屈曲している。	石英･長石･雲母・赤色斑粒	やや良好	内外面ともにぶい橙色	
22	土師器皿	口径12.6	上方への開きが大きくわずかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は円く仕上げられている。	長石･雲母･赤色斑粒･結晶片岩	良好	内外面ともにぶい橙色	

ＳＰ１０９１出土遺物

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
23	土師器杯	口径13.6	上方への開きが大きい直線的な体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁を持つ。	石英･ 雲母･赤色斑粒･結晶片岩	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　明赤褐色	
24	土師器皿	口径13.0	上方への開きが大きい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁を持つ。体部と底部の境は屈曲部を持たず不明瞭。	石英･長石･雲母・赤色斑粒	良	内　にぶい橙色 外　浅黄橙色	
25	土師器甕	口径13.6	緩やかに膨らむ体部と、「く」の字に屈曲する頸部からのびる上方への開きが小さく端部が円く仕上げられた直線的な口縁部を持つ。	石英･長石･雲母・赤色斑粒	不良	内面　黒褐色 外面　にぶい橙色	
26	土師器甕	口径24.0	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石･雲母・赤色斑粒	良好	内外面とも黄橙色	内面炭化物が付着
27	土師器甕	口径23.6	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石･赤色斑粒	やや不良	内外面とも橙色	

ＳＰ１１０９出土遺物

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
28	土師器 杯	口径 12.4	上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	石英･長石・ 雲母	良好	内面　明赤褐色 外面　橙色	
29	土師器 杯	口径 12.2	上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	長石・雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	良好	内面　にぶい橙色 外面　黄灰色	
30	土師器 杯	口径 12.8	上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	
31	土師器 杯	口径 12.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
32	土師器 杯	口径 12.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	
33	土師器 杯	口径 11.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	外面・口縁部に煤付着
34	土師器 高台付椀	口径 19.2	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には接地部が円く下方への開きが小さい比較的高い高台が付けられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	内外面とも赤彩
35	土師器 椀	口径 15.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰黄褐色 外面　にぶい褐色	
36	土師器 高台付椀	口径 12.3	緩やかに内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部には接地部が円く下方への開きが小さい比較的高い高台が付けられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　黒褐色 外面　灰黄色	
37	土師器 高台付椀	底径 9.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、接地部が円く下方への開きが小さい比較的高い高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも明赤褐色	内外面とも赤彩
38	土師器 高台付椀	高台径 7.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、接地部が円く下方への開きが小さい比較的高い高台が付けられた底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	内外面とも赤彩
39	土師器 皿	口径 13.2	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも黄橙色	
40	土師器 甕	口径 13.6	わずかな膨らみを持つ体部と緩やかに外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　灰黄褐色 外面　にぶい橙色	南河内産の甕
41	土師器 甕	口径 25.8	わずかな膨らみを持つ筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が平坦に仕上げられている。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　橙色 外面　にぶい橙色	

第５表　ＳＡ１００６出土遺物観察表

ＳＰ１１１９出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
42	土師器 皿	口径 10.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。体部と底部の境は不明瞭。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
43	土師器 羽釜	口径 22.6	体部は筒状で、口縁端部には水平。口縁端部と鍔の先端部は凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　暗灰黄色 外面　にぶい黄橙色	

ＳＰ１１３３出土遺物

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
45	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.8	直線的で上方への開きが大きい体部と、接地部が円く仕上げられた下方に開く低い高台を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも灰白色	
46	土師器 皿	口径 11.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　浅黄橙色	
47	土師器 皿	口径 8.6	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	長石	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
48	黒色土器 椀	口径 16.0	内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	雲母	良好	内外面とも暗灰色	Ｂ類

第６表　ＳＡ１００７出土遺物観察表

ＳＰ１１１８出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
49	土師器 皿	口径 11.2	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄褐色	内面煤付着
50	黒色土器 椀	口径 16.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　オリーブ黒色 外面　灰白色	A類

第７表　ＳＤ１００１出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
51	土師器 杯	口径 12.8	底部との境が円く仕上げられ、上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄色	内外面とも 赤彩
52	土師器 杯	口径 14.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	内外面とも 赤彩
53	土師器 杯	口径 14.9	直線的で上方への開きが小さい体部を持ち、端部が円く仕上げられた口縁は内面に凹線状の沈線が１本引かれている。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　橙色 外面　にぶい橙色	内外面とも 赤彩
54	土師器 杯	口径 15.4	直線的で上方への開きが小さい体部を持ち、端部が円く仕上げられた口縁は内面に凹線状の沈線が１本引かれている。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	内面に赤彩
55	土師器 杯	口径 15.9	直線的で上方への開きが小さい体部を持ち、端部が円く仕上げられた口縁は内面に凹線状の沈線が１本引かれている。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　淡赤橙色 外面　にぶい橙色	内外面とも 赤彩
56	土師器 杯	口径 17.0	直線的で上方への開きが小さい体部を持ち、端部が円く仕上げられた口縁は内面に凹線状の沈線が１本引かれている。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰白色	内面に赤彩
57	土師器 杯	口径 17.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁は内面に凹線状の沈線が１本引かれている。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　淡橙色 外面　にぶい橙色	内面に赤彩
58	土師器 杯	口径 18.3	上方への開きが小さい体部と、内側に折り曲げられた口縁端部内面に凹線状の沈線が１本引かれた口縁部を持つ。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母	不良	内外面ともにぶい橙色	
59	土師器 鉢	口径 20.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた直立気味の口縁部を持つ。口縁端部内面には凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや良好	内外面ともにぶい橙色	
60	土師器 杯蓋	口径 13.9	外下方に大きく開く直線的な体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ内面には凹線状の沈線が１本引かれている。平坦に仕上げられた天井部には擬宝珠状のつまみがつけられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　灰白色 外面　にぶい黄橙色	内外面とも 赤彩
61	土師器 甕	口径 16.6	直立する体部と、大きく外反する頸部から上方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部はわずかに上方に拡張され頂部は凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母	良好	内面　褐灰色 外面　にぶい褐色	
62	土師器 甕	口径 14.6	膨らみを持つ体部と、外反する直線的な口縁部を持つ。口縁端部はわずかに内方に拡張され頂部が平坦に仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　橙色 外面　明赤褐色	
63	須恵器 杯	口径 15.2	底部との境が円く仕上げられた上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	長石・雲母	良好	内外面とも灰白色	
64	須恵器 皿	口径 20.8	底部との境が円く仕上げられた上方への開きが小さい直線的な体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも灰白色	
65	須恵器 高台付杯	口径 13.1	底部との境が円く仕上げられた上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には下方への開きの小さい低い高台が貼り付けられている。	長石･雲母	良好	内外面とも灰色	
66	須恵器 高台付杯	口径 18.5	底部との境が円く仕上げられた上方への開きが小さい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には下方へ開く低い高台が貼り付けられている。	長石	良好	内外面とも灰色	
67	須恵器 高台付壷	高台径 9.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、「く」の字に強く内屈する肩部を持つ。底部には接地部がにぶく尖る低い高台が付けられる。	長石・雲母	良好	内外面とも灰白色	
68	製塩土器	口径 11.0	砲弾型の体部と、端部が鈍く尖らされた緩やかに内彎する口縁部を持つ。	石英･長石・ 黒色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
69	製塩土器		砲弾型の体部と、端部が鈍く尖らされた緩やかに内彎する口縁部を持つ。内面には布目圧痕が残されている。	長石・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい橙色 外面　黄灰色	
70	製塩土器		緩やかに内彎する口縁は端部がにぶく尖らされている。	石英・長石	不良	内外面ともにぶい黄橙色	
71	製塩土器		緩やかに内彎する口縁は端部がにぶく尖らされている。	石英･長石・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	

第８表　ＳＤ１００５出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
72	土師器 杯	口径 12.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。底部と体部との境は屈曲が明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
73	土師器 杯	口径 13.4	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部との境は屈曲が明瞭。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
74	土師器 杯	口径 11.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。底部と体部との境は円く仕上げられる。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
75	土師器 杯	口径 12.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部との境は円く仕上げられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
76	土師器 杯	口径 11.8	緩やかに内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	口縁部；内外面とも灰白色 体部；内外面とも褐灰色	内外面とも赤彩
77	土師器 杯	口径 18.0	直線的で上方への開きが小さい体部を持ち、端部が円く仕上げられた口縁は内面に凹線状の沈線が１本引かれている。体部と底部との境は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい褐色	内面に赤彩
78	土師器 高台付杯	高台径 16.5	比較的上方への開きが大きい直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には断面方形の低い高台が貼り付けられている。	長石・雲母・ 赤色斑粒	やや良好	内外面ともにぶい褐色	
79	土師器 高台付椀	口径 18.2	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英・雲母	良好	内面　浅黄色 外面　灰黄色	内外面とも赤彩
80	土師器 高台付椀	高台径 10.0	底部には接地部が円く仕上げられた下方への開きが小さい比較的低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	内外面とも赤彩
81	土師器 高台付椀	高台径 10.2	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英・雲母	良好	内外面ともにぶい黄橙色	内外面とも赤彩
82	土師器 高台付椀	高台径 10.0	底部には接地部が円く仕上げられた下方への開きが小さい比較的低い高台が付けられる。	石英・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
83	土師器 高台付椀	高台径 8.6	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄色 外面　浅黄色	外面に赤彩
84	土師器 高台付椀	高台径 8.4	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄褐色	外面に赤彩
85	土師器 高台付椀	高台径 8.6	平底の底部には接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられる。	石英・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも黄橙色	内外面とも赤彩
86	土師器 高台付椀	高台径 8.4	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも浅黄色	内外面とも赤彩
87	土師器 高台付椀	高台径 8.2	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　灰白色 外面　にぶい黄橙色	内外面とも赤彩
88	土師器 高台付椀	高台径 7.9	底部には接地部が円く仕上げられた低い高台が付けられる。	石英･長石・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄色 外面　にぶい黄橙色	外面に赤彩
89	土師器 高台付椀	高台径 7.8	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良好	内外ともにぶい黄橙色	外面に赤彩
90	土師器 高台付椀	高台径 7.5	底部には外下方への開きが小さく、接地部が円く仕上げられた比較的高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
91	土師器 高台付椀	高台径 8.2	底部には接地部が円く仕上げられた下方への開きが小さい比較的低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	
92	土師器 高台付椀	高台径 7.9	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く比較的高い高台が付けられる。	石英・雲母	良好	内面　にぶい褐色 外面　明赤褐色	
93	土師器 高台付椀	高台径 7.2	底部には接地部が円く仕上げられた下方への開きが小さい比較的高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
94	土師器 高台付椀	高台径 6.8	底部には接地部が円く仕上げられた下方への開きが小さい比較的低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	

95	土師器 皿	口径 14.6	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
96	土師器 皿	口径 13.2	わずかに内彎する上方への開きが小さい体部と、円く仕上げられた端部が軽く外反する口縁部を持ち、底部と体部の境は円く仕上げられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
97	土師器 皿	口径 14.2	体部との境で屈曲し外方に大きく開く口縁部は、端部が円く仕上げられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
98	土師器 小皿	口径 10.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　にぶい褐色	
99	土師器 小皿	口径 10.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
100	土師器 小皿	口径 11.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
101	土師器 小皿	口径 11.0	上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰白色	
102	土師器 小皿	口径 9.6	上方への開きが大きく短い体部と、肥厚し円く仕上げられた口縁端部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
103	土師器 小皿	口径 10.0	上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	赤色斑粒・ 黒色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	
104	土師器 小皿	口径 10.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英・雲母	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
105	土師器 小皿	口径 9.3	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
106	土師器 台付小皿	口径 10.8	底部からの上方への立ち上がりがほとんどない体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には断面三角形の低い高台が付けられている。	石英･長石	不良	内外面とも橙色	
107	土師器 小皿	口径 10.6	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
108	土師器 小皿	口径 10.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
109	土師器 小皿	口径 10.0	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。	石英・雲母	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
110	土師器 小皿	口径 11.1	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石	やや不良	内面　にぶい黄色 外面　にぶい黄橙色	
111	土師器 小皿	口径 9.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英･長石	良好	内外面ともにぶい褐色	
112	土師器 小皿	口径 7.6	緩やかに内彎する体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
113	土師器 羽釜	口径 20.0	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁端部直下につけられた鍔は上部が横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
114	土師器 羽釜	口径 23.0	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁端部直下につけられた鍔は上部が横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも灰黄褐色	
115	土師器 羽釜	口径 20.6	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁端部直下につけられた鍔は上部が横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい黄褐色 外面　にぶい黄橙色	外面に煤付着
116	土師器 羽釜	口径 24.2	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁端部直下につけられた鍔は上部が横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
117	土師器 羽釜	口径 21.6	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁端部直下につけられた鍔は上部が横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	石英・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	

118	土師器 羽釜	口径 26.6	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁部につけられた鍔は上部が横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰黄褐色 外面　褐灰色	
119	土師器 羽釜	口径 22.0	平坦に仕上げられた口縁部には端部直下に幅広い鍔がつけられている。鍔上部は横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	石英・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄色	
120	土師器 羽釜	口径 20.4	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内外方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁部につけられた鍔は端部上下に拡張され凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい褐色	
121	土師器 羽釜	口径 27.0	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が円く仕上げられる。口縁端部直下につけられた鍔は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母	良好	内面　にぶい橙色 外面　にぶい赤褐色	外面に煤 内面に炭化物付着
122	土師器 羽釜	口径 17.0	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁端部はにぶく尖らされ、口縁部につけられた鍔は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい褐色	外面に煤付着
123	土師器 羽釜	口径 24.4	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁端部はにぶく尖らされ、口縁部につけられた鍔は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい褐色 外面　にぶい赤褐色	
124	土師器 羽釜	口径 20.8	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内外方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁部につけられた鍔は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも黄橙色	
125	土師器 羽釜	口径 23.4	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内外方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁部につけられた鍔は上部に強い横ナデが加えられ端部は凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄色	
126	土師器 羽釜	口径 24.6	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内外方に拡張され頂部が平坦に仕上げられる。口縁部につけられた鍔は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　灰黄褐色	外面に煤付着
127	土師器 羽釜	口径 23.6	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに外方に拡張され頂部が平坦に仕上げられる。口縁部の鍔は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄色	
128	土師器 羽釜	口径 24.4	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、鍔端部も円く仕上げられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい黄褐色	
129	土師器 羽釜	口径 25.4	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、鍔も端部が円く仕上げられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　淡赤橙色	
130	土師器 甕	口径 19.0	「く」の字に屈曲する頸部と、上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部は浅く凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも黄褐色	
131	土師器 甕	口径 16.0	筒状の体部と、外反する短い口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄褐色 外面　灰黄褐色	
132	土師器 甕	口径 22.4	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
133	土師器 甕	口径 25.4	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　明褐色 外面　黄褐色	
134	土師器 甕	口径 27.0	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英	良好	内面　灰黄色 外面　暗灰黄色	外面に煤付着
135	土師器 甕	口径 25.4	わずかな膨らみを持つ体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・ 雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	口縁部に沈線あり 外面に煤付着
136	土師器 甕	口径 25.6	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が浅い凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも黄橙色	外面に煤 内面に炭化物付着
137	土師器 甕	口径 31.4	わずかな膨らみを持つ体部と、上方への開きが小さい直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方へ拡張され頂部がわずかにくぼんでいる。	石英・ 雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい黄色	
138	土師器 甕？鍋？	口径 26.0	内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方にのびる直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され平坦に仕上げられている。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄褐色	
139	土師器 甕	口径 21.6	弱い膨らみを持つ体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方にのびる直線的で開きが小さい口縁部を持つ。口縁端部はにぶく尖らされている。	石英・ 赤色斑粒	良好	内外面とも黄橙色	外面に煤付着

140	土師器 甕	口径 19.2	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方へのびる開きが大きく直線的な口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	石英・ 赤色斑粒	やや不良		
141	土師器 甕	口径 15.8	球形の体部と、外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は屈曲部を持ちにぶく尖らされている。	石英・雲母	良好	内面　にぶい橙色 外面　にぶい赤褐色	南河内型甕
142	土師器 甕	口径 16.8	球形の体部と、外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は屈曲部を持ちにぶく尖らされている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　灰褐色 外面　にぶい赤褐色	南河内型甕
143	土師器 高杯	器高 5.2	脚柱部はヘラケズリにより面取りが加えられる。	石英・雲母	やや不良	内面　にぶい赤褐色 外面　にぶい橙色	
144	土師器 竈	口径 26.6	内傾する体部と、平坦に仕上げられた火口部分を持つ。	石英・長石・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい黄色	
145	黒色土器 椀	口径 14.0	内彎する上方への開きが大きい体部と端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　オリーブ黒色 外面　灰黄褐色	A類
146	黒色土器 椀	高台径 8.0	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英・長石	やや不良	内面　灰色 外面　にぶい黄褐色	A類
147	黒色土器 椀	高台径 6.6	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	長石	良好	内面　灰色 外面　にぶい橙色	A類
148	黒色土器 椀	高台径 7.9	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　黒色 外面　にぶい橙色	A類
149	黒色土器 椀	高台径 9.2	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ大きく開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面ともオリーブ黒色	A類
150	黒色土器 椀	高台径 7.4	底部には接地部が円く仕上げられた下方へ大きく開く低い高台が付けられる。	石英	良好	内面　黒褐色 外面　にぶい橙色	B類
151	黒色土器 椀		底部には接地部が円く仕上げられた下方へ開く低い高台が付けられる。	雲母	良好	内外面とも暗灰色	B類
152	黒色土器 椀？皿？	高台径 7.8	底部には断面三角形の低い高台が付けられる。	長石・雲母	良好	内　暗灰色 外　暗灰黄褐色	A類
153	黒色土器 鉢	口径 28.2	内彎する体部と、頸部から「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母	やや不良	内面　暗灰色 外面　にぶい黄褐色	A類
154	黒色土器 鉢	底形 8.4	平底の底部と、上方への開きが大きい体部を持つ。	長石・雲母	良好	内面　黒色 外面　灰黄褐色	
155	黒色土器 甕	口径 16.0	「く」の字に屈曲する頸部と、上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部は浅い凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面ともオリーブ黒色	
156	須恵器 杯	口径 15.2	直線的で上方への開きが小さい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰色	
157	須恵器 杯	口径 14.4	直線的で上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。体部と底部の境は「く」の字に屈曲している。	石英・ 黒色斑粒	不良	内外面とも灰白色	外面に黒斑あり
158	須恵器 杯	口径 15.4	直線的で上方への開きが大きい体部は、そのまま端部がにぶく尖る口縁部に移行する。	長石	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
159	須恵器 杯蓋	口径 15.8	緩やかに内彎する天井部はそのまま端部が屈曲する口縁部に移行する。	石英・長石	良好	内外面とも灰色	
160	須恵器 杯	底径 7.0	上方への開きが大きい体部は、底部との境の屈曲部がわずかに外方に突出している。	石英・長石・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰色	
161	須恵器 杯	底径 7.0	上方への開きが大きい体部は、底部との境の屈曲部がわずかに外方に突出している。	長石	良好	内外面とも灰色	
162	須恵器 高台付杯	高台径 12.0	体部との境の屈曲部付近に接地面が平坦に仕上げられた低い高台が付く。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰白色	
163	須恵器 高台付杯	高台径 14.0	平面の底部に断面方形の低い高台が付く。	石英・長石	良好	内面　黄灰色 外面　灰白色	
164	須恵器 壺	口径 9.8	上方に向かって大きく開く喇叭型の口縁は端部が上方に拡張されている。	石英・長石	やや良好	内外面とも灰色	
165	須恵器 壺	口径 9.0	上方に向かって大きく開く喇叭型の口縁は端部が上方に拡張されている。	石英・長石・ 雲母	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
166	須恵器 壺	口径 9.0	上方に向かって大きく開く喇叭型の口縁は端部が上方に拡張されている。	雲母	良好	内外面とも灰色	
167	須恵器 壺	口径 9.3	上方に向かって大きく開く喇叭型の口縁は端部が上下に拡張され平坦に仕上げられる。	長石・雲母	良好	内外面とも灰色	
168	須恵器 壺	口径 8.6	上方に向かって大きく開く喇叭型の口縁は端部が上方に拡張されている。	長石	良好	内外面とも灰色	
169	須恵器 壺	口径 9.1	上方に向かって大きく開く喇叭型の口縁は端部がにぶく尖らされている。	石英・雲母	良好	内外面とも灰色	
170	須恵器 壺	口径 11.2	緩やかに外反しながら上方に開く口縁は端部が方形に仕上げられている。	石英	良好	内面　灰色 外面　灰白色	

171	須恵器 壺	口径 11.8	緩やかに外反しながら上方に開く口縁は端部が外方に拡張され平坦に仕上げられている。	長石	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
172	須恵器 壺	口径 25.2	上方に向かって大きく開く喇叭型の口縁は端部が上方に拡張されている。	石英･長石	やや良好	内面　黄灰色 外面　灰色	
173	須恵器 甕	口径 23.6	緩やかに外反しながら上方に開く口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	長石	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
174	須恵器 甕	口径 28.2	緩やかに外反しながら上方に開く口縁は端部が内外方に拡張され頂部が平坦に仕上げられている。	石英･長石	やや良好	内外面とも灰色	
175	須恵器 壺	頸部 11.0	なで肩の体部と、緩やかに外反する口縁部を持つ。	長石･雲母	良好	内面　オリーブ灰色 外面　灰色	
176	須恵器 壺	器高 6.9	筒状の体部は、肩部に把手が付けられている。	長石	良好	内外面とも灰色	
177	須恵器 壺	底径 9.0	体部は膨らみが小さく底部は平底。		良好	内面　灰白色 外面　灰色	
178	須恵器 壺	底径 11.6	体部は膨らみが小さく底部は平底。	石英・雲母	良好	内外面とも灰色	
179	須恵器 壺	底径 9.0	体部は膨らみが小さく底部は平底。	長石	良好	内外面とも灰色	
180	須恵器 壺	底径 11.0	体部は膨らみが小さく底部は平底。	石英･長石･ 雲母･ 黒色斑粒	不良	内外面とも灰白色	
181	須恵器 甕	底径 13.7	体部は膨らみが小さく底部は平底。	石英･長石･ 赤色斑粒	やや良好	内外面とも灰色	
182	須恵器 壺	底径 6.9	体部は膨らみが小さく底部は平底。	石英･長石	やや良好	内外面とも灰色	
183	須恵器 高台付 壺	高台径 5.5	底部には接地部が円い低い高台が付けられる。	長石	良好	内面　灰色 外面　灰白色	
184	須恵器 高台付壺	高台径 10.4	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石	やや不良	内外面とも灰白色	
185	須恵器 高杯？	口径 18.8	口縁部は体部との境で屈曲し、外反しながら円く仕上げられた端部に向かってのびている。	長石	良好	内外面とも灰白色	
186	須恵器 高杯	器高 5.4	円柱状の脚柱部を持つ。	石英･長石･ 雲母･ 赤色斑粒･ 黒色斑粒	不良	内面　灰白色 外面　灰色	
187	須恵器 鉢	口径 22.0	内彎する体部は肥厚し円く仕上げられた口縁端部に移行する。	石英･長石	良好	内外面とも灰白色	
188	陶器 椀	口径 18.0	緩やかに内彎しながら上方に大きく開く体部と、わずかに外反する口縁部を持つ。底部には断面方形の比較的低い削り出し高台が付けられる。釉層は薄く内外面全体に施釉されている。		良好		緑釉
189	陶器 椀		緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、比較的低い削り出し高台が付けられた底部を持つ。体部内面には稜が付けられる。	石英･長石･ 雲母･ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい黄緑色	緑釉
190	陶器 杯	口径 12.0	外反する口縁と体部との境に屈曲部を持つ稜皿。陰刻花文が描かれた内面には釉が薄くかけられるが外面は口縁部付近以外露胎のまま残されている。	長石･雲母	良好	内外面とも灰白色	緑釉
191	陶器 椀	高台径 7.3	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、断面方形の比較的低い削り出し高台が付けられた底部を持つ。釉層は薄く内外面全体に施釉されている。	長石	不良	内外面ともグレイみの黄緑色	緑釉
192	陶器 台付皿	高台径 7.4	底部には断面方形の低い削り出し高台がつけられている。内面見込部にはヘラミガキが加えられる。釉層は薄く内外面全体に施釉されている。	長石	不良	内外面とも灰色がかっ黄緑色；釉薬	緑釉
193	陶器 台付皿	高台径 6.6	上方への開きが大きい体部と、畳付部分の内面が凹線状にくぼむ比較的低い削り出し高台が付けられた底部を持つ。内外面全体に施釉されている。	石英･長石･ 雲母	良好		緑釉
194	陶器 皿	底径 7.2	底部は削り出しによる平高台が付けられる。内面見込部にはヘラミガキが加えられ、内外面とも全面施釉されている。	石英･長石	不良	内外面とも灰白色	緑釉
195	陶器 台付皿	高台径 5.4	底部には削り出しによる低い蛇ノ目高台を持つ。内面見込部には陰刻花文が描かれている。	長石･雲母	良	内外面とも灰白色	緑釉
196	陶器 鉢	口径 16.6	上方への開きが大きい体部と、わずかに外反する端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には比較的高い三日月形高台が付けられる。内面は口縁端部と見込部の一部を除き釉がかけられる。外面は口縁部付近と高台部分が露胎のまま残される。	雲母	良好	内外面とも灰白色	灰釉

197	陶器 椀	口径 17.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。内外面とも薄く釉がかけられている。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰白色	灰釉
198	陶器 皿	口径 15.0	上方への開きが大きい直線的な体部と、端部がにぶく尖らされた口縁部を持つ段皿。底部には直立する低い削り出し高台が付けられる。内面見込部の一部と、外面の高台部分は露胎のまま残されている。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰白色	灰釉
199	陶器 段皿	口径 19.1	端部が円く仕上げられ水平に近い角度で上方にのびる口縁部と、内彎する体部との境が強く屈曲する段皿。体部内面と外面の一部が施釉されている。	長石・雲母	良好	内外面とも灰色	灰釉
200	陶器 高台付椀	高台径 7.8	直立する三日月形高台を持つ椀。内面見込部は施釉され重ね焼きの痕跡が残される。外面は高台部分まで釉が垂れ下がっている。	長石	良	内外面とも灰白色	灰釉
201	陶器 把手付瓶	器高 10.0	肩の膨らみを失った下膨れの体部と、短い筒状の頸部から外反する口縁部を持つ。肩から頸部にかけては板状の粘土を折り曲げて作った把手が付けられている。把手の縁辺部は円く面取りが施されている。	長石	やや不良	内外面とも灰色	灰釉
202	製塩土器	口径 10.2	円錐形の体部と、鈍く尖らされたわずかに内彎する口縁部を持つ。外面には指オサエの痕を多く残す。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　灰黄色 外面　淡黄色	

第９表　ＳＲ１００１出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
264	土師器 杯	口径 12.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部との境は円く仕上げられている。	石英・長石・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい黄橙色	外面に赤彩の痕
265	土師器 皿	口径 15.2	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部との境は「く」の字に屈曲する。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　浅黄橙色	
266	土師器 皿	口径 10.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部との境は「く」の字に屈曲する。	長石・ 赤色斑粒	やや不良	内外面とも橙色	
267	土師器 高台付 椀・杯	高台径 8.6	上方への開きが大きい体部と、下方に向かって開く比較的高い高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
268	土師器 高台付 椀・杯	高台径 8.8	上方への開きが大きい体部と、下方に向かって開く比較的高い高台が付けられた底部を持つ。高台は接地部が円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	内外面に赤彩
269	土師器 高台付 椀・杯	高台径 8.8	上方への開きが大きい体部と、外下方に向かって開くやや低い高台が付けられた底部を持つ。高台は接地部が円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　浅黄橙色	外面に赤彩の痕
270	土師器 甕	口径 26.8	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄色 外面　灰黄色	
271	土師器 甕	口径 28.2	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい褐色	
272	土師器 釜	口径 21.0	わずかに内傾する直線的な体部は、頂部が凹線状にくぼむ口縁部にそのまま移行する。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄褐色 外面　黒色	外面に煤付着
273	土師器 竈	器高 6.7	火口から焚き口上部にかけての破片。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい褐色	
274	土師器 竈	縦 15.0	焚き口部分には帯状の粘土が貼り付けられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	良好	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
275	黒色土器 椀	高台径 9.0	円く仕上げられた底部に下方への開きが小さく低い高台が付けられる。高台は接地部が円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　黄灰色 外面　灰黄褐色	A類
276	須恵器 杯	底径 8.0	底部と体部の境は円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰色 外面　灰白色	
277	須恵器 壺	高台径 12.0	丸底の底部にわずかに外方に張り出す比較的高い高台が付けられている。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面とも灰色	
278	須恵器 壺		肩の部分に環状の把手が縦方向に貼り付けられている。	雲母	良好	内外面とも灰色	
279	須恵器 甕	口径 27.0	直線的で上方への開きが大きい口縁部は段を持ち、端部は内方へ拡張されている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　黄灰色 外面　灰色	外面波状文

280	須恵器 甕	器高 4.9	緩やかに外反する口縁部には沈線と波状文が描かれる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも黄灰色	
281	陶器 椀	高台径 6.0	ゆるやかに内彎する体部と、断面方形の低い削り出し高台が付けられた底部を持つ。体部は内外面にヘラミガキ調整が行われている。	石英・雲母	良好	内外面とも釉薬あかるいオリーブみのグレイ色	緑釉
282	陶器 椀	高台径 5.8	底部は削り出しによる蛇ノ目高台。釉層は薄いが底部外面まで施釉されている。		良好	内外面とも釉薬にぶい黄緑（リーフ）	緑釉
283	陶器 椀	高台径 6.0	体部はゆるやかに内彎している。底部は削り出しによる平高台で、中央部がわずかに上方に持ち上がり上げ底になる。釉層は薄く底部外面まで施釉されている。体部は内外面ともヘラミガキが加えられている。	石英	良好	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	緑釉
284	陶器 椀	高台径 7.6	削り出しによる平高台。	石英・雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　黄灰色 外面　にぶい黄橙色	緑釉
285	陶器 椀	高台径 8.4	直立する高台は畳付部分が円く仕上げられる。高台部分は全面露胎、内面見込部中央も露胎のまま残される。高台に沿って外面から内側に向けて連続する打ち欠きが行われている。	石英・雲母	良好	内面　灰白色 外面　灰黄色	灰釉
286	瓦器 椀	高台径 4.0	底部には断面三角形の低い貼付高台が付けられる。	石英・長石	やや不良	内外面ともにぶい橙色	

第10表　ＳＲ１００２出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
289	土師器 杯	口径 16.6	上方へ大きく開く体部と、内側に折り曲げられた口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、内側には沈線が引かれている。	石英・雲母・ 結晶片岩	良好	内外ともににぶい黄橙色	赤彩
290	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.2	接地部が円く仕上げられた下方へ開く比較的低い高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい黄橙色	外面に赤彩
291	土師器 小皿	口径 12.0	直線的で身の浅い体部と、端部が円く仕上げられわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも橙色	
292	土師器 小皿	口径 10.9	直線的で上方への開きが大きい浅い体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内　黄橙色 外　橙色	
293	土師器 小皿	口径 10.0	直線的で短い体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外ともににぶい黄橙色	
294	黒色土器 椀	高台径 7.1	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに外方に開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも黒褐色	B類
295	黒色土器 椀	高台径 8.0	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに外方に開く低い高台が付けられる。	石英・雲母	良好	内面　暗灰色 外面　にぶい黄橙色	A類
296	土師器 甕	口径 20.7	大きく膨らむ球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く口縁部を持つ。わずかに外反する口縁は端部がにぶく尖らされている。	長石・雲母・ 赤色斑粒	やや良好	内外ともに灰黄色	
297	土師器 羽釜	口径 24.5	直立する筒状の体部と、内方に拡張され頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くには外反する短い鍔が廻されている。鍔端部は円く仕上げられている。	石英・雲母	良好	内外面とも灰黄褐色	
298	土師器 羽釜	口径 23.8	内方に拡張され頂部が凹線状にくぼむ口縁は端部近くに幅広の鍔が水平に廻されている。鍔端部は上方に拡張され浅い凹線状にくぼんでいる。	石英・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰黄褐色	
299	土師器 高坏		脚柱部にはヘラケズリにより幅広い面取りが加えられる。	長石・雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　浅黄色 外面　灰黄色	
300	須恵器 蓋杯	口径 16.4	上方への開きが大きい扁平な体部を持つ。短い口縁は立ち上がりが内屈し、端部が円く仕上げられている。受け部は比較的長く、端部は円い。	石英・雲母	良	内外ともに灰白色	
301	須恵器 杯蓋	口径 15.0	天井部は低く扁平で、口縁端部は円く仕上げられている。	石英・雲母	良	内外ともに灰色	
302	須恵器 壺	底径 7.4	べた底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	長石・雲母	やや良好	内外面とも灰色	
303	須恵器 高台付壺	高台径 9.4	底部には下方に開く断面方形の低い高台が付けられる。	長石・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰色	
304	須恵器 高台付壺	高台径 7.0	上方への開きが小さい直線的な体部と、下方に開く断面方形の低い高台が付く底部を持つ。	石英・長石	良	内外面とも灰色	
305	須恵器 高台付壺	高台径 8.6	上方への開きが小さい直線的な体部と、直立する断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内　灰白色 外　灰色	内面に漆付着

306	須恵器 壺	底径 6.6	球形の体部と丸底の底部を持ち、底部には断面方形の高台が付けられる。	石英・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰白色	
307	須恵器 横瓶		俵型の体部と直立する太い口縁部を持つ。体部の一方の端に焼き台として使用された須恵器片が窯着している。体部外面には平行タタキ、内面には同心円文タタキが残されている。	雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面ともに灰白色	
308	陶器 杯	底径 6.4	上方に大きく開く直線的な体部と、端部が円く仕上げられた口縁を持ち、底部は蛇ノ目高台。口縁端部内面は凹線状の沈線が１本引かれ、体部外面と内面にはそれぞれヘラミガキが加えられている。釉は全面に薄くかけられている。	石英	不良	内面　灰オリーブ色 外面　にぶい黄緑色	緑釉
309	陶器 皿	口径 13.6	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、肥厚し円く仕上げられた口縁端部を持つ。内面は口縁部から体部にかけて、外面は口縁端部直下にそれぞれ放射暗紋が付けられている。	長石・雲母	良	内外面ともにぶい黄緑色	緑釉
310	陶器 皿	底径 8.6	内彎しながら上方に大きく開く体部と、直立する断面方形の削り出し高台を持つ。体部内面には暗紋、見込部にはヘラミガキがそれぞれ加えられている。内外面とも全面に薄い釉がかけられている。	雲母・ 赤色斑粒	良	釉薬グレイみのオリーブグリーン	緑釉
311	陶器 皿	高台径 7.0	平底の削り出し高台を持つ。外面は底部まで釉がかけられている。	石英･長石	不良	内外面とも淡黄色	緑釉
312	陶器 皿	高台径 6.7	上方に大きく開く体部と、直立する断面方形の低い削り出し高台を持つ。内外面とも全体に薄く施釉されている。	石英･長石	不良	内外面とも灰白色	緑釉
313	陶器 皿	高台径 6.6	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、接地部が円く仕上げられた直立する低い削り出し高台を持つ。内面見込部に施釉されている。	長石・雲母	不良	内面　灰色がかった黄色 外面　灰白色	緑釉
314	陶器 皿	底径 6.0	内彎する体部と平底の低い削り出し高台を持つ。内外面全体に薄く施釉されている。	石英･長石・ 雲母	不良	内外面ともくらい緑がかった灰色	緑釉
315	陶器 高台付皿	高台径 5.6	三日月状の削り出し高台を持つ。内面見込部と外面の高台部分付近は露胎のまま残されている。	長石・雲母	良好	内外面とも灰白色	灰釉

第11表　ＳＨ１００１出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
375	須恵器 杯蓋	口径 12.8	扁平な天井部と、短く内側に屈曲する口縁端部を持つ。つまみは扁平。	石英・雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	不良	内面　灰色 外面　灰白色	
376	須恵器 杯身	口径 14.4	直線的で上方への開きが小さい体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持つ。	石英	良好	内外面とも青灰色	
377	須恵器 高台付壺	高台径 7.2	底部との境から外上方に向かって直線的にのびる体部は、肩の部分で「く」の字に内屈している。底部には下方に大きく開く低い高台が付けられている。	長石・ 黒色斑粒・ 結晶片岩	良好	内面　灰白色 外面　灰色	

第12表　ＳＰ１００７出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
378	土師器 皿	口径 17.5	直線的で上方への開きが大きい体部と、にぶく尖らされた口縁端部を持つ。体部と底部との境は「く」の字に屈曲している。	長石・雲母・ 赤色斑粒・ 片結晶岩	不良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
379	土師器 甕	口径 22.0	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が平坦に仕上げられている。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	

第13表　ＳＰ１０１３出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
380	土師器 羽釜	口径 26.4	直立する筒状の体部との境に水平にのびる鍔が廻された口縁部を持つ。口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。口縁端部直下につけられた鍔は上部が横ナデによってくぼみ、鍔端部も凹線状にくぼんでいる。	胎土	不良	内面　灰黄褐色 外面　にぶい橙色	

第14表　ＳＰ１０１４出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
381	土師器 鍋	口径 40.0	内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。短い口縁端部は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	良好	内外面とも灰褐色	

第15表　ＳＰ１０１６出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
382	土師器 甕	口径 22.8	わずかな膨らみを持つ体部と、「く」の字に屈曲する頸部からのびる上方への開きが小さい直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方へ拡張され頂部がわずかにくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	不良	内外面とも橙色	

第16表　ＳＰ１０２２出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
383	土師器 皿	口径 11.4	緩やかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部と体部の境は不明瞭。	長石・ 赤色斑粒	不良	内　橙色 外　にぶい黄橙色	

第17表　ＳＰ１０４１出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
384	須恵器 甕	口径 27.6	上方に大きく開く直線的な体部と口縁部の境に段が設けられている。口縁端部はにぶく尖らされている。		良好	内外面とも灰白色	

第18表　ＳＰ１０５６出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
385	土師器 高台付小皿	口径 10.2	わずかに外反する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く比較的高い高台が付けられている。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	

第19表　ＳＰ１１１６出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
386	土師器 椀	口径 14.8	内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。丸底の底部には接地部が円く仕上げられた下方に開く比較的高い高台が付けられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　黒褐色 外面　橙色	
387	土師器 椀	口径 16.0	内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　黄灰色 外面　灰黄褐色	
388	土師器 皿	口径 10.7	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部の境は「く」の字に屈曲し明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
389	土師器 皿	口径 10.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。底部と体部の境は屈曲部を持たず不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	

第20表　ＳＰ１１２２出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
390	土師器 椀	口径 19.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。	石英・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	内外面とも 赤彩

第21表　ＳＰ１１５９出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
391	土師器 杯	口径 18.0	緩やかに内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には凹線状の沈線が１本引かれ、体部と底部の境は円い。	石英･長石	やや良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
392	土師器 鉢	口径 14.4	緩やかに内彎する上方への開きが小さい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。口縁端部外面には凹線状の沈線が１本引かれている。	長石・雲母	良好	内面　橙色 外面　にぶい橙色	

第22表　ＳＰ１１６０出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
393	土師器 高台付椀	口径 14.8	緩やかに内彎する身の深い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　淡橙色 外面　浅黄橙色	内外面とも 赤彩
394	土師器 甕	口径 14.8	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母	不良	内面　にぶい黄橙色 外面　褐灰色	
395	黒色土器 椀	高台径 7.6	内彎する身の深い体部と、接地部が円く、わずかに下方に開く低い高台がつけられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰色 外面　にぶい橙色	A類

第23表　ＳＰ１１６４出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
396	土師器 風炉	底径 27.5	平底の底部に「ハ」の字に開く高い高台が付けられる。高台の接地面は平坦に仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	

第24表　ＳＰ１１７９出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
397	土師器 高台付椀	高台径 7.0	内彎する体部と、接地部が円く下方に開く低い高台がつけられた底部を持つ。	石英・長石・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
398	土師器 皿	口径 9.0	内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。体部と底部の境は屈曲部を持たず不明瞭。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面とも黄橙色	

第25表　ＳＫ１００４出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
400	瓦器 椀	口径 15.2	内彎する体部と、わずかに外反する口縁部を持つ。口縁部外面には横ナデが二段にわたって行われている。体部外面にはヘラミガキの痕跡がわずかに残され、内面には圏線ミガキと平行線状ミガキが残されている。	長石	不良	内外面とも暗灰色	和泉型
401	土師器 鍋	口径 34.2	緩やかに内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。内外面ともハケ目調整が加えられている。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　灰黄褐色	

第26表　ＳＰ１０１５出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
402	瓦器 椀	口径 16.0	内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。口縁部は外面に横ナデが加えられ、体部内面には圏線ミガキと平行線状ミガキが残されている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 結晶片岩	不良	内面　褐灰色 外面　灰黄褐色	和泉型
403	瓦器 椀	口径 15.2	内彎する体部と、わずかに外反する口縁部を持つ。口縁部外面には横ナデが二段に加えられ、体部内面には圏線ミガキが残されている。	石英・長石	不良	内外面とも褐灰色	和泉型
404	瓦器 椀	口径 14.4	内彎する体部とわずかに外反する口縁部を持つ。口縁部外面には幅広い横ナデが加えられ、体部内面には圏線ミガキが残されている。	石英・雲母	やや不良	内外面とも黒色	和泉型

第27表　包含層出土遺物観察表（古墳・古代）

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
405	土師器 杯	口径 13.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英・長石	良	内外面とも浅黄橙色	
406	土師器 杯	口径 13.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも浅黄橙色	
407	土師器 杯	口径 12.8	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
408	土師器 杯	口径 12.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　灰白色 外面　浅黄橙色	

409	土師器 杯	口径 12.6	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
410	土師器 杯	口径 12.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英・雲母	良	内外面とも浅黄橙色	
411	土師器 杯	口径 14.1	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英・雲母・ 結晶片岩	良好	内外面とも黄橙色	
412	土師器 杯	口径 14.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部と体部の境は屈曲部を持ち境が明瞭。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
413	土師器 杯	口径 13.5	直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部と体部の境は屈曲部を持ち境が明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
414	土師器 杯	口径 13.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒		内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
415	土師器 杯	口径 11.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
416	土師器 杯	口径 12.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。底部から体部にかけては円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい橙色	
417	土師器 杯	口径 14.0	緩やかに内彎する体部と端部が鈍く尖らされた口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	外面に赤彩
418	土師器 杯	口径 11.4	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が鈍く尖らされた口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
419	土師器 杯	口径 14.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ、境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや良好	内外面とも浅黄橙色	
420	土師器 杯	口径 15.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
421	土師器 杯	口径 18.2	直線的で上方への開きが大きい体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持つ。	石英･長石	良好	内外面ともにぶい橙色	
422	土師器 杯	口径 21.0	上方への開きが小さく内彎する体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
423	土師器 杯	口径 19.0	上方への開きが小さく内彎する体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	長石・雲母	良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
424	土師器 杯	口径 16.6	上方への開きが小さく内彎する体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	
425	土師器 杯	口径 16.0	上方への開きが小さく内彎する体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも淡橙色	
426	土師器 杯	口径 18.0	内彎する上方への開きが小さい体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母	良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
427	土師器 杯	口径 13.8	上方への開きが小さく内彎する体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　橙色 外面　にぶい黄橙色	
428	土師器 杯	口径 14.2	直線的で上方への開きが小さい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	内面に赤彩
429	土師器 杯	口径 21.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　灰黄色 外面　にぶい黄橙色	
430	土師器 杯	口径 20.9	直線的で上方への開きが小さい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。口縁端部内面には浅い凹線状の沈線が１本引かれている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
431	土師器 高台付杯	口径 15.2	直線的で上方への開きが大きい体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持つ。底部には接地部が円く低い高台が付けられている。	石英・ 結晶片岩	良好	内外面とも灰黄褐色	内外面に煤付着
432	土師器 高台付椀	口径 14.2	わずかに内彎する上方への開きの大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。丸底の底部には接地部が円くわずかに下方に開く低い高台が付けられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	

433	土師器 杯	底径 7.6	上方への開きが大きい体部から底部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも浅黄橙色	
434	土師器 杯	底径 7.0	上方への開きが大きい体部から底部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい橙色	
435	土師器 杯	底径 4.5	上方への開きが大きい体部から底部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄褐色	内外面に煤付着
436	土師器 杯	底径 8.6	底部と体部の境は屈曲部を持つ。	石英・雲母	不良	内外面とも橙色	
437	土師器 杯	底径 8.2	底部と体部の境は屈曲部を持ち、わずかに外方に張り出す。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい黄橙色	
438	土師器 杯	底径 5.6	底部と体部の境は屈曲部を持ち、わずかに外方に張り出す。	石英・長石・ 赤色斑粒	良	内外面とも浅黄橙色	
439	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 10.2	接地部が円く下方へ開く比較的低い高台が付けられた丸底の底部を持つ。	長石・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
440	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 11.0	接地部が円く下方へ開く比較的低い高台が付けられた丸底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
441	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.4	接地部が円く下方へ開くやや高い高台が付けられた底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい橙色 外面　浅黄橙色	
442	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 10.0	丸底の底部には、下方へ開きが小さく接地部が円く仕上げられた比較的低い高台が付けられる。	石英・雲母	不良	内外面とも橙色	
443	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 10.0	上方への開きが大きい体部と、内方に拡張された平らな接地部を持つわずかに下方に開く比較的低い高台が付けられた丸底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　灰白色 外面　にぶい黄橙色	
444	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.3	直線的で上方への開きが大きい体部と、接地部が円く下方への開きが小さい低い高台がつけられた平底の底部を持つ。	石英･長石・ 赤色斑粒	やや不良	内外面とも浅黄橙色	
445	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.7	接地部が円く、直立する比較的低い高台が付けられた平底の底部を持つ。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
446	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.0	接地部が鈍く尖らされ、直立する比較的低い高台が付けられた丸底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい黄橙色	外面に赤彩
447	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.6	接地部が円く、直立する比較的低い高台が付けられた円底の底部を持つ。	石英・長石・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい橙色	
448	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.5	接地部が円く、外下方への開きが小さい低い高台が付けられた底部を持つ。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
449	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、接地部が円く下方への開きが小さい低い高台がつけられた平底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄褐色	内外面に煤付着
450	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.3	直線的で上方への開きが大きい体部と、接地部が円く下方への開きが小さい低い高台がつけられた平底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい黄橙 外面　にぶい橙色	

451	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.6	接地部が円く、下方への開きが小さい比較的低い高台が付けられた底部を持つ。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも明赤褐色	
452	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.2	接地部が円く、下方へ開きが小さい比較的低い高台が付けられた丸底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　橙色 外面　浅黄緑色	
453	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 7.8	接地部が円く、下方への開きが小さい比較的低い高台が付けられた底部を持つ。	石英･長石・ 雲母	不良	内面　にぶい黄色 外面　灰黄色	
454	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.6	接地部が円く、下方への開きが小さい低い高台がつけられた平底の底部を持つ。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
455	高台付椀	高台径 8.2	平底の底部にわずかに外下方に開く比較的高い高台が付けられる。高台の接地部は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外ともに橙色	
456	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.8	直線的で上方へ大きく開く体部と、接地部が円く直立する低い高台がつけられた平底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい褐色 外面　にぶい橙色	
457	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.2	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く高い高台が付けられる。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内面　橙色 外面　浅黄橙色	
458	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.0	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
459	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 9.4	底部には接地部が円く仕上げられた直立する高い高台を持つ。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
460	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.0	底部には接地部が円く仕上げられた直立する高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良好	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
461	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 7.0	体部は緩やかに内彎する。底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く高い高台が付けられる。	雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい褐色	
462	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.0	内彎する体部と、直立する高い高台が付けられた平底の底部を持つ。	雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　灰黄褐色 外面　にぶい黄橙色	
463	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.2	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに外方に開く高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい赤褐色	
464	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.9	底部には接地部が方形で直立する高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　浅黄橙色	
465	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.0	平底の底部には接地部が円く仕上げられた直立する高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
466	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 7.0	平底の底部には接地部が円く仕上げられた直立する高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
467	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 7.0	平底の底部には接地部が円く仕上げられた直立する高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
468	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.2	平底の底部には接地部が鈍く尖らされた直立する比較的低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい橙色	
469	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 7.0	平底の底部には接地部が鈍く尖らされた直立する高い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	

470	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 6.1	平底の底部には接地部が鈍く尖らされた直立する高い高台が付けられる。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
471	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 8.8	直線的で上方への開きの大きい体部と、接地部が円く、外方への開きが小さい比較的低い高台が付けられた平底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
472	土師器 高台付 椀？杯？	高台径 7.6	直線的な体部と、断面三角形の高台が付けられた平底の底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　浅黄橙色 外面　にぶい橙色	
473	土師器 高台付 椀？杯？	器高 3.2	直線的な体部と、高台が付けられた平底の底部を持つ。	長石・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
474	土師器 高台付 椀？杯？	器高 2.1	直線的な体部と、高台が付けられた平底の底部を持つ。	石英・長石・ 赤色斑粒	やや不良	内面　浅黄橙色 外面　にぶい橙色	
475	土師器 高台付 椀？杯？	器高 2.8	内彎する体部と、高台が付けられた丸底の底部を持つ。	石英・ 赤色斑粒	不良	内面　橙色 外面　浅黄橙色	
476	土師器 皿	口径 13.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい橙色	
477	土師器 皿	口径 12.6	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　浅黄橙色	内面に赤彩
478	土師器 皿	口径 13.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　淡橙色 外面　にぶい橙色	内面に赤彩
479	土師器 皿	口径 13.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄橙色	
480	土師器 皿	口径 14.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも橙色	
481	土師器 皿	口径 12.7	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母	良	内外面とも浅黄橙色	
482	土師器 皿	口径 9.6	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
483	土師器 皿	口径 11.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石	良	内外面とも橙色	
484	土師器 皿	口径 10.4	直線的で浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい黄橙色	
485	土師器 皿	口径 12.0	上方への開きが小さく浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　橙色 外面　浅黄橙色	
486	土師器 皿	口径 12.3	直線的で浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい橙色	
487	土師器 皿	口径 11.4	直線的で浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
488	土師器 皿	口径 10.8	直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては屈曲部を持ち境が明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも浅黄橙色	
489	土師器 皿	口径 10.0	上方への開きが小さく浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
490	土師器 皿	口径 11.2	上方への開きが小さく浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい褐色	
491	土師器 小皿	口径 11.0	緩やかに内彎する浅い体部と、端部が円く仕上げられた外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
492	土師器 小皿	口径 10.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも浅黄色	

493	土師器 小皿	口径 12.0	緩やかに内彎する浅い体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
494	土師器 小皿	口径 11.9	体部は上方への立ち上がりがほとんどなく、底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行する。	石英・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
495	土師器 小皿	口径 10.5	体部は上方への立ち上がりがほとんどなく、平底の底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行する。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
496	土師器 小皿	口径 10.8	平底の底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行し、体部の立ち上がりはほとんどない。	雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい橙色	
497	土師器 小皿	口径 10.6	体部は上方への立ち上がりがほとんどなく、底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行する。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
498	土師器 小皿	口径 10.0	体部は上方への立ち上がりがほとんどなく、平底の底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行する。	石英・長石・ 雲母	不良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
499	土師器 小皿	口径 10.2	体部は上方への立ち上がりがほとんどなく、平底の底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行する。	長石・雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄橙色 外面　浅黄橙色	
500	土師器 小皿	口径 10.0	直線的で上方への開きが大きく浅い体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英・長石	不良	内外面とも橙色	
501	土師器 小皿	口径 10.0	直線的で身の浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい黄橙色	
502	土師器 皿	口径 9.4	直線的で身の浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。	石英・長石・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
503	土師器 小皿	口径 10.0	体部は上方への立ち上がりはほとんどなく、丸底の底部から円く仕上げられた口縁端部にそのまま移行する。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
504	土師器 高台付皿	口径 10.2	直線的で身の浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ち、底部には直立する高台が付けられる。	長石・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
505	土師器 小皿	口径 10.0	上方への開きが小さく身の浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも明赤褐色	
506	土師器 小皿	口径 10.8	上方への開きが小さく身の浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
507	土師器 小皿	口径 10.0	上方への開きが小さく身の浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
508	土師器 小皿	口径 10.0	上方への開きが小さく浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石・赤色 斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
509	土師器 小皿	口径 8.6	上方への開きが小さく浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
510	土師器 小皿	口径 11.0	上方への開きが小さく浅い体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石・雲母	良	内外面ともにぶい橙色	
511	土師器 小皿	口径 11.6	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面ともにぶい橙色	
512	土師器 小皿	口径 12.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。底部から体部にかけては円く仕上げられ境が不明瞭。	長石・雲母	良	内外面とも橙色	
513	土師器 小皿	口径 11.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が鈍く尖らされたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の境は円く仕上げられる。	長石・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
514	土師器 小皿	口径 11.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部と体部の境は屈曲部を持ち明瞭。	石英・長石・ 雲母	不良	内外面ともにぶい橙色	
515	土師器 小皿	口径 10.0	直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部と体部の境は屈曲部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
516	土師器 小皿	口径 9.5	直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部と体部の境は屈曲部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい橙色	
517	土師器 皿	口径 16.0	上方への開きの小さい短い体部と、円く仕上げられた端部がわずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には凹線状の浅い沈線が１本引かれている。	雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい黄橙色	

518	土師器 皿	口径 16.2	上方への開きが小さく短い体部と、円く仕上げられた端部がわずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には凹線状の浅い沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 雲母	良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
519	土師器 皿	口径 18.0	上方への開きが小さく短い体部と、円く仕上げられた端部が、わずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には凹線状の浅い沈線が１本引かれている。	石英･長石・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
520	土師器 皿	口径 16.1	直線的で上方への開きが小さい体部と、鈍く尖らされた端部がわずかに外反する口縁部を持つ	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい黄橙色	
521	土師器 皿	口径 19.3	直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた端部がわずかに外反する口縁部を持つ。	石英・雲母	不良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
522	土師器 羽釜	口径 20.6	直立する筒状の体部と、頂部が凹線状にくぼむ口縁端部近くに幅広の鍔が水平に廻されている。鍔端部は浅く凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　暗灰黄色 外面　灰黄色	
523	土師器 羽釜	口径 21.2	直立する筒状の体部と、端部が内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くにはわずかに外反する幅広の鍔が廻され、端部は浅く凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰黄褐色 外面　にぶい黄橙色	
524	土師器 羽釜	口径 21.7	直立する筒状の体部と、頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くにはわずかに外反する幅広の鍔が廻され、端部は浅く凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰黄褐色 外面　にぶい橙色	
525	土師器 羽釜	口径 21.8	直立する筒状の体部と、頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くには水平にのびる幅広の鍔が廻され、上方に拡張された端部は凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母	良好	内面　灰黄褐色 外面　にぶい黄橙色	
526	土師器 羽釜	口径 22.2	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には端部が平坦に仕上げられた外反する短い鍔が廻されている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
527	土師器 羽釜	口径 23.3	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には端部が凹線状にくぼむ短い鍔が水平に廻されている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面ともにぶい黄褐色	
528	土師器 羽釜	口径 23.0	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が平坦に仕上げられた口縁部を持つ。口縁部には端部が平坦に仕上げられた鍔が水平に廻されている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰黄褐色 外面　にぶい黄橙色	
529	土師器 羽釜	口径 21.8	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁端部近くに幅広の鍔が水平に廻されている。鍔端部は上方に拡張され浅く凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
530	土師器 羽釜	口径 26.4	直立する筒状の体部と、頂部が鈍く尖らされた口縁部を持つ。口縁部には端部が凹線状にくぼむ短い鍔が水平に廻されている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 角閃石	良好	内外面ともにぶい褐色	
531	土師器 羽釜	口径 25.5	直立する筒状の体部と、外方に拡張された頂部が平坦な口縁部を持つ。口縁部には端部が上方に拡張され平坦に仕上げられた短い鍔が水平に廻されている。	石英・雲母	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　灰黄褐色	
532	土師器 羽釜	口径 29.6	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くには外反する鍔が廻されている。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内外面とも黄橙色	
533	土師器 羽釜	口径 22.8	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には端部が平坦に仕上げられた外反する短い鍔が廻されている。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内面　灰黄色 外面　にぶい黄橙色	内外面ともに 黒斑あり
534	土師器 羽釜	口径 27.6	直立する筒状の体部と、頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には水平にのびる短い鍔が廻され、外反する端部は凹線状にくぼんでいる。	石英･長石	良好	内外面とも黄橙色	
535	土師器 羽釜	口径 22.2	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には外反する短い鍔が廻されている。	石英･長石・ 雲母	良	内外面ともにぶい褐色	
536	土師器 羽釜	口径 30.8	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には外反する鍔が廻されている。	石英･長石・ 赤色斑粒	良好	内外面とも黄橙色	
537	土師器 羽釜	口径 28.2	直立する筒状の体部と、頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には端部が鈍く尖り外反する短い鍔が廻されている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄褐色 外面　灰黄褐色	
538	土師器 羽釜	口径 25.5	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁部には外反する鍔が廻されている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい褐色	
539	土師器 羽釜	口径 24.0	直立する筒状の体部と、頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くには水平にのびる幅広の鍔が廻されている。鍔端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。	石英･長石	良好	内面　褐色 外面　明赤褐色	
540	土師器 羽釜	口径 24.0	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くに水平に鍔が廻されている。鍔端部は円く仕上げられている。	石英･長石・ 雲母	良	内外面ともにぶい黄褐色	

541	土師器 羽釜	口径 23.0	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くにはわずかに外反する鍔が廻されている。鍔端部は上方に拡張され円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	良好	内面　灰黄褐色 外面　にぶい黄褐色	
542	土師器 羽釜	口径 23.5	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が凹線状にくぼむ口縁部を持つ。口縁端部近くには外反する短い鍔が廻されている。鍔端部は円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	良好	内面　灰褐色 外面　にぶい橙色	
543	土師器 羽釜	口径 28.8	直立する筒状の体部と、内方に拡張された頂部が円く仕上げられた口縁部を持つ。口縁部には端部が円く仕上げられた短い鍔が水平に廻されている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　暗灰黄色 外面　褐色	
544	土師器 甕	口径 20.9	球形に膨らむ体部と、「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部は凹線状にくぼむ。	長石・雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	
545	土師器 甕	口径 16.2	緩やかに膨らむ長い体部と、括れを持つ頸部から上方にのびる直線的な口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	石英・長石・ 赤色斑粒	良	内面　明赤褐色 外面　橙色	
546	土師器 甕	口径 18.4	緩やかな膨らみを持つ体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方にのびる直線的な口縁部を持つ。肥厚する口縁端部は円く仕上げられている。	長石・雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　黄灰色 外面　にぶい黄褐色	
547	土師器 甕	口径 15.3	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は平坦でわずかにくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい褐色 外面　明赤褐色	
548	土師器 甕	口径 24.4	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに内彎しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は平坦でわずかにくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄褐色 外面　にぶい赤褐色	
549	土師器 甕	口径 32.4	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は平坦で頂部がわずかにくぼんでいる。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい褐色 外面　にぶい橙色	
550	土師器 甕	口径 20.6	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が平坦に仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
551	土師器 甕	口径 25.5	下半部にわずかな膨らみを持つ筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに内彎しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい赤褐色 外面　にぶい褐色	
552	土師器 甕	口径 17.6	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい黄橙色 外面　明赤褐色	
553	土師器 甕	口径 19.2	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・ 結晶片岩	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
554	土師器 甕	口径 25.8	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部は平坦に仕上げられる。	石英・長石・ 雲母	良	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	
555	土師器 甕	口径 23.8	下半部にわずかな膨らみを持つ筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁は端部が上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい褐色	
556	土師器 甕	口径 29.0	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい赤褐色 外面　明赤褐色	
557	土師器 甕	口径 27.2	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに内彎しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外ともに灰黄褐色	
558	土師器 甕	口径 29.6	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに内彎しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	
559	土師器 甕	口径 26.0	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
560	土師器 甕	口径 26.4	直立する筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい褐色 外面　明赤褐色	
561	土師器 甕	口径 26.6	「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は平坦で頂部がわずかにくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい褐色	
562	土師器 甕	口径 27.0	「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は平坦で頂部がわずかにくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい褐色	
563	土師器 甕	口径 25.6	筒状の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は平坦で頂部がわずかにくぼんでいる。	石英・長石	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　暗灰黄色	

564	土師器 甕	口径 25.5	「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は鈍く尖らされている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰黄色	
565	土師器 甕	口径 16.0	球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ。口縁端部は鈍く尖らされている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも橙色	
566	土師器 甕	口径 17.0	球形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的で短い口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	石英・雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	不良	内面　灰褐色 外面　にぶい褐色	内外面に煤付着
567	土師器 鍋	口径 27.4	わずかな膨らみを持つ体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
568	土師器 鍋	口径 32.4	わずかな膨らみを持つ体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	長石・ 赤色斑粒	不良	内外面とも明赤褐色	
569	土師器 鍋	口径 38.4	わずかな膨らみを持つ体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
570	土師器 鍋	口径 29.3	上方へ開く直線的な体部と、「く」の字に屈曲する頸部から上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ。口縁端部は凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	
571	土師器 鉢	口径 19.0	内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。	石英・長石・ 赤色斑粒	不良	内外面とも橙色	
572	土師器 竈		アーチ状の焚き口部分には帯状の粘土が貼り付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　にぶい褐色	
573	土師器 竈	口径 31.1	接地面は肥厚し平坦に仕上げられる。	石英・長石・ 雲母	良	内外ともに橙色	
574	黒色土器 椀	口径 17.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が鈍く尖る口縁部を持つ。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	A類
575	黒色土器 椀	口径 15.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が鈍く尖りわずかに外反する口縁部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　黒色 外面　にぶい黄橙色	A類
576	黒色土器 椀	高台径 10.0	底部には接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられる。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　黄灰色 外面　橙色	A類
577	黒色土器 椀	高台径 7.6	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　オリーブ黒色 外面　灰色	A類
578	黒色土器 椀	高台径 8.2	底部には接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられる。	長石・ 赤色斑粒	良	内面　黒褐色 外面　にぶい黄橙色	A類
579	黒色土器 椀	高台径 8.8	底部には接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられる。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内面　オリーブ黒色 外面　橙色	A類
580	黒色土器 椀	高台径 8.4	底部には接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられる。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　灰色 外面　にぶい黄橙色	A類
581	黒色土器 椀	高台径 9.0	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　灰色 外面　にぶい黄橙色	A類
582	黒色土器 椀	高台径 8.1	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母	良	内面　黒褐色 外面　にぶい黄橙色	A類
583	黒色土器 椀	高台径 7.6	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい橙色	A類
584	黒色土器 椀	高台径 9.1	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く低い高台が付けられる。	石英・雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　灰色 外面　橙色	A類
585	黒色土器 椀	高台径 6.8	底部には接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　黄灰色 外面　にぶい黄橙色	A類
586	黒色土器 椀	高台径 6.9	底部には接地部が円く仕上げられた直立する低い高台が付けられる。	石英・長石・ 赤色斑粒	不良	内面　黄灰色 外面　にぶい橙色	A類
587	黒色土器 椀	高台径 7.6	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　黒褐色 外面　浅黄橙色	B類

588	黒色土器 椀	高台径 6.0	底部には接地部が円く仕上げられたわずかに下方に開く低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良	内面　暗灰色 外面　黒色	B類
589	黒色土器 椀	高台径 8.0	底部には接地部が円く仕上げられた下方に開く低い高台が付けられる。	長石・雲母	不良	内面　黄灰色 外面　橙色	A類
590	黒色土器 椀	高台径 8.2	底部には接地部がにぶく尖らされた直立する低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　オリーブ黒色 外面　にぶい橙色	A類
591	黒色土器 椀	高台径 7.0	底部には接地部がにぶく尖らされた直立する低い高台が付けられる。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内面　オリーブ黒色 外面　明赤褐色	A類
592	黒色土器 鉢	口径 16.0	内彎する体部と、「く」の字に屈曲する頸部から水平にのびる短い口縁部を持つ。上方に拡張された口縁は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母	良	内面　黒色 外面　にぶい黄褐色	A類
593	須恵器 蓋杯	口径 11.9	底部から体部にかけては緩やかに内彎しながら上方に大きく開く。受け部は比較的長く端部は円い。立ち上がりは短く内傾している。	長石・雲母	良好	内外面とも灰色	
594	須恵器 蓋杯	口径 16.0	上方への開きが大きい扁平な体部を持つ。短い口縁は立ち上がりが内屈し、端部が円く仕上げられている。受け部は比較的長く、端部は円い。	長石	良	内外面とも灰白色	
595	須恵器 杯	口径 12.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、鈍く尖らされた口縁部を持つ。底部と体部の間は屈曲し境が明瞭。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　褐灰色	
596	須恵器 杯	口径 12.0	直線的で上方への開きが小さい体部と、鈍く尖らされた口縁部を持つ。底部と体部の間は屈曲し境が明瞭。	石英･長石	やや良好	内外面とも灰白色	
597	須恵器 杯	口径 13.0	直線的で上方への開きが小さい体部と、鈍く尖らされたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英･長石	良好	内面　灰色 外面　灰白色	
598	須恵器 杯	口径 14.9	直線的で上方への開きが小さい体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持つ。底部と体部の間は屈曲し境が明瞭。	石英･長石・ 雲母	良好		
599	須恵器 杯	口径 14.0	直線的で上方への開きが小さい体部と、端部が鈍く尖らされたわずかに外反する口縁部を持つ。底部と体部の間は屈曲し境が明瞭。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	
600	須恵器 杯	口径 14.2	直線的で上方への開きが小さい体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持つ。底部には断面方形の低い高台がつく。	石英･長石・ 雲母	良	内面　灰色 外面　灰白色	
601	須恵器 杯蓋	口径 12.3	扁平な天井部と、端部が短く内側に屈曲する口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも灰白色	
602	須恵器 杯蓋	口径 13.0	扁平な天井部と、端部が短く内側に屈曲する口縁部を持つ。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも灰黄色	口縁部内外面に煤付着
603	須恵器 杯蓋	口径 13.4	天井部から口縁部にかけては緩やかに内彎している。口縁端部は屈曲部を持たない。	長石	良好	内外面とも灰色	
604	須恵器 杯蓋	口径 17.2	天井部から口縁部にかけては緩やかに内彎している。口縁端部はわずかに屈曲する。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	不良	内面　にぶい橙色 外面　褐灰色	
605	須恵器 杯蓋	器高 2.2	宝珠摘。	雲母	良好	内外面とも灰白色	
606	須恵器 杯蓋	器高 1.5	摘は扁平で頂部がわずかに突出する擬宝珠摘。	石英･長石・ 雲母	良	内外面とも青灰色	
607	須恵器 杯蓋	器高 1.6	摘は扁平で頂部がわずかに突出する擬宝珠摘。	石英･長石・ 雲母	良	内外面とも灰白色	
608	須恵器 杯蓋	器高 1.5	摘は扁平で頂部がわずかに突出する擬宝珠摘。	長石	良好	内外面とも灰色	
609	須恵器 杯	底径 8.0	上方への開きが小さい体部は底部との境が円く仕上げられている。	石英･長石・ 赤色斑粒	不良	内面　灰白色 外面　暗灰黄色	
610	須恵器 杯	底径 7.0	円盤状の厚い底部は体部との境がわずかに外方に張り出している。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	
611	須恵器 杯	底径 6.6	直線的で上方への開きが大きい体部と、円盤状の厚い底部を持つ。底部と体部の境はわずかに外方に張り出している。	石英･長石	良好	内外面とも青灰色	
612	須恵器 杯	底径 7.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた底部を持つ。	石英･長石	不良	内外面とも灰白色	
613	須恵器 高台付杯	高台径 11.6	直線的で上方への開きが小さい体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	
614	須恵器 高台付杯	高台径 11.4	直線的で上方への開きが小さい体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	

615	須恵器 高台付杯	高台径 10.4	直線的な体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　オリーブ灰色 外面　灰色	
616	須恵器 高台付杯	高台径 9.0	直線的で上方への開きが小さい体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
617	須恵器 高台付杯	高台径 11.4	直線的で上方への開きが小さい体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石	良	内外面とも灰白色	
618	須恵器 高台付杯	高台径 10.2	直線的な体部と、わずかに下方に開く断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石	良好	内外面とも灰白色	
619	須恵器 高台付杯	高台径 8.2	直線的な体部と、わずかに下方に開く断面方形の高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母・ 黒色斑粒	不良	内外面とも灰白色	
620	須恵器 高台付杯	高台径 10.2	直線的な体部と、わずかに下方に開く断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰白色	
621	須恵器 高台付杯	高台径 10.0	直線的な体部と、わずかに下方に開く断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母	不良	内面　褐灰色 外面　灰褐色	
622	須恵器 高台付杯	高台径 9.2	直線的で上方への開きが小さい体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	石英･長石	良好	内外面とも灰色	
623	須恵器 高台付杯	高台径 10.0	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良	内面　灰白色 外面　青灰色	
624	須恵器 高台付杯	高台径 9.0	底部には、わずかに下方に開く断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石	良好	内外面とも灰色	
625	須恵器 高台付杯	高台径 9.8	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも灰白色	
626	須恵器 高台付杯	高台径 8.2	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良	内外面とも灰色	
627	須恵器 高台付杯	高台径 9.0	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも灰色	
628	須恵器 高台付杯	高台径 10.0	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰色	
629	須恵器 高台付杯	高台径 8.0	底部には、わずかに下方に開く断面方形の低い高台が付けられる。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	
630	須恵器 高台付杯	高台径 10.0	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英･長石・ 雲母	良	内外面とも青灰色	
631	須恵器 高台付杯	高台径 7.7	直線的で上方への開きが小さい体部と、わずかに下方に開く断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	石英・雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰白色	
632	須恵器 高台付杯	高台径 4.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、わずかに下方に開く断面方形の高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母	良好	内外面とも灰色	
633	須恵器 高台付皿	高台径 6.0	丸底の底部に「ハ」の字に開く低い高台を持つ。高台の接地部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。	石英･長石	良好	内外面とも灰白色	
634	須恵器 壺	口径 11.8	「く」の字に屈曲する頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は端部が上方に拡張され凹線状にくぼんでいる。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	
635	須恵器 壺	口径 10.9	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は端部が上方に拡張され凹線状にくぼんでいる。	長石	良好	内外面とも灰色	
636	須恵器 壺	口径 11.2	口縁は端部が上方に拡張され凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも灰色	
637	須恵器 壺	口径 10.4	緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は端部が上方に拡張され凹線状にくぼんでいる。	長石	良好	内外面とも灰色	
638	須恵器 壺	口径 8.2	緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は端部が外方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも青灰色	
639	須恵器 壺	口径 8.0	上方への開きが小さい筒状の口縁は端部が平坦に仕上げられる。	長石・ 赤色斑粒	良好	内面　灰色 外面　黄灰色	
640	須恵器 壺	口径 7.0	緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は端部が外方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内面　暗オリーブ灰色 外面　緑黒色	

641	須恵器 壺	口径 9.2	緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は端部が鈍く尖らされている。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内面　にぶい黄褐色 外面　灰白色	
642	須恵器 壺	口径 16.0	上方に大きく開く口縁は頂部が凹線状にくぼんでいる。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　灰色 外面　黄灰色	
643	須恵器 壺	口径 14.5	口縁部は「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら上方に大きく開く。	石英･長石・ 雲母	良	内面　灰色 外面　青灰色	
644	須恵器 壺	口径 15.0	上方に大きく開く口縁は端部がわずかに内方に拡張され頂部が凹線状にくぼんでいる。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内面　灰色 外面　灰白色	
645	須恵器 壺	口径 11.4	球形の体部と、端部が円く仕上げられた直立する短い口縁部を持つ。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰色	
646	須恵器 短頸壺	口径 13.6	球形の体部と、端部が鈍く尖らされた直立する短い口縁部を持つ。	長石	良好	内外面とも灰白色	
647	須恵器 壺	口径 10.0	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は、端部が上方に拡張されている。	石英・雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰色	
648	須恵器 壺	器高 6.7	上方に大きく開く口縁は端部が方形に仕上げられる。	石英・雲母	良好	内外面とも灰色	
649	須恵器 壺	器高 5.0	口縁部は「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら上方に大きく開く。	石英・雲母	良好	内面　青灰色 外面　紫灰色	
650	須恵器 壺	器高 4.4	口縁部は「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら上方に大きく開く。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　褐灰色 外面　灰赤色	
651	須恵器 壺	器高 3.2	底部との境から外上方に向かって直線的にのびる体部は、肩の部分で「く」の字に内屈している。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰白色	
652	須恵器 壺	器高 3.5	肩の張る膨らみの強い体部を持つ。	長石・ 赤色斑粒	やや良好	内外面とも灰白色	
653	須恵器 短頸壺	器高 7.0	球形の体部と、直立する口縁部を持つ。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内面　灰白色 外面　暗オリーブ灰色	
654	須恵器 壺蓋	口径 14.8	扁平な天井部と、端部が円く仕上げられた直立する口縁部を持つ。	石英･長石・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰色	
655	須恵器 壺蓋		扁平な天井部と口縁部との境は円く仕上げられる。	長石・雲母	良	内面　黄灰色 外面　灰白色	
656	須恵器 甕	口径 20.6	直線的で上方への開きが大きい口縁は端部が上方に拡張され凹線状にくぼむ。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰色	
657	須恵器 甕	口径 22.3	直線的で上方への開きが大きい口縁は端部が方形に仕上げられ、頂部が凹線状にくぼむ。	長石・角閃石	やや良好	内面　灰色 外面　灰白色	
658	須恵器 甕	口径 23.9	直線的で上方への開きが大きい口縁は端部が外方に拡張され、頂部は平坦に仕上げられる。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも黄灰色	
659	須恵器 甕	口径 30.4	緩やかに外反する口縁は端部近くに段が設けられ、頂部は平坦に仕上げられる。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰白色	
660	須恵器 甕	口径 34.1	緩やかに外反する口縁は端部近くに段が設けられ、頂部は平坦に仕上げられる。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰白色	
661	須恵器 甕		緩やかに外反する口縁は端部が外方に拡張され、頂部は平坦に仕上げられる。	石英･長石・ 雲母	良	内面　灰色 外面　暗青灰色	
662	須恵器 甕	器高 4.6	膨らみの強い体部と、「く」の字に屈曲する頸部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
663	須恵器 壺	底径 10.5	底部は上げ底。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも灰色	
664	須恵器 壺	底径 7.5	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	良	内面　明青灰色 外面　青灰色	
665	須恵器 壺	底径 7.6	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面褐灰色 外面赤灰色	
666	須恵器 壺	底径 9.8	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	不良	内外面とも灰黄色	
667	須恵器 壺	底径 9.8	直線的で上方への開きが小さい体部と、平底の底部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内面　灰白色 外面　オリーブ灰色	
668	須恵器 壺	底径 8.4	直線的で比較的上方への開きが大きい体部と、平底の底部を持つ。	長石・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰色	

669	須恵器 壺	底径 12.9	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	長石・雲母	良好	内外面とも灰色	
670	須恵器 壺	底径 15.0	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	長石	良	内外面とも灰白色	
671	須恵器 壺	底径 8.0	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　青灰色 外面　灰褐色	
672	須恵器 壺	底径 8.2	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰色	底部に接合痕あり
673	須恵器 壺	底径 10.0	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英・長石	良好	内外面とも灰白色	
674	須恵器 壺	底径 15.4	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰色	
675	須恵器 壺	底径 13.0	平底の底部と、直線的で比較的上方への開きが大きい体部を持つ。	長石・雲母	良	内外面とも灰色	
676	須恵器 壺	底径 15.0	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰白色	
677	須恵器 小壺	底径 4.0	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。底部と体部の境は外方に張り出している。	石英・長石	良	内外面とも灰色	底部は回転糸切り
678	須恵器 壺	底径 6.0	平底の底部と、ゆるやかに内彎する上方への開きが小さい体部を持つ。底部と体部の境はわずかに外方に張り出している。	石英・雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面ともに灰白色	底部は回転糸切り
679	須恵器 壺	底径 5.6	平底の底部と、ゆるやかに内彎する上方への開きが小さい体部を持つ。	長石・雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内面　灰黄褐色 外面　にぶい黄橙色	底部は回転糸切り
680	須恵器 壺	底径 9.2	平底の底部と、上方への開きが大きい体部を持つ。底部と体部の境はわずかに外方に張り出している。	長石	良	内外面とも灰白色	底部は回転糸切り
681	須恵器 壺	底径 9.6	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。底部と体部の境は外方に張り出している。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面とも灰色	底部は回転糸切り
682	須恵器 壺	底径 10.2	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。底部と体部の境は外方に張り出している。	長石・ 赤色斑粒	やや良好	内外面とも灰色	底部は回転糸切り
683	須恵器 高台付壺	高台径 10.0	直線的で上方への開きが小さい体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも黄灰色	
684	須恵器 高台付壺	高台径 10.1	直線的で上方への開きが小さい体部と、わずかに下方に開く断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
685	須恵器 高台付壺	高台径 6.3	直線的で上方への開きが小さい体部と、接地部が円く仕上げられ下方に開く高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰色	体部外面に格子目タタキ
686	須恵器 高台付壺	高台径 5.0	内彎する体部と、断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・ 赤色斑粒	良	内外面とも黄灰色	
687	須恵器 高台付壺	高台径 7.7	わずかに内彎する体部と、下方に開く断面方形の高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰色	
688	須恵器 高台付壺	高台径 11.0	直線的な体部と、外下方に開く断面方形の高台が付けられた底部を持つ。	長石	良	内外面とも灰色	
689	須恵器 高台付壺	高台径 6.9	直線的で上方への開きが比較的大きい体部と、直立する断面方形の高い高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石	やや良好	内外面とも灰白色	
690	須恵器 高台付壺	高台径 8.0	直線的で比較的上方への開きが大きい体部と、直立する断面方形の高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良好	内面灰色 外面灰白色	内外面に自然釉付着
691	須恵器 高台付壺	高台径 8.0	直線的で比較的上方への開きが大きい体部と、下方に開く断面方形の高台がつく底部を持つ。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰色	
692	須恵器 高台付壺	高台径 10.0	底部には接地部が内外方に拡張された断面方形の低い高台が付けられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも灰色	貼り付け高台
693	須恵器 高台付壺	高台径 11.0	上方への開きが小さく内彎する体部と、接地部が外方に拡張され、わずかに下方に開く低い高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰色	
694	須恵器 高台付壺	高台径 11.2	底部には接地部が内外方に拡張された比較的高い高台が付けられる。	長石・雲母	良	内外面とも灰色	
695	須恵器 高台付壺	高台径 16.0	直線的で上方への開きが小さい体部と、接地部が外方に大きく拡張された低い高台が付けられた底部を持つ。	石英・長石	やや不良	内面　黄灰色 外面　灰色	

696	須恵器 高台付壺	高台径 7.4	直線的で上方への開きが小さい体部と、直立する断面方形の低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母	やや良好	内面　褐灰色 外面　灰黄褐色	
697	須恵器 高台付壺	高台径 9.0	底部には直立する断面方形の低い高台が付けられる。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	
698	須恵器 高台付壺	高台径 8.2	直線的で上方への開きが小さい体部と、内端部に接地面を持つ低い高台が付けられた底部を持つ。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
699	須恵器 短頸壺	器高 3.2	肩部が直角に近い角度で屈曲する。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	
700	須恵器 高坏？	口径 17.2	端部が鈍く尖らされた口縁部は体部との境に屈曲部を持ち、緩やかに外反しながら上方にのびている。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	
701	須恵器 鉢	口径 16.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、わずかに肥厚し円く仕上げられた口縁端部を持つ。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	
702	須恵器 鉢	口径 18.5	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部を肥厚させ円く仕上げた口縁部を持つ。	長石	良	内外面とも灰色	
703	須恵器 鉢	口径 18.2	端部を肥厚させ円く仕上げた口縁部を持つ。	石英･長石・ 黒色斑粒	良好	内面　灰白色 外面　灰色	
704	須恵器 鉢	口径 22.0	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部を肥厚させ円く仕上げた口縁部を持つ。	長石・ 赤色斑粒	やや不良	内外面とも灰白色	
705	須恵器 鉢	口径 21.3	緩やかに内彎しながら上方にむかって大きく開く体部と、端部を肥厚させ円く仕上げた口縁部を持つ。	石英･長石・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰色	
706	須恵器 鉢	口径 20.4	直線的で上方への開きが大きい体部と、端部を肥厚させ円く仕上げた口縁部を持つ。	長石	良	内外面とも灰白色	底部は回転糸切り
707	須恵器 円面硯	底径 16.1	筒状の脚台に三角の透かしが施された圏足硯。脚台上部には凸帯が廻されている。	長石	良好	内外面とも灰色	
708	陶器 椀	口径 17.4	上方への開きが大きい体部と、わずかに外反する端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。内面には陰刻花紋が付けられる。	長石	良好	内外面とも灰白色	緑釉
709	陶器 椀	口径 13.0	緩やかに内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。内外面とも薄く釉がかけられる。	長石・雲母	良好	内外面とも青灰色	緑釉
710	陶器 高台付皿	口径 13.7	上方に大きく開く体部と、端部が円く仕上げられわずかに外反する口縁部を持つ。底部には接地部の内面が凹線状にくぼみ下方に向かって「ハ」の字に開く低い削り出し高台が付けられる。高台接地部から外底部以外に薄い釉がかけられている。	長石・雲母	良好	内外面とも灰色	緑釉
711	陶器 皿	口径 9.4	上方に大きく開く直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。底部は平高台であろうか？口縁端部付近と底部を除き薄く釉がかけられている。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面とも明青灰色	緑釉
712	陶器 椀	高台径 8.0	内彎する上方への開きが大きい体部と、断面方形の低い貼付高台を持つ。内面見込部には陰刻花紋が付けられている。高台外底部を除き全体に薄く釉がかけられている。	長石・雲母	非常に良好	内外面とも灰白色	緑釉
713	陶器 椀	高台径 8.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、断面方形の低い貼付高台を持つ。内面には丁寧なヘラミガキが加えられ見込部には陰刻花紋が付けられている。高台外底部を除き全体に薄い釉がかけられている。	雲母	非常に良好	内外面とも灰白色	緑釉
714	陶器 椀	高台径 7.0	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、直立する断面方形の貼付高台を持つ。内面見込部にはヘラミガキが施され、内外面とも全面に薄い釉がかけられている。	石英･長石・ 雲母	良好	内外面とも灰黄色	緑釉
715	陶器 椀？皿？	高台径 7.2	底部には直立する断面方形の低い貼付高台が付けられる。内外面とも全面に薄い釉がかけられている。	石英	不良	内外面とも灰オリーブ色	緑釉
716	陶器 椀？皿？	高台径 6.0	底部には直立する断面方形の低い削り出し高台が付けられる。高台部分には薄く釉がかけられている。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	緑釉
717	陶器 椀？皿？	高台径 5.6	底部には直立する断面方形の低い削り出し高台が付けられる。体部内面には暗紋が付けられ、内外面とも比較的厚い釉がかけられている。	石英・雲母	不良	内外面とも灰白色	緑釉
718	陶器 椀？皿？	高台径 7.3	底部には端部に面取りが施された断面方形の幅広で低い削り出し高台が付けられる。高台畳付部分と外底面以外全面に釉がかけられている。	長石・雲母	良好	内外面とも灰白色	緑釉
719	陶器 椀？皿？	高台径 6.8	底部には直立する断面方形の低い削り出し高台が付けられる。内外面全体に薄く釉がかけられている。	長石・雲母・ 赤色斑粒	不良	内外面とも灰白色	緑釉
720	陶器 椀？皿？	高台径 10.0	底部には下方に向かってわずかに開く接地部が円く仕上げられた削り出し高台が付けられる。	長石	不良	内外面ともにぶい黄橙色	緑釉

721	陶器 皿	高台径 6.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、低い削り出し高台を持つ。高台接地部を残し全体に薄い釉がかけられている。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰色がかった オリーブグリーン色	緑釉
722	陶器 皿	高台径 7.1	高台接地部の内面が凹線状にくぼみ、わずかに下方に開く低い貼付高台を持つ。外底部には回転糸切り痕が残される。高台畳付部分と外底部以外全面に比較的厚い釉がかけられている。	長石	極めて良好	内外面ともにぶい黄緑色	緑釉
723	陶器 皿	高台径 7.0	内彎する体部と、接地部が凹線状にくぼむ低い貼付高台を持つ。内外面全体に釉がかけられ、体部内面にはヘラミガキが加えられた可能性がある。	石英	やや良好	内外面とも灰色がかった オリーブ色	緑釉
724	陶器 皿	高台径 5.9	内彎する体部と、やや上げ底気味の平底の削り出し高台を持つ。外面には外底部を除き釉がかけられている。	石英・雲母	不良	内外面とも灰白色	緑釉
725	陶器 皿	底径 5.8	内彎する体部と、やや上げ底気味の平底の削り出し高台を持つ。内面には釉がかけられている。	石英・長石・ 雲母	不良	内外面とも黄橙色	緑釉
726	陶器 皿	底径 5.7	内彎する体部と、平底の底部を持つ。底部と体部の境には弱い段を持つ。	石英・長石・ 雲母	不良	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄橙色	緑釉
727	陶器 皿	底径 6.5	内彎する体部と、削り出しによる蛇ノ目高台の底部を持つ。内外面全体に釉がかけられる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　グレイみのオリーブ グリーン 外面　グレイ	緑釉
728	陶器 皿	底径 5.4	内彎する体部と、平底の貼付高台を持つ。高台部分はヘラケズリで形が整えられ、外底部には回転糸切り痕が残される。内面見込部には回転力を使用したナデ調整が加えられ薄く釉がかけられる。高台部分は露胎のまま残されている。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内面　灰白色 外面　灰色	緑釉
729	陶器 皿	口径 17.0	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。内面には薄く釉がかかるが、外面は口縁端部付近を除きほとんど釉がかけられた痕跡がない。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰白色	灰釉
730	陶器 椀	口径 13.4	緩やかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。内外面とも薄く釉がかけられている。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	灰釉
731	陶器 椀	口径 13.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。内面は全体に釉がかかるが外面は露胎のまま残されている。	石英・長石・ 雲母	良	内面　灰色がかった黄色 外面　灰白色	灰釉
732	陶器 段皿	口径 17.1	端部が円く仕上げられ水平に近い角度で外方にのびる口縁部と、内彎する体部との境が強く屈曲する段皿。体部内面と外面の一部に施釉されている。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	灰釉
733	陶器 段皿	高台径 7.6	上方への開きが大きい体部と、口縁部の境に弱い屈曲部を持つ段皿。底部には貼付により比較的高い三日月形高台が付けられる。内面全体に施釉されているが、重ね焼きの痕跡が残される見込部の釉は薄く、所々に塗りむらがある。	長石	良	内外面とも灰白色	灰釉
734	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 9.8	内彎する体部と、比較的高い三日月形高台が貼付けられた底部を持つ。内外面はいずれも露胎のまま残されている。	長石・雲母	やや良好	内面　灰白色 外面　浅黄色	灰釉
735	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 9.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、高い三日月形高台が貼り付けられた底部を持つ。外面は高台半ばまで施釉されているが内面は見込部が露胎のまま残される。一部に釉がかかっているが自然釉の可能性が高い。またこのほかに見込部には漆膜が付着している。	石英・長石	良	内外面とも灰白色	灰釉
736	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 8.6	内彎する上方への開きが大きい体部と、直立する高い貼付高台を持つ。内面見込部は露胎のまま残され重ね焼きの痕が残される。体部外面は途中で釉が途切れている。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	灰釉
737	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 8.0	内彎する上方への開きが大きい体部と、接地部が円く仕上げられた貼付高台を持つ。内面見込部と外面は露胎のまま残されている。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰白色	灰釉
738	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 6.2	内彎する上方への開きが大きい体部と、接地部が円く仕上げられた低い高台を持つ。内面見込部と外面の高台部分は露胎のまま残される。	長石	良	内外面とも灰白色	灰釉
739	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 7.5	底部には比較的高い三日月形高台が貼り付けられる。	石英・長石	良	内外面とも灰白色	灰釉
740	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 7.4	底部には高い三日月形高台が付けられる。内面見込部の一部と、高台部分全面が露胎のまま残されている。	石英・雲母	良好	内外面とも灰白色	灰釉
741	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 7.0	底部には直立する高い三日月形高台が付けられる。重ね焼きの痕が残る内面見込部は一部露胎のまま残されている。外面は高台畳付付近まで釉がかけられている。	石英	良好	内外面とも灰白色	灰釉
742	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 6.9	底部には高い三日月形高台が付けられる。重ね焼きの痕跡が残る内面見込部は釉が蛇ノ目状に塗り残されている。外面は一部が高台の途中まで釉がかけられている。	長石	やや良好	内面　にぶい黄橙色 外面　灰白色	灰釉

743	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 6.7	底部には高い三日月形高台が貼り付けられる。重ね焼きの痕跡が残された内面見込部と外面の高台部分は全面露胎のまま残される。体部は高台との境が高台に沿って内側に向かって連続して打ち欠かれ円盤状に加工されている。	長石・雲母	良好	内外面とも灰白色	灰釉
744	陶器 高台付皿? 高台付椀?	高台径 5.8	底部には接地部が円く仕上げられた比較的高い高台が付けられる。重ね焼きの痕跡が残された内面見込部は露胎のまま残され、漆膜が付着している。外面の高台部分は全面露胎のまま残されている。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰白色	灰釉
850	製塩土器	口径 12.8	砲弾型の体部と、端部がにぶく尖る内彎する口縁部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　浅黄橙色 外面　灰白色	
851	製塩土器	口径 9.2	砲弾型の体部と、端部がにぶく尖る内彎する口縁部を持つ。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰褐色 外面　にぶい橙色	
852	製塩土器	口径 9.0	砲弾型の体部と、端部がにぶく尖る内彎する口縁部を持つ。内面には布目圧痕が残されている。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面ともにぶい黄橙色	

第28表　包含層出土遺物観察表（中世・近世）

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
745	土師器 鍋	口径 30.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた直線的な口縁部を持つ。頸部は「く」の字に屈曲する。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄橙色	
746	土師器 羽釜	口径 22.2	わずかに内彎する体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。口縁端部ちかくには断面半円形の低い鍔が廻されている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　灰黄褐色	外面に煤が付着
747	土師器 羽釜	口径 24.3	直立する体部と、端部が鈍く尖らされたわずかに内傾する口縁部を持つ。口縁端部ちかくには断面半円形の低い鍔が廻されている。	石英・長石・ 雲母	良	内面　にぶい褐色 外面　灰黄褐	
748	土師器 羽釜	口径 28.4	直立する体部と、端部が鈍く尖らされたわずかに内傾する口縁部を持つ。鍔は消失し口縁端部との間が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母	良好	内面　にぶい黄橙色 外面　にぶい黄褐色	
749	土師器 羽釜	口径 22.6	直立する体部と、端部が鈍く尖らされたわずかに内傾する口縁部を持つ。鍔は消失し口縁端部との間が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい黄橙色	外面に煤が付着
750	土師器 羽釜	口径 25.3	体部との境で内傾する口縁は端部近くで外反する。口縁部と体部の境には、端部が鈍く尖らされた低い鍔が廻されている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともにぶい黄橙色	はりま形羽釜
751	土師器 羽釜？	長さ 12.1	断面が長楕円形で一端が撥状に開く。	石英・長石・ 雲母		にぶい黄橙色	脚か？
752	瓦器 椀	口径 15.3	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	長石・雲母	良好	内外面ともオリーブ黒色	
753	瓦器 椀	口径 15.2	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持つ。	石英・長石	やや不良	内外面とも灰色	
754	瓦器 椀	口径 16.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内外面ともオリーブ黒色	
755	瓦器 椀	口径 14.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰色	
756	瓦器 椀	口径 11.8	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。	長石	良	内面　オリーブ黒色 外面　灰色	
757	瓦器 小皿	口径 9.2	直線的な体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ち、底部と体部の間は円く仕上げられる。	石英・長石	やや不良	内外面とも灰色	
758	瓦器 小皿	口径 8.9	内彎する体部と、円く仕上げられた口縁端部を持ち、底部と体部の間は円く仕上げられる。	石英・長石・ 雲母	良	内面　灰色 外面　暗灰色	
759	瓦器 小皿	口径 8.0	内彎する体部と、端部が円く仕上げられたわずかに外反する口縁部を持ち、底部と体部の間は円く仕上げられる。	黒色斑粒	不良	内面　暗灰色 外面　灰色	
760	瓦器 椀	高台径 4.4	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、断面半円形の低い貼付高台を持つ。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面とも暗灰色	
761	瓦器 椀	高台径 5.0	緩やかに内彎する上方への開きが大きい体部と、断面三角形の低い高台が付けられた底部を持つ。	石英・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	内外面、高台部に接合痕あり
762	瓦器 椀	高台径 5.8	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英・長石	良	内外面とも灰色	
763	瓦器 椀	高台径 5.8	底部には断面半円形の低い高台が貼り付けられる。	長石	良好	内外面とも灰色	
764	瓦器 椀	高台径 5.0	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	石英・長石	良	内外面とも灰黄色	

765	瓦器 椀	高台径 4.9	底部には断面方形の低い高台が付けられる。	長石・雲母	良	内外面とも褐灰色	
766	瓦質土器 羽釜	口径 17.4	内彎する体部と、端部が平坦に仕上げられた口縁部を持つ。口縁端部から離れた位置に水平にのびる断面方形の低い鍔が付けられている。	石英・長石・ 雲母	良	内面　黄灰色 外面　黒色	
767	瓦質土器 羽釜	口径 17.6	内彎する体部と、端部が平坦に仕上げられた口縁部を持つ。口縁端部からやや離れた位置には水平にのびる断面方形の低い鍔が付けられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	やや不良	内外面とも灰色	
768	瓦質土器 羽釜	器高 4.9	内彎する体部と口縁部との境には、水平にのびる幅の広い鍔が付けられる。鍔端部は円く仕上げられている。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面ともオリーブ黒色	
769	瓦質土器 捏鉢	口径 28.8	上方に大きく開く直線的な体部は、端部が鈍く尖らされた口縁部にそのまま移行する。	石英・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	不良	内面　灰白色 外面　灰色	外面摩滅
770	瓦質土器 甕	口径 34.7	大きく外反する口縁は端部が凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母	良	内外面ともオリーブ黒色	
771	瓦質土器 鉢	底径 10.0	大きく膨らむ球形の体部を持つ。体部外面は底部近くにヘラケズリが加えられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　にぶい橙色 外面　灰色	
772	瓦質土器 鉢	底径 12.0	平底の底部と、直線的で上方への開きが小さい体部を持つ。底部と体部の境はわずかに外方につきだしている。	石英・ 黒色斑粒	不良	内外面とも灰白色	
773	須恵質土 器 捏鉢	口径 22.2	上方に大きく開く直線的な体部は、鈍く尖らされた口縁端部にそのまま移行する。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面とも灰色	東播系
774	須恵質土 器 捏鉢	口径 27.0	上方に大きく開く直線的な体部は、鈍く尖らされた口縁端部にそのまま移行する。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内面　灰黄色 外面　灰白色	東播系
775	須恵質土 器 捏鉢	口径 29.8	肥厚する口縁は端部が円く仕上げられる。口縁部内面は横ナデによって浅くくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内面　灰白色 外面　灰黄色	東播系
776	須恵質土 器 捏鉢	口径 32.6	肥厚する口縁は端部が鈍く尖らされる。口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	良	内外面ともに灰白色	東播系
777	須恵質土 器 捏鉢	口径 29.8	肥厚する口縁は端部が円く仕上げられる。口縁部内面は横ナデによって浅くくぼんでいる。	石英・長石・ 雲母	良	内面　灰色 外面　灰白色	東播系
778	須恵質土 器 捏鉢	口径 31.6	上方に大きく開く直線的な体部は、端部が鈍く尖らされた口縁部にそのまま移行する。底部は回転糸切り。	石英・長石・ 雲母	良	内面　灰黄褐色 外面　灰色	東播系
779	須恵質土 器 捏鉢	口径 29.2	直線的で上方への開きが大きい体部と、内側に向かって「く」の字に折り曲げられた口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	石英・長石	やや良好	内外面とも灰色	東播系
780	須恵質土 器 捏鉢	口径 25.0	肥厚する口縁は体部との境でわずかに内屈する。口縁端部は円く仕上げられ、内面は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・ 赤色斑粒	やや不良	内外面とも灰白色	東播系
781	須恵質土 器 捏鉢	口径 21.4	口縁部は断面方形に近い形態を持つ。	石英・長石・ 雲母	良	内外面とも灰色	東播系
782	須恵質土 器 捏鉢	口径 27.4	上方に大きく開く直線的な体部と、わずかに肥厚する口縁部を持つ。口縁端部は面取りが施されている。	石英	良好	内外面とも灰色	東播系
783	須恵質土 器 捏鉢	口径 23.4	肥厚する口縁は体部との境で内屈し幅の狭い帯状の口縁部が形作られている。口縁端部は円く仕上げられ、内面に強い横ナデが加えられている。	石英・長石	良	内外面とも灰白色	東播系
784	須恵質土 器 捏鉢	口径 29.8	肥厚する幅の狭い帯状の口縁部は体部との境で内屈している。口縁端部は円く仕上げられ、内面に強い横ナデが加えられている。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	東播系
785	須恵質土 器 捏鉢	口径 31.2	肥厚する幅の狭い帯状の口縁と体部との境には、段が設けられている。口縁端部は鈍く尖らされ、内面には強い横ナデが加えられている。	石英・長石・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰色	東播系 787と同一個体か
786	須恵質土 器 捏鉢	口径 19.2	口縁端部は上下に拡張され円く仕上げられる。	石英・長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外ともに灰色	東播系
787	須恵質土 器 捏鉢	口径 21.8	肥厚する幅の狭い帯状の口縁部と、体部との境には段が設けられる。口縁端部はにぶく尖らされ、内面には強い横ナデが加えられている。	石英・長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰色	東播系 785と同一個体か
788	須恵質土 器 捏鉢	口径 25.3	口縁端部は上下に拡張され円く仕上げられる。	石英・長石・ 雲母	良好	内外面とも灰色	東播系

789	須恵質土器 捏鉢	口径 20.4	端部が円く仕上げられた肥厚する幅の狭い帯状の口縁と体部との境には段が設けられる。口縁端部内面には強い横ナデが施されている。	長石・雲母	良	内外面とも灰白色	東播系
790	須恵質土器 捏鉢	口径 21.4	端部が円く仕上げられた肥厚する幅の狭い帯状の口縁と体部との境には段が設けられる。口縁端部内面には強い横ナデが施されている。	石英･長石・ 黒色斑粒	良好	内外面とも灰白色	東播系
791	須恵質土器 捏鉢	口径 22.0	肥厚する幅の狭い帯状の口縁は、体部との境がわずかに内屈する。口縁は端部が円く仕上げられ、内面は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。口縁部直下には重ね焼きの痕跡が残される。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰白色	東播系
792	須恵質土器 捏鉢	底径 9.0	底部には回転糸切り痕が残される。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰色	東播系
793	須恵質土器 捏鉢	底径 15.0	平底の底部と、上方に大きく開く直線的な体部を持つ。	石英･長石	良	内外面とも灰白色	東播系
794	須恵質土器 捏鉢	底径 8.9	底部は回転糸切りの後に粗いナデ調整が加えられ板目痕が残される。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰白色	東播系
795	須恵質土器 捏鉢	底径 8.5	底部には回転糸切り痕が残される。	石英･長石	やや良好	内面　灰白色 外面　灰色	東播系
796	須恵質土器 捏鉢	底径 10.2	内面には板状工具による斜め方向のナデが加えられ、底部には回転糸切り痕が残される。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内外面とも灰白色	東播系
797	陶器 擂鉢	口径 31.2	わずかに肥厚する平坦な口縁部を持つ。内面には擂目が３条残される。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒・ 黒色斑粒	良好	内面　灰色 外面　黄灰色	備前
798	陶器 擂鉢	口径 22.9	わずかに肥厚する平坦な口縁部を持つ。内面には擂目が３条残されている。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内面　黄灰色 外面　灰色	備前
799	陶器 擂鉢	口径 27.6	わずかに肥厚する平坦な口縁部を持つ。内面には擂目が７条残されている。	石英･長石・ 角閃石	良好	内面　黄灰色 外面　灰色	備前
800	陶器 擂鉢	口径 27.8	直線的で上方への開きが大きい体部と、内屈する口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、体部との境の屈曲部は外方に拡張されている。	石英・長石	やや良好	内外面とも灰色	備前
801	陶器 擂鉢	口径 22.7	直線的で上方への開きが大きい体部と、内屈する帯状の口縁部を持つ。口縁部は横ナデによって凹線状にくぼむ。体部との境の屈曲部は外下方に拡張され端部は鈍く尖らされている。	長石・雲母	良	内面　にぶい橙色 外面　灰赤色	備前
802	陶器 擂鉢	口径 23.2	直線的で上方への開きが大きい体部と、内屈する帯状の口縁部を持つ。端部が円く仕上げられた口縁部には横ナデによって凹線状の沈線が３本引かれる。体部との境の屈曲部は外方に拡張され段が設けられている。内面には５条１単位の擂目が付けられている。	長石・雲母	良	内外面ともにぶい橙色	備前
803	陶器 擂鉢	口径 25.8	帯状の口縁と体部の間には段が設けられる。口縁部外面は横ナデにより凹線状の沈線が３本引かれ、内面も強くくぼんでいる。	石英・ 黒色斑粒	良好	内面　灰色 外面　灰白色	堺・明石系
804	陶器 擂鉢	器高 4.9	内面には６条１単位の擂目が間隔をあけて放射状に付けられる。	石英･長石・ 雲母・ 黒色斑粒	良	内面　オリーブ灰色 外面　灰赤色	備前
805	陶器 擂鉢	底径 12.5	内面には８条１単位の擂目が間隔をあけて放射状に付けられる。	石英･長石・ 雲母	良	内面　にぶい橙色 外面　橙色	備前
806	陶器 壷	口径 30.8	筒状の頸部と、強く外反して上下に拡張された幅の狭い帯状の口縁部を持つ。口縁端部は円く内面は凹線状に強くくぼんでいる。また垂下する口縁下端部は鈍く尖らされている。	石英	良	内面　灰色 外面　灰褐色	常滑
807	陶器 甕	器高 6.0	体部外面には平行タタキが加えられる。	長石・雲母	やや良好	内外面とも灰色	常滑
808	陶器 甕	底径 36.0	平底の底部と、上方に大きく開く直線的な体部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内面　赤灰色 外面　褐灰色	備前
809	陶器 甕	底径 38.8	平底の底部と、上方に大きく開く直線的な体部を持つ。	石英･長石・ 雲母・ 赤色斑粒	良	内外面とも灰褐色	備前
810	陶器 甕	底径 31.4	平底の底部と、ゆるやかに内彎しながら上方にのびる体部を持つ。	長石・雲母	良	内外面ともにオリーブ灰色	備前
811	陶器 皿	口径 9.6	内彎しながら上方へ大きく開く体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。内面見込部は釉が掻き取られ、底部は蛇ノ目高台が削り出されている。	長石・雲母	良	釉薬　くらい黄色	瀬戸
812	磁器 碗	口径 17.0	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ。外面には片切彫による鎬連弁紋が付けられている。		良	内外面ともグレイみの黄緑色（青磁）	龍泉窯系

813	磁器 碗	口径 14.0	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。外面には片切彫により鎬連弁文が描かれている。		良	内外面とも灰白色グレイ味の黄緑色釉がかけられる	龍泉窯系
814	磁器 碗	口径 13.8	内彎する上方への開きが小さい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ。口縁部外面には雷文、体部外面には連弁文がそれぞれ描かれている。		良	内外面とも灰白色グレイ味の黄緑色釉がかけられる	青磁
815	磁器 皿	口径 14.2	ゆるやかに外反する上方への開きが大きい体部と、端部が円く仕上げられた口縁部を持つ腰折れの輪花皿。		良好	内外面ともグレイみの黄緑色	青磁
816	磁器 碗	器高 3.3	内彎する体部は内面に櫛描文が描かれる。		良好	内外面とも灰色がかったオリーブ色	同安窯系
817	磁器 碗	高台径 4.8	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、断面方形の削り出し高台を持つ碗。外面には片切彫により鎬連弁文が描かれている。		良好	内外面とも灰オリーブ色	青磁
818	磁器 碗	高台径 5.2	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、断面方形の削り出し高台を持つ碗。外面には片切彫により鎬連弁文が描かれている。		良	内外面とも灰白色	青磁
819	磁器 碗	高台径 5.7	高台畳付部分は円く仕上げられる。内面見込部には鳳凰のスタンプ文が付けられる。		良好	内外面ともオリーブ灰色	青磁
820	磁器 碗	高台径 6.3	底部には断面方形の低い削り出し高台が付けられる。高台畳付部分は露胎のまま残されている。		良	内面　オリーブ灰色 外面　橙色	青磁
821	磁器 碗	高台径 5.4	底部には断面方形の低い削り出し高台が付けられる。高台畳付部分は露胎のまま残されている。		良	内外面とも灰白色	青磁
822	磁器 碗	高台径 6.0	高台は低く畳付部分が円く仕上げられ露胎。		良好	内外面とも灰色	青磁
823	磁器 碗	口径 14.0	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、わずかに肥厚する端部が玉縁状に仕上げられた口縁部を持つ。		良	釉薬；黄みの白色	白磁
824	磁器 碗	口径 17.4	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、円く仕上げられた端部がわずかに外反する口縁部を持つ。		良	内外面とも灰白色	白磁
825	磁器 碗	口径 18.6	上方への開きが比較的小さい体部と、肥厚する端部が玉縁状に仕上げられた口縁部を持つ。		良	内外面とも灰白色	白磁
826	磁器 碗	口径 17.0	上方への開きが比較的小さい体部と、肥厚する端部が玉縁状に仕上げられた口縁部を持つ。体部下半は露胎。		良好	内外面とも灰白色	白磁
827	磁器 碗	口径 19.4	上方への開きが比較的小さい直線的な体部と、肥厚する端部が玉縁状に仕上げられた口縁部を持つ。体部下半は露胎。		良好	内外面とも灰白色	白磁
828	磁器 碗	高台径 8.0	ゆるやかに内彎する体部と、畳付部分が円く低い削り出し高台が付けられる。外面は高台近くまで施釉される。		良	内外面とも灰白色	白磁
829	磁器 碗	高台径 6.0	ゆるやかに内彎する体部と、直立する断面逆台形の高い削り出し高台を持つ。外面は高台の一部まで施釉される。		良好	内外面とも灰白色	白磁
830	磁器 碗	高台径 6.2	ゆるやかに内彎する体部と、畳付部分が鈍く尖り直立する高い削り出し高台を持つ。外面は高台部分まで施釉される。		良	内外面とも灰白色	白磁
831	磁器 皿	底径 5.1	平底の底部と上方への開きが小さい体部を持つ。		良好	内外面とも灰白色	白磁
832	磁器 皿	高台径 3.6	底部には畳付部分に面取りが加えられた低い高台が削り出される。外面は高台部分との境まで施釉される。		良	内外面とも灰白色	白磁
833	磁器 壷	頸部径 8.0	球形に膨らむ体部上半部分と、「く」の字に屈曲する頸部からゆるやかに外反しながら上方にのびる筒状の口縁部を持つ。		良好	内面　灰白色 外面　オリーブ黄色	白磁
834	磁器 皿	高台径 8.4	内彎する体部と、断面が円い畳付部分が露胎のまま残された低い高台が付けられる。内面には染付により文様が描かれる。		良	内外面とも灰白色	染付
835	陶器 碗	高台径 5.2	上方への開きが小さい体部と、畳付部分が円い直立する高台が付けられる。体部外面には山水らしい文様が描かれるが不鮮明。高台半ばまで施釉される。		良	釉薬うすい黄色	陶胎染付
836	磁器 碗	高台径 4.6	畳付部分が円い直立する低い高台を持つ。畳付部分は露胎で内面見込部には圏線内にコンニャク印判による五弁花がつけられる。		良好	内面　灰白色 外面　明緑灰色	伊万里外青磁碗
837	磁器 碗	高台径 4.0	畳付部分が円い直立する高台を持つ。畳付部分は露胎で内面見込部には圏線が引かれる。		良	内外面とも灰白色	伊万里外青磁碗
838	磁器 碗	器高 2.8	直立する比較的高い高台を持つ。高台部分は途中まで施釉される。		良好	内面　黄みの白色 外面　グレイみの黄緑色	伊万里青磁
839	磁器 皿	口径 17.0	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部は、そのまま端部が円く仕上げられた口縁部に移行する。		良	内外面とも黄みの白色	伊万里

840	陶器 小杯	高台径 2.9	ゆるやかに内彎する体部と、断面方形の低い削り出し高台を持つ。外面は高台との境近くまで施釉される。	長石・ 赤色斑粒	良好	内外面ともグレイみの黄色	京焼
841	陶器 皿	高台径 5.6	内彎する上方への開きが大きい体部と、断面方形の畳付部分が露胎のまま残された低い高台を持つ。	黒色斑粒	良	内外面とも灰白色	
842	陶器 皿	高台径 5.2	上方への開きが大きい体部と、断面三角形に近い畳付部分が露胎のまま残された低い高台を持つ。	長石・ 赤色斑粒	良好	内外面とも灰色	
843	陶器 皿	口径 15.4	内彎する上方への開きが大きい体部と、外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には凹線状の沈線が引かれる。	長石	良好	内外面とも灰白色	唐津溝縁皿
844	陶器 皿	高台径 5.3	上方へ大きく開く体部と、断面逆台形の低い削り出し高台を持つ。外面は体部半ばまでしか施釉されず、内面見込部には砂目積の痕跡が残される。	長石・雲母・ 赤色斑粒	良好	釉薬　黄みのグレイ	唐津
845	陶器 皿	高台径 4.3	上方へ大きく開く体部と、断面逆台形の低い削り出し高台を持つ。外面は高台との境まで施釉され、内面見込部には砂目積の痕跡が残される。	雲母	良	釉薬色 グレイみの黄緑色	唐津
846	陶器 皿	高台径 4.6	ゆるやかに内彎する上方への開きが大きい体部と、畳付部分が円い削り出し高台を持つ。外面は体部半ばまでしか施釉されず、内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが行われる。	長石・雲母・ 黒色斑粒	良	内面　にぶい黄色 外面　明褐灰色	唐津
847	陶器 皿	高台径 3.7	上方へ大きく開く体部と、碁笥底の底部を持つ。内面見込部には胎土目の痕が残される。	石英・雲母・ 赤色斑粒	良好	内面　灰黄褐色 外面　にぶい黄橙色	唐津
848	陶器 擂鉢	口径 26.2	体部との境で「く」の字に内屈する狭い帯状の口縁は端部が円く仕上げられ、外面には太い沈線が２本引かれている。	石英・長石・ 雲母・	良好	内外面ともにぶい黄橙色	
849	陶器 鉢	口径 23.0	内彎する上方への開きが小さい体部と玉縁状口縁を持つ。口縁端部の釉は掻き取られている。	雲母	良好	内面　灰オリーブ色 外面　オリーブ黒色	唐津

第29表　ＳＡ１００６出土遺物観察表（土製品）

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
44	管状土錘	6.8	2.5	33	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	オリーブ黒色	

第30表　ＳＤ１００５出土遺物観察表（土製品）

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
203	管状土錘	7.8	3.5	74.6	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい橙色	
204	管状土錘	7.3	3.1	54.8	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	明褐灰色	一部を欠失
205	管状土錘	7.1	2.7	43.2	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい黄橙色	
206	管状土錘	6.2	2.9	44	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	黄灰色	
207	管状土錘	6.6	3	49	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	灰黄色	
208	管状土錘	6.6	2.8	41	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	灰黄色	
209	管状土錘	6.6	2.6	33.9	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい橙色	
210	管状土錘	6.5	2.5	34.2	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい黄橙色	一端を欠失
211	管状土錘	6.7	2.8	42	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい橙色	
212	管状土錘	6.0	2.6	36.5	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい黄橙色	
213	管状土錘	6.1	2.8	33	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい橙色	
214	管状土錘	6.7	2.6	38.9	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい黄橙色	
215	管状土錘	5.8	2.6	32.3	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい黄色	
216	管状土錘	5.7	2.5	32	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	灰黄色	
217	管状土錘	5.8	2.2	22.4	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	灰白色	
218	管状土錘	5.5	2.3	22.2	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい橙色	
219	管状土錘	5.6	2.5	23	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	にぶい黄橙色	

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
220	管状土錘	6.1	2.6	33.6	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰黄色	
221	管状土錘	6.2	2.6	33.7	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰黄色	
222	管状土錘	5.6	2.3	25.7	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰黄色	
223	管状土錘	6.0	2.4	23.5	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰黄色	一端を欠失
224	管状土錘	5.5	2.6	20.3	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰黄色	
225	管状土錘	5.2	2.1	20.3	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	黒褐色	
226	管状土錘	4.8	2.2	19.2	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	にぶい黄橙色	
227	管状土錘	5.1	2.4	20.7	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰色	一端を大きく欠失
228	管状土錘	6.7	2.0	23.1	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰色	
229	管状土錘	7.0	2.1	33.0	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰色	
230	管状土錘	5.9	2.3	25.5	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	にぶい橙色	
231	管状土錘	6.1	2.0	17.0	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰色	一端を欠失
232	管状土錘	5.5	1.9	15.5	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	橙色	一端を欠失
233	管状土錘	5.4	1.9	14.5	紡錘形で中央部が端部に比べて約2倍の太さを持つ。	灰黄色	
234	管状土錘	6.4	1.3	8.8	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	橙色	
235	管状土錘	6.0	1.1	6.0	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい赤褐色	
236	管状土錘	6.3	1.1	6.7	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	オリーブ黒色	
237	管状土錘	5.3	1.2	5.8	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	橙色	両端を欠失
238	管状土錘	5.5	1.2	5.7	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	明褐灰色	
239	管状土錘	5.0	1.2	4.6	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	黄灰色	
240	管状土錘	5.1	1.1	4.7	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰黄色	一端を欠失
241	管状土錘	5.3	1.2	5.4	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい黄橙色	一端を欠失
242	管状土錘	5.3	1.0	4.9	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰白色	
243	管状土錘	5.2	1.1	5.9	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	オリーブ黒色	
244	管状土錘	4.9	1.0	4.3	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい赤褐色	一端を欠失
245	管状土錘	4.8	1.1	4.5	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい黄橙色	
246	管状土錘	4.2	1.1	4.4	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	黄灰色	両端を欠失
247	管状土錘	5.9	1.1	3.9	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい黄橙色	
248	管状土錘	4.4	1.0	3.0	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰色	
249	管状土錘	4.4	0.9	2.8	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい橙色	
250	管状土錘	3.8	1.2	4.6	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰黄色	
251	管状土錘	4.4	1.3	5.6	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰白色	
252	管状土錘	4.4	0.9	2.4	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい橙色	
253	管状土錘	4.0	0.9	2.4	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい黄橙色	
254	管状土錘	4.5	1.1	4.4	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	にぶい黄褐色	
255	管状土錘	3.6	0.9	1.8	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰オリーブ色	
256	管状土錘	3.5	0.9	1.9	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰黄色	
257	管状土錘	3.5	1.4	5.8	中央部から両端にかけて徐々に細くなる。	灰白色	

第31表　ＳＲ１００１出土遺物観察表（土製品）

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
287	棒状有孔土錘	5.3	2.1	21.0	断面は円形で端部近くに側面から孔があけられている。	灰黄色	下半部を欠失
288	管状土錘	4.9	1.3	5.4	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	暗赤褐色	

第32表　ＳＰ１１７９出土遺物観察表（土製品）

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
399	管状土錘	6.6	2.7	36.1	紡錘形で中央部が端部に比べて約２倍の太さを持つ。	オリーブ黒色	

第33表　包含層出土遺物観察表（土製品）

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
853	有溝土錘	7.1	4.2	80.5	紡錘形。中央にＵ字型の溝が付けられている。	灰色	
854	棒状有孔土錘	6.2	2.2	23.3	断面は円形で端部近くに側面から孔があけられている。	橙色	下半部を欠失
855	棒状有孔土錘	3.8	1.6	9.7	断面は円形で端部近くに側面から孔があけられている。	にぶい黄橙色	頭部の一部と下半部を欠失
856	棒状有孔土錘	3.6	1.3	5.0	断面は円形で端部近くに側面から孔があけられている。	橙色	下半部を欠失
857	管状土錘	8.0	2.9	58.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
858	管状土錘	7.0	3.0	47.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	黄灰色	
859	管状土錘	6.7	2.7	38.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰黄色	一端を欠失
860	管状土錘	6.8	2.4	32.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい橙色	
861	管状土錘	6.2	2.3	26.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
862	管状土錘	6.8	2.3	30.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰黄色	
863	管状土錘	6.6	2.6	40.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
864	管状土錘	6.7	2.4	35.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	浅黄橙色	
865	管状土錘	5.6	2.2	25.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
866	管状土錘	6.1	2.7	40.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい褐色	
867	管状土錘	5.5	2.2	31.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	黄灰色	
868	管状土錘	6.8	2.2	27.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
869	管状土錘	6.8	2.2	25.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	黄灰色	
870	管状土錘	5.2	2.7	30.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	浅黄橙色	
871	管状土錘	6.1	2.5	27.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰黄色	
872	管状土錘	5.0	2.3	21.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	浅黄橙色	
873	管状土錘	6.0	2.0	18.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい橙色	
874	管状土錘	5.2	1.9	18.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	黄灰色	
875	管状土錘	6.0	2.3	29.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰色	
876	管状土錘	5.5	2.0	16.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
877	管状土錘	5.0	2.2	16.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	一端を欠失
878	管状土錘	5.3	2.3	20.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	橙色	
879	管状土錘	5.7	2.2	24.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰黄褐色	
880	管状土錘	5.7	2.2	25.0	中央部の太さが端部の約２倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
881	管状土錘	5.6	2.4	26.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	黄灰色	
882	管状土錘	5.3	2.4	22.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
883	管状土錘	5.4	2.3	26.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰黄色	
884	管状土錘	5.2	2.1	18.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい橙色	
885	管状土錘	6.1	2.3	30.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄色	
886	管状土錘	6.0	2.1	18.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	黄灰色	
887	管状土錘	5.4	2.1	21.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰オリーブ色	
888	管状土錘	5.2	2.0	15.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	灰色	
889	管状土錘	4.8	2.2	17.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	橙色	
890	管状土錘	4.9	2.1	14.2	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい橙色	
891	管状土錘	4.7	2.3	23.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	橙色	
892	管状土錘	4.6	2.5	22.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい橙色	
893	管状土錘	4.4	2.0	13.0	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい黄橙色	
894	管状土錘	4.7	2.0	15.7	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。	にぶい橙色	
895	管状土錘	4.0	1.5	7.2	中央部の太さが端部の約2倍ある中膨らみの形状を持つ。		
896	管状土錘	5.3	3.5	57.0	楕円形に近い形状を持つ。	橙色	
897	管状土錘	6.1	1.0	5.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい橙色	
898	管状土錘	6.2	1.1	6.7	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
899	管状土錘	5.4	1.0	5.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	浅黄橙色	
900	管状土錘	4.7	1.0	3.9	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
901	管状土錘	5.1	1.1	4.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰黄色	
902	管状土錘	5.0	1.1	4.3	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい橙色	
903	管状土錘	5.5	1.3	6.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰白色	
904	管状土錘	5.6	1.2	5.8	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰黄色	
905	管状土錘	5.5	1.2	5.9	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	明赤褐色	
906	管状土錘	5.9	1.1	6.8	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰白色	
907	管状土錘	5.0	1.0	3.8	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	浅黄橙色	
908	管状土錘	5.4	1.3	6.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい黄橙色	
909	管状土錘	4.8	1.4	7.1	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
910	管状土錘	4.4	1.1	4.8	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	浅黄橙色	
911	管状土錘	5.0	1.1	5.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰白色	
912	管状土錘	4.3	1.1	4.3	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	明褐灰色	
913	管状土錘	4.8	1.1	4.5	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰黄色	
914	管状土錘	5.1	1.3	7.3	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい赤褐色	
915	管状土錘	4.5	1.2	5.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
916	管状土錘	4.7	1.1	4.5	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい黄色	
917	管状土錘	4.8	1.2	5.4	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	明赤褐色	
918	管状土錘	4.6	1.0	2.6	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	明赤褐色	

遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	特　徴	色　調	備　考
919	管状土錘	4.6	1.2	3.7	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	淡黄色	
920	管状土錘	4.5	1.0	4.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	オリーブ黒色	
921	管状土錘	4.6	0.8	3.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい黄橙色	
922	管状土錘	4.7	1.0	4.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰白色	
923	管状土錘	4.5	1.1	3.9	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
924	管状土錘	4.1	1.0	2.5	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
925	管状土錘	3.7	1.1	3.9	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい橙色	
926	管状土錘	4.1	1.4	6.3	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰色	
927	管状土錘	3.7	1.0	2.5	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
928	管状土錘	4.2	0.8	1.4	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰色	
929	管状土錘	4.0	0.8	1.9	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
930	管状土錘	4.3	1.3	5.1	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
931	管状土錘	4.1	1.1	3.6	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	明赤褐色	
932	管状土錘	4.0	1.0	3.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
933	管状土錘	3.8	0.9	2.7	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	明赤褐色	
934	管状土錘	3.9	1.1	3.6	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい橙色	
935	管状土錘	4.3	1.5	8.7	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい赤橙色	
936	管状土錘	3.3	1.3	3.7	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい橙色	
937	管状土錘	3.4	0.9	2.1	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	灰色	
938	管状土錘	3.5	1.0	2.3	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	明褐色	
939	管状土錘	2.8			中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	暗灰黄色	
940	管状土錘	3.4	1.2	3.2	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	橙色	
941	管状土錘	3.2	1.1	3.5	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	黒色	
942	管状土錘	2.6	1.0	2.0	中央部から両端に向かって徐々に細くなる。	にぶい赤褐色	

第34表　ＳＲ１００２出土遺物観察表（木製品）

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	備　考
316	曲げ物 蓋？ 底板？	直径 約19	側縁部から1.5cmほど内側に一対の孔があけられ側板を接合するために桜の樹皮が通されている。片面には刃物による直線的な傷が多く残されている。針葉樹の板目材を使用している。	
317	曲げ物 蓋？ 底板？	直径 約18	側板を取り付けるために縁辺部を幅約6mm前後、深さ5～6mmにわたり削り込み低い段を設けている。段の内側には側板を取り付けるための樹皮が通された孔が2ヶ所あけられている。また段が切り込まれた反対側の面には刃物によって付けられた直線的な傷跡が多く残されている。針葉樹の正目材を使用している。	
318	曲げ物 蓋？ 底板？	直径 約20	側板を取り付けるために縁辺部が幅約6mm前後、深さ5～6mmにわたり削りこまれ、低い段が設けられている。段の内側には側板を留めるため樹皮が通された孔が2ヶ所あけられている。また段が切り込まれた反対側の面には刃物によって付けられた直線的な傷跡が多く残されている。針葉樹の正目材を使用している。	
319	曲げ物 蓋？ 底板？	直径 約18	縁辺部を幅約1.2cm前後、深さ3mmほど削って低い段を設け、段に沿って厚さ約3mmほどの側板を取り付けている。段を挟んで一対の孔が4ヶ所あけられ樹皮を通して側板を留めている。また段が切り込まれた反対側の面には刃物によって付けられた直線的な傷跡が多く残されている。針葉樹の板目材を使用している。	
320	曲げ物 蓋？ 底板？	長さ	残された部分から推定すると直径30cm以上の大型の製品と考えられる。縁辺部には側板を取り付けるために幅約1cm、深さ3mmの内側に向かって傾斜する切り込みが加えられ低い段が設けられている。外面には刃物によって付けられた直線的な傷が多く残されている。針葉樹の板目材が使用されている。	
321	曲げ物 側板	長さ 13.1	針葉樹の板目材の薄板を使用し、斜め方向のケビキが加えられている。	
322	人形	長さ 12.9	樹皮を剥いだだけの広葉樹の細い幹に目と口を刻み込み、反対側にも水平の切り込みを加えて頭部と胴体の境を表現している。	
323	船形	長さ 23.1	針葉樹を割って作られた角材の一方の端を三角形に、もう一方を台形に削り出し船首と船尾部分を表現している。甲板部分を両端から中央に向かって斜めに削り込み中央部を台形状に残している。	

遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	備　考
324	船形	長さ 26.8	不均等な厚さの針葉樹の板の両端を側面から削って三角形に尖らせ、船首と船尾部分を表現している。甲板部分は台形状に削り込まれ船艘部分を作り出している。船底部分は断面が台形に削り込まれている。	
325	船形	長さ 21.8	針葉樹を割って作られた角材を使用し船底部分から両端に向かって斜めに削り込み、船首部分と船尾部分を表現している。甲板部分は両端から内側に向かって斜めに切り込みが入れられ中央部を方形に残している。	
326	船形	長さ 22.6	丸木の両端を一方向から斜めに削り込み、船首部分と船尾部分を表現している。甲板部分は両端から内側に向かって斜めに切り込みが入れられ中央部を方形に残している。	両端を欠失
327	刀形？	長さ 27.6	針葉樹の薄板の片側の側縁を削り込み、刀状に加工している。	両端を欠失
328	剣形？	長さ 22.0	針葉樹の薄板の一端を両側縁から削り込み剣先状に加工している。	両端を欠失
329	形代？	長さ 8.0	針葉樹の薄板の端部近くに片側から削り込みを加えている。	両端を欠失
330	斎串	長さ 23.4	針葉樹の薄板の両端を片側方向から削り込み尖らせている。	
331	斎串	長さ 22.1	針葉樹の薄板の両端を片側方向から削り込み尖らせている。	一端を欠失
332	斎串	長さ 25.0	針葉樹の薄板の両端を片側方向から削り込み尖らせている。	一端を欠失
333	斎串	長さ 22.2	針葉樹の薄板の両端を片側方向から削り込み尖らせている。	
334	斎串	長さ 19.6	針葉樹の薄板の両端を片側方向から削り込み尖らせている。	
335	斎串	長さ 22.0	針葉樹の薄板の両端を片側方向から削り込み尖らせている。	一端を欠失
336	斎串	長さ 12.2	針葉樹の薄板の端部を片側から削り込み尖らせている。	下半部を欠失
337	斎串	長さ 9.2	針葉樹の薄板の端部を片側から削り込み尖らせている。	下半部を大きく欠失
338	斎串	長さ 12.4	針葉樹の薄板の端部を片側から削り込み尖らせている。	下半部を欠失
339	斎串	長さ 10.3	針葉樹の薄板の端部を片側から削り込み尖らせている。	下半部を欠失
340	斎串	長さ 8.4	両則縁から削り込みが加えられ三角形に尖らされた薄板の一端から、やや離れた位置に端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	下半部を大きく欠失
341	斎串	長さ 10.0	両則縁から削り込みが加えられ三角形に尖らされた薄板の一端から、やや離れた位置に端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	下半部を大きく欠失
342	斎串	長さ 16.8	両則縁から削り込みが加えられ三角形に尖らされた薄板の一端から、やや離れた位置に端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	下半部を欠失
343	斎串	長さ 6.5	両則縁から削り込みが加えられ三角形に尖らされた薄板の一端から、やや離れた位置に端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	下半部を大きく欠失
344	斎串	長さ 3.9	両端が三角形に尖らされた薄板の片方の端部から、やや離れた位置に端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	下半部を大きく欠失
345	斎串	長さ 44.2	両則縁から削り込みが加えられ三角形に尖らされた薄板の端部近くに、端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	中央部と下端部を欠失
346	斎串	長さ 19.2	両則縁から削り込まれ三角形に尖らされた薄板の端部近くに、端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	頭部と下端部を欠失
347	斎串	長さ 13.6	両則縁から削り込まれ三角形に尖らされた薄板の端部近くに、端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	下端部を大きく欠失
348	斎串	長さ 12.2	両則縁から削り込まれ三角形に尖らされた薄板の端部近くに、端部とは逆方向の浅い削り込みが加えられている。	下端部を大きく欠失
349	斎串	長さ 11.9	三角形の頭部と剣先状の下端部を持つ針葉樹の薄板の、頭部からやや離れた位置に下端部方向の浅い削り込みが加えられている。	
350	斎串	長さ 18.8	三角形の頭部と剣先状の下端部を持つ針葉樹の薄板。	
351	斎串	長さ 18.3	三角形の頭部と剣先状に加工された下端部を持つ針葉樹の薄板。	
352	斎串	長さ 20.8	針葉樹の薄板の下端部が刀状に削り出されている。	上半部を大きく欠失
353	斎串	長さ 17.3	針葉樹の薄板の下端部が剣先状に削り出されている。	上半部を大きく欠失
354	斎串	長さ 11.4	針葉樹の薄板の下端部が剣先状に削り出されている。	上半部を大きく欠失
355	斎串	長さ 11.2	針葉樹の薄板の下端部が剣先状に削り出されている。	上半部を大きく欠失
356	棒状木製品	長さ 20.4	多角形の棒の先端が四角く削り出されている。	一端を欠失
357	棒状木製品	長さ 19.0	板材を割って得られた角棒の一端を四方から削り込んで鈍く尖らせ、元の板の面には並行する２本の刻みが加えられている。	
358	棒状木製品	長さ 17.3	角材の一端を削り込み楔状に加工している。	上半部を欠失

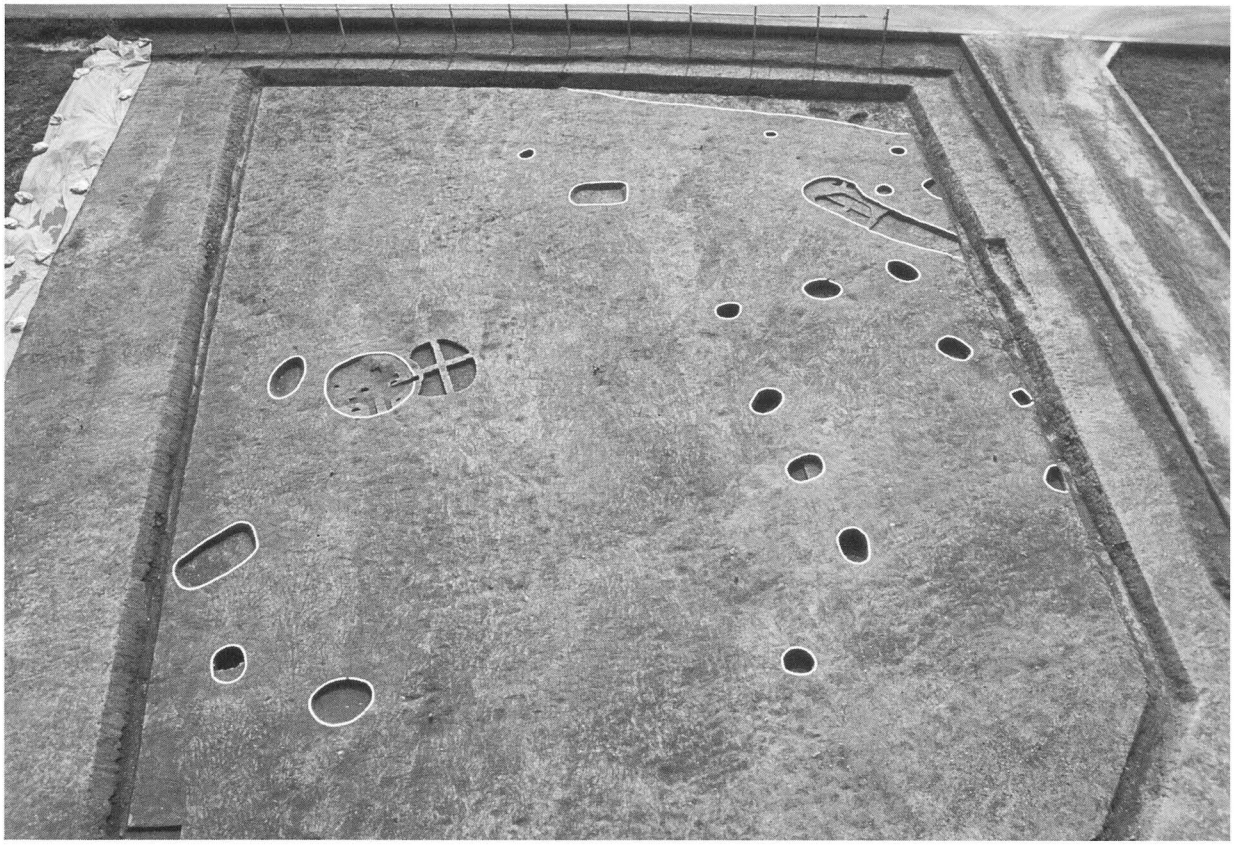
遺物番号	器　種	法量(cm)	特　徴	備　考
359	棒状木製品	長さ 20.1	全面が丁寧に削り込まれた断面が楕円形の棒状木製品。頭部は平坦に仕上げられている。	下端部を大きく欠失
360	棒状木製品	長さ 16.7	全面が丁寧に削り込まれた断面が楕円形の棒状木製品。頭部は平坦に仕上げられている。	下端部を大きく欠失
361	棒状木製品	長さ 12.0	全面が丁寧に削り込まれた断面が円形の棒状木製品。	両端を欠失
362	棒状木製品	長さ 14.6	全面が丁寧に削り込まれた断面が楕円形の棒状木製品。	両端を欠失
363	棒状木製品	長さ 10.4	全面が丁寧に削り込まれた断面が楕円形の棒状木製品。	両端を欠失
364	棒状木製品	長さ 64.4	細長い丸太の一端を尖らせ、もう一端は半円状に仕上げている。頭部から中程にかけては表面が加工されているが、あとの半分は樹皮をはいだままで残されている。	
365	棒状木製品	長さ 15.0	全面に丁寧な加工が加えられた先端が尖らされた木製品。	上半部を大きく欠失
366	棒状木製品	長さ 14.5	樹皮をはいだ状態のままの丸太の先端を削り込み鈍く尖らせている。	上半部を大きく欠失
367	板状木製品	長さ 26.9	並行する直線的な則縁を持った針葉樹の板。	
368	板状木製品	長さ 8.3	並行する直線的な則縁を持った針葉樹の薄板。	両端を欠失
369	板状木製品	長さ 9.8	並行する直線的な則縁を持った針葉樹の薄板。	両端を欠失
370	板状木製品	長さ 5.4	板目材の断面が緩やかに彎曲している。	片側の則縁を欠失
371	板状木製品	長さ 27.1	並行する直線的な則縁を持った針葉樹の板。	一端を欠失
372	板状木製品	長さ 8.2	並行する直線的な則縁を持った針葉樹の薄板。	一端を欠失
373	板状木製品	長さ 12.6	並行する直線的な則縁を持った針葉樹の薄板。	一端を欠失

写 真 図 版

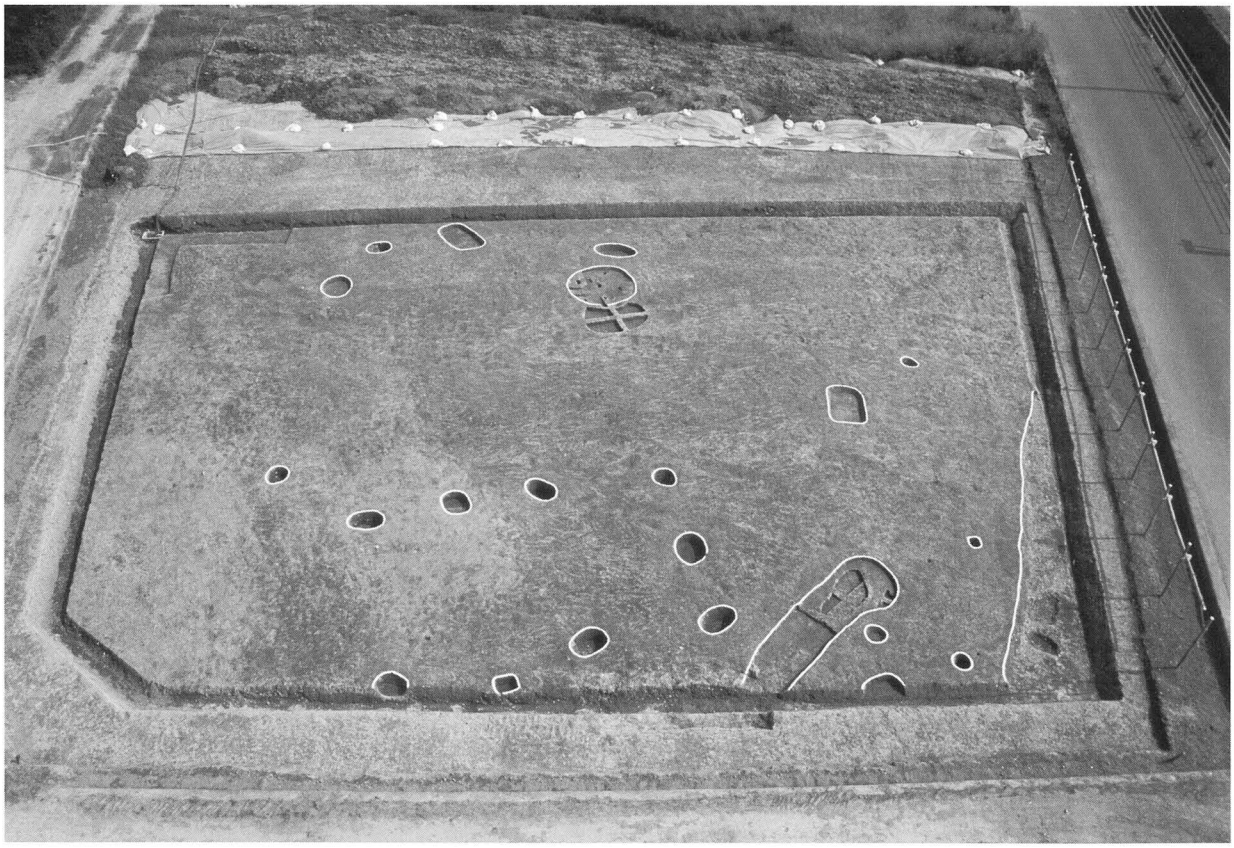
図版 1

(1) 遺跡遠景（北から）

(2) 遺跡遠景（南から）



（1）2区遺構完掘状況（北から）

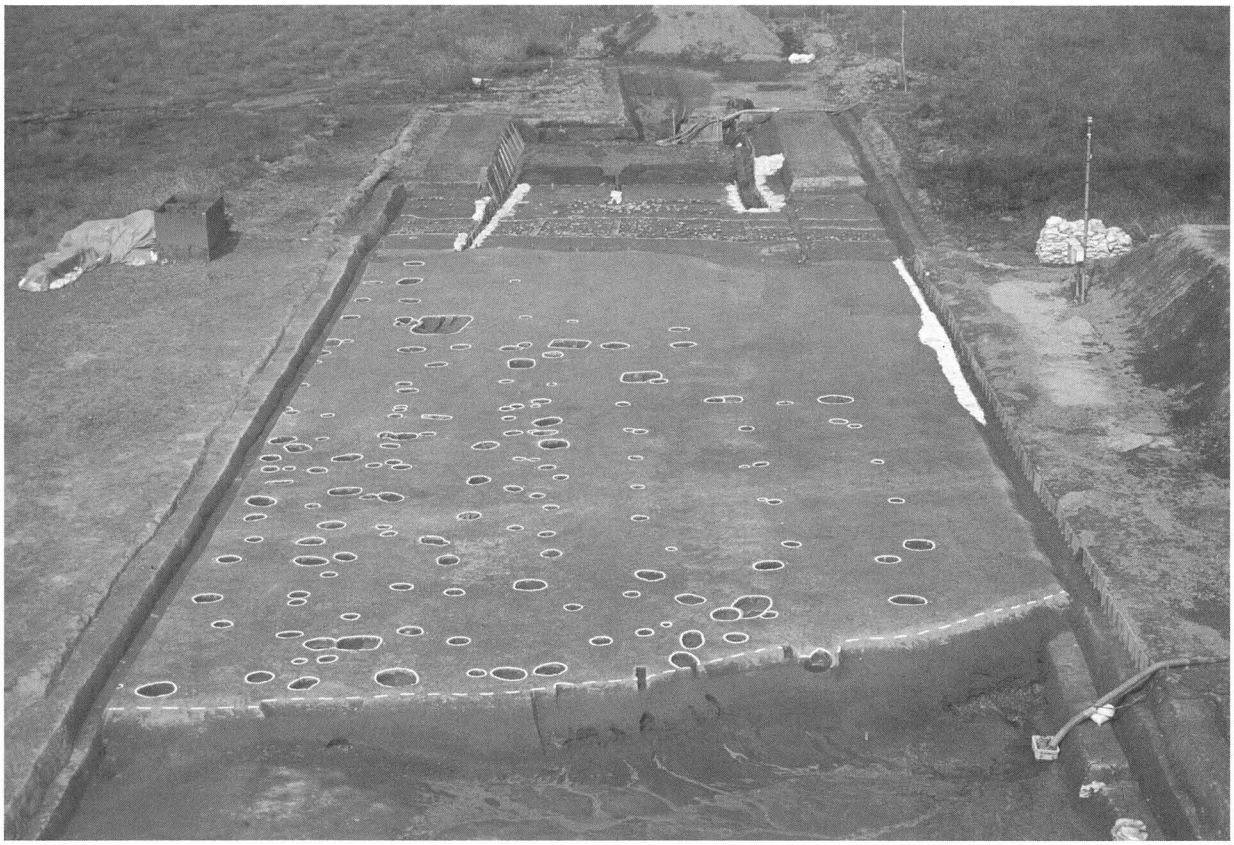


（2）2区遺構完掘状況（西から）

図版 3

（1）3区遺構完掘状況（南から）

（2）3区南半遺構完掘状況（西から）



（1）3区掘立柱建物跡群（南から）

（2）3区掘立柱建物跡群（西から）

図版 5

（1）SD1001（北から）

（2）SD1001（西から）